

湖南説唱本研究

岩田 和子

目次

序論	1
1 湖南説唱本とは	1
2 湖南における説唱文芸活動流行の背景	2
3 研究の目的	6
4 先行研究	6
4.1 湖南伝統演劇・芸能に関する研究	7
4.2 目録整理研究	8
4.3 説唱本出版活動に関する研究	15
5 問題の所在と本研究の意義	20
6 研究の方法と視座	22
6.1 研究対象となる物語の抽出	22
6.2 各種媒体における関連故事の収集	24
6.3 地域文化と出版文化からの分析	25
7 本論の構成	25
第1章 現存する湖南説唱本の概容	28
1 湖南説唱本の定義	28
2 湖南説唱本の形態	29
3 封面の特徴	40
4 出版地と書肆	41
5 湖南説唱本の物語の概容	42

第2章 「秦雪梅」故事の伝承と流通	45
0 はじめに	45
1 戯曲作品としての「秦雪梅」故事の流行	47
1.1 南戯伝奇『商輅三元記』の成書年代と流行	47
1.2 弋陽腔系諸腔「秦雪梅」故事の各地への広まり	50
1.2.1 弋陽腔系散齣集の収録状況	
1.2.2 明の万暦年間の上演記録	
1.2.3 清代初期の上演記録	
1.2.4 「断機教子」の変遷と流布	
(a) 富春堂本『商輅三元記』第二十六折	
(b) 弋陽腔系散齣集	
(c) 高腔	
1.3 清雜劇『三元報』	64
2 地方劇における「秦雪梅」故事の流布	66
3 清末民初の説唱文芸における「秦雪梅」故事の流行	69
3.1 説唱本『秦雪梅三元記』の流通	71
3.2 弋陽腔系演劇と説唱本『秦雪梅三元記』の内容比較	73
3.3 湖南における「秦雪梅」故事の流行	77
3.4 説唱本『秦雪梅三元記』「游地府」の場面と「転生姻縁」	78
4 本章のまとめ	80
第3章 湖南説唱本と多世姻縁の物語	82
0 はじめに	82
1 従来の研究	83
2 湖南説唱本にみえる転生姻縁の物語	84
2.1 「秦雪梅」故事の地獄めぐり	84
2.1.1 湖南説唱本『新刻秦雪梅三元記全部』	
2.1.2 「金童玉女」の生まれ変わり	
2.2 「売臙脂」故事の変遷	87
2.2.1 「売臙脂」故事とは	
2.2.2 湖南説唱本『王月英賣臙脂』	
2.3 「梁祝」故事と湖南における「三世姻縁」の流行	90
2.3.1 「梁祝」故事形成の背景	
2.3.2 湖南説唱本『新抄繡像祝英台』	

3	湖南説唱本以外に見える転生姻縁の展開	96
3.1	「秦雪梅」故事と地獄めぐり	96
3.2	「売臙脂」故事	103
3.2.1	上海石印説唱本『新出抄本買臙脂』	
3.2.2	その他	
3.3	「梁祝」故事	106
3.3.1	上海石印説唱本	
3.3.2	その他	
4	「藍橋会」故事との関わり	111
4.1	「藍橋会」故事とは	111
4.2	転生姻縁の類型の特徴	112
4.3	上海石印説唱本	121
4.3.1	『絵圖水漫藍橋相會』、『水漫藍橋相會』	
4.3.2	続編の存在	
4.3.3	淮戯『藍橋相會全部』	
5	転生姻縁一覧	126
6	「三世姻縁」の長編化と湖南の書肆の販促意識	128
7	本章のまとめ	130
第4章 湖南説唱本「私訪」故事の流行と流通		134
0	はじめに	134
1	湖南説唱本「私訪」故事の出版ブーム	135
1.1	「私訪」故事説唱テキストの種類と特徴	135
1.1.1	呉大人	
1.1.2	陶大人	
1.1.3	彭大人	
2	湖南における「私訪」故事説唱の流行のしくみ	145
2.1	「私訪」故事のパターン化とシリーズ化	145
2.1.1	物語設定の枠組みの共有と封面の統一	
2.1.2	書肆による販促意識	
2.2	「私訪」故事の湖南化	149
2.2.1	湖南の有名人による「私訪」故事	
2.2.2	湖南人のための「私訪」故事	
2.3	主人公による実際の私訪	153
2.4	湖南における包公「私訪」劇	155

3	「私訪」故事の流通のしくみ	157
3.1	出版時期	157
3.2	他地域への流通と流布	158
3.3	上海石印説唱本との関係	160
4	本章のまとめ	161
第5章 湖南説唱本「美図」故事の流行と流通		
—『五美図』、『後五美図』、『七美図』を中心として—		163
0	はじめに	163
1	弾詞「美図」故事の流行と他地域への影響	164
1.1	弾詞「美図」故事形成の背景	164
1.2	他地域説唱文芸への影響	167
2	湖南説唱本「美図」故事の出版ブーム	167
2.1	物語設定の枠組みの共有と封面の統一	167
2.2	「美図」故事説唱テキストの種類と特徴	170
2.2.1	『五美図』	
2.2.2	『後五美図』—続編『五美図』—	
2.2.3	『七美図』—番外編『五美図』—	
3	湖南における「美図」故事説唱の流行のしくみ	175
3.1	「美図」故事の湖南化	175
3.1.1	『五美図』—物語を支える河川と湖南—	
3.1.2	『七美図』—物語の展開を支える湖南人—	
3.2	湖南説唱本「私訪」故事出版ブームの影響	179
3.2.1	『七美図』—「私訪」故事との融合—	
3.2.2	『後五美図』—「美図」の仮面を被った「私訪」故事—	
4	本章のまとめ	185
総論		186
付録 湖南説唱本目録（稿）		191
参考文献一覧		214

序論

1. 湖南説唱本とは

清末民初の中国は、歴史や文化における重要な転換期とされる。特に清代後期、中国国内は戦乱が絶えず、アヘン戦争、アロー戦争、太平天国の乱と、それに呼応した捻軍の蜂起など、道光（1821-1850）、咸豊（1851-1861）、同治（1862-1874）年間と続く内憂外患を体験する。のち、太平天国の乱、捻軍の鎮圧で活躍した、安徽省出身の李鴻章や、湖南省出身の曾国藩が中心となって政治を動かし、洋務運動を推進する。

本研究であつかう湖南説唱本とは、そのような歴史の転換期である、道光、咸豊年間から民国期にかけて、湖南省各地の民間の書肆で出版され、流通した、説唱の文字テキストを指す。

説唱とは、中国の通俗文芸において古い歴史をもち、少人数で簡単な楽器を用いて、リズムに合わせて「説」（カタリ）と「唱」（ウタ）で物語を紡いでいく、語りもの芸能のことを言う。また、曲辞の形式によって大きく二系統に分類され、ひとつが楽曲に長短句の歌詞をつなぎあわせるもので「楽曲系」と称され、ひとつが七言句や十言句を主とする齊言句を重ねるもので「詩讚系」と称される。曲辞の文体は、叙事体あるいは代言体を以てし、基本的に韻散混合文で、散文を用いる「説」と、韻文を用いる「唱」から成るが、全篇韻文だけで構成される「唱」のみのものもあれば、全篇散文だけで構成される「説」のみのものもある¹。

これら説唱は、いわゆる小説や戯曲などと同じように、物語の伝承媒体のひとつとして特に明清期に発展したが、出版の盛り上がりは清の嘉慶期辺りからと比較的遅く、また各地域の民間における説唱文芸が、それぞれのスタイルを確立して大きな流行を築くのも、清代に入ってからが殆どである。代表的なものに、北方の鼓詞、子弟書、江南地方の宝卷、弾詞、福建、広東を中心とする木魚書、潮州歌などがあるが、これらの説唱文芸は、当時各地で成長した出版活動と結びついて、伝統的な有名故事やご当地特有の物語など、様々な内容の各種文字テキストが大量に出版された。

説唱文芸活動が北方から東南沿海部にかけて隆盛する一方、内陸部の湖南でも清末民初の時期に説唱文芸が勃興した。湖南説唱本の存在は、早くより俗文学研究者の間で注目され、1929年には、中山大学の辛樹幟と石声漢が湖南で収集したテキスト90種（大部分が湖南の中部、長沙、常德、また湖北の漢口や陝西長安のもいくつかある）に対し、姚逸之、鍾貢勛などが共同で提要を著した『湖南唱本提要』²が出版され、その資料的価値も認められていた。しかし、その後の主な研究は、張継光が1993年に北京の琉璃廠で偶然購入した湖南説唱本150種について、各種テキストの書誌情報と、湖南の他芸能における同一物語の有無などを調査し、1998年にその成果として「一百五十種湖南唱本書録」³を発表した

¹ 曾永義『俗文学概論』（台北：三民書局、2003.6）

² 姚逸之、鍾貢勛述『湖南唱本提要』（国立中山大学言語歴史研究所、1929.3初版、1969秋復刊）

³ 張継光「一百五十種湖南唱本書録」『中国文哲研究通訊』第八卷・第二輯（1998.6）：pp. 111-142

のみで⁴、実際のところ、上記の鼓詞、子弟書、宝卷、弾詞、木魚書、潮州歌などに関する研究に比べて、湖南説唱本について深く掘り下げるものは皆無である。

本来、語りもの芸能であった説唱が、清代以降に出版と特に強く結びついて読みもの化したことにより、それまで方言などの障害で他地域へ流布することのなかった物語も、文字テキストを介して流通・流布が可能となった。また、およそその出版時期が確定しているこれら各種文字テキストの存在は、どの時期にどの地域でどのような物語が流通していたのか、口頭伝承では時代と共にしばしば散逸もしくは変容しがちな内容を確実に把握することが出来るため、通俗文芸における物語の形成や伝播を考察する上でも、非常に重要な資料としての役割を担うと考えられる。

2. 湖南における説唱文芸活動流行の背景

湖南省の地理的位置を見ると、洞庭湖を縦横無尽に走る河川によって、北は湖北と通じ、東は広西、西は貴州、四川、南は広東、広西に連なる、交通、流通の中継地点として存在する。また、元末明初、清末民初には、早魃や動乱などが原因で、江西、広東、福建からの大量の移民が湖南へ流入したり、湖南から四川へ人が移動したりと、人口の流動、即ち地域文化の流動も繰り返し行われて来た特殊な地域でもある。明代の湖南は、商品経済の発展で活躍した江西商人や安徽商人らが頻繁に往来し、また異郷において同郷の人々が集う会館も建ち、そこには戯台（舞台）が設けられ、時に同郷の劇団を招いて芝居を上演させるなど、芸能、娯楽活動も盛んに行われ、経済活動だけでなく、文化活動の交錯する地としても繁栄した。そのような土壌のもと、清代の湖南で説唱文芸を含む芸能活動が盛んになった背景として、『中国曲芸志・湖南卷』⁵は以下のように太平天国運動における湘軍の活躍との関係を指摘する。

清軍剿滅太平天国義軍之後、曾参加剿滅太平天国義軍の湘軍将領返湘多挟巨資在湘建宅治産、且耽於声色犬馬、恣意享楽、給湖南带来一段畸形繁榮的局面。生活在当时的長沙文人楊恩寿、在『蘭芷零香録・紀事』中、就曾記下了他所目睹的省垣長沙的变化：“道光中葉、始有歌妓、合省城不過三四輩。招之侑酒、必於重檐秘室。偶一開觴、鄰里亦耳而目之、詫為僅見。咸豐改元後、陽羨方伯、嘉定太守先後莅宮、提倡風雅、時作文酒詩歌之會、烏紗紅粉、鎮日排當。官紳從而和之、即下及儉楚、亦慕雅效尤、若輩遂以省城為花藪。軍興以來、湖湘子弟帕首荷戈、富貴而歸故郷、揮金如土。每值豪宴、洵如王愷、石崇、竟誇豪富。…同治以前、寥寥數酒店、殺亦適口。近因名花全集、遂窮工極巧、以待不時之需。有若慶春園、有若萃賢閣、有若如松館、玉壺春、而以老怡園為最……雖秦淮之丁字簾、吳門之冶芳濱、無以過之。”⁶

⁴ その他、広州の中山大学中国古代文献学の謝玉芳が、中山大学人類学部収蔵の湖南説唱本 183 種について、姚（1929）、張（1998）を参考に提要と目録を作成し、修士論文として提出した「国立中山大学人類学部収蔵湖南唱本の発現与提要」（2008）がある。

⁵ 『中国曲芸志』全国編集委員会・『中国曲芸志・湖南卷』編集委員会編『中国曲芸志・湖南卷』（北京：新華社出版社、1992）

⁶ 注 5 前掲書『中国曲芸志・湖南卷』「総述・明清以来的湖南曲芸」p. 8

清軍が太平天国義軍を討伐した後、太平天国義軍の討伐に参加した湘軍の将領が湖南省に戻ると、巨万の財貨を携えて湖南省に屋敷を建て財産を築き、歌舞音曲、女色、犬、馬の愛玩など道楽三昧に耽り、享樂を恣にし、湖南にゆがんだ繁榮をもたらした。当時の長沙に暮らした文人の楊恩寿は、『蘭芷零香録・紀事』⁷で、彼が実際に目にした省都長沙の変化を以下のように記している。「道光中期に、歌妓が現れ始めたが、省都全体でも三、四人に過ぎなかった。歌妓を招いて酒を勧める時は、必ず奥まったところの秘密の部屋で行われた。偶に宴会が開かれると、同郷の人々はその噂を聞いただけで、わずかに見たと自慢するほどだった。咸豊に改元すると、陽羨の方伯（布政使）、嘉定の太守は相次いで宮中に至ると、風雅を提唱して、常に詩文を作り、酒宴を設け、役人、歌妓は、朝から晩まで宴を催した。官紳もこれに同調し、下は粗野な人々に至るまで、風雅を慕う悪習に倣い、このような輩で遂に省都は一杯になった。軍事情動が勃興して以来、湖南省の若者で軍に就いた者は、富貴となって故郷に帰り、金銭を湯水のように浪費した。毎回の豪華な宴会は、まことにかつて豪奢を競った西晋の王愷や石崇のようであり、巨万の富を誇るものであった。…同治以前は、酒店の数は極めて少なく、料理も一定のものしかなかった。最近では美女が集まり、建物の工芸も精巧になり、不時の必要に備えるようになった。慶春園、萃賢閣、如松館、玉壺春のようなものがあり、老怡園が最も優れていた……歌妓の集う地として名高い秦淮の丁字簾、呉門の冶芳濱と雖も、これに勝るものは無かった。」

咸豊元年（1851）に洪秀全が中心となって広西で蜂起した太平天国軍は、咸豊三年（1853）には江寧（現在の南京）を陥落し、天京と改名して都とし、清朝に対抗する巨大勢力へと成長していく。太平天国の乱を鎮圧するため、湖南省湘郷出身の曾国藩は湖南の義勇兵を集めて湘軍を組織し、太平天国軍との10年近くに亘る攻防の末、同治三年（1864）、李鴻章が率いる淮軍等と共に天京を攻落した。

上記の引用文を通して、太平天国の乱後、湘軍として活躍した湖南の英雄たちが、莫大な富を携えて故郷に凱旋し、その財で贅沢の限りを尽くした事により、長沙は秦淮や呉門を凌ぐほどの享樂的、娯樂的雰囲気にも包まれていたことが分かる。各地より活動の場を求めて芸人が集い、同治以降の湖南の芸能が空前の繁榮を見せたことも想像に難くない。また、楊恩寿（1835-1891）には、『坦園日記』⁸という同治元年（1862）二月から同治九年（1870）十月までと同治十三年（1874）正月から三月までの出来事を記した日記があり、そのうち、同治五年（1866）十一月から同治九年十月までが、長沙滞在時の記録である。彼は「戲癖」（芝居好き）と自称するほど、とりわけ戯曲を愛好し、また自ら戯曲作品の創作も行っていった。彼の日記には観劇の記録、特に湘劇に関する記録が多いのも特徴である⁹。日記を通して、約四年間の長沙生活で、250回以上も芝居を観ていることが確認でき、また個人的に邸宅に招いて上演させる「堂会戯」（特別興行）だけでなく、「廟戯」（廟や寺での縁日の芝居上演）を200回ほど観劇しに出向いていることから、同治年間の湖南では民間におけ

⁷ 清・蓬道人（楊恩寿）撰『蘭芷零香録』については、雷瑠輯『清人説薈』（上海：掃葉山房、1928）所収のテキストを参照。

⁸ 楊恩寿『坦園日記』（上海古籍出版社、1983.5）を参照。

⁹ 注8前掲書『坦園日記』「出版説明」pp.1-3参照。

る芝居の上演も日常的に行われていたと考えられる。同時に、説唱芸人による活動も盛んで、楊恩寿の日記には、長沙で彼の母親や知り合いの誕生日を祝う宴席に説唱芸人を招いた、という記録も散見する。

実際のところ、同治以前の道光年間から湖南では説唱活動が既に流行しており、また上演だけでなく、説唱本の出版も行われていた。以下は、『中国曲芸志・湖南卷』に記される道光、咸豊年間の説唱活動と説唱本出版の様子である。

…在道光、咸豊年間，湖南的曲藝活動已很流行，有了更多的專業藝人。還出現了印刷唱本的作坊。如寶慶一地，在道光年間就出現了專門雕版印刷通俗唱本和調子書的印刷作坊文元堂、王長青等。所印唱本行銷全省，遠銷兩廣、江西、雲南、貴州、四川等地。唱本的廣泛流行，促進了城市中曲藝藝人的營業性演唱，競技之下，就湧現了一些著名藝人。¹⁰

…道光、咸豊年間、湖南の曲芸（各種説唱の総称）活動は既に流行し、更に多くの職業芸人が誕生した。また唱本を印刷する作業場も出現した。例えば、宝慶（現在の湖南省邵陽市）一帯には、道光年間に、通俗唱本や調子書を専門的に雕版印刷する作業場の文元堂、王長青などが出現した。印刷された唱本は湖南省全域に広く販売され、遠くは広東と広西、江西、雲南、貴州、四川などの地域まで売られた。唱本の広範な流行は、都市の説唱芸人に営利事業としての上演を促進し、技芸を競い合う中で、有名な芸人も幾人か現れた。

ここで言う「通俗唱本」とは、すなわち本研究で扱う「説唱本」を含むだろう。道光年間には既に説唱本の印刷と販売が行われていたという宝慶における説唱文芸活動は、衰微することなく更に発展を続け、同治年間には、宝慶府の皇恩寺に説唱本を専門に販売する書店が立ち並ぶ通りが出来ていたという。

…同治年間（1862-1874）宝慶府皇恩寺（今邵陽市西区長新街）形成専売《十月飄》、《双探妹》、《三姑記》、《三元記》、《孟姜女》等調子書和《五美図》、《彭玉麟私訪広東》等通俗唱本的一条街，有書鋪数十家。¹¹

…同治年間、宝慶府の皇恩寺（今の邵陽市西区長新街）には『十月飄』、『双探妹』、『三姑記』、『三元記』、『孟姜女』などの調子書と、『五美図』、『彭玉麟私訪広東』などの通俗唱本を専売する通りが形成され、書店は数十軒にのぼった。

また、江凌『清代兩湖地区的出版業』¹²によると、宝慶は、明清期にかけて官刻（政府による出版）、家刻（私人による出版）、坊刻（民間の書肆による出版）が発達し、中でも坊刻は最も盛んに行われ、特に清代の宝慶府は、書肆、書坊が集中し、湖南省ひいては全国における坊刻本の主要な産地のひとつでもあったという。また、当時全国に「三個半刻書中心」という言い方が流行し、ひとつが四川の成都、ひとつが福建の建陽、ひとつが江

¹⁰ 注5 前掲書『中国曲芸志・湖南卷』「総述・明清以来の湖南曲芸」p. 8

¹¹ 注5 前掲書『中国曲芸志・湖南卷』「大事年表」p. 26

¹² 江凌『清代兩湖地区的出版業』（北京：中国書籍出版社、2011. 7）

西の撫州、そして湖南の寶慶は「半」とされ、他の三つの地域と比べればやや劣るが、民間の書肆による出版が活発な地として名を馳せ、清末になると、長沙、永州、衡陽、茶陵などの地域にも坊刻業が新たな勢力として出現し、通俗唱本、年画、日用の曆、子供向け読み物などが盛んに出版されたという。¹³

この現象については、以下の『湖南省志』¹⁴にも同様の記述があり、清末から民国期における湖南省各地の具体的な書肆名を挙げ、説唱本出版の盛況ぶりが示される。

…清末和民國年間湖南坊刻最多的是“雜書”，即唱本、童蒙讀物。…刻印唱本的主要是唱本店、幾乎遍布全省各縣，長沙、湘潭、零陵、常德、益陽、邵陽、澧縣等地尤為集中。其中出書較多、影響較大的有：長沙的周雙槐堂、慶林堂書坊、誠興堂、左三元堂，湘潭的楊大文堂、黃三元堂、楊文星堂，常德的李三元堂、貴變記書店，益陽的文元堂、文化堂、斯為美書店，寧鄉的黎錦芝（芳）堂，澧縣津市的金玉堂等。這些唱本店大多開業於清代嘉慶、道光前後，有的歷經幾十年，至民國年間仍生意興隆。

…清末民国年間の湖南の坊刻で最も多いのが「雜書」、すなわち唱本や子供向け読み物だった。…唱本を印刷する主要な唱本店は、湖南省全域の各県に遍く存在し、長沙、湘潭、零陵、常德、益陽、邵陽、澧県などの地域に最も集中した。そのうち、出版量が多く、影響力も比較的大きかったのが、長沙の周雙槐堂、慶林堂書坊、誠興堂、左三元堂、湘潭の楊大文堂、黃三元堂、楊文星堂、常德の李三元堂、貴變記書店、益陽の文元堂、文化堂、斯為美書店、寧郷の黎錦芝（芳）堂、澧縣津市の金玉堂などであった。これらの唱本店は、大体が清代の嘉慶、道光年間前後に開業し、何十年も経て、民国年間に至るまで繁盛した店もあった。

…湖南刻印的唱本、戲文、童蒙讀物、歷書，不僅行銷本省，而且遠銷湖北、廣西、貴州等省。發行渠道主要是批發小商販，運送到各地，深入農村集鎮發售；有的甚至串鄉走村，因而銷行面積極廣，發销量很大。長沙市在抗日戰爭前，可以見到以賣唱本為生的人，他們用竹篾織成牌扇式折子一塊，安上手柄，折子上插著許多唱本、戲文、小本歷書。他們把折子扛在肩上，往來各廟坪和偏僻小巷，遇到適當地方，便放下折子倚在牆根，吆喝起來，招徠顧客。¹⁵

…湖南で印刷された唱本、戲文、子供向け読み物、曆書は、湖南省で販売されただけでなく、遠く湖北、広西、貴州などの省でも売られた。販売ルートは主に卸売りの行商人が、各地まで運び、農村の集落まで深く入り込んで販売した。村から村へと回る者すらいたのは、売る範囲が広ければ、発销量も増えるためであった。長沙市では抗日戦争前に、唱本販売を生業とする人が見かけられ、彼らは竹ひごで編んだ扇型の折子に取っ手を付け、折子に沢山の唱本、戲文、小型の曆書を挿した。彼らは折子を肩に担ぎ、廟や辺鄙な小路までやって来ては、適当な場所で、折子を降ろして扉際に

¹³ 注 12 前掲書『清代兩湖地區的出版業』「第六章清代兩湖地區的坊刻」「第三節清代湖南地區的坊刻」p. 278 参照

¹⁴ 湖南省地方志編纂委員會編、『湖南出版志・出版』（湖南省志第二十卷、湖南出版社、1991）

¹⁵ 注 14 前掲書『湖南出版志・出版』「第一篇北宋至民国湖南出版事業」「第一章雕板書刊刻」pp. 32-38

腰掛け、大声で呼び売りをし、客を招いた。

道光年間辺りから湖南説唱本の出版活動は勃興し、特に太平天国の乱で活躍した湘軍がもたらした湖南の繁栄は、それ以降の文芸活動の隆盛を促し、同治年間には説唱本を出版する書肆が湖南全域に遍く林立し、流行を築いたという。

このような当時の状況から鑑みるに、現在図書館等に所蔵される湖南説唱本は、恐らくほんの一部に過ぎないかもしれない。しかし、現存する湖南説唱本を見ると、当時の湖南省全域における盛況ぶりの片鱗をうかがわせるように、出版地に長沙、湘潭、永州、常德、益陽、宝慶などの各地や書肆名を確認することができる。また、上述の引用文にあるように、説唱本の行商販売により、湖南地域だけでなく、広東、広西、貴州、雲南、四川など、主に南中国を中心に他地域まで流通しており、当時の南方の民間諸芸能において、湖南説唱本は一定の影響力を有していたのではないかと推察される。

3. 研究の目的

本研究は、清の嘉慶期辺りから勃興する北方および東南海沿岸部における説唱文芸活動を背景に、いわゆる研究の空白地域とも言える、内陸部の湖南における説唱文芸の様相を解明するものである。特に、同治以降、湖南地域で爆発的な流行を築いた、読み物としての湖南説唱本は、中国の古典小説、戯曲、地方劇、説唱、民間故事など、多岐にわたる物語の伝承媒体の中で、どのような役割を果たしたのか。清代から民国期にかけて全国的に隆盛した説唱本出版活動の動きと合わせて検証し、物語の伝承や流通のメカニズムを再構築する。その上で、清末民初の説唱文芸における、湖南の地域文化的意義や湖南説唱本の位置を明らかにすることを目的とする。

4. 先行研究

管見の限り、湖南説唱本に関する先行研究は、姚他（1929）、張（1998）、謝（2008）以外に確認できない。また、物語の演変、伝承などの研究においても、従来、湖南説唱本は資料として全く取り上げられてこなかった。例えば、中国四大民間故事のひとつ「梁祝」故事の資料整理研究の中でも代表的な書籍を見ると、路工編『梁祝故事説唱集』¹⁶には、鼓詞 2 編、木魚書 3 編、弾詞 2 編が収録され、周静書主編『梁祝文化大観』¹⁷の「故事歌謡卷」には民間歌謡資料 36 編、「曲芸小説卷」には説唱資料として、弾詞 4 編、木魚書 3 編、鼓詞 3 編、宝卷 1 編を中心に、蓮花落、揚州清曲、淮北花鼓調など全 25 編の「梁祝」故事の関連作品が収録されているが、いずれも湖南説唱本の作品は収録されていない。同じく「白蛇伝」故事に関する小説、戯曲、講唱（説唱）、雑曲の資料を収録する、潘江東著『白蛇故事研究：附資料彙編』¹⁸も、説唱資料として、宝卷 13 編、弾詞 18 編、鼓詞（大鼓書）12 編、子弟書 19 編、雑曲資料として、馬頭調 17 編、牌子曲 21 編、鼓子曲 8 編、岔

¹⁶ 路工編『梁祝故事説唱集』（上海古籍出版社、1985）

¹⁷ 周静書主編『梁祝文化大観』（中華書局、1999）

¹⁸ 潘江東著『白蛇故事研究：附資料彙編』（臺北：臺灣學生書局、1981）

曲3編、群曲3編、山歌12編、蓮花落1編、閩南歌謡2編と、いずれも北方から上海、蘇州、杭州と江南地域を中心に、厦門、台湾から出版されたテキストを収めるが、湖南説唱本は未収録である。このように、民間説唱資料と言え、鼓詞、子弟書、彈詞、木魚書などが主であり、湖南説唱本は資料として看過されてきたのが現状である。

以下、本研究に直接関係する先行研究として、「4.1. 目録整理研究」、「4.2. 湖南伝統演劇・芸能に関する研究」、「4.3. 説唱本出版活動に関する研究」を取り上げて整理し、先行研究の問題点、および本研究の意義を明らかにしたい。

4.1. 湖南伝統演劇・芸能に関する研究

湖南説唱本の出版と密接に関わる、湖南地域の演劇・芸能については、以下のような研究成果がある。

先ず、中国の伝統演劇・芸能研究における代表的な大型叢書に、中華人民共和国文化部、中華人民共和国国家民族事務委員会、中国戯劇家協会が共同で編纂した『中国戯曲志』¹⁹と『中国曲芸志』がある。それぞれ、省、自治区、直轄市の行政区分に応じて、北京巻、河北巻、河南巻、江蘇巻など巻を分け、各巻は各地の文化主管部門が中心となって編修した。

『中国戯曲志』は、資料収集の下限を1982年までと定め（海南巻を除く）、各地域の演劇に関する事柄を網羅的に記録する。「総述」、「図表」、「志略」、「伝記」の四部構成から成り、「総述」では、各地の戯曲の歴史について時代順に概説し、「図表」では、大事年表や、劇種（演劇のジャンル）を整理した表などを載せ、「志略」では、「劇種」、「劇目（演目）」、「音楽」、「表演（演出）」、「舞台芸術」、「機構（養成所、学校、劇団など組織）」、「演出場所（演出場所）」、「演出習俗（演出の風俗習慣）」、「文物古迹（文物遺跡）」、「報刊專著（新聞、雑誌、専門書）」、「逸聞伝説（逸話伝説）」、「諺言口訣（ことわざなど）」について解説し、「伝記」では、地域で活躍した人物（存命者は除く）の活動内容を紹介する。

『中国曲芸志』も、『中国戯曲志』と全く同じ体裁を以て編纂され、資料収集の下限を1985年に定めて、中国の曲芸（各種説唱文芸の総称）の歴史と現状や、中華人民共和国成立以降の曲芸改革事業の成果と、曲芸史、曲芸論の研究成果なども反映させた叢書である。

両書とも「湖南巻」に湖南地域における演劇と民間説唱に関する様々な情報が網羅的に記載されるが、目録などは必ずしも完全とは言えない。また収録される脚本や説唱本の文字テキストも、全文ではなく一節を抜粋して音楽と共に載せるだけなので、作品を知るには他の各種文献を参考にしながら適宜補填する必要がある。

その他、湖南土着の演劇に関する研究として、漢班、花鼓戯、影戯、傀儡戯、票友班、賀紳班について簡単な沿革などを概観した、卓之（1934）「湖南戯劇概観」²⁰がある。また、湖南のどの演劇ジャンルでどの演目が上演されたかについて整理したものに、『湖南地方劇種誌（五）下：長沙市花鼓戯誌』²¹所収「湖南地方大戯劇種伝統劇目表」がある。そこには、『荊河戯志』『巴陵戯志』初稿に付録される劇目冊（即ち演目帳）、常德地区戯工室編『武

¹⁹ 中国戯曲志編集委員会編『中国戯曲志・湖南巻』（文化芸術出版社、1990）

²⁰ 卓之「湖南戯劇概観」『劇学月刊』3巻7期（1934）

²¹ 湖南省戯曲研究所編『湖南地方劇種誌（五）下：長沙市花鼓戯誌』（湖南文芸出版社、1992）

陵戲伝統劇目冊』、長沙市戲工室編『湘劇伝統劇目冊』、蔣経成編『衡陽湘劇弾腔劇目冊』、劉回春編『祁劇伝統劇目冊』、文憶萱編『辰河戲弾腔劇目総冊』、省戲研所編『高腔劇目初探』、胡健国編『湖南地方戯曲伝統劇目総冊』などの資料を参考に収集した、数百種におよぶ演目が、湘劇、祁劇、辰河戯、衡陽湘劇、武陵戯、荊河戯、巴陵戯、湘昆の、各種声腔（高腔、昆腔、低牌子、弾腔、弾腔北路、弾腔南路、弋板、吹腔、儺腔、七句半、七鍾半、草鞋板、襄陽調、小調、白口戯）のいずれにおいて上演されたか、一覧表にまとめられている。

また、同じく『湖南地方劇種誌（五）下：長沙市花鼓戯誌』所収の「花鼓戯、陽戯伝統劇目表」は、湖南省の長沙、常德、岳陽、衡陽、零陵、邵陽の花鼓戯と陽戯における、100種余ある演目の上演状況を一覧表にまとめたもので、7種の演劇史の初稿付録の演目帳と、唐璧光、伍光華、何欽法、陽楓、黄吉川、向緒成の各氏が提供した伝統演目の粗筋と、陳青霓著『湘潭地区花鼓戯劇目初探』、胡健国編『湖南地方戯曲伝統劇目総冊』を参考に作成された。なお、近年では、湖南の高腔、低牌子、昆腔、弾腔の四つの声腔および小雑戯で演じられた660種の演目について、内容の梗概とどのジャンルで演じられたか等の解説を付した、范正明（2011）『湘劇劇目探微』²²も出版されている。

4.2. 目録整理研究

本研究の目的である、湖南説唱本の物語の説唱文芸全体における流布状況を把握するためには、あわせて他地域の説唱本を調査する必要もある。その場合、第一次的調査として確認するのが、既存の目録や書録である。

中国で「説唱」は、「曲芸」や「俗曲」とも称される。先ず、「俗曲」に対する価値を見出し、大々的に収集を始めたのは、北京大学歌謡研究会であったが、「俗曲」に関する最初の大型目録『中国俗曲總目稿』²³を出版したのは、中央研究院歴史言語研究所であった。

劉復は、当時の俗曲収集について、『中国俗曲總目稿』「序」で以下のように述べる。

我們研究民間文學，從民國六年冬季開始徵集歌謠起，到現在還不滿十五年。在這個很短的時期之中，我們最初所注意的只是歌謠，後來就連俗曲也同樣看重，甚而至于看得更重些。²⁴

我々の民間文學研究は、民国六年（1917）の冬に歌謡を収集し始めてから、現在に至るまで、まだ15年に満たない。この短い期間の中で、私たちが最初に注意したのは歌謡だけだったが、後に俗曲までも同様に重要視し、ひいてはより一層重視されるようになった。

当初は民間歌謡を収集することを目的としたが、次第に俗曲にも注意の目が向けられるようになったことが分かる。その後、歴史言語研究所が俗曲のテキストを大量購入し、また

²² 范正明『湘劇劇目探微』（長沙：岳嶺書社、2011）

²³ 劉復、李家瑞等編『中国俗曲總目稿』（中央研究院歴史言語研究所単刊甲種之九、中央研究院歴史言語研究所、1932.5初版、1993.2重版）

²⁴ 注23前掲書『中国俗曲總目稿』「序」p.1

同研究所の劉復が、以前より個人的に俗曲を収集していたこともあり、劉復は李家瑞と一緒に、車王府曲本所蔵本（清のモンゴル族貴族喀爾喀賽音諾諺部の車布登札布＜通称車王府＞が収集した北京の戯曲、芸能の上演テキスト）、国立北平図書館所蔵本、故宮博物院所蔵本、劉復旧蔵本と合わせて、全部で六千種余りの俗曲テキストに対する整理作業を行った。全ての俗曲を、演目名の字数と筆画に従って配列し、また各テキストの冒頭二行の文言と、版本情報を付記して、1932年5月に完成した。

『中国俗曲總目稿』に収録される俗曲テキストの種類は、地域ごとに、河北が41009種、江蘇が718種、広東が525種、四川が165種、福建が165種、山東が139種、河南が116種、雲南が66種、湖北が24種、安徽が18種、江西が2種である。

これについて劉復は、「當初我們打算把這部目錄叫做『中國俗曲總目』，後來我覺得我們所見到的，在中國俗曲全體之中，恐怕還是很小的一部分，所以加一『稿』字，以為將來增補或重編的預備（当初、私たちはこの目録を『中国俗曲總目』と名付けようとしたが、後に、私たちが目にしたのは、中国の俗曲全体のほんの一部かもしれないと思うようになり、『稿』の字を加えて、将来増補或いは重訂する用意とした）。」²⁵と述べるように、実際のところ収録テキストの出版地には偏りがあり、本研究で扱う湖南説唱本も、『中国俗曲總目稿』に全く収録されていない。

次に、本研究では「説唱」と称す、いわゆる「俗曲」の定義について、劉復は同書「序」にて以下のような見解を述べている。

歌謠與俗曲分別，在於有沒有附帶樂曲；不附樂曲的如張打鐵，李打鐵，就叫做歌謠；附樂曲的如五更調，就叫做俗曲。所以俗曲的範圍是很廣的；從最簡單的三句五句的小曲起，到長篇整本，連說帶唱的大鼓書，以至于許多人合同扮演的蹦蹦戲，中間有不少的種類和階段。但我們沒有把皮黃和崑曲包括在內。這裏面也並沒有多大的理由，只是因為這兩種已經取得正式的舞台劇的資格，不在「雜耍」之列…

歌謠と俗曲の區別は、樂曲を伴うかどうかによる。樂曲が付かない「張打鉄、李打鉄」のようなものは「歌謠」と言い、樂曲が付く「五更調」のようなものは「俗曲」と呼んだ。したがって俗曲の範囲はとても広く、最も簡単な三句、五句の小曲から、長編の全幕通し劇まで、「説（カタリ）」と「唱（ウタ）」の大鼓書や、多くの人が合同で演じる蹦蹦戲に至るまで、その間には多くの種類や段階があった。しかし、我々は皮黃と崑曲は俗曲の中に含まなかった。これには特に大きな理由は無いのだが、ただこの二種はすでに正式な舞台劇の資格を得ており、「雜耍」の限りではない…

更に、李家瑞は『北平俗曲略』（中央研究院歴史語言研究所、1932）を執筆し、『中国俗曲總目稿』で網羅的に集めた膨大な量の「俗曲」を、上演形態からジャンルごとに整理する作業を行い、主に北平に伝わった俗曲62種をジャンルごとに概説し、それらを次の5項目に大きく分類した。

「説書之属」：説唱故事（故事を説唱するもの）

「戲劇之属」：扮演故事（故事を演じるもの）

²⁵ 注23前掲書『中国俗曲總目稿』「序」pp. 2-3

「雑曲之属」：通常所稱小調（通常小調と呼ばれるもの）

「雑耍之属」：帶耍帶唱（戯れながら唱う）

「徒歌之属」：不附帶樂器（樂器を付帶しないもの）

『北平俗曲略』は、62種の「俗曲」を以下のように項目別に分類した。

説書：説唱鼓書、大鼓書、絃子書、竹板書、快書、南詞

戯劇：嘯嘯戲、傀儡戲、灯影戲、梆子腔、喝喝腔、吹腔、打連廂、灘簧

雑曲：濟南調、利津調、湖広調、福建調、馬頭調、靠山調、蕩湖調、辺関調、玉溝調、五更調、西調、窰調、牌子曲、群曲、岔曲、揚州歌、四川歌、琴腔、十盃酒、十朶花、歎十声、大四景、老八板、剪靛花、銀紐絲、紅綉鞋、梳粧台、对花、蘇武牧羊、西江月、清江引

雑耍：蓮花落、打花鼓、跑早船、鋸大缸、西湖景、噉来実、耍猴、雙簧、餓口、道情、倒喇

徒歌：児歌、喜歌、秧歌、夯歌、叫賣歌、馬糞薈歌

この『北平俗曲略』による「俗曲」の各種ジャンルに対する解説や分類整理は、以降の「俗曲」整理研究の大本となったと言える。ちなみに、『中国俗曲総目稿』に収録される資料は、抗日戦争や国共内戦の影響で、大陸を転々として最終的に中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館へ移され、その後、抗日戦争前後の作品や台湾歌謡のテキスト 394種と併せて保管された。同研究所の曾永義らは、傅斯年図書館所蔵の俗曲に対して改めて分類作業を行い、1978年に「中央研究院所蔵俗文学資料的分类整理和編目」（『説俗文学』、聯経出版事業公司、1984、所収）を發表した。彼らは、先に挙げた李家瑞の『北平俗曲略』の分類方法を元に、新たに「雑著之属」を増やして6項目に分類し、またかつて劉復や李家瑞が「俗曲」ではないとした「崑曲」と「皮黄」を、「俗曲」の範囲に入れた。詳しい分類状況は以下のとおり。

戯劇：13類、3697種、5183目

崑曲、皮黄、川戲、梆子、越劇、粵劇、滇劇、楚劇、福州戲、淮戲、影戲、嘯嘯戲、灘簧など

説唱：3類、2304種、3356目

- 1、弾詞：福州平話、木魚書（南音、龍舟歌の二種）など
- 2、鼓詞：説唱鼓書、子弟書、大鼓書、快書、石派書など
- 3、宝卷

雑曲：89類、4078種、5354目。そのうち待考のものが162種、186目。

濟南調、利津調、湖広調、福建調、馬頭調、靠山調、蕩湖調、辺関調、五更調、窰調、牌子曲、群曲、岔曲、四川調、琴腔、十朶花、十盃酒、嘆十声、剪靛花、銀紐絲、梳粧台調、紅綉鞋、西江月、对花、十二月、侷侷調、七七調、毛毛雨、和尚採花調、関東調、滿江紅、小情郎調、広東小調、湖北調、一字調、梅花調、揚州調、刮地調、羅江怨、天津調、楊柳青、京調、毛延寿調、倒板槳、的篤班調、四喜調、国慶調、川心調、月映花調、寧波調、漢陽調、湘江浪調、馬灯調、清淮調、金柳曲調、大四景、兪調、雅調、無錫調、閩南調、客家調、玉溝調、寄生草、

黄歴調、雙黄歴調、南叠落、北叠落、一江風、重叠序、螺絲轉、粉紅蓮、劈破玉、雙劈破玉、起字呀呀啲、北河調、番調、倒番調、重重統、秦吹腔花柳歌、打棗竿、盤香詞、彈簧調、兩句半、八角鼓、嶺頭調、南詞、清江引、老人板、蘇武牧羊など。

雜耍：10類、194種、313目

蓮花落、鮮花調、跑旱船、数来宝、雙簧、嵌口、急口令、西湖景、鋸大缸、道情など。

徒歌：7類、241種、427目

兒歌、喜歌、秧歌、夯歌、叫賣歌、軍歌、山歌など。

雜著：9類、182種、196目

經、籤、命相、藥書、信札、謎語、笑林、勸善箴言、その他。

先に挙げた湖南説唱本における姚他（1929）、張（1998）による分類方法も、李家瑞や曾永義のものやや似ており、先学を参考にしたと考えられる。

再び論を目録整理研究に戻す。『中国俗曲總目稿』の出版とほぼ同時期の1931年に、北京大学の顧頡剛は「蘇州唱本叙録」²⁶を發表した。これは、北京大学歌謡研究会による歌謡収集の後、唱本に注目した顧頡剛が、個人的に蘇州へ四回赴いて現地の露店で販売される唱本を収集し、従弟の呉立模と共同で作成した解題である。実は、1920年に原稿は出来ており、北京大学の『歌謡週刊』に發表しようと考えていたそうだが、当時は歌謡を重視し、唱本は下らない文人の創作と軽視され、当該研究は不採用となり、その後10年近く放置されたという背景がある。早くから説唱本が注目されていても、その後の研究が大きく発展しなかったのは、このような説唱本に対する観念が研究者の間で根本的にあったからと推測される。それから、やや遅れて傅惜華（1962）『北京伝統曲芸総録』²⁷が出版された。

1990年以降になると、多くの研究者たちが説唱テキストに目を向け始め、目録作成が活発に行われるようになった。その歩みについては、任広世（2008）「明清俗曲研究綜述」²⁸にも詳しいが、任広世（2008）には日本人研究者による成果を収録していないため、以下に補いながら、近年における説唱本目録整理研究を概観する。

先ず、任広世（2008）で言及されるものを以下に挙げると、車錫倫（1994）「清末揚州刻印的唱本」²⁹、仇江、張小瑩（2000）「車王府曲本全目及藏本分布」³⁰は、車王府曲本の目録の中で最も整っており、蔣守文（2006）「四川善書書目」³¹は、重慶市図書館所蔵の俗曲坊刻本を収録した、四川俗曲唱本の比較的整った目録であると述べる。また、李秋菊（2007）

²⁶ 顧頡剛「蘇州唱本叙録」『開展月刊』第十、十一合期、即ち『民俗学集鐫』第一輯（1931）。本研究が参照したのは、顧頡剛『顧頡剛民俗論文集』（北京：中華書局、2011.1）pp. 288-304所収の同論文である。

²⁷ 傅惜華『北京伝統曲芸総録』（中華書局、1962）

²⁸ 任広世「明清俗曲研究綜述」『中国詩歌研究動態』第4輯（2008）

²⁹ 車錫倫『俗文学叢考』（学海出版社、1995）pp. 183-193

³⁰ 劉烈茂、郭精銳等『車王府曲本研究』（広東人民出版社、2000）

³¹ 蔣守文『半方齋曲芸論稿』（四川大学出版社、2006）

「清末民初時調叙録」³²には、国家図書館蔵鄭振鐸旧蔵の時調歌本 641 冊、復旦大学図書館蔵趙景深旧蔵の時調唱本、安徽省の蕪湖図書館蔵阿英旧蔵の時調唱本を中心に、上海図書館蔵本も幾つか収めていると述べる。補足すると、李（2007）に先立つ時調研究として、川浩二（2006）「清末民初上海時調小曲初探—復旦大学蔵趙景深旧蔵唱本を中心として—」³³が、復旦大学の時調唱本所蔵状況を明らかにしている。

また、任広世（2008）は、「国内外の各図書館に散在する俗曲資料や民間の俗曲資料で、まだ多くが発見、整理されていない。例えば、南開大学図書館蔵朱一玄贈書『唱本滙訂』（四川俗曲唱本）、中山大学図書館蔵の揚州、河南などの地域の俗曲唱本、早稲田大学図書館蔵澤田瑞穂『風陵文庫』の俗曲唱本、東京大学東洋文化研究所蔵俗曲唱本などいずれも未整理である」と述べるが、日本の説唱本については既に多くが整理されているので、新しい目録整理研究と併せて以下に挙げる。

早稲田大学中央図書館風陵文庫（澤田瑞穂旧蔵）所蔵本については、『早稲田大学風陵文庫目録』（1999）³⁴に収録され、東京大学東洋文化研究所雙紅堂文庫蔵の説唱本については、中山大学の黄仕忠による「雙紅堂文庫蔵清末四川「唱本」目録」（2005、2006）³⁵、「雙紅堂文庫蔵清末民初北京木刻、石印本『唱本』目録」（2007）³⁶、「雙紅堂文庫蔵北京排印本唱本目録」（2007）³⁷がある。なお、風陵文庫蔵の資料は、早稲田大学図書館（<http://www.wul.waseda.ac.jp/index-j.html>）の蔵書検索や、古典籍データベース（<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/about.html>）からも検索が可能であり、雙紅堂文庫（<http://hong.ioc.u-tokyo.ac.jp/list.php>）と共に、蔵書はデジタルアーカイブ化されており、影像是自由に閲覧、ダウンロードが出来る。また、九州大学附属図書館濱文庫（濱一衛旧蔵）が所蔵する清末民国時代までの唱本 1053 冊に対する整理作業が中里見敬他によって進められており、現在までに「濱文庫蔵唱本目録稿（一）～（十三）」（2010 - 2014）³⁸が発表されている。その他、日本国内では、香川大学図書館、東京都立図書館

³² 李秋菊『清末民初時調研究』、復旦大学博士論文（2007）

³³ 川浩二「清末民初上海時調小曲初探—復旦大学蔵趙景深旧蔵唱本を中心として—」『中国都市芸能研究』第 5 輯（2006）pp. 15-33

³⁴ 早稲田大学図書館編『風陵文庫目録』（早稲田大学図書館文庫目録第 17 輯、早稲田大学図書館、1999）

³⁵ 黄仕忠「雙紅堂文庫蔵清末四川「唱本」目録」『東洋文化研究所紀要』第 148 冊（2005）

³⁶ 黄仕忠「雙紅堂文庫蔵清末民初北京木刻、石印本『唱本』目録」『東洋文化研究所紀要』第 150 冊（2007）

³⁷ 黄仕忠「雙紅堂文庫蔵北京排印本唱本目録」『東洋文化研究所紀要』第 151 冊（2007）

³⁸ 中里見敬他「濱文庫蔵唱本目録稿（一）～（十三）」はそれぞれ順に、『言語科学』第 45 号、九州大学言語文化研究院言語研究会（2010）：pp. 117-137、『言語科学』第 46 号（2011）：pp. 147-166、『九州大学附属図書館研究開発室年報』2010/2011、（2011）：pp. 65-74、『言語科学』第 47 号（2012）：pp. 91-110、『九州大学附属図書館研究開発室年報』2011/2012、（2012）：pp. 51-60、『言語科学』第 48 号（2013）：pp. 95-119、『九州大学附属図書館研究開発室年報』（九州大学附属図書館研究開発室）2012/2013、（2013）：pp. 51-68、『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第 18 集第 1 号、（2013）：pp. 85-10、『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第 18 集第 2 号（2014）：pp. 65-84、『言語科学』第 49 号（2014）：pp. 101-120、『言語文化論究』第 32 号（2014）：pp. 39-60、『九州大学附属図書館研究開発室年報 2013/2014、（2014）：pp. 50-73、『言語文化論究』第 33 号（2014）：pp. 87-106 に収録される。

などにも説唱本の所蔵があるため、今後調査し整理する必要があるだろう。

次に、各説唱ジャンルで独立して行われる目録整理作業の成果のうち代表的なものを挙げたい。

先ず、江南の弾詞については、近年出版された盛志梅（2008）『清代弾詞研究』付録「弾詞知見総録」³⁹が、明、清、民国期の弾詞 530 種、1700 余りあるテキストを整理した、最も網羅的な大型弾詞目録と言えるだろう。盛志梅（2008）の資料収集範囲は、大陸は、黒龍江大学図書館、東北師範大学図書館、北京国家図書館、北京大学図書館、首都図書館、北京師範大学図書館、中国社会科学院資料室、天津図書館、南開大学図書館、山東大学図書館、鄭州大学図書館、河南省図書館、浙江図書館、南京師範大学図書館、南京大学図書館、南京図書館、南京大学東洋文化研究所、揚州大学図書館、蘇州市評彈団資料室、蘇州市図書館、上海図書館、華東師範大学図書館、復旦大学図書館、上海評彈団、福建師範大学図書館、台湾は、中央研究院歴史語言研究所、日本は、国立国会図書館、京都大学人文科学研究所までに及び、同時に、従来 of 代表的な目録である、胡士瑩・蕭欣橋編『弾詞宝卷書目』、『中国古籍善本書目・集部』、鄭振鐸『西諦所蔵弾詞目録』、周良『弾詞経眼録』、関徳棟『胡氏編著弾詞目訂補』、譚正璧『弾詞叙録』の情報も含まれる。

木魚書に関する目録は、金文京・稲葉明子・渡辺浩司編著（1995）『木魚書目録』⁴⁰が、最も代表的なものと言えるだろう。その資料収集範囲の詳細については、同書の「凡例」を参照されたいが、中国大陸、香港、ドイツ、アメリカ、パリ、ロシア、日本など全国各地の所蔵機関、個人所蔵のテキスト、各研究者による調査記録を網羅し、実に 30 カ所以上から全 3874 冊のテキストを収集、整理している。

潮州歌については、上田望・大塚秀高（1999）「潮州歌冊研究目録」⁴¹がある。本目録は、譚正璧・譚尋『木魚歌潮州歌叙録』⁴²著録の潮州歌冊、拋薛汕所蔵潮州歌冊影印本（上田望・大塚秀高所蔵、これらは潮汕歴史文化研究中心所蔵のもの）、中山大學図書館所蔵潮州歌冊（田仲一成氏調査）、林有鈿「潮州歌冊要目」（同氏『潮州民間文学浅論』所収 潮州市文化局文芸創作基金会編印）、「広東省潮州市博物館地方文献」目録（金文京氏調査、全 140 種）、東京大学東洋文化研究所所蔵の潮州歌冊（大塚秀高氏調査）の各成果を、ひとつにまとめたものである。また、大塚氏には「石印鼓詞研究（其一）～（其三）」⁴³（1999、2000）があり、これは台湾の中央研究院傅斯年図書館所蔵の「石印鼓詞」に分類される石印出版された鼓詞テキストの書誌情報を整理したもので、上海の椿蔭書局、協成書局から出版されたテキストが大半を占めている。

鼓詞については台湾の研究者も注目しており、胡紅波が台湾の古本屋で個人的に収集した 100 種余りの説唱本を整理し、その中の鼓詞 64 種に対する初歩的な成果として、「民初

³⁹ 盛志梅『清代弾詞研究』（済南：齊魯書社、2008）pp. 263-479

⁴⁰ 金文京・稲葉明子・渡辺浩司編著『木魚書目録』（好文出版、1995）

⁴¹ 上田望・大塚秀高「潮州歌冊研究目録（稿）」『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第 3 輯（1999. 4）：pp. 139-151

⁴² 譚正璧・譚尋『木魚歌潮州歌叙録』（文史哲研究資料叢書、書目文献出版社、1982）

⁴³ 大塚秀高「石印鼓詞研究（其一）」『埼玉大学紀要 教養学部』第 35 卷第 1 号（1999）：pp. 43-56、同「石印鼓詞研究（其二）」『埼玉大学紀要 教養学部』第 35 卷第 2 号（1999）：pp. 67-88、同「石印鼓詞研究（其三）」『埼玉大学紀要 教養学部』第 36 卷第 1 号（2000）：pp. 17-44

繡像鼓詞刊本三十二種叙録」(2000)⁴⁴、「清末民初繡像鼓詞三十二種叙録」(2001)⁴⁵を發表し、更に資料収集を続けて、2003年には130種に及ぶ鼓詞資料をまとめて「清末民初繡像鼓詞百卅種総論」⁴⁶を發表した。

一方、大陸では、1990年代に設立された山西大学中国鼓詞研究中心が、近年になって鼓詞に関する研究成果を次々と發表している。2006年には、山西大学文学院鼓詞搜集研究中心が、10年の歳月をかけて集めた各時代の鼓詞(大きく、中国伝統鼓詞、抗日解放戦争時期鼓詞、共和国時期鼓詞の三期に分ける)と、中国国内の20カ所に及ぶ図書館の蔵書目録に記載される鼓詞全4992種を照合して整理した、大型鼓詞目録『中国鼓詞総目』⁴⁷を2006年に出版したのを皮切りに、2009年には、『中国鼓詞総目』に収録される鼓詞のうち、清代の第一次アヘン戦争から中華民国成立以前(1840-1912)に中国の北方で木版印刷された鼓詞を中心にテキストの簡単な考証と物語の梗概を記載した『清代木刻鼓詞小説考略』⁴⁸や、2011年には、これまでの成果報告をひとつにまとめ、目録整理研究を基礎に、鼓詞の起源から民国期までを体系的に著した『中国鼓詞文学発展史』⁴⁹を發表し、鼓詞の全容を明らかにした。

子弟書については、陳錦釗「子弟書の整理與研究世紀回顧」⁵⁰に詳しいが、傅惜華『子弟書總目』⁵¹、波多野太郎『子弟書集』⁵²を始めとし、テキストの活字出版も盛んに行われている。

以上は代表的なものであるが、このような長年に亘る整理が続けられた結果、現在では全国各地に散在する説唱本の全貌が、民間で個人が所有するものを除いて、少しずつ把握することが可能となって来た。また、インターネットの普及により、全世界の殆どの所蔵機関は、オンライン蔵書検索が出来るようになり、「俗曲」「彈詞」「鼓詞」や物語名など関連するキーワードを検索項目に入れば、一次的な作業としての蔵書確認は可能である。もしかしたら目録整理研究は、次第に不要になって来るのかもしれない。しかし、各所蔵機関によって分類法が曖昧であったり、キーワードが不統一であったり、検索結果に遺漏があったり、内容の記載が無い(中央研究院傅斯年図書館の検索システムには、当該書籍の冒頭数句が併記されているため、簡単な内容の確認はできる)ものが殆どであり、キーワードを入れない限り各図書館がどのような資料を所蔵しているか不明であるため、やはりインターネットだけでなく、各種書誌目録と相互補完的に利用する必要があるだろう。

このように、清代から民国期にかけて大量に出版された説唱本に関する研究は、基礎的作業であるテキストの収集と整理、及びそれらに対する目録の作成が中心に行われ、現在に至るまで大きな成果をあげている。

⁴⁴ 胡紅波「民初繡像鼓詞刊本三十二種叙録」『成大中文学報』第8期(2000)

⁴⁵ 胡紅波「清末民初繡像鼓詞三十二種叙録」『成大中文学報』第9期(2001)

⁴⁶ 胡紅波「清末民初繡像鼓詞百卅種総論」『成大中文学報』第11期(2003)

⁴⁷ 李豫、李雪梅、孫英芳、李巍編著『中国鼓詞総目』(太原:山西古籍出版社、2006)

⁴⁸ 李豫、尚麗新、李雪梅、莫麗燕著『清代木刻鼓詞小説考略』(太原:三晋出版社、2009)

⁴⁹ 李雪梅、于紅、霍耀中、尹變英、李豫『中国鼓詞文学発展史』(上海:上海人民出版社、2011)

⁵⁰ 陳錦釗「子弟書の整理與研究世紀回顧」『漢學研究通訊』22:2、總86期(2003)

⁵¹ 傅惜華『子弟書總目』(上海古典文學出版社、1957)

⁵² 波多野太郎『子弟書集』(横濱市立大学、1976)

本研究では、上述の目録整理研究を基に、姚他（1929）、張（1998）、謝（2008）以外の各所蔵機関に蔵される未整理の湖南説唱本について全面的に調査を行い、併せて現存する湖南説唱本の整理目録を作成する。また、湖南説唱本で出版される物語が、説唱を始めとする各種媒体でどのように流通し流布するのかを調査するため、網羅的なテキスト収集を行うにあたり、上述の目録整理研究の成果を最大限に活用する。

4.3. 説唱本出版活動に関する研究

説唱本のテキストの整理や目録の作成作業が進む中、同じく成果をあげているのが、説唱本の出版・流通に関する研究である。各地の各説唱ジャンルにおける説唱本出版活動の状況を把握することは、全国における湖南説唱本出版活動の位置や意義を明らかにする上で非常に重要となってくる。

従来、木刻出版が主流であった印刷技術は、清末民初にひとつの転機を迎え、西洋からの石印技術の導入と上海における石版印刷の勃興により、各地で行われていた木版印刷は、次第に上海の石版印刷に取って代わられるようになった。説唱本も木刻から石印へと印刷形態を移し、ひとつの文化現象となって大きな影響を与えた。そのことについては、顧頡剛が「蘇州唱本叙録」で、1920年6月20日付の記録として次のように指摘している。

說到收集唱本，現在真是“千鈞一髮”的時期了。上月我旅行到濟南，到地攤上看，滿是上海印本。要買濟南本地刻的，買不到。訪了幾家鋪子，才得到本地木板的十餘本。我問他們；“為甚麼這樣少呢？”他們說；“上海的又好看，價又廉：本地的誰要買！”唉，上海靠了印刷術的發達，紙價的低廉，印出了鉅量的唱本，分散到各地，把各地原有的民眾文藝一切打倒，這文化的侵略真不小呵！（現在的小孩只唱小學校裏的歌而不唱各地原有的歌謠，與此正同例。）⁵³

唱本の収集について言えば、現在は真に「一髮千鈞を引く」危ない時代となった。先月、旅行で済南に赴き、露店を見ると、全て上海で印刷された書物だった。済南の木刻本を買いたくても、手に入れることが出来ないのである。幾つかの書店を訪れて、やっと済南で出版された木刻本を10冊余り買うことが出来た。私が彼らに「どうしてこんなに少ないのか」と尋ねると、彼らは、「上海のものは見た目も良いし、値段も安い。現地のものなど誰が買うかね」と答えた。ああ、上海は印刷技術が発達し、紙が廉価であることを頼みに、大量の唱本を印刷して各地に渡し、各地にもとからある民衆文芸の全てに打撃を与えた。この文化的な侵略は実に大きい。（現在の子供が小学校で習う歌しか歌わず、現地の歌謡を歌わないのは、正にこれと同類である。）

このように、中国の伝統的な地方文化を侵食したとまで言わしめた上海の石版印刷は、

⁵³ 顧頡剛「蘇州唱本叙録」『開展月刊』第十、十一合期、『民俗学集鐫』第一輯（1931）、今、顧頡剛『顧頡剛民俗論文集』（北京：中華書局、2011、『顧頡剛全集』）pp. 288-304所収のものを参照。

どのように中国で勢力を広げたのだろうか。以下に、中国における石版印刷導入の背景について簡単に振り返りながら、現在まで諸研究で明らかにされている説唱本出版との関連について述べていく。

1798年、オーストリアのAloys Senefelder（施内費爾特 1771 - 1834）が石印技術を発明すると、その技術は、道光十二年（1832）に、英国倫敦布道会宣教師のW.H. Medhurst（麦都思 1786 - 1857）によって中国にもたらされ、当時の通商港である広州に石版印刷所を設立し、またバダビア（現ジャカルタ）にも石版印刷所を開設した。

道光13年（1834）、アメリカからの最初の宣教師Eligah Coleman Bridgman（裨治文 1801 - 1861）が、雑誌『中国文庫（Chinese Repository）』を創刊すると、麦都思はジャカルタの石版印刷所でこの中国語書籍を印刷したそうで、最初期の中国における石印出版は、ごく限られた範囲で行われていたと思われる。

石版印刷が中国に徐々に根付くようになるのは、アヘン戦争後の道光二十三年（1843）に上海が開港されて以降のことである。上海が開港すると、国内外の文化交流の中心は、これまでの通商港である広州から次第に上海へ移り、外国商品、文化、資本、科学技術などの受け入れも、経済活動も全て上海で展開されるようになる。上海開港と同時に、麦都思もバダビアの石版印刷所を上海に移し、中国で最初の外国資本の企業である墨海書館印刷所を設立した。初めは主に倫敦布道会の布教用『聖經』や宣伝物を印刷していたが、1850年以降は翻訳書や科学技術書も少量ではあるが出版したという。

光緒年間に入ると、石印書籍が爆発的に出回る契機となる出来事が起こる。『申報』の創刊者であるF. Major（美查）が、光緒五年（1879）に点石齋書局を開業すると、すぐに『康熙字典』を数か月間で10万部印刷したところ、全て完売となり巨万の利益を得たのである。その桁外れな印刷量と売れ行きに、中国の出版界は大きな衝撃を受けた。当時の様子は、姚公鶴『上海閑話』にも以下のように記録される。

聞点石齋石印第一獲利之書為「康熙字典」、第一批印四万部、不数月而售罄、第二批印六万部、適某科舉士子北上会試、道出滬上、每名率購五六部、以作自用及贈友之需、故又不数月即罄。⁵⁴

聞くところによると、点石齋が石版印刷で最初に利益を得た書が『康熙字典』で、第一刷で四万部を印刷し、数か月经たないうちに売り切れ、第二刷で六万部を印刷したが、ちょうど科挙試験を受ける男子が会試で北京へ行き、途中上海に出ると、各人均しく五、六部を購入し、自身で使用するのと友人に贈る需要があったことで、また数か月も経たないうちに売り切れた。

しかもこの『康熙字典』は、光緒八年（1882）、九年（1883）、十一年（1885）、十二年（1886）と版を重ねて出版され、点石齋書局のロングセラー書籍となった。石版印刷が、従来の木版印刷に較べて少ない投資で大量生産ができ、且つ迅速に利潤を得ることができるということを、点石齋書局が成功例を以て示し、上海に石版印刷所が多数出現するひとつの契機となった。光緒年間には、上海土山湾印書局、上海点石齋書局、上海中華書局、上海文明

⁵⁴ 姚公鶴『上海閑話』（上海灘与上海人叢書、上海古籍出版社、1989.5）

書局、上海商務印書館など、いずれも大型石印書局が開業し、科挙或いは試験の教材、補助読み物、児童用の啓蒙書や、暦法、宗教、占いなど民衆の社会生活に関連する書物を中心に出版した。⁵⁵

一方、説唱本や小説などの通俗読みものも、光緒年間辺りから石印出版されるようになる。ただし、上述の大型書局ではなく中小書局で専ら印刷され、また同じ通俗読み物でも、小説と説唱本では小説の方が比較的早く石印本となって世に出回ったことなども、現在までの諸研究を通して少しずつ明らかになって来ている。

清末民初の中国の通俗読み物の石印本出版の実態について、調査対象を小説に限って考察したものに、丸山浩明（1999）「中国石印版小説目録（稿）」⁵⁶、丸山浩明（2002）「中国石印本小説の特徴と役割」⁵⁷がある。説唱については、胡紅波（2003）「清末民初繡像鼓詞百冊種総論」、李豫ほか（2006）『中国鼓詞総目』、李雪梅、李豫（2007）「晚清民国“上海石印鼓詞”概念闡釈」⁵⁸、李豫、于紅（2011）「清末民初上海石印鼓詞小説文化現象透視」⁵⁹、李雪梅ほか（2011）『中国鼓詞文学発展史』など、鼓詞の分野で石印出版に関する分析が行われている。いずれの研究も、各目録や著者自身が収集した膨大な数量の小説或いは鼓詞の書誌情報を整理し、テキストの刊行年から年別に出版量を点数化し、その推移をグラフ化することを基礎としている。

先ず、小説の状況を見てみたい。丸山氏が各種目録や文献から収集した石印本小説 470部、800種以上あるテキストのうち、年代の記載が明確な 630種余のテキストに対して行った調査によると、石印本小説の出版年代は、おおよそ 1875年（光緒元年）から 1930年前後の 50余年に集中しており、1941年以降に出版されたテキストは確認されず、また、全体を通じた出版数の推移は、以下のものであったと言う。

1. 光緒十四年（1888）がこの年のみ前後の年に比べて多い。
2. 前半の 1893・1894・1895（光緒十九～二十一）年が発行点数が多い。
3. 中盤の 1908～1910、1912～1914年がこれに次ぐ。
4. 1920年代は平均して毎年 10点ほどが確認できる。⁶⁰

また、石印本小説の出版地は殆ど上海が占め、出版社は、「筆頭は上海書局で、光緒元年（1875）から光緒年間を中心に 1930年にかけて、百種以上の石印本小説を出版している事が知られる。これに次ぐのが三十種以上を出している上海広益書局・上海錦章図書局（或いは錦章書局）の二所である。この他、民国時代 1920年代を中心に上海会文堂及び会文堂書局が活

⁵⁵ 注 49 前掲書『中国鼓詞文学発展史』「第六章清代鼓詞的刊行与伝播」「第六節清末民初上海出版的石印鼓詞小説」 pp. 266-282

⁵⁶ 丸山浩明「中国石印版小説目録（稿）」『広島女子大学国際文化学部紀要』第 7 号（1999）： pp. 1-39、所収

⁵⁷ 丸山浩明「中国石印本小説の特徴と役割」『広島女子大学国際文化学部紀要』第 10 号（2002）： pp. 13-25、所収

⁵⁸ 李雪梅、李豫「晚清民国“上海石印鼓詞”概念闡釈」『山西大学学报』哲学社会科学版第 30 卷第 5 期（2007）： pp. 36-39

⁵⁹ 李豫、于紅「清末民初上海石印鼓詞小説文化現象透視」『閩江学刊』第 1 期（2011. 2） pp. 81-90

⁶⁰ 注 56 前掲丸山（1999）論文

躍していることがわかる。」⁶¹と言う。丸山氏が調査した石印本小説の総出版数は800種あったが、実にその約四分の一を占めるほど出版数が、この上海書局、上海広益書局、上海錦章図書局、上海会文堂の4社に集中しており、上海書局だけでも全体の八分の一を占め、石印本小説の出版に特化した書局だったと考えられる。また、これら4社は、小説だけでなく鼓詞などの説唱本を出版したことでもその名が知られている。

続いて、鼓詞における石印出版の状況を見ていきたい。もともと、北方の説唱文芸を代表する鼓詞は、そのテキストが石版印刷されるようになる以前は、清の乾隆から同治年間にかけて、京都と東北地区を中心に、京都、東北、山東、河北地区で盛んに木版印刷されていた。ところが、光緒年間の上海における石印出版の勃興により、鼓詞出版の流れも大きく変化した。鼓詞のテキストは上海に集まり、新たに石印として焼き直され、上海を起点に、再び各地へと流通するようになるのである。中でも、比較的長編の物語で、読みものとしての要素の強い鼓詞は、「鼓詞小説」⁶²とも称され、その殆どが上海で翻印された。『清代北方鼓詞小説考略』に収録された木刻鼓詞小説142種のうち、上海で翻印された物語は128種に及ぶ。⁶³

石印鼓詞は、山東、東北、北京などでも出版されたが、やはり殆どが上海に集中し、『中国鼓詞文学発展史』による調査結果から、上海だけでもおよそ44カ所で印刷されたことが確認できている。それぞれ、清末に開業した「上海書局、上海久敬齋、上海共和書局、上海江東茂記書莊(局)、上海大成書局、上海倉海山房、上海章福記書局、上海萃文齋書局、上海有益齋書局、上海煮字山房、上海二酉山房、上海校經山房成記、上海広益書局、上海江東書林、上海文元書莊、上海三元堂、上海玉麟書局、上海海仁記書局、上海小説図書館、上海錦章図書局、上海槐蔭書莊、上海煉石書局、上海会文堂」の23社と、民国初期に開業した「上海南方書局、上海文益書局、上海尚古山房、上海大成書局、上海民衆書局、上海變記書莊、上海蔣春記、上海鴻文書局、上海公平書局、上海鑄記書局、上海昌文書局、上海広雅書局、上海掃葉山房、上海振華書局、上海中華図書館、上海沈鶴記、上海自強書局、上海昇昌書社、上海興記書局、上海求实齋書局、上海大新書局」の21社である。先ほど、石印本小説の中心的出版社として挙げた、上海書局、上海広益書局、上海錦章図書局、上海会文堂の4社も含まれており、これらの出版社は、比較的規模の小さい中小書局ではあったが、大型書局が出版に関与しない、小説や説唱など通俗文学の分野に活路を見出したとされる。⁶⁴

また、これらの出版年代は、光緒八年(1882)、九年(1883)から、民国二十六年(1937)年の間に分布しているが、当初、上海の中小書局が鼓詞を主要な出版物と見なしていなか

⁶¹ 注57前掲丸山(2002)論文

⁶² 注58前掲李雪梅他(2007)論文によると、「鼓詞小説」という言葉は、清末民初に上海で石版印刷された鼓詞の広告で表現されたものだという。また、注48前掲『清代木刻鼓詞小説考略』「代序」で、「清代木刻鼓詞小説」という概念について、清代に木版印刷された、韻散混合文の説唱形式の長編鼓詞の書物で、白話小説の言語と章回小説の構成をもつ、説唱と白話小説の形式が融合したものであると説明する。

⁶³ 注49前掲書『中国鼓詞文学発展史』「第六章清代鼓詞的刊行与伝播」「第六節清末民初上海出版的石印鼓詞小説」「四、近代上海中小書局鼓詞的出版運作方式」p.278

⁶⁴ 注49前掲書『中国鼓詞文学発展史』「第六章清代鼓詞的刊行与伝播」「第六節清末民初上海出版的石印鼓詞小説」pp.266-282

ったためか、光緒八年から光緒三十年（1904）までの出版点数は極端に低い。石印本小説の出版が1888年や、1893、94、95年に際立った盛り上がりを見せるのと異なることから、小説は鼓詞よりも早い時期から主力商品として扱われていたことが分かる。その後、上海石印鼓詞は、光緒三十一年（1905）から宣統三年（1911）の7年間で、次第に勢力を増し、光緒三十二年（1906）に最初の出版ピークを迎え、光緒三十四年（1908）から宣統二年（1910）の間も安定した増加を続けた。民国期に入ると、上海江東茂記書莊、上海校經山房、上海大成書局、上海公平書局などを中心に、数百種単位で出版されるようになり⁶⁵、これらのピークは石印本小説の隆盛期とも重なり合うところが多く、鼓詞も小説同様に上海の中小書局の主力商品となったと推察される。

このように、光緒三十年（1904）前後をひとつの転換期として、石印鼓詞は大量に出版・販売されるようになったが、実際のところ、この現象は鼓詞だけに限らず、江南の説唱文芸を代表する弾詞においても起きていた。田中譜美（2007）「清代江南における代言体弾詞の出版について」⁶⁶は、主に清代の木刻本の代言体弾詞を中心に刊行点数の推移を分析したもののだが、それによると、清の嘉慶期以降に江南地域で非常に流行した代言体弾詞は、1890年前後に転換期を迎え、「光緒後期から代言体弾詞の出版形態は刻本から石印本へ、そして主な刊行地は蘇州等江南諸地域から上海へと移行していくが、上海石印本の多くが刻本を基にした翻印であった」とあり、石印本への転換時期も、代言体弾詞の木刻本テキストからの翻印が多いという事実も、鼓詞の現象と殆ど重なり合う。

先に挙げた顧頡剛「蘇州唱本提要」に記された1920年という時期は、石印本出版の全盛期であったため、蘇州には上海石印本が多く出回り、かつて現地で流行を築いたと思しい蘇州唱本は殆ど見る影もない有様であった。上海石印本は、各地の木刻本通俗読みものを吸収しながら、逆輸入の形で各地特有の文化を侵す勢力にもなっていったと言えるだろう。

以上のように、各説唱ジャンルで個別に進められてきた研究を、ひとつひとつ詰め合わせることで、清末民初における説唱本出版全体の流れを、立体的に明らかにすることが出来るのではないだろうか。

では、光緒年間に北方と江南緒地域の代表的な説唱本が上海を中心とする石版印刷へと大きく移行する最中、中心地から離れた内陸部の湖南における説唱本出版は、どのような動きを見せたのだろうか。

湖南説唱本と上海石印本との関係について考察する研究は、現在のところ無い。ただし、湖南説唱本の出版については、先の「1. 湖南説唱本とは」で引用した資料でも明らかのように、湖南では、清の嘉慶、道光年間前後に開業し、何十年も経て、民国年間まで繁盛した書肆もあった。また、尋霖（2004）「明清湖南戯曲作家和戯曲刻書」⁶⁷でも、湖南の民国年間に戯曲を木版印刷した書肆は、名前が分かるものだけでも50家前後あったといい、また「湘潭の黄三元堂は清の光緒年間に開業し、木刻唱本を百種近く出版した。楊大文堂は

⁶⁵ 注47前掲書『中国鼓詞総目』「前言」pp. 17-31

⁶⁶ 田中譜美「清代江南における代言体弾詞の出版について—『弾詞総目録』を基礎資料とした量的研究—」『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第10輯（2007.12）：pp. 13-30

⁶⁷ 尋霖「明清湖南戯曲作家和戯曲刻書」『藝海』第5期（2004）

清代に開設され、以前は経、史、子、集のいわゆる正書を印刷していたが、光緒末年に科挙が廃止されると、唱本を出版するようになった。長沙の周双槐堂は光緒年間に開業し、店舗は長沙の永興街に位置し、唱本など戯曲を印刷しながら、露店へも卸売りをし、農村でも広く販売したが、1938年11月、長沙における文夕大火⁶⁸で壊滅した。左三元堂は民国初めに長沙の半湘街に開設され、木刻唱本の販売をかなり広範に行い、特に毎年秋の収穫期の後に盛況し、濱湖一帯まで出向いて販売した。周慶林堂は、民国初めに長沙の小西門福勝街口に開設されたが、文夕大火で営業停止となった。」⁶⁹と記すように、光緒年間から民国期にかけて、湖南では木版印刷の説唱本の出版、販売がより一層盛んに行われていた。

つまり、北方から江南地域における鼓詞、弾詞などの説唱出版活動が、上海を中心に石印出版に取って代わられている時期に、湖南では依然として旧式の木版印刷の説唱本が盛んに出版されていたということになる。

本研究では、上述のような上海石印説唱本の隆盛を背景に、湖南地域で爆発的に流行していた湖南説唱本のテキストは、どのような運命をたどるのか、その状況を具体的に明らかにするため、湖南説唱本の中でも特に湖南地域で流行を築いたと思われる物語を抽出し、それらについて上海石印説唱本における出版状況を調査しながら、時代の転換期、出版界の転換期における、地域文化現象の有様を検証する。

5. 問題の所在と本研究の意義

以上のように、清末民初の説唱文芸に関する研究は、民間に散逸していた膨大な数の説唱本テキストの収集と書誌整理を基礎に始まり、これらの作業が断続的に行われると同時に、実際の上演形態、創作活動、物語内容、説唱の文体や形式、当時の出版活動、地域文化など、様々な側面からも、各種説唱文芸の時代ごとの変遷や特徴が考察されてきた。

中でも、江南の弾詞と北方の鼓詞については、長年に亘る先人たちの成果の積み重ねによって文学史的研究が進み、その他、広東の木魚書や福建の潮州歌冊など、主に北方から東南海沿海地域で流行した個々の説唱文芸に関しても、各種文献資料から歴史的発展や芸術的特性などが解明されつつある。

但し、大半の研究が単独の説唱ジャンルに限ったものであり、各説唱文芸間の関連について考察するものは殆ど無い。最近では、特定の物語の伝承系統について、各説唱文芸における流布状況を検証しながら、地域間の結びつきを考察する研究もあるが⁷⁰、関連する

⁶⁸ 中国国民党軍によって起こされた放火事件

⁶⁹ 注 67 前掲尋 (2004) 論文「湘潭黄三元堂、清光緒間開業、有木刻唱本近百種。楊大文堂開設於清代、以前出経、史、子、集等正書、光緒末年廢科挙後、改出唱本。長沙周双槐堂、光緒間開業、店趾長沙永興街、自刻自印唱本等戯曲、批發給書攤小販、在農村發行甚広、1938年11月長沙文夕大火中被毀。左三元堂、民国初開設於長沙小西門福勝街口、文夕大火後歇業。」

⁷⁰ 例えば日本では以下のような研究がある。岡崎由美「弾詞『倭袍伝』の禁書と流通」『中国古籍文化研究』3 (中国古籍文化研究所、2005) pp. 29-35、「清代小説『繡戈袍全伝』成書考—木魚書『繡戈袍全本』および弾詞『倭袍伝』との比較から」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第2分冊、第55 (2009) : pp. 77-90 では、清の道光年間から同治年間にかけて流布した弾詞『倭袍伝』を中心に、小説、戯曲、地方戯、説唱では弾詞、宝巻、木魚書など多様な文芸ジャンルにおける物語の成立や伝播について、出版されたテキストを比

地理的範囲は、やはり北方および東南海沿岸部が中心である。

一方、湖南説唱本に関しては、先行研究によって、清末民初の湖南省全域における民間出版の繁栄の状況や、出版された物語の概要、湖南の演劇や諸芸能との関連などがいくらか明らかにされたが、いずれも湖南地域に限定した文献整理研究に止まり、しかもテキストの収集範囲も決して網羅的ではない。

本研究の意義は、先行研究であげた「4.1 湖南伝統演劇・芸能に関する研究」、「4.2. 目録整理研究」、「4.3 説唱本出版活動に関する研究」の、それぞれ独立して行われていた研究ジャンルを、「湖南説唱本」という独自の着眼点から新たに展開させることにある。

湖南説唱本は、①大量の説唱本が集中して残されている、②ひとつのジャンルだけでなく、弾詞、鼓詞など北方、南方の複数の説唱が入り混じって流通している、③地域独自の物語および全国的に流布した物語の地域独自の発展や変化が見られる、などという特徴から、「口承文芸（上演）と文字テキスト（出版）」、「全国性と地域性」といった、清代説唱文芸の発展に関わる様々な要素が内包されているため、湖南という地域性から説唱本を考察することは、非常に大きな意義があると考えられる。

そこで、本研究では、湖南説唱本の物語群の流布と出版・流通を基軸に、以下の三点を中心に説唱文芸活動における湖南説唱本の役割を解明する。

- ① 清末民初の説唱文芸活動全体における湖南説唱本の位置。
- ② 清末民初、特に太平天国以降の湖南という、極めて限定的な時間と地域で起きた文化現象。
- ③ 清末民初の出版界の趨勢を背景に、湖南の特異な文化現象は地域の枠組みを越え、どのように変遷するのか。

現在に至るまで、説唱文芸研究は、各地域の個別の説唱文芸の特徴を概説するものや、ひとつの物語を取り上げ、その各種媒体における伝承を検証するために、伝承媒体のひとつである説唱本テキストの内容分析や比較を行う研究が主であり、本研究のように、「湖南説唱本」という伝承媒体自体が、清末民初における物語の伝承および説唱文芸活動の中で、どのような機能を担っていたのかを明らかにするものは無い。また、本研究を通して、今まで殆ど注目されて来なかった、内陸部の説唱文芸活動が明らかになると同時に、北方から東南海沿岸部における活動とどのように関わり合うのか、複数の代表的な物語群を基軸に、それらの流行、伝承、流通の背景に潜む、近世の出版界における商業モデルも浮かび上がらせることが出来ると期待される。

較検討する。また、大塚秀高「宋太祖趙匡胤をめぐる清朝宮廷連台戯」（『日本アジア研究：埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要』11（2014）：pp. 25-129）は、宋の太祖趙匡胤をモチーフとした物語について、清朝宮廷で演じられた連台戯を中心に、宋代「小説」から元雜劇、明代小説、清代小説、京劇、鼓詞や木魚書など説唱まで、網羅的に関連する物語を収集し、テキストを通して物語の変容を追う。

6. 研究の方法と視座

上述した湖南説唱本の役割を具体的に明らかにするための、本研究における方法論と視座は以下のとおり。

6.1. 研究対象となる物語の抽出

湖南説唱本は、姚他（1929、1969）に 90 種、張（1998）に 150 種、謝（2008）に 183 種の作品が著録されるほか、中国大陸および日本の各所蔵機関にも多数現存する。所蔵機関によっては「湖南説唱本」とジャンルを設けてまとめて保存しているのが比較的調査しやすいが、分類されていないテキストも多く、その場合は、カード目録で説唱に分類されるテキストのうち、出版地に湖南の地名が明記されているものをピックアップして整理した。

実際に現物もしくはカード目録等で目睹した、各所蔵機関に所蔵される湖南説唱本の作品は、中国北京市の首都図書館に 137 種、上海市の上海図書館の湖南地域と明確に分かる説唱本が凡そ 112 種、復旦大学の 138 種（出版地の明記はないが、湖南説唱本とおぼしきもの 54 種を含む）、杭州市の浙江図書館に 163 種、湖南省長沙市の湖南図書館の 30 種、広東省広州市の中山大学非物質中国遺産研究中心の 44 種⁷¹、日本の早稲田大学図書館風陵文庫の 18 種、早稲田大学演劇博物館の 28 種、および大木氏蔵本 36 種である。これらを全て整理すると、湖南説唱本にはおよそ 355 種 590 冊（重複は除く）にのぼる作品が現存する⁷²。

本研究では、「物語の伝承」を基軸に調査、分析を行うため、355 種類のうち半数近くを占める山歌や小調の類は調査対象から除外し、伝統的な戯曲や小説、有名民間故事に取材するもの、或いは説唱文芸で新たに創作された、読み物として流通したと思しい作品大よそ 120 種を中心的にあつかう。

120 種の物語の具体的な分布は、いわゆる「世話物」に分類される作品が 60 種前後と圧倒的多数を占め、また民間故事も幾つか存在する。その他、一般的にあまり馴染みがない、湖南地域で独自に流行したような作品も多い。

細かい内訳は、「嫌貧愛富」を描くものが 5 種前後、「恋愛」は 20 種前後、しかし、単に恋愛を描くのではなく、殺人や誘拐など事件が絡んでくる作品も多い。特に目立つのが、男主人公が何人もの女性を娶る『五美図』、『九美図』などの作品である。「家庭問題」を描く作品も多く、15 種前後あり、例えば、受難の末の団円や、本妻、妾、嫁、夫などの家庭

⁷¹ 黄仕忠「国立中山大学“風俗物品陳列室”旧蔵唱本考略」『文化遺産』第 3 期（2009）：pp. 42-49。「湖南説唱本は、当時中山大学理科教授の辛樹幟と石声漢が 1928 年の夏休みに湖南に戻った時に一緒に現地の唱本合計 90 種を収集した。その後、姚逸之が数か月の時間をかけてこれら唱本を整理し、『湖南唱本提要』を著し、その後、中山大学民俗叢書から 1929 年 3 月に出版した。これら 90 種類の唱本は現在 53 種が現存し、その他 37 種の行方は分からない。」と、中山大学所蔵の湖南説唱本について指摘する。また、注 4 前掲の謝（2008）によれば、中山大学にはその他に 183 種の湖南説唱本が存在するという。論者が中山大学で実際に目睹できたのは、わずかに 44 種であったため再調査の必要がある。

⁷² なお、中国国家図書館にも湖南説唱本は多数所蔵されるが、本研究では関連故事のテキスト収集のための調査のみとなったことをお断りしておく。

内殺人、夫婦の問題、遺産、虐待などを話題とする。「民間故事」は10種前後で、例えば、『池塘洗澡』（「孟姜女」）、『董永行孝』、『祝英台』、『王月英賣胭脂』などがある。『池塘洗澡』は、湖南地域で非常に流行した演目であったという。その他、立身出世、善行、節婦などを描くものが10種前後、清代に大きな勢力を持った盗賊集団による被害など「社会問題」を描くものが5種前後ある。

次いで多いのが「公案物」で、全部で20種前後ある。いわゆる「包公案」も存在する（『紫金瓶』、『八寶山』）が、大半を占めるのは、清朝の湖南に縁のある人物を主人公とする「私訪物」である。内容は、家庭問題による殺人や盗賊による被害、冤罪の解決が中心であるが、当時の人気を裏付けるように、テキストの種類と現存数が他と比べて多いことが特徴である。先ほど挙げた恋愛物の作品の中にも、公案物の要素を含むものもある。

また、「歴史・戦記物」は15種前後、例えば、『仁貴征東記』（「薛仁貴」）、『三哭桃園』（「三国志」）、『三氣周瑜』（「三国志」）、『天水関』（「三国志」）『轅門斬子』（「楊家将」）など良く知られた物語を題材とする作品から、弾詞『五美縁雕龍扇』を倣った作品などがある。

その他、「神仙」が10種前後、呂洞賓の『白牡丹兌藥』、『三醉岳陽樓』、韓湘子の『湘子賣雜貨』、『湘子賣藥』、『韓仙問道』など、「信仰、観世、功德」5種前後『目蓮尋母』、『香山記』、『修身録』などがある。

以上の分布状況から、現存する湖南説唱本の物語は、歴史物や戦記物よりも、事件性の強い世話物や公案物の方が多いたことが分かる。四大奇書では『三国志演義』から幾つか題材が採られるが、『水滸伝』、『西遊記』、『金瓶梅』を題材にした話は見当たらない。

また、清朝の話が20種前後、物語の舞台や主人公が湖南に関連する作品も20種前後と少なからず存在し、それ以外にも物語の端役で登場する人物や細かい設定に湖南が絡んでくる場合もあるので厳密な数量は挙げられないが、湖南色の強い物語が多く存在する。

これらの作品の中から、本研究では物語の伝承や流通における湖南説唱本の役割を具体的に明らかにするため、「湖南の地域的独自性」と、テキスト数が多く、人気のほどがうかがえる「流行性」を基準に、湖南で特に広く受け入れられた世話物と公案物の作品の中から、代表的モデルとなるものを以下のように抽出する。

① 「秦雪梅」故事

全幕通しの説唱本『秦雪梅三元記』は、未婚の夫の商琳に先立たれた秦雪梅が、商家の下女の愛玉が残した遺児を立派に育て上げ三元及第したという節婦譚だが、湖南説唱本だけでなく、ほぼ同一テキストが他地域からも数多く出版されており、説唱文芸において最も全国的に流通したと考えられる物語のひとつである。また、折子戯や物語のダイジェスト版も湖南説唱本で出版されている

② 「多世姻縁」の物語

「秦雪梅」故事と共に、有名民間故事として古くから全国的に流布する、「梁祝」故事、「売臙脂」故事を取り上げる。これらの物語は、湖南説唱本では、今世で姻縁を結ぶことが出来ない男女が、姻縁を全うするべく多世にわたって転生するという悲恋の内容で伝わり、また湖南説唱本として流通する時、湖南地域独自の発展、改変が見られる。以上の①、②は、全国区であり且つ物語の流通や物語の内容に湖南地域の独自性を見る

ことも出来るため、体系化することに意義のある代表的な作品と言える。

以下の③、④で取り上げる物語は、現存する湖南説唱本の物語の中でも、作品数、テキストの数が群を抜いて多く、出版の形態においてシリーズ化されていたと言ってもいい。

③ 「私訪」シリーズ

ひとつが、書名に「私訪」と冠する作品群である。湖南説唱本の公案物のうち、地方清官が各地を微行し様々な事件を解決する「私訪」故事は、パターン化されて13種存在し、中でも、太平天国軍に対抗した湘軍の指揮官である彭玉麟（湖南出身）を主人公とするものは7作品あり、その他の主人公も湖南と縁のある実在の人物であったり、縁のない人物でも物語での私訪先が湖南であったりと非常に湖南色が強い。また、湖南各地の書肆から同一テキストが多数出版されており、湖南独自の流行を築いたと思しい。

④ 「美図」シリーズ

もうひとつが、書名に「美図」と冠する作品群である。「男主人公が流浪の旅の途中で、出会った女と婚姻を結び、最終的に出世して全員と結ばれる」という物語設定の枠組みを以てパターン化された物語である。結ばれる女性の数を目印に、五人なら『五美図』、七人なら『七美図』と「美図」の前の数字を変える。物語の内容も湖南独自のものが多い。

湖南説唱本以前に、江南の弾詞に同様の物語設定の枠組みを持つ、「美図」故事が多数存在し流行していた。この江南からもたらされた「美図」故事の規格を、湖南の書肆は取り込みながら、湖南独自の作品を編み出して、新たな流行を築いたと言える。

③、④共に、シリーズ化されるほど湖南で非常に人気を博しており、湖南独自の流行性と地域性をとらえるのに有効な物語と言える。

6.2. 各種媒体における関連故事の収集

また本研究では、研究対象として抽出した湖南説唱本の各物語について、それぞれの物語の伝承系統を俯瞰的に分析しながら、湖南説唱本の役割を考察するため、湖南説唱本だけでなく、その他の説唱、小説、戯曲、地方劇、民間故事など、各種伝承媒体で描かれる関連故事に対しても、全面的に調査、収集する必要がある。

中国の伝統芸能、主に演劇や語りものを研究する際の文献収集に役立つ情報が、上田望（2012）「第2章文化資源化する伝統芸能と中国一芸能研究の情報収集・整理・発信の手引きとして」⁷³にも幾つか挙げられている。本研究では、以下の刊行物を中心に資料収集を行う。

全国各地の所蔵機関の蔵書を調査する以外に、現在までに戯曲や説唱などに関する各種テキストを影印した大型叢書が多数刊行されているので、それらを調査する必要もある。最も代表的な叢書に、台湾中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館所蔵の俗文学資料を影印出版した『俗文学叢刊』⁷⁴、車王府が収集した北京の戯曲、芸能の上演テキストを影印出版した『清蒙古車王府蔵曲本』⁷⁵、『故宮珍本叢刊』⁷⁶などがある。その他にも、各ジャ

⁷³ 上田望「文化資源化する伝統芸能と中国一芸能研究の情報収集・整理・発信の手引きとして」『文化資源情報論』2（2013.3）：pp.111-121

⁷⁴ 『俗文学叢刊』全5輯500冊（臺灣新文豊出版公司、2001-）

⁷⁵ 『清蒙古車王府蔵曲本』315函1661冊（北京古籍出版社、1991）

ソルの説唱文芸のテキストを影印あるいは活字出版したものに、『中国伝統鼓詞精滙』⁷⁷、『鼓詞彙編』⁷⁸、『清蒙古車王府藏子弟書』⁷⁹、『潮州歌冊』⁸⁰、『宝卷初集』⁸¹など、枚挙に暇がないほど現在も陸続と出版されている。

6.3. 地域文化と出版文化からの分析

清末、特に太平天国以降の湖南という、限定的な時間と地域で起きた特異な文化現象の実態と仕組みを解析するため、書物の出版、販売、流通というアプローチから、湖南地域で独自の流行を築いた湖南説唱本の物語群を重点的に取り上げて、その物語群に共通する地域的特性を洗い出し、流行を築いた要因を検証する。書物の出版・流通は、物語の局地的あるいは全国的な流布を支える大きな基盤であり、時に口承よりも生々しく当時の文化現象を留めている。既述の通り清代は各地で民間出版が盛行し、鼓詞、弾詞などの説唱文芸も出版活動を伴って発展し、読み物としての説唱本も数多く出版されたという背景がある。

更に清の光緒年間に出版界はひとつの転換期を迎えた。上海で石版印刷事業が成功したことにより、従来の木版印刷に石版印刷が取って代わり、出版活動の中心地も次第に上海へと集中するようになる。当然、説唱本の出版活動も時代の趨勢の影響を受け、北方における鼓詞、江南における弾詞、宝卷などの木版印刷は衰退し、上海で翻印され石印本として流布するようになったが、湖南説唱本の出版活動にはどのような影響を及ぼしたのだろうか。他地域で木版印刷された関連故事の説唱本は勿論、清末民国期に上海で石印出版された説唱本との比較を通して、出版文化という側面から、未解明であった内陸部と中心地との関わりを検証する。

7. 本論の構成

本論の構成は以下のとおりである。

- 第1章 現存する湖南説唱本の概容
- 第2章 「秦雪梅」故事の伝承と流通
- 第3章 湖南説唱本と多世姻縁の物語
- 第4章 湖南説唱本「私訪」故事の流行と流通
- 第5章 湖南説唱本「美図」故事の流行と流通

⁷⁶ 『故宮珍本叢刊』（海口市：海南出版社）

⁷⁷ 劉英男、陳新編『中国伝統鼓詞精滙』（北京：華芸出版社、2003）

⁷⁸ 『鼓詞彙編』全6輯、4冊（瀋陽市文学芸術工作者聯合会編、1957）

⁷⁹ 北京市民族古籍整理出版規劃小組輯校『清蒙古車王府藏子弟書』（国際文化出版公司、1994）。その他に、劉烈茂、郭精銳『清車王府鈔藏曲本・子弟書集』（江蘇古籍出版社、1993）張壽崇『子弟書珍本百種』（北京：民族出版社、2000）などがある。

⁸⁰ 『稀見舊版曲藝曲本叢刊・潮州歌冊卷』（北京：北京図書館出版社、2002）

⁸¹ 『宝卷初集』40冊（山西人民出版社、1994）

第1章は、各所蔵機関で調査した現存する湖南説唱本について、湖南説唱本の定義、説唱ジャンル、封面の形式、出版地や書肆の分布、物語の収録状況などの概容を叙述する。

第2章は、湖南説唱本の中でも、湖北や広西などの周辺地域や、その他の地域からも類似のテキストが出版され、最も広く流通したと思しい、説唱本『秦雪梅三元記』を取り上げる。許婚の商霖に先立たれた秦雪梅が、商霖と下女愛玉との遺児である商輅を立派に育て上げた節婦譚として人口に膾炙し、全国的に流布した、いわゆる「秦雪梅」故事の伝承系統を明らかにしながら、湖南説唱本『秦雪梅三元記』の位置を分析する。

第1節では、「秦雪梅」故事の取材先である明の南戯伝奇『商輅三元記』を中心に、弋陽腔系諸腔の散齣集に収められるテキストや物語内容の整理などを通して、明清期における戯曲作品としての「秦雪梅」故事の流行の特徴を明らかにする。第2節では、特に清代から民国期にかけて、地方戯における「秦雪梅」故事の流布状況を、第3節では弾詞、宝卷、鼓詞、子弟書、木魚書などの説唱文芸における「秦雪梅」故事の流布状況について調査する。各種伝承媒体で編まれてより広範に民間に流布した「秦雪梅」故事の様相を明らかにしながら、湖南説唱本『秦雪梅三元記』はどのような役割を担ったのかを考察する。

第3章は、「秦雪梅」故事と共に、有名民間故事の「梁祝」故事、「売臙脂」故事を取り上げる。これら3種の物語は、湖南説唱本として流通する時、「主人公の男女が、実は天界に仕える金童と玉女で、人間の男女として姻縁を全うしなければ天界に帰れない」という「転生姻縁」の設定が付加され、更に、相互の物語の主人公に生まれ変わって、何世にもわたって転生する「多世姻縁」へと姻縁が膨らむという独特の展開をみせる。この金童玉女が有名民間故事の主人公へ転生し、次々と姻縁を繋いでいく形式は、七夕伝説として小説『七世夫妻』にも編まれ、現在まで伝わる一つの文化現象となった。本章では、この現象の形成過程について、湖南説唱本を中心に考察し、その役割を明らかにする。

第1節では、「多世姻縁」に関する先行研究を確認する。

第2節では、湖南説唱本にみえる転生姻縁の物語として、第2章で取り上げた説唱本『秦雪梅三元記』について再度分析をする。説唱本『秦雪梅三元記』では、金童と玉女が結ばれない姻縁を全うするため、第一世が「梁山伯と祝英台」、第二世が「郭華と王月英」、第三世が「商霖と秦雪梅」という組み合わせで、三世に亘って転生を繰り返した、いわゆる「三世姻縁」のエピソードが挿入される。この「三世姻縁」を軸に、湖南説唱本「梁祝」故事、「売臙脂」故事においても共通して描かれる「転生姻縁」の場面を取り上げ、湖南の書肆による説唱本の販売戦略と併せて、物語の伝承について解明する。

第3節では、湖南説唱本以降に出版された、つまり上海石印説唱本での「秦雪梅」故事、「梁祝」故事、「売臙脂」故事では、転生姻縁の組み合わせはどのように展開するのかを検証する。

第4節では、第2節、3節で取り上げた湖南説唱本と上海石印説唱本にみられる「転生姻縁」の組み合わせの中で、新たに出現する「藍橋会」故事の主人公に着目し、「藍橋会」故事の説唱本における流布と、転生姻縁との関係を明らかにし、第5節では、第2、3、4節から得られた見解をまとめる。

第6節では、従来あくまで単独の物語に付加されるに過ぎなかった設定から、後世には

転生姻縁をモチーフにした長編物語『七世夫妻』が出現するようになった背景を、湖南説唱本の書肆による販促意識を手掛かりに検討する。

第4章は、湖南説唱本の中で、特に現存する物語の数とテキストの種類が圧倒的に多く、また湖南の書肆がシリーズ化し、湖南独自の流行を築いたと思しい、「私訪」故事を取り上げ、その流行と流通のメカニズムを解明する。

第1節では、湖南説唱本「私訪」故事のテキストの種類と特徴を整理する。

第2節では、湖南地域で「私訪」故事が爆発的な人気を築いた要因を、登場人物、物語内容と、実際の歴史的、社会的背景、湖南の演劇との関係などから総合的に分析する。

第3節では、説唱本の出版・流通という観点から、局地的流行を築いた「私訪」故事に対する湖南の書肆の販売意識と、湖南説唱本「私訪」故事の他地域への流通と、上海石印説唱本との関係について考察する。

第5章は、第4章で考察した「私訪」故事と似通った現象を見せる、「美図」故事を取り上げ、その流行と流通のメカニズムを解明する。これらの物語も「私訪」故事と同様に現存する物語の数とテキストの種類が多く、湖南の書肆によってシリーズ化され、湖南独自の流行を築いたと思しい。

第1節では、湖南説唱本として流行する以前に、江南の弾詞で「美図」故事が多数創作され、ブームを築いていた点に着目し、先ず江南で「美図」故事が形成された背景と、弾詞以外にも宝巻、木魚書、潮州歌冊など他地域の説唱文芸にも「美図」故事が浸透していたことを確認する。

第2節では、湖南説唱本における「美図」故事の出版ブームについて、物語の種類とテキストの特徴などを整理して示す。

第3節では、湖南における「美図」故事流行の背景と要因を、物語内容の分析、「私訪」故事との関わり、書肆の販売意識などの観点から総合的に検証する。また、湖南説唱本「美図」故事の他地域への流通と、上海石印説唱本との関係についても併せて考察する。

第1章 現存する湖南説唱本の概容

1. 湖南説唱本の定義

本研究で取り上げる湖南説唱本の収集範囲は、中国北京市の首都図書館、上海市の上海図書館、復旦大学、湖南省長沙市の湖南図書館、広東省広州市の中山大学非物質中国遺産研究中心、早稲田大学図書館、早稲田大学演劇博物館の各所蔵機関および大木康氏私蔵本である。先行研究の各種目録および収集したテキストに対する整理を通して、355種に及ぶ作品が現存することが明らかとなった。

「湖南説唱本」とは、湖南の書肆から木版印刷された説唱テキストを言う。現存する湖南説唱本は、ほとんど全てが木刻本であり、基本的に湖南地域で出版された説唱テキストを指すが、例えば各所蔵機関で「湖南説唱本」と一括して分類されるテキストのうち、出版地の明記は無いが湖南の書肆と思しき名前が印字されるもの、或いは出版地と書肆名が磨滅あるいは削られているもの、また、出版地や書肆名が無くても、テキストの形式等から湖南説唱本と推定できるものについても便宜的に湖南説唱本とする。

湖南説唱本の物語のうち、同一テキストが湖南省以外の他地域で木版印刷される場合もあり、それらについては、湖南説唱本ではなく他地域の説唱本と見なす。上海で石印出版されたテキストについては「上海石印説唱本」と称し、いずれも湖南説唱本とは別物として区別する。

湖南説唱本の出版は、文献資料などによると、道光、咸豊年間辺りから始まると記されるが、現存する湖南説唱本のテキストから判断できる出版時期は、最も早くて湖南図書館蔵の同治元年（1862）刊『香山記』である。ただし、このテキストに関しては、湖南図書館の目録の記載を見ただけで実物を確認していないのと、目録に出版地の明記が無いので、湖南説唱本と断言することはできない。ただし『香山記』は、光緒三十一年（1905）刊の出版地不詳の刻本や、出版年不詳の湖南省武林の大林堂福記刻本や、宣統元年（1909）年の黄三元堂刻本（黄三元堂は湖南の書肆と思しい）など多数現存するため、湖南図書館所蔵の同治元年刊『香山記』のテキストも湖南説唱本の可能性が高いと考えられる。

出版地として湖南地域が明記されるテキストの中で最も古いものは、こちらもカード目録を見たのみで現物は未確認だが、上海図書館蔵の光緒二年（1876）刊『新刻五子行孝』（辰州刻本）である。次いで古いのが、首都図書館、浙江図書館などに所蔵される光緒三年（1877）刊『南橋会』（寧郷：黎綿芳堂刻本）である。また、出版年が明確なテキストの中で最も新しいものは、湖南図書館、首都図書館、演劇博物館などに所蔵される民国甲戌（1934）刊『全家宝』（岳陽：彭同文堂刻本）である。

355種の湖南説唱本を全て調査した結果、出版地、書肆名の情報は、大半のテキストの封面に明記されているが、出版年に関しては殆んど記されていない。現存するテキストの中で封面から出版年が分かるものはわずか一部で、しかも1876年から1934年辺りの光緒から民国期にかけてと比較的新しい時期に限定されている。

以下に、実際のテキストを参照しながら、湖南説唱本の詳しい形態について見ていきたい。

2. 湖南説唱本の形態

姚他（1929）、張（1998）ともに、収集した湖南説唱本を整理する際、類似する説唱形式ごとにテキストを系統的に分類している。参考までに、以下に両氏の分類方法を通して、湖南説唱本の説唱形式の特徴を見ていきたい。

○姚逸之、鍾貢助（1929）『湖南唱本提要』の分類法

姚他（1929）は、大きく四項目に分類する。

- ① 弾詞：書中全係韻語，無説白；七字一句，一韻到底（書中は全てが韻語、セリフ無し。一句七字、一韻到底）。
- ② 鼓詞：韻文、毎句七字、換韻（韻文、毎句七字、換韻）。
- ③ 評話：書中雜有説白，係韻語。毎句字數，有七字至十字的，換韻（書中はセリフが混じる、韻語である。毎句の字数は七字から十字、換韻）。
- ④ 山歌：有套數，每套四句或五句。四句係「五五七五」格；五句有五字或七字的兩種，每套為一韻（套數（組曲）があり、毎組四句或いは五句。四句のものは「五、五、七、五」の形式、五句のものは五字或いは七字の二種、毎組一韻）。
- ⑤ 劇本：係流行湘省的劇本，此類很少（湖南省で流行した劇の脚本、この種は少ない）。

このように、各種テキストを、「弾詞、鼓詞、評話」という説唱のジャンルと、民間歌謡の「山歌」、演劇の「劇本」すなわち脚本とに区分した。本書の「編者叙言」で、彼らはこの分類方法について、「我對於這分類的標準，都曾詳細考究，毫沒有任意區分，並且我覺得在一大堆新材料之中，無一定的準則，是很難著手整理的。（この分類の基準に対しては、いずれも細かく研究したものであり、決して自由に区分したのでは無い、しかも山ほどある新資料を引き受け、決まった基準も無く、整理作業に着手するのは難しかった）」と述べており、未知資料の整理に先鞭をつける困難さがうかがえる。

上述のよう説唱形式から湖南説唱本を「弾詞、鼓詞、評話」という説唱ジャンルを特定したが、実際の上演は、必ずしも固定の説唱形式を遵守して演じられた訳ではなく、常に流動的であったと考えられる。しかも読みものとしての要素が強い説唱本を、説唱形式から明確に弾詞、鼓詞、評話であると判断することは難しい。ただここから、湖南説唱本は決して一つのジャンルではなく、「弾詞、鼓詞、評話」という複数の説唱ジャンルを内包していたことが分かる。湖南省で流行した説唱のジャンルは、弾詞、鼓詞、評話だけではなく、『中国曲芸志・湖南卷』には、絲弦、漁鼓、評書、長沙弾詞、祁陽小調、地花鼓、長沙大鼓など42種が収録され、一方、湖南省で流行した戯曲も、『中国戯曲志・湖南卷』に、湘劇、祁劇、辰河劇、衡陽湘劇、常德漢劇など21種が収録される。『曲芸志』も『戯曲志』も、それぞれ数百におよぶ上演演目を挙げ、それらがどの種類の芸能で上演されたか分類するが、これらの分類方法も、あくまで主要な傾向を示すものであって、特定の芸能の種類で特定の物語が上演されたとは断定できない。

このように、音楽や節回しを含む演唱形式によって種類が異なるため、文字テキストの形式だけでは、説唱のジャンルを判別するのは極めて難しいと言えるだろう。そのため、張（1998）は、自身が収集した150種の湖南説唱本を次のように分類している。

○張繼光（1998）「一百五十種湖南唱本書録」の分類方法

張繼光は、自身が収集した 150 種におよぶ湖南説唱本を、「一、説唱類」「二、戯曲類」、「三、山歌類」、「四、小調類」、「五、其他類」の大きく五項目に分け、姚他（1929）が「弾詞、鼓詞、評話」と説唱ジャンルごとに細分類したものを、「説唱類」に一括し、また、「説唱類」に属すテキストについては、文体の特徴から細かく十種「甲、乙、丙、丁…癸類」に分類した。以下、張（1998）による分類方法を引用、確認しながら、テキストの特徴について、論者による補注も付しながら具体的に明らかにしていく。なお、参考までに該当するテキストの書影を併載した。

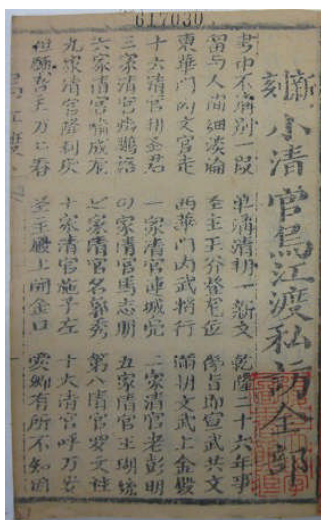
一、説唱類：

此類皆不帶科介、角色、曲詞多為七字韻語或夾有散文道白、敘述也常為第三人稱、應屬彈唱演出曲目。由其曲詞形式、結構及用語特徴等、又可分為以下九種。

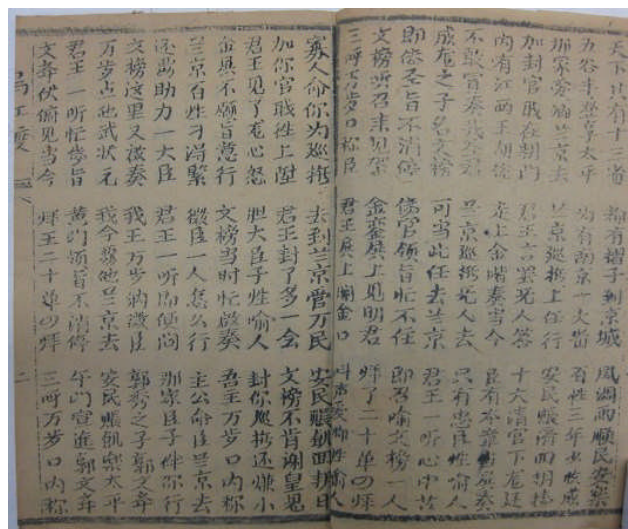
説唱類は、科介（しぐさ）、角色（役）を含まず、曲詞は多くが七字の韻語或いは散文のセリフを挟む構成で、叙述も常に第三人称で、弾き語りで演目を上演したものと思しい。曲詞の形式、構成および用語の特徴などから、以下の 9 種（筆者注：10 種の誤り）に分けることができる。

甲類：全篇為七字句、頭四句類似七言詩、第一、第二、第四句押韻、但有時此詩句形式並不明顯。其後接七字韻語、隔句用韻、一韻到底、所押多為平聲韻。前段用語常有「……不講……單講……」。偶有此類曲本於七字句中加十字句、或於篇末另加七言四句贊語。此形式計有九種。

全篇七字句中、冒頭の四句は七言詩に似ており、第一、第二、第四句が押韻、しかし詩句の形式ははっきりしない。その後七字の韻語が続き、隔句韻、一韻到底、多くが平声で韻を踏む。初めの段階で「……不講……單講……」という用語をよく用いる。偶に七字句の中に十字句を加えたり、物語の最後に七言四句の賛詞を加えたりするものもある。この形式のものは全部で 9 種。



1a

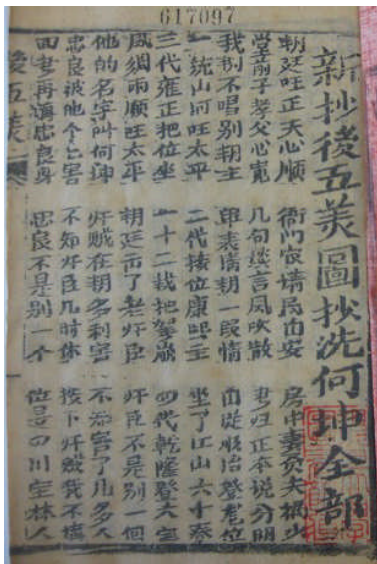


1b、2a

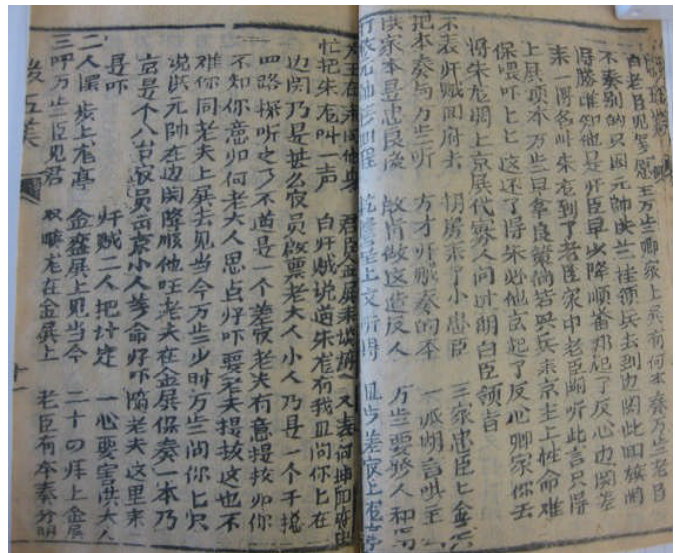
図1 復旦大学蔵『新刻小清官烏江渡私訪全部』中湘刻本

乙類：頭四句或八句亦似七言詩，但此詩句形式多不明顯。其後韻、散夾雜，韻語皆七字句，隔句押韻，一韻到底，所押多為平聲韻。韻文前段也常以「……不講……單講……」或「……不唱……單表……」等用語帶入正文。首段散文道白常以「話說」、「卻說」或「列位，說書的不講，又道是交代不清」等用語起頭。篇末常以「人人君子買一本，開愁解悶過光陰」或「過往君子買一本，消愁解悶過光陰」等類似用語作結。此形式計有十五種。

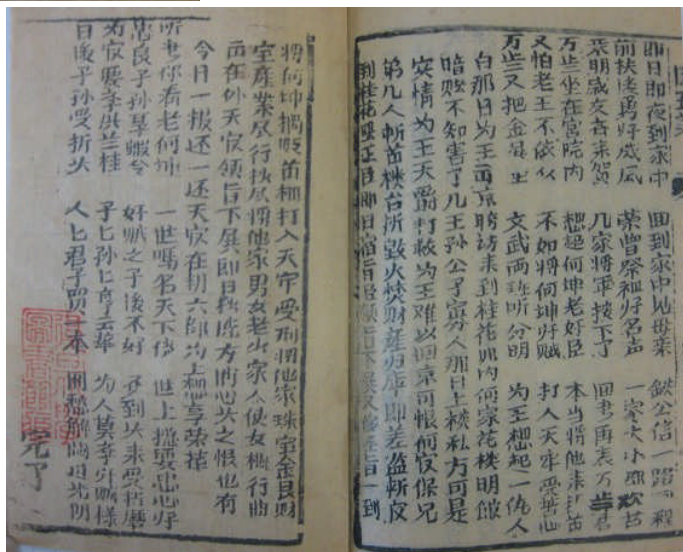
冒頭の四句或いは八句は、七言詩に似ているが、その詩句の形式ははっきりしない。その後に韻、散混合文が続き、韻語は全て七字句、隔句韻、一韻到底、多くが平声で韻を踏む。韻文の初めの段階で、「……不講……單講……（…はここまで…ただお話するのは…）」或いは「……不唱……單表……」等の用語を以て本文に入る。最初の散文のセリフはよく「話說（さて）」、「說（さて）」或いは「皆様、講釈師はお話しません、お話してもきちんと説明はできません」等の用語を以て始まる。物語の最後は、「君子の皆々さま是非一冊、気晴らし、暇つぶしにお求めください」等の用語で締めくくる。この形式のものは全部で15種。



1a



10b, 11a



43b, 44a

図2 復旦大学蔵『新抄後五美图抄洗何坤全部』中湘黄三元堂刻本

丙類：無開場引詩，逕以散文道白開始，其餘與乙類完全相同。疑由乙類省略而來。此形式僅有一種。

開場詩が無く、いきなり散文のセリフで始まり、その他は乙類と全く同じ。乙類を省略して出来たものと思しい。この形式のものはわずかに1種。

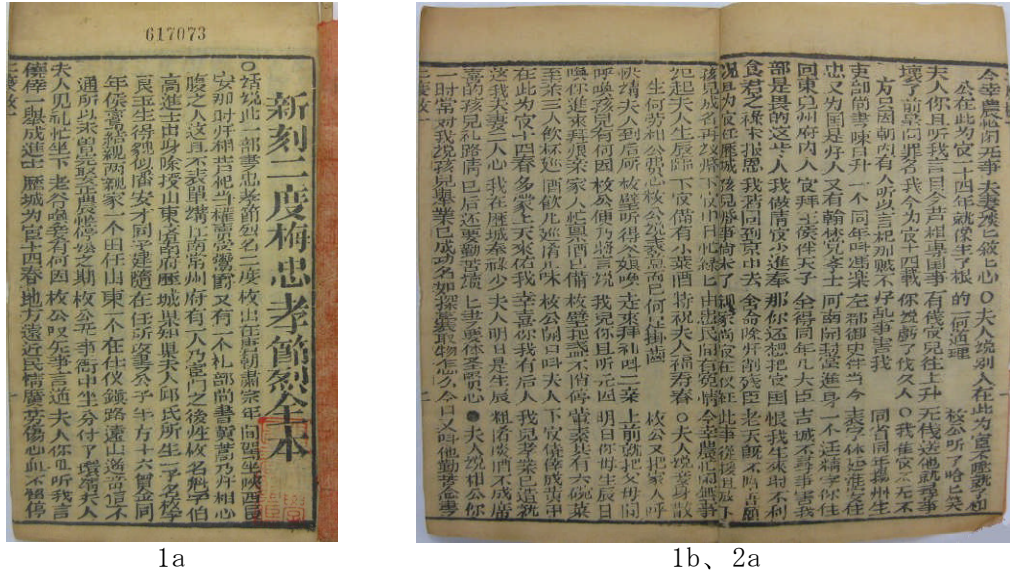


図3 復旦大学蔵『新刻二度梅忠孝節烈全本』中湘黄三元堂刻本

丁類：除以五言四句引詩開始外，其後所接形式及用語大致與乙類相同。此形式計有四種。

五言四句の開場詩を除き、その後続く形式および用語は大よそ乙類と同じ。この形式のものは4種。



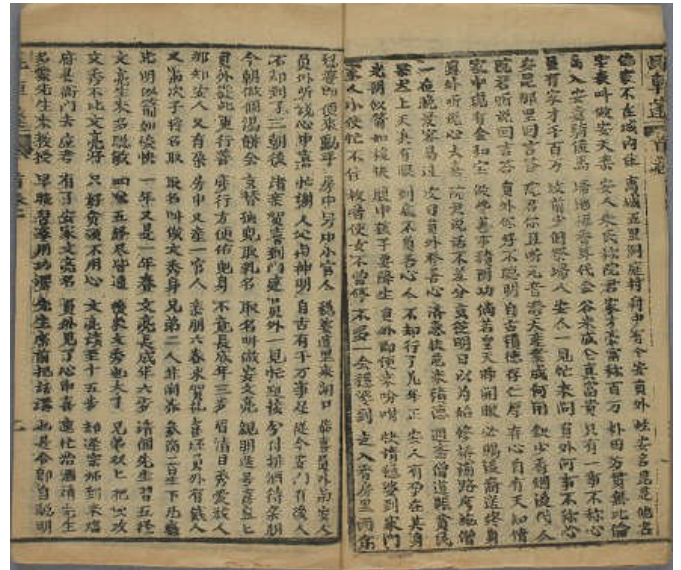
図4 復旦大学蔵『新刻八宝山全集』中湘黄三元堂刻本

戊類：除以六言八句引詩開始外，其後所接形式及用語大致與乙類相同。此形式計有一種。

六言八句の開場詩を除き、その後続く形式および用語は大よそ乙類と同じ。この形式のものは1種。



挿図 3b、本文 1a



本文 1b、2a

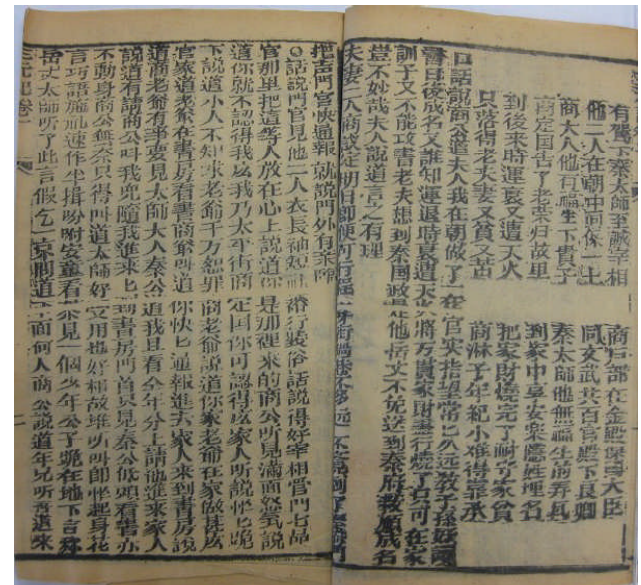
図5 早稲田大学演劇博物館蔵『新編揀抄瓦車篷好善賑民第首卷牙痕記真本』中湘黄三元堂刻本

己類：以《西江月》為開始引詞，其後交夾七字、十字韻語及散文道白，韻語隔句押韻，一韻到底。此形式計有一種。

『西江月』の開場詞の後、七字、十字の韻語および散文のセリフを交互に挟む、韻語は隔句韻、一韻到底。この形式は1種。



挿図 1b、本文 1a

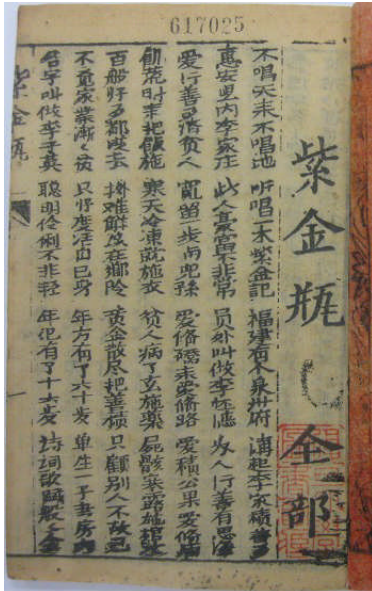


本文 1b、2a

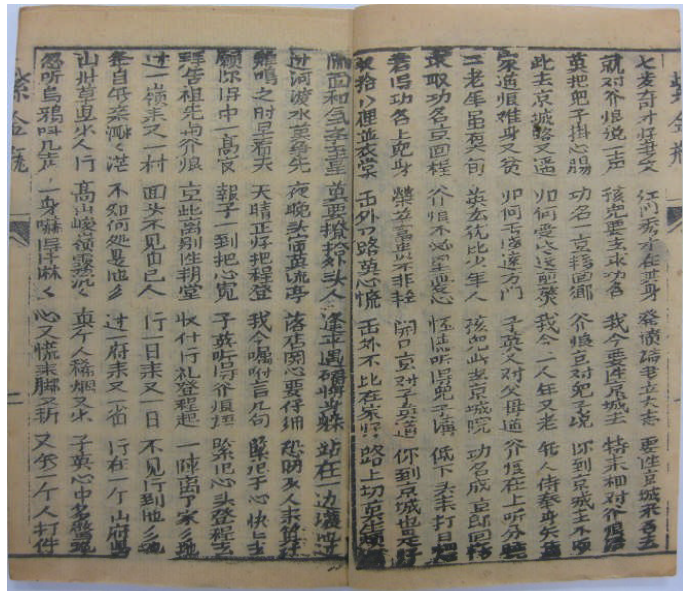
図6 復旦大学蔵『新刻秦雪梅三元記全部 卷之一』中湘黄三元堂刻本

庚類：全篇皆七字句，每兩句一韻，常不斷換韻。首句幾乎都以「不唱……聽唱……」用語開始。此形式計有十九種。

全篇七字句で、二句一韻だが、常に換韻をする。冒頭の句は殆どが「……については語らず、さてお話しするのは……」の用語で始まる。この形式のものは全部で19種。



1a

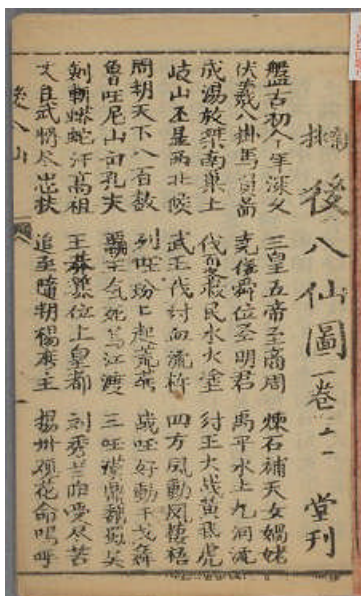


1b、2a

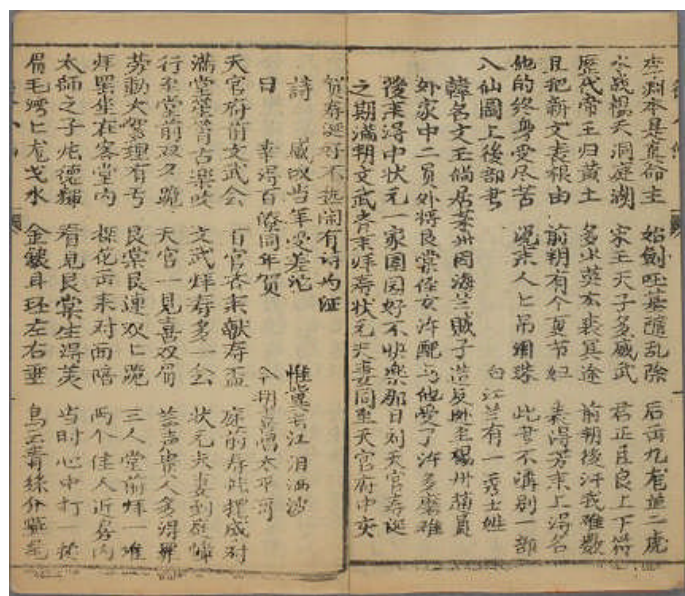
図7 復旦大学蔵『紫金瓶全部』中湘黄三元堂刻本

辛類：大致同乙類，但其韻句每遇散文夾白則換韻。此形式計有兩種。

大よそ乙類と同じだが、その韻を踏む句は、散文のセリフが挟まれる毎に換韻。この形式のものは2種。



1a

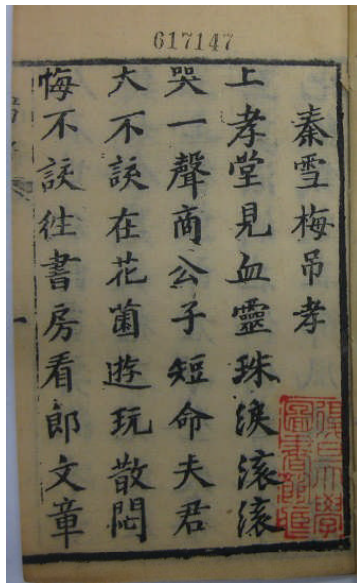


1b、2a

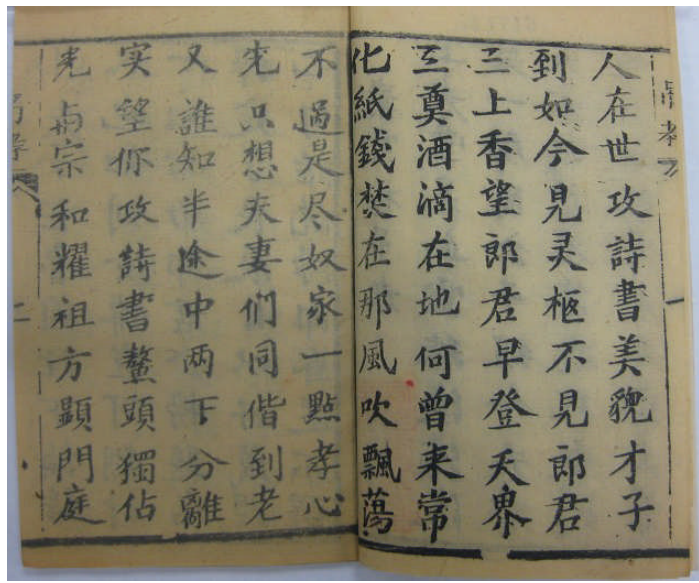
図8 早稲田大学演劇博物館蔵『新抄後八仙圖一卷』長沙刻本

壬類：全篇皆十字句(三、三、四)，大致為隔句韻，但不嚴謹。此形式計一種。

全篇全て十字句、大体は隔句韻だが、嚴密ではない。この形式のものは1種。



1a

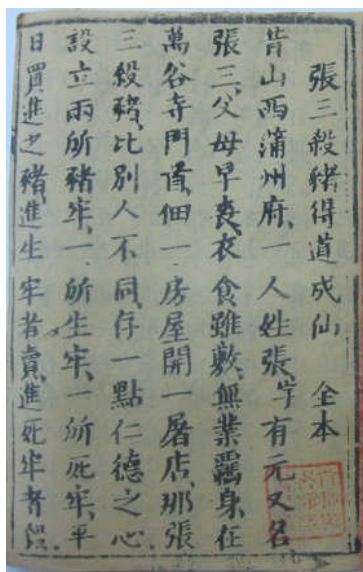


1b、2a

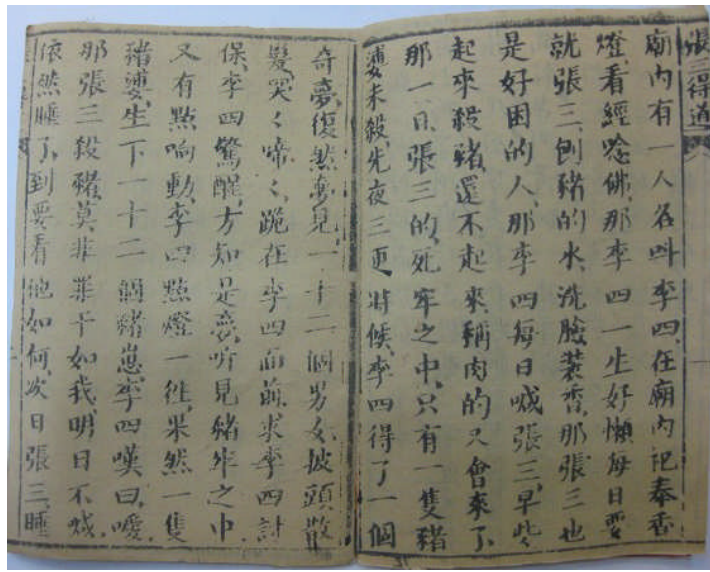
図9 復旦大学蔵『秦雪梅吊孝』中湘黄三元堂刻本

癸類：此類為寶卷。全篇散、韻夾用，說、唱兼具。散文皆第三人稱的敘述與對白；韻文唱句有七字句、十字句(三三四)、十三字句(三三七)及長短句等多種不同形式。七字句與十字句皆隔句押韻，一韻到底；十三字句則兩句一韻。此類形式計有兩種。

これは宝卷である。全篇は韻、散混合文で、説（カタリ）と唱（ウタ）を兼ね具える。散文は全て第三人称による叙述とダイアログであり、韻文の唱（ウタ）は七字句、十字句、十三字句および長短句など多種多様な形式で、七字句と十字句は隔句韻で、一韻到底。十三字句は二句一韻。この形式のものは2種。



1a



1b、2a

図10 首都図書館蔵『張豬得道成仙全本』中湘刻本

[論者補注]: 以上が、甲類から癸類まで 10 種類に分類された「説唱類」の概容である。なお、張 (1998) が 150 種の各テキストの版式 (何葉、何字何行、封面題など) に関する詳細な書誌情報を整理し、明らかにしているので、ここでは全体的な版式の特徴を大まかに述べるにとどめる。

「説唱類」に属するテキストの大きさは、ほとんどが、縦 15~17 センチ×横 10 センチ前後、匡郭は縦 12~15 センチ×横 8 センチ前後の小型本である。四周単辺で、毎半葉 10 行 20 字前後を基本とする。物語の全編の長さは、20~30 葉程度の短編が最も多く、40~60 葉程度の中編がこれに次ぎ、100 葉以上の長編物語は僅かに『瓦車蓬』、『二度梅』の 2 種のみ現存する。

二、戯曲類 :

此類唱本皆分角色扮演，由兩角、三角以至多角皆有，且常帶科、介、唱、白。但除花鼓戲外，其餘多未載明所唱曲調，難以確認其劇種。故以下書錄除花鼓戲特加註明外，其餘不再另作說明。此類計有五十一種。

この種の唱本は、全て角色 (役) を分けて演じ、二人、三人から、多人数のものまであり、常に科 (しぐさ)、介 (しぐさ)、唱 (ウタ)、白 (セリフ) を含む。ただし、花鼓戲を除いて、その他は多くが唱 (ウタ) の曲調を記載しないので、その演劇のジャンルを確認することは難しい。そのため、書録は花鼓戲については特に注記するが、その他については特に説明を加えない。戯曲類は合計 51 種。



図 11 復旦大学蔵『湘子賣藥』星沙羅富文堂刻本 封面、1a

[論者補注]: 「戯曲類」に属すテキストの大きさは、二つの系統に大きく分かれ、ひとつが縦 15 センチ×横 9 センチ前後、匡郭は縦 12 センチ×横 8 センチ前後、もうひとつはやや小さく、縦 13 センチ×横 8 センチ前後、匡郭は縦 10 センチ×7 センチ前後。いずれも四周単辺で、毎半葉 8~10 行 15~20 字前後を基本とする。現存するテキストの物語全編の長さは、2~10 葉程度の短いものが殆どである。

三、山歌類：

全篇皆由七字句韻文組成，有四句、五句及六句一韻三種形式。四句及五句形式者第三句不押韻、六句者第五句不押韻，其餘皆押平韻。此類唱本計十四種。

全篇七字句の韻文で構成され、四句、五句および六句一韻の三種の形式がある。四句および五句の形式のものは第三句目を押韻せず、六句の形式のものは、第五句目を押韻しない、その他は平声で韻を踏む。山歌に属す唱本は14種ある。



図12 首都図書館蔵『十月懷胎』寧鄉綿芳堂刻本 封面、1a

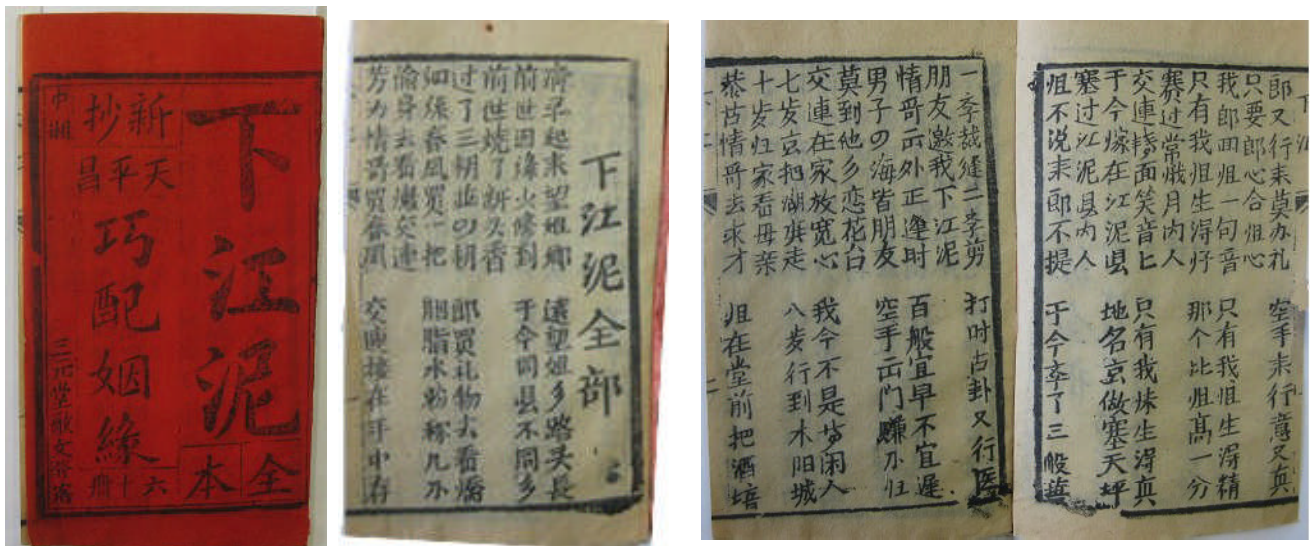


図13 大木蔵『下江泥全部』中湘三元堂刻本 封面、1a、1b2a

[論者補注]：「山歌類」に属すテキストの大きさは、縦13センチ×横10センチ前後、匡郭は縦11センチ×横8センチ前後、四周単辺で、毎半葉9行14字前後或いは10行×20字前後を基本とする。現存するテキストの物語全編の長さは、多くが3～5葉程で、20葉程のものもある。

四、小調類：

篇幅皆較短小，曲情也極簡單，有些在扉葉上即題「小曲」或「小調」。曲詞多長短句，每段常帶虛腔或疊字。此類計有二十二種。

ページ数は少なく、内容も極めて簡単で、封面には「小曲」或いは「小調」と題すものもある。曲詞は多くが長短句で、每段虚腔あるいは疊字を含む。小調に属す唱本は22種ある。

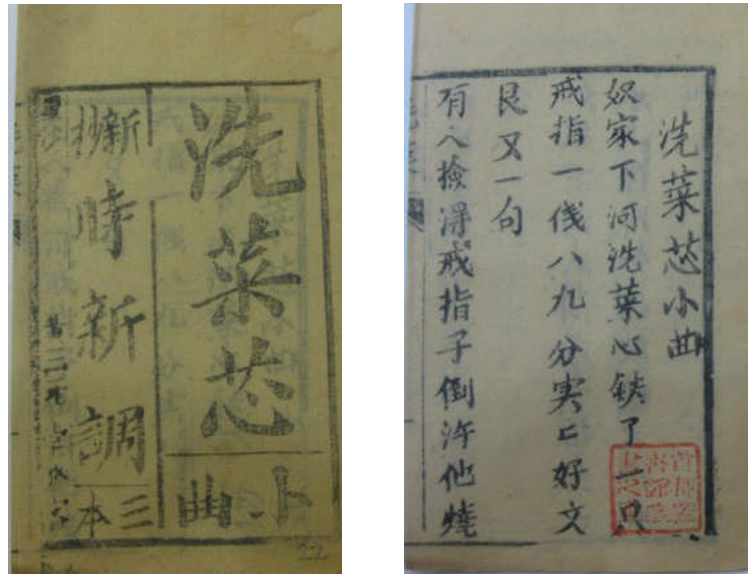


図 14 首都図書館蔵『洗菜芯小曲』星沙三元堂刻本 封面、1a

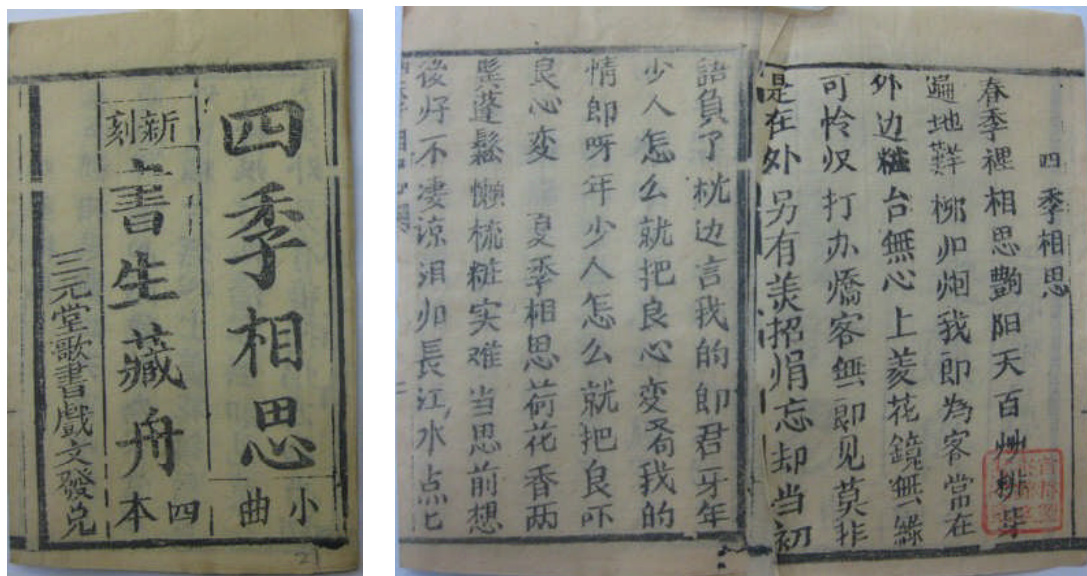


図 15 首都図書館蔵『四季相思』三元堂刻本 封面、1b、2a

[論者補注]：「小調類」に属すテキストの大きさは、縦13センチ×横8センチ前後、匡郭は縦12センチ×横7センチ前後、四周単辺で、毎半葉5行13字前後を基本とする。現存するテキストの物語全編の長さは、全て10葉以下で、2、3葉のものが多い。

五、其他類：

大致為喜歌、喪歌、香誥、讚土地等唱本，前面四類未包含者，皆歸入此類。計有八種。

大体が喜歌、喪歌、香誥、讚土地などの唱本で、「説唱、戯曲、山歌、小調」の分類に含まれないものは全て「其他類」に入れた。全部で8種。

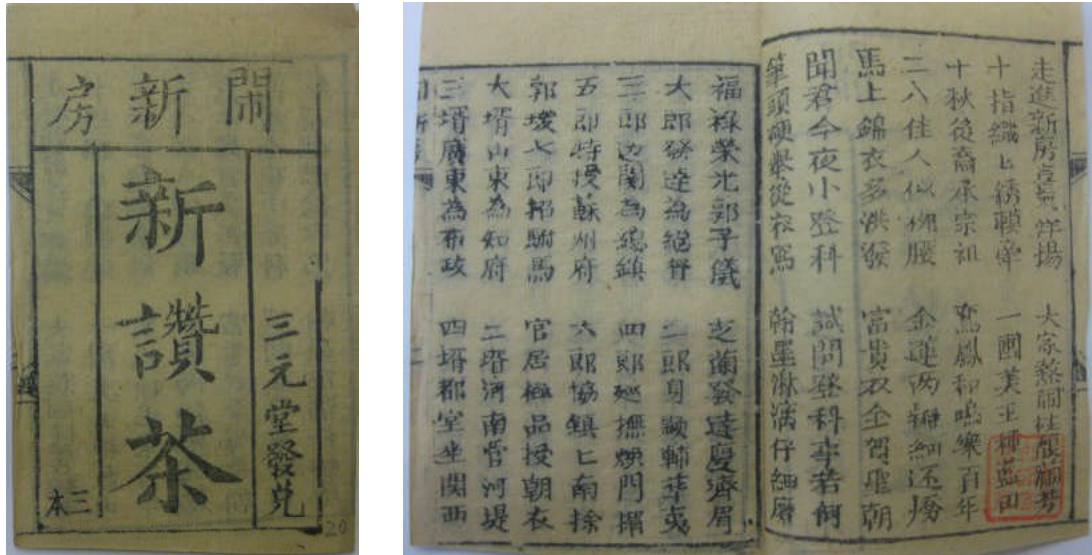


図 16 首都図書館蔵『新讚茶』三元堂刻本 封面、1b2a

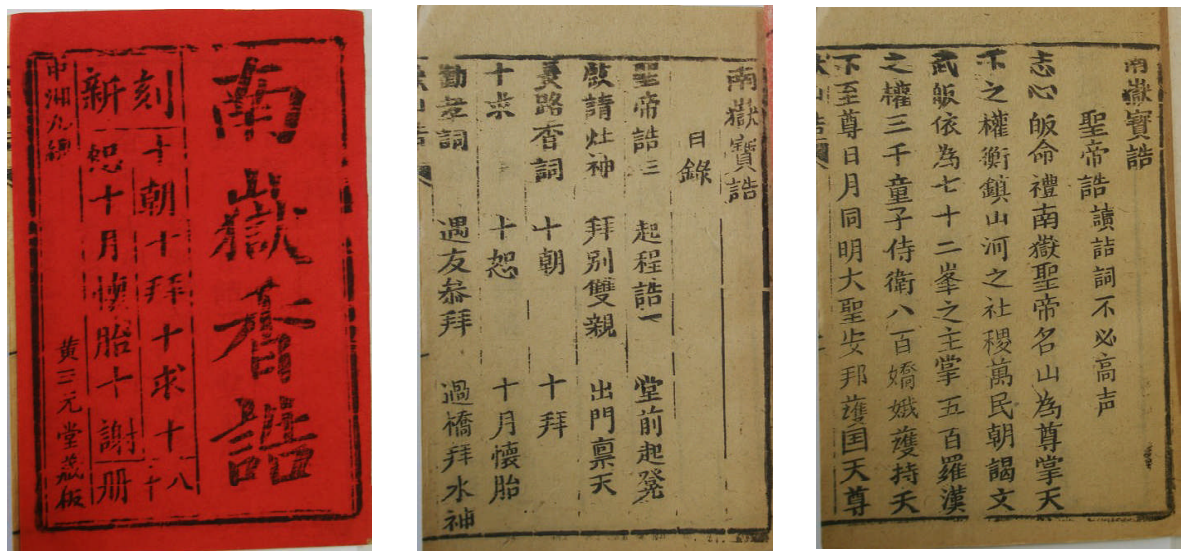


図 17 大木氏蔵『南嶽寶誥』中湘黄三元堂 宣統 2 年（1910）刻本 封面、1a、2a

[論者補注]：「其他類」に属すテキストは種類も様々であるため、大きさ、版式もまちまちである。6 葉前後のものがほとんどである。

3. 封面の特徴

湖南説唱本の「戯曲類」、「山歌類」、「小調類」、「其他類」に属す封面については、既に書影を出して例示したので、ここでは「説唱類」に属すテキストの封面をいくつか挙げて見ていく。先ず、封面はしばしば赤や紫その他に緑などの着色が施されている。そして、書題が大きく記され、次に2行にわたる表題（1行の場合もある）が書かれている。これが章回小説の各回の題目のような役割を担い、物語の内容を簡単に紹介している。その他、刊行地、書肆名、印刷数など、出版に関する各種情報も記載される。このような封面の工夫は、各地へ販売しに行くことを主たる目的としていた湖南説唱本が、より多くの消費者の目に留まるように宣伝をする、書肆による販売促進の意図の現れだったと思われる。

図 18、20 は早稲田大学演劇博物館、図 19 は中山大学に所蔵される湖南説唱本である。

図 18



図 19



図 20



本論では、テキストの書誌情報のうち、封面の情報について以下のように記す。

図 18：後八仙圖/新抄/真本/趙銀棠枯井産子 張太師謀害佳人/百廿冊/長沙小西門外首湘
郷碼頭□□戲文發客

図 19：何文秀算命/新刻/何副史報冤記/七十冊/星沙明經堂歌書發兌

図 20：瓦車蓬/全部/新刻/兄弟状元牙痕記/□□冊/中湘九總黃三元堂藏板

それぞれ、図 18 長沙、図 19 星沙（長沙）、図 20 中湘（湘潭）の各地で出版されたもので、図 18 は書肆名が削られているが、別の物語のテキストでは「長沙小西門外首湘郷碼頭」と「戲文發客」の間に「左三元堂」と入るものが散見する。また、図 20 は冊数の数字が削られている。この図 18、図 20 のような版本上の処理はしばしば見られ、恐らく元々の版本では文字が記されていたが、別の書肆で版本を使い回す際に、書肆の都合で削られたのではないかと思しい。中には、全く同じ封面でも、冊数の数字だけ一方は 70 冊で、一方は 100 冊という具合に異なるテキストもある。これは同じ書肆で版を重ねて出版する際に、印刷数に変更があったのだろうと推察することができる。

4. 出版地と書肆

姚他（1929）、張（1998）、謝（2008）の著録、各所蔵機関にある湖南説唱本、『湖南出版志』¹、尋（2004）²に記載される湖南説唱本の出版地と書肆名を抽出して整理すると、以下のような分布が見られた。湖南省のほぼ全域に広く説唱本を販売する書肆が林立していたことが分かる。また、例えば、以下の下線部、常德と長沙と湘潭の三元堂や、長沙と宝慶の文元堂のように、地域を跨いで同じ書肆名が見えるが、それぞれの書肆の関連性ははっきりとは見出せない。

【地名】 【書肆名】

岳陽： 彭同文堂

常德： 錦華堂、明経堂、三元堂、常城堂、三沅堂、全城堂、華徳堂、變記書店、蕭福祥、文陞堂

桃源： 四喜堂、三槐堂

益陽： 華文錦堂、富文堂、文元堂、薬王宮下首志安、郵局対門華文錦、姚文元

長沙： 誠興堂、三慶堂、慶華堂、蕭同華書坊、三元堂、左三元、文星堂、周慶林堂、同文堂、楊福星、黄文森、文珍堂、慶林堂、羅富文、煥文堂、文元堂、彭煥文、大成堂

星沙： 王洪興堂、黄三元堂、三元堂、同華堂、広文堂、羅富文堂、同文堂、経文堂、（長沙）正光堂、信友堂、同文堂、文元堂、汲古閣、誠興書店、明経堂

寧郷： 黎綿芳堂、綿文堂

中湘： 九總黄三元堂、楊文星堂、文星堂、（湘潭）三元堂、同華堂、同心堂、信友堂、九總三元堂、十總河街楊文星堂、十六總信友堂、中湘書局

辰州： 文陞堂、張文陞堂

宝慶： 王長興、大林福堂、朱副慶堂、武岡州、文賢堂、文元堂、福慶堂

洪江： 豊泰新堂、同徳堂、左文堂

武岡： 大林堂福記、大林堂

永州： 文順慶記、文順堂、黄文順堂、周陞發書社、文順書局、西郷田洞餘家

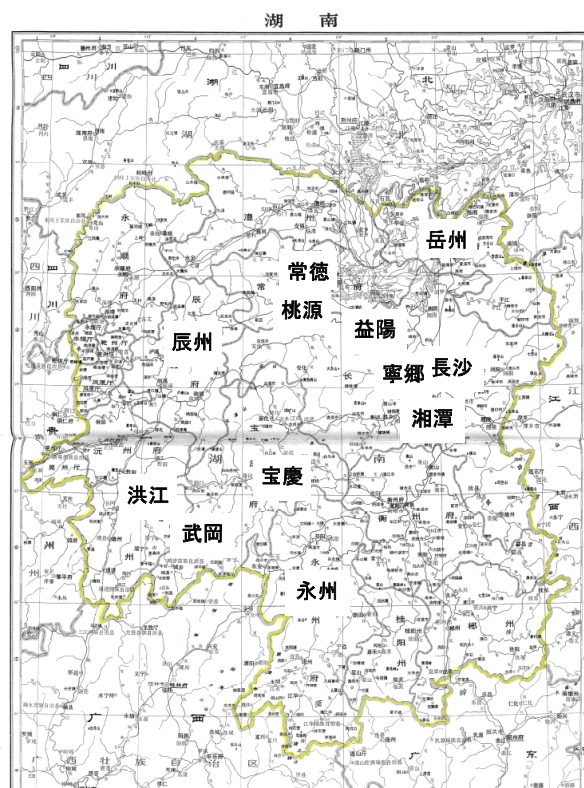


図 21

湖南省における説唱本出版販売書肆の分布

¹ 湖南省地方志編纂委員会編『湖南出版志・出版』（湖南省志第二十卷、湖南出版社、1991）

² 尋霖「明清湖南戯曲作家和戯曲刻書」『藝海』第5期（2004）

³ 譚其驤主編『中国歴史地図集』第八冊：清時期（北京：中国地図出版社、1996）より引用し、論者が地名を加えた。

出版地の「星沙」は「長沙」のことであり、「中湘」は「湘潭」を指す。テキストによっては、封面に印刷される出版地が「長沙」であったり「星沙」であったりする。「岳陽」は民国二年（1913）に「岳州」から「岳陽」へと改名されたので、「岳陽の彭同文堂」から出版された説唱本は、1913年以降のものと考えられる。

また、封面だけでなく、たまに巻首題下にも書肆名が印刷されており、封面の情報と一致しないものもある。また、ある物語で、封面には「中湘楊文星堂」、巻首題下には「三元堂」、途中の巻の題下には「左三元」と記されるテキストもあり⁴、三元堂は湘潭にもあるが、左三元堂は長沙の書肆なので、先ほどの封面と同様に、本文の版木も使い回され、各地に入り乱れていたことが窺える。

5. 湖南説唱本の物語の概容

現存する湖南説唱本 355 種の作品についてみていきたい。先ほどの張（1998）による分類で「説唱類」に属す作品は、20 葉～50 葉前後の短編、中編が多く、1 回読み切りタイプか、上下巻或いは上中下巻のように、2、3 冊に分冊されている。60 葉前後から 150 葉程度になると、4 巻、5 巻、6 巻…と長編化し、『秦雪梅三元記』六巻（全 74 葉）、『瓦車蓬』八巻（全 100 葉）、『二度梅』十二巻（全 161 葉）は、現存する物語の中で三大長編作品と言えよう。

「説唱類」で語られる物語の内容は、「梁祝」故事、「孟姜女」故事、「売臙脂」故事など、各地に広く流布する伝統的な民間故事を題材とするものもあれば、湖南常德府の梨園玉林班と山賊の事を描いた『三打玉林班』や、その他に湖南出身の彭玉麟が微行で各地を民情調査し（「私訪」）、事件に巻き込まれる『彭大人私訪湖北』などの「私訪シリーズ」や、湖南省湘潭の光景を描く『湘潭景』など、湖南に縁の深い人物を主人公としたり、物語の舞台が湖南だったり、湖南で独自に創作されたと思しい新しいものも数多く存在する。また、内容の傾向は、悲恋、一夫多妻、節婦、冤罪事件、暴力事件、怪事件、家庭問題などが大半を占める。政治、歴史、戦記を主題に描く物語は左程多くないため、民衆の生活に密接した、身近な話題を描くものが好んで出版されたと考えられる。

「戯曲類」は、全て 2～10 葉程度で、一幕劇や物語のさわりを簡単に描くものが多い。物語も「梁祝」、「孟姜女」、「董永」、「呂洞賓」故事など良く知られた民間故事の題材が多い。戯曲のジャンル「花鼓戲」、曲調「西湖調」、「魚古（鼓）調」、「六音調」などを明記するテキストも散見する。

「山歌類」や「小調類」は、民間で唱われた歌謡や端唄の類である。「山歌類」に属すものには、例えば母親が子を身ごもり育てる苦勞を述べる『十月懐胎』や、茶摘みの時に唱われた恋歌の『採茶歌』などがある。「小調類」には、男女の恋愛を主題とし、妓女に関するものも散見し、例えば、少女が青菜を洗いながら異性への想いを述べる『洗菜心』や、未婚で妊娠した女性の苦惱を描く『私懐胎』、妓女の白牡丹が一夜客を取る『白牡丹小曲』などがある。

以下に、「説唱類」と「戯曲類」に属す 120 種余りの作品のうち代表的なものを取り上げ、

⁴ 『新刻董永行孝』（浙江図書館、湖南図書館、復旦大学古籍所蔵）

湖南説唱本の作品内容の主な傾向を分類して示す⁵。

- 嫌貧愛富
『賣水記』、『三姑記』、『毛洪記』、『秦雪梅三元記』
- 恋愛（殺人事件・家庭問題を含む）
『十美図』、『四美図』、『八美図』、『九美図』、『五美図』、『三美図』、『二度梅』、『七美図』（「私訪」でもある）、『七層樓』、『後八仙圖』、『張二姐反情』、『吳三保遊春』、『江西買雜貨』、『賣花線』、『硃砂印』、『手巾記』、『南橋會（藍橋会）』、『吳燕花』、『下江泥』、『二度梅』
- 恋愛（民間故事）
『王月英賣胭脂』、『祝英台』、『孟姜女唱春』、『孟姜女過關』、『孟姜哭夫』、『孟姜女尋夫』、『池塘洗澡』、『董永行孝』、『槐蔭会』、『麒麟送子』、『送子書』、『山伯訪友』、『山伯送友』、『英臺勸酒』、『關王廟會』
- 家庭問題
『碧玉簪』、『雙花記』、『瓦車蓬』、『高機分別』、『新殺蔡鳴鳳』、『青楓亭趕子』、『書房調叔』、『張三勸妹』、『蔡鳴鳳辞店』、『雙珠球掛袍記』、『烏金記』、『法場勸子』、『張公百忍』、『瓦車蓬』
- 立身出世・節婦・善行
『得保放牛』、『謀朝記』、『秦雪梅吊孝』、『秦雪梅斷機教子』、『秦雪梅教子』、『状元拜塔』、『勸世山歌』、『勸孝歌』、『娘教子』、『二十四孝』、『五子行孝』、『三娘教子』、『蔡崑山犁田』、『曹安行孝』
- 私訪・公案
『吳大人私訪漢陽』、『吳大人私訪九人頭』、『後五美図』、『彭大人私訪湖北』、『彭大人私訪九龍山』、『彭大人私訪廣東』、『彭大人私訪蓮花廳』、『彭大人私訪南京』、『彭大人私訪蘇州』、『盧知県私訪武陵』、『馬金龍私訪華容』、『私訪翠花菴』、『陶大人私訪江南』、『八寶山』（包公案）、『滴血珠』（包公案）、『乾隆主私訪南京』、『光緒主遊長安』、『紫金瓶』、『七美図』
- 社会問題
『三打玉麟班』、『盧俊義上梁山』、『龍虎鬪』、『光緒自嘆』
- 神仙
『湘子化齋』、『湘子賣雜貨』、『湘子賣藥』、『韓仙問道』、『得道記』、『劉海戲蟾』、『白牡

⁵ 姚逸之、鍾貢勛（1929）『湖南唱本提要』の物語内容の分類方法を参考にした。

丹兌藥』、『三醉岳陽樓』

■ 信仰

『目蓮尋母』、『良言記』、『張秀英懷胎』、『香山記』、『修身録』、『葵花記』

■ 歴史・戦記

『十八條好漢』、『黄金印』、『李廣催貢』、『天水関』、『三哭桃園』、『三氣周瑜』、『仁貴征東記』、『仁貴回窰』、『華容擋曹』、『轅門斬子』、『殺四門』、『馬嵬驛』、『五美縁雕龍扇』、『鶴子観星』

物語内容の傾向からも明らかなように、恋愛や家庭問題、事件などを描く世話物と公案物が人気であった。物語の時代設定が清代の作品（『三姑記』、『五美図』、『得保放牛』、「呉大人」、「彭大人」、「陶大人」、「馬金龍」による「私訪」故事シリーズ、『光緒自嘆』、『乾隆主私訪南京』、『光緒主遊長安』など）、湖南地域を舞台にした作品も多い。また、特に目立つのが、『四美図』、『五美図』、『六美図』などの「美図」故事シリーズや、『乾隆主私訪南京』、『呉大人私訪漢陽』、『彭大人私訪蘇州』などの「私訪」故事シリーズと言える作品群の存在である。その他、「秦雪梅」故事を描く作品は、『秦雪梅三元記』、『秦雪梅吊孝』、『秦雪梅斷機教子』、『秦雪梅教子』など、一種類だけでなく折子戯など数種類が存在し、湖南地域で広く流行したと思しい。

本論では、「湖南の地域的独自性」と、テキスト数が多く、人気のほどがうかがえる「流行性」を基準に、上記の作品の中から、第2章では「秦雪梅」故事、第3章では、「秦雪梅」故事と、湖南説唱本において物語間に結び付きが生まれる「売臙脂」故事（『王月英賣臙脂』）、「梁祝」故事（『祝英台』）、第4章では、「私訪」故事シリーズ、第5章では「美図」故事シリーズを取り上げて、湖南説唱本について明らかにしていく。

なお、本論で取り上げる湖南説唱本等の書誌情報について、先ず封面の記載方法は、「3. 封面の特徴」で既に述べた通り。また、各所蔵箇所については以下のように略称で記す。

- 国家図書館 → 国図
- 首都図書館 → 首図
- 北京大学図書館 → 北大
- 上海図書館 → 上図
- 復旦大学古籍所 → 復旦
- 浙江図書館 → 浙図
- 中山大学非物質中国遺産研究中心 → 中山
- 湖南図書館 → 湖南
- 中央研究院傅斯年図書館 → 傅斯年
- 早稲田大学中央図書館風陵文庫 → 早大
- 早稲田大学演劇博物館 → 演博
- 大木康氏 → 大木

第2章 「秦雪梅」故事の伝承と流通

0. はじめに

「秦雪梅」故事の説唱テキストは、論者による各図書館に所蔵される説唱本への調査から、湖南省において全幕通し、折子戯などの説唱本が各種出版されただけでなく、全幕通しの説唱本については、他地域でも類似のテキストが数多く出版されていたことが明らかとなった。説唱文芸の中でも非常に流通したと推定され、清代以降の物語の伝承を考察する上で、「秦雪梅」故事を取り上げることは非常に意義があると考えられる。

本章は、全国的に広く流布した「秦雪梅」故事をとりあげ、物語の伝承について、第1節では明清期の戯曲作品を中心とした物語の流布について、第2、第3節では清代以降の地方劇、説唱文芸を中心とした物語の流布について体系的に検証し、現在まで伝わる「秦雪梅」故事の伝承と流通に、湖南説唱本がどのような役割を果たしたのかを考察する。

現在では「秦雪梅」故事といえば、かつて豫劇の名旦閻立品(1922 - 1996)が芝居で演じるにあたり、自ら「観文」「吊孝」の場面の脚本を改編し、演唱方法や演出にも改革を試みて好評を博して以来、豫劇閻派の代表演目として有名であるが、その物語の淵源は、明の南戯伝奇『商輅三元記』にさかのぼることができる。

南戯伝奇『商輅三元記』は、徐渭(1521 - 1593)が浙江地区の南戯の状況を記した嘉靖三十八年(1559)序刊『南詞叙録』「本朝」の項目に著録があり、明代の物語として流行していたことが分かる。また、テキストとして、明の万暦年間(1573 - 1620)に金陵の富春堂から出版された『新刻出像音註商輅三元記』全三十八折¹(以下「富春堂本『商輅三元記』」)があり、これは、『商輅三元記』に関して、現存する唯一の南戯伝奇の「完本」(全幕通し)である。現在、我々はこのテキストを通してのみ、後世まで広範に流布する「秦雪梅」故事の立ち上がりの全容を把握することができる。

物語のあらすじは以下のとおり。「」は、折子戯(一幕もの)で伝わる演目名の通称。

明の西浙の商霖は裕福な家庭に生まれ、読書を善くし、浙江嚴州府の長官秦徹の娘の雪梅と婚約関係にあった。ある日、商霖は岳父に挨拶をするため秦家を訪れた際に、雪梅を見かけ、その美しさに心を奪われる。一方、雪梅も商霖が書いた文章をこっそり読み、その才に感激する(「観文」「観画」)。商霖は帰宅後、恋煩いで床に臥し、万策尽くすも病は回復せず、不憫に思った商霖の両親は、媒酌人を立てて秦家に結婚を申し込む。しかし、科挙試験に合格するまではと受け入れてもらえない。病は日に日に重くなり、やむなく両親は厄払いにと商霖を下女の愛玉と夫婦にさせたが、甲斐なく他界する(「相思病」「愛玉成婚」)。秦雪梅は商霖の訃報を聞くと、父親の制止を振り切って商家へお悔やみに赴き、そのまま留まって商家を守り、舅姑への孝養、商霖への守節を誓う

¹ 当該テキストは現在北京図書館に所蔵される。『古本戯曲叢刊』初集(上海:商務印書館、1954)は、北京図書館蔵本を影印して収める。また、鄭振鐸輯『彙印伝奇』第一集に鄭氏が富春堂本を影印したものを収める。『彙印伝奇』は、日本では東京大学雙紅堂文庫に所蔵があり(http://hong.ioc.u-tokyo.ac.jp/main_p.php)、インターネット上で閲覧が可能である。本論では『古本戯曲叢刊』初集所収本、雙紅堂本共に参考にした。

（「吊孝」）。そして愛玉が宿した遺児商輅を我が子のように育てた。学問を途中で怠る商輅を、孟母に倣って自身の織りかけた機を断ち、厳しく戒め激励すると（「断機教子」）、商輅は改心して郷試、会試、殿試と首席で合格し、翰林院学士となり故郷に錦を飾った。また、秦雪梅、愛玉はその貞節が讃えられ、皇帝より恩典を賜った（「三元捷報」）。

明の嘉靖年間（1522 - 1566）から万暦年間は、民間の出版活動が隆盛した時期として知られ、戯曲のテキストも小説と並ぶ中心的な出版物として盛んに刊行されるようになった。富春堂本『商輅三元記』のような完本は然ることながら、散齣を収めた散齣集にも「秦雪梅」故事は収録され、上演のみならず書物としても流通した。特に散齣では「観文（観画）」、「吊孝」、「断機教子」、「三元及第」の場面を中心とした秦雪梅の節婦譚が人口に膾炙し、明末から清代、民国期にかけて、各地の地方戯でも盛んに演じられたほか、弾詞、宝卷、鼓詞、子弟書、木魚書などの説唱文芸にも採用されて民間に広く伝わり、様々な伝承媒体を介して流布する過程で、物語も少しずつ変容していった。

「秦雪梅」故事に関する代表的な研究に、丘慧瑩（2009）「雪梅故事的演變及文化解讀」があり、そこで丘氏も「秦雪梅」故事の形成と伝承について以下のように指摘する。

明代戯曲《三元記》、鋪陳女角秦學梅未嫁守寡，断機教子，最後三元及第，一門榮顯的故事。這種節婦守貞，教子成立的故事主題，因符合傳統綱常禮教，在中國各地廣泛流傳。不同體裁的戯曲、小説、民間講唱都有雪梅故事，其內容則是在原來戯曲「祖本」的基礎上，沿用與變化。²

明代の戯曲『三元記』（※『商輅三元記』のこと）は、女主人公の秦雪梅が未婚のまま貞節を守り、織かけの機を断って子を戒め、最後に子は三元及第し、一門が繁栄したという物語である。このような節婦が貞節を守り、子を戒めて自立させるという物語の主題は、伝統的な倫理道徳と合致したため、中国各地に広く流布した。異なるジャンルである戯曲、小説、民間説唱にも秦雪梅故事があり、その内容は戯曲の「祖本」を基礎に、踏襲、変化した。

丘氏の研究は、先ず物語の立ち上がりである戯曲『商輅三元記』の「祖本」の成書年代を、商輅にまつわる歴史的事実と併せて考証し、更に地方劇、説唱、民間故事などで描かれる「秦雪梅」故事のテキストを網羅的に収集し、それぞれ「原型」、「宿命型」、「考驗型」、「女性群相型」の4つの類型に分類して物語内容の変遷を追いながら、描写される女性の形象に注目し考察を加える。

丘氏の「秦雪梅」故事の収集範囲は網羅的ではあるが、そのうち説唱資料として挙げた「評話『三元記』」について言うと、注に「『湖南唱本提要』」と記されるのみであり、提要で物語内容のあらまきは把握したが、原本を実際に確認していないと思しく、論考で物語内容の変遷を考察する際に、関連するはずの湖南説唱本の内容の詳細に触れられていないのが憾まれる。

² 丘慧瑩「雪梅故事的演變及文化解讀」國立中山大學中國文學系主編『文與哲』第十五期（2009）の「前言」より引用。

以下、第 1 節では、「秦雪梅」故事の立ち上がりと位置づけられる、明の南戯伝奇『商輅三元記』の成書年代と、散齣集のテキストや物語内容を再度整理しながら、明清期のひとつの伝承母体である戯曲作品での「秦雪梅」故事の流行を明らかにする。第 2 節では清代の地方劇における流布状況、第 3 節では清代以降に大きな勢力となった、もうひとつの伝承媒体である説唱文芸の中で、物語がどのように受け継がれていくか、或いは変遷していくかを、従来看過されていた湖南説唱本を中心的に取り上げ、その出版と流通とあわせて、「秦雪梅」故事の伝承における湖南説唱本の果たした役割について考察したい。

1. 戯曲作品としての「秦雪梅」故事の流行

1.1. 南戯伝奇『商輅三元記』の成書年代と流行

明の万暦年間に刊行された富春堂本『商輅三元記』以外で、物語の内容を伝えるテキストに、戯曲選集『風月錦囊』（嘉靖三十二年（1553）詹氏進賢堂重刊）³に収録される『摘滙奇妙戲式全家錦囊三元登科記』がある。

『摘滙奇妙戲式全家錦囊三元登科記』（以下「風月錦囊本」）は、南戯伝奇『商輅三元記』の内容を節略したいわゆる節略本である。富春堂本と風月錦囊本を比べるとテキストの文言がほぼ同じであるため、両者は同一系統のテキストを基礎に、ひとつは完本、ひとつは節略本として刊行されたと考えられる⁴。また、『風月錦囊』は嘉靖三十二年の重刊本が現存するため、少なくとも嘉靖三十二年以前には、『商輅三元記』の戯曲作品はテキストとして存在し、出版されていたことが分かる。

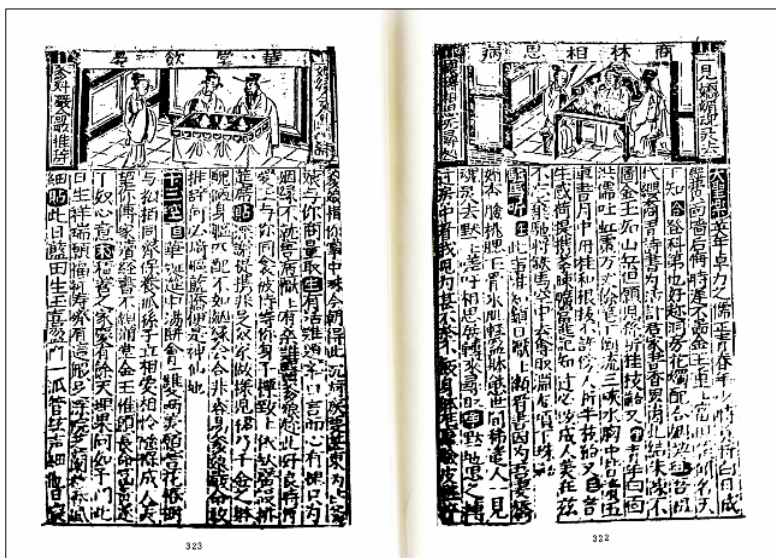


図 22

『風月錦囊』所収『摘滙奇妙戲式全家錦囊三元登科記』

³ 王秋桂主編『善本戯曲叢刊』（臺灣学生書局、1987）に、明・徐文昭編輯『風月錦囊』嘉靖三十二年（1553）詹氏進賢堂重刊本が影印収録される。

⁴ 孫崇濤・黃仕忠箋校『風月錦囊箋校』（北京：中華書局、2000）も、当該作品の「箋」で、「此戲今存明萬曆金陵富春堂刻《新刊出像音注商輅三元記》一種（《古本戯曲叢刊初集》影印）。富春堂本與錦本文字極少出入，可知其同出一源。錦本的主要價值，乃在於使富春堂本若干殘脫的文字得以補足。（この劇は現存する明萬曆金陵富春堂刻『刊出像音注商輅三元記』（『古本戯曲叢刊所収』影印）の一種である。富春堂本と錦本の文字の異同は極めて少なく、その源を一にすることが分かる。錦本の主な価値は、富春堂本で若干欠落した文字を補填させることにある。」と指摘する。

図 22 に示したのは、風月錦囊本の一部である。『風月錦囊』の出版元である詹氏進賢堂は、福建省建陽の書肆であるため、テキストの体裁も建陽で出版された書物に特徴的な上図下文の形式をとる。下段に物語の内容を収め、上段には内容と相応する絵が毎半葉全十二幅描かれる。十二幅の絵には題名が記されており、どの場面を描いているか一目瞭然である。ただし、下段の本文と照らし合わせると、上段に相応する挿絵が無くテキストのみの場面もある。それぞれ風月錦囊本の上段の挿絵の題名と下段のテキストの内容を、富春堂本全三十八折の該当箇所と照合すると以下の【表 1】のようになる。

【表 1】

風月錦囊本	富春堂本
「母子閑賞」（秦雪梅が母と庭の春景色を鑑賞する）	第五折
テキストのみ（秦雪梅の父が商霖に詩を書かせ、その才能を褒める）	第八折
「商林相思病」（商霖の病の治癒の為、下女愛玉を代わりに嫁がせる）	第十一折
「華堂飲宴」「節婦心不異」（商輅誕生、秦雪梅は改めて節婦を誓う）	第二十二折
「姉妹貞叙」（雪梅は商輅の勉強を見る。愛玉は雪梅の教育に感謝）	第二十四折
「断機教子」「公婆借（指）孫勸解」（学問を怠る商輅を厳しく戒める）	第二十六折
テキストのみ（商輅は受験に行く）	第二十七折
「太守考士子」（試験で秀才（生員）に合格する）	第二十九折
「雪梅自嘆」「深閨閑雅」「喜接家君（書）」（商輅の三元及第）	第三十六折
「衣錦榮歸」（商輅が故郷に凱旋する）	第三十八折

風月錦囊本は、富春堂本の中でも第二十二折、第二十六折、第三十六折、即ち「賀生商輅」、「断機教子」、「三元及第」の場面に紙幅を割き、挿絵も多く、商輅が生まれてから立派に育て上げるまでの場面を中心に収めた。次項で改めて論じるが、これらの場面は、後に折子戯の芝居として独立して演じられるようになり、万暦年間に大量出版された散齣集にも散見するので興味深い。

その他、現存するテキスト以外に、『商輅三元記』の上演の様子を伝える資料に、明の陳洪謨（1474-1555）『治世餘聞』「近世戯曲盛傳商三元輅事（近世の戯曲は商輅の三元及第の事を盛んに伝える）」がある。『治世餘聞』はその巻末に正徳十六年（1521）の年号が記され、陳洪謨にとっての近世、すなわち弘治（1488-1505）、正徳年間（1506-1521）辺りには、既に『商輅三元記』の戯曲が盛んに上演されていたと考えられる⁵。ここから、『商輅三元記』の出版年の下限は、先ほどの現存する各テキストの刊行年から想定した嘉靖三十二年よりも更に早く、正徳年間まで遡れる可能性もある。

では、出版年の上限はいつに設定されるだろうか。物語の登場人物の中でも唯一実在する商輅（1414-1486）について、『明史』巻一百七十六、列伝第六十四に伝がある。

⁵ 葉徳均著『戯曲小説叢考』（北京：中華書局、1975）巻上「祁氏曲品劇品補校」「雜調・三元即断機」の項目に、「…明陳洪謨『治世餘聞』下篇卷四「近世戯曲盛傳商三元輅事…」巻末題正徳十六年、故此記最晩弘治、正徳間之作也（明の陳洪謨『治世餘聞』下篇卷四に「近世の戯曲は盛んに商輅三元の事を伝える…」とあり、巻末に正徳十六年と題す。ここから、最も遅くて弘治、正徳年の間の作品と記す。」とある。

商輅、字弘載、淳安人。舉鄉試第一。正統十年、會試、殿試皆第一。終明之世、三試第一者、輅一人而已。

商輅、字は弘載、淳安の人なり。郷試第一に擧ぐ。正統十年、會試、殿試皆第一なり。終明の世に、三試第一の者は、輅一人のみ。

このように、商輅は浙江省淳安の人、正統十年（1445）の進士で、郷試、會試、殿試を首席で合格し、明代では唯一の「三元及第」の人物だったと記録される。つまり、正統十年以降でなければ商輅の三元及第をモチーフのひとつにする『商輅三元記』の創作は不可能であるため、出版年代の上限は早くて正統十年とするのが妥当であろう⁶。

以降も商輅の「三元及第」という偉業は、戯曲作品として編まれる以外に記録としても語り継がれ、その過程で以下のような伝説が残された。

淳安商文毅公。郷會廷試皆第一。文錦坊北所建三元坊是也。
淳安の商文毅公は、郷會廷試皆第一なり。文錦坊の北に建つ所の三元坊は是れなり。
(明・張鼎思『琅邪代醉編』万曆二十五年（1597）刻本)

商文毅公三元及第。官至元輔。德望首稱。止此一人而已。公之父爲嚴州掾。公生於吏舍中。刺史於是夕夢天門開。有神人乘鸞車降公廨。詰旦公生。故命名輅。今俗行傳奇。造言生事。可笑尤甚。蓋公之父親見公發解。絕無遺腹之事。紀此以詔後學云。

商文毅公は三元及第し、官は元輔に至る。德望首めに稱へらる、止だ此の一人のみ。公の父は嚴州掾と為りて、公は吏舍中に生まる。刺史是に於いて夕夢に天門開き、神人の鸞車に乗りて、公廨に降りる有り。詰旦公生まれ、故に輅と命名す。今俗に傳奇を行い、造言し事を生ず。笑う可きこと尤も甚し。蓋し公の父は公の發解を親見す。絶へて遺腹の事無し。此を紀して以て後學に詔げて云うなり。

(明・劉仲達『劉氏鴻書』万曆三十九年（1611）刻本)

商輅父名仲宣。爲嚴州府吏。輅生時。太守夜間遙見吏舍有光。踪跡之。非火也。翌旦。問羣吏家夜間有何事。羣吏云。商仲宣生一子。太守曰。此子必貴。非尋常人。宜善撫之。

商輅の父の名は仲宣、嚴州府吏と為る。輅生るる時、太守夜間遙に吏舍光有るを見る。之を踪跡するも、火に非ざるなり。翌旦、羣吏の家に夜間何事か有らんことを問う。羣吏云はく、商仲宣に一子生まると。太守曰く、此子必ず貴きなり、尋常の人に

⁶ 成書年代については、商輅の存命中に劇を創作するのは不謹慎にあたり、芸人たちは自身に災いが及ぶことを恐れて、創作は商輅の死後の弘治年間以降に行つたはずだという意見もある（車錫倫「讀丘慧瑩女史的論文」『民間文化青年論壇第二屆會議』2004）。それに対して丘（2009）は、商輅の息子のうち良輔は正徳年間に太僕寺少卿の任にあり、それなりの影響力を持っていたが、『治世餘聞』の記録では正徳年間に『商輅三元記』の戯曲が盛行していたとあり、もし不謹慎というなら正徳年間の創作も否定されるべきであり、商輅の存命中に創作は不可能だとする判断材料にはならない、と述べる。

非ず。宜く善く之を撫むべしと。
略)

(明・来集之『倘湖樵書二編』「朝野紀

それぞれ、『琅邪代醉編』、『劉氏鴻書』が世に出た万暦年間と、崇禎八年（1635）の進士来集之（1604-1682）による、崇禎年間に伝わった、商輅にまつわるエピソードである。商輅が生まれる直前に、官舎に神仙の乗った鳳輦が降り立ったり、まばゆい光が射し込んだりという逸話は、「三元及第」という偉業を遂げた人物をより神格化させるために後付けされたものと思われるが、ここで注目したいのは、商輅の父親に関する情報である。

『劉氏鴻書』、『倘湖樵書二編』とも、商輅の父親は嚴州府の役人と記録する。一方、南戲伝奇『商輅三元記』では、商輅の父である商霖は嚴州府淳安県の人で、科挙試験を受けることなく恋煩いで早逝しているため官職には就いていない。また、節婦として称えられた母親の秦雪梅についても、実際の記録では、母親の名前もエピソードも皆無であるため、南戲伝奇『商輅三元記』は、「商輅が三元及第した」という事実以外すべて完全な創作であることが分かる⁷。しかし、『劉氏鴻書』において著者の劉氏が「万暦年間の民間で流行している伝奇『商輅三元記』は笑止千万なデマである、商輅が父親の死後に生まれ子だということは絶対に無い」と敢えて忠告しなければならないほど、万暦の世の人々の間では、史実から乖離した『商輅三元記』の物語内容を以て商輅が認識されていたという現実も窺える。

1.2. 弋陽腔系諸腔「秦雪梅」故事の各地への広まり

1.2.1. 弋陽腔系散齣集の収録状況

なぜ、これほどまでに南戲伝奇『商輅三元記』の内容の方が、史実よりも一般化したのだろうか。その大きな要因として、南戲四大声腔のひとつである弋陽腔の発展を挙げることができるだろう。明代は南戲が勃興し、特に江蘇省崑山の「崑山腔」、浙江省海鹽の「海鹽腔」、江西省弋陽の「弋陽腔」、浙江省餘姚の「餘姚腔」が発展した。それぞれ、曲牌を連ねる「曲牌聯套体」の形式で構成され、各曲牌に長短句の歌詞をあてはめる曲辞形態が採用された。曲牌すなわち楽曲を中心とするため「楽曲系」演劇とも呼ばれる。

中でも、崑山腔と弋陽腔は受容層を異にして人気を二分し、崑山腔が、伴奏楽器を用い、厳密な規則を要する歌唱法を重んじて、上流階級の知識人に親しまれて発展したのに対し、弋陽腔は、弦楽器などの伴奏楽器を用いず、専ら太鼓や銅鑼など打楽器を用いる、制約の少ない演唱形態で、各地の方言や音楽などと結びつき、また「滾調」と呼ばれる韻文、散文を差し挟む通俗的な表現方法を取り入れ民衆に広く受容された。

「滾調」は、散文体の「滾白」と韻文体の「滾唱」を取り入れた歌唱法で、それぞれ三

⁷ 商輅より若干早い正統四年（1439）に進士となった章綸の母、金氏について、未婚の夫に先立たれたが夫の家を守り、妾の産んだ子を進士まで育て上げたという節婦譚が残されている。当該エピソードは、明・馮夢龍『情史』、『温州府志』、明・何喬遠撰『名山蔵』などにも収録されており、明代に広く知られていたことが窺える。ここから、当時有名だった未婚の母である金氏の節婦譚と、商輅の三元及第という稀有な話題を意図的に融合し、南戲伝奇『商輅三元記』を創作した可能性が考えられる。

字句、五字句、七字句といった一句の字数が固定した齊言句を重ねる曲辭形態を用いるため、「詩讚系」説唱に分類される。つまり、弋陽腔は「樂曲系」演劇であるだけでなく、「詩讚系」説唱の部分も芝居に取り込み、樂曲に縛られずに表現の幅を広げ、明代初期から中期にかけて民間で最も流行した地方劇となった。

更に、弋陽腔はその演唱形態や滾調の特徴を継承しながら周辺地域へと広まり、民間の影響を受けて発展を続け、嘉靖年間には、江西省樂平の「樂平腔」、安徽省徽州の「徽州調」、安徽省池州府青陽の「青陽腔」へと展開し、更に、万曆年間には「四平腔」、「義烏腔」、「太平腔」などが生まれた。これらの弋陽腔を継いで発展した弋陽腔系の地方劇は、まとめて弋陽腔系諸腔と称され、江西、安徽を中心とする南中国の民間演劇の隆盛に大きな影響を与えた。

「秦雪梅」故事も、代表的な場面が散齣として弋陽腔系諸腔で盛んに演じられた一方、万曆年間には様々な戯曲作品の散齣を集めた書物、いわゆる弋陽腔系散齣集にも収められ、書物としても出版され、流通した。現存する弋陽腔系散齣集のうち、「秦雪梅」故事の散齣は、以下の12種に収録される⁸。

- ① 『新鐫梨園摘錦樂府菁華』四卷（『樂府菁華』と略称する。以下同じ）
豫章劉君錫輯、書林三槐堂王會雲刻本 万曆庚子（二十八年、1600）刊
- ② 『鼎刻時興滾調歌令玉谷新簧』六卷（『玉谷新簧』）
吉州景居士彙編、書林劉次泉刻本 万曆三十八年（1610）刊
- ③ 『新刊徽板合像滾調樂府官腔摘錦奇音』六卷（『摘錦奇音』）
龔正我選輯、書林敦睦堂張三懷繡刻本 万曆三十九年（1611）刊
- ④ 『新刻京板青陽時調詞林一枝』四卷（『詞林一枝』）
玄明黃文華選輯、瀛賓邳綉甫同纂、閩建書林葉志元刻本 万曆年間刊
- ⑤ 『鼎鐫崑池新調樂府八能奏錦』六卷（『八能奏錦』）
汝川黃文華精輯、書林愛日堂蔡正河刻本 万曆年間刊
- ⑥ 『新鐫天下時尚南北徽池雅調』二卷（『徽池雅調』）
閩建書林熊稔寰彙編、潭水燕石居主人刻本 万曆年間刊
- ⑦ 『新鐫天下時尚南北新調堯天樂』二卷（『堯天樂』）
豫章饒安殷啓聖彙編、閩建書林熊稔寰刻本 万曆年間刊
- ⑧ 『新選南北樂府時調青崑』四卷（『時調青崑』）
江湖黃儒卿彙選、書林四知館刻本 清初刊
- ⑨ 『新鐫精選古今樂府滾調新詞玉樹英』六卷（『玉樹英』）
黃文華選、書林余紹崖刻本 万曆己亥（二十七年、1599）玄明壯夫序刊
- ⑩ 『梨園會選古今傳奇滾調新詞樂府萬象新』八卷（『萬象新』）
阮祥宇編、劉齡甫刻本
- ⑪ 『精刻滙編新聲雅雜樂府大明天下春』八卷（『大明天下春』）
刻本
- ⑫ 『新刊分類出像陶真選粹樂府紅珊』十六卷（『樂府紅珊』）

⁸ 『善本戲曲叢刊』参照

秦淮墨客（紀振倫）選輯、唐振吾刻本 万曆壬寅（三十年、1602）刊⁹

①～⑫の弋陽腔系散齣集以外にも、弋陽腔系と崑山腔系両方の散齣を収録する戯曲選集の胡文煥編『群音類選』六卷（万曆年間刊、以下『群音類選』と称す）や、明・無名氏編『新鐫樂府清音歌林拾翠』二卷（清・奎壁齋、寶聖樓、鄭元美等書林覆刻本、以下『歌林拾翠』）や、『新鐫南北時尙青崑合選樂府歌舞台』四卷（書林鄭元美刻本、清刊、以下『樂府歌舞台』）にも、「秦雪梅」故事の散齣が収録されている¹⁰。

これらの散齣集は、ただ芝居の脚本のみを集めたものではなく、毎半葉を上下二段、或いは上中下の三段に分け、上下段に散齣、中段には当時流行した散曲や小曲、酒令などを併せて収め、また散齣の場面を描いた挿絵や、紙面に装飾を施すなど、娯楽性を追求した、読み物としての意識の強い書物であった。散齣集の編者は弋陽腔発祥の地でもある江西出身者が多く、また出版地は、当時の出版業の一大中心であり、且つ大衆的な通俗書の出版を得意とした福建省の建陽、或いは福建と関係のある書肆から多数出版された。現存するものだけでも十数種類に及ぶことから、実際には更に多くの散齣集が存在したと推測され、娯楽読み物として大きな受容があったことが窺える。¹¹

史実と乖離した虚構の「秦雪梅」故事は、弋陽腔系諸腔の発展を背景に、実際の上演だけでなく書物の流通という二大勢力を以て、南中国を中心に各地のあらゆる受容層に広く浸透していったと言えるだろう。

では、「秦雪梅」故事のどの場面が、散齣として民間に広く流行したのだろうか。

以下の【表 2】は、南戯伝奇『商輅三元記』の富春堂本と節略本である風月錦囊本に収められた各場面と、①～⑫の弋陽腔系散齣集と『群音類選』、『歌林拾翠』、『樂府歌舞台』の3種の戯曲選集に収録される散齣との対応関係を、ひとつにまとめて示したものである。横軸には戯曲作品名と各散齣集の書名、縦軸には完本の各折、節略本の挿絵の題目と収録される場面、弋陽腔系散齣集に収録される演目名をそれぞれ記した。ただし、散齣集によっては目次に演目名は残るが原本は散逸しているものもあるため、それらについては演目名のところに「原欠」と補記した。

前項で触れたとおり、風月錦囊本は、完本のうち第二十二折、第二十六折、第三十六折の場面、すなわち「賀生商輅」、「断機教子」、「三元捷報」の内容に集中して紙幅を割いていたが、果たして弋陽腔系諸腔でも同じ場面が中心的に上演されたのであろうか。

⁹ 万曆刊本は既に散逸。『善本戯曲叢刊』には大英図書館所蔵の清嘉慶庚申（1800）積秀堂覆刻本を影印したものが収録されている。

¹⁰ 土屋育子「明清刊散齣集の収録演目に見られる特徴について」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』vol. 16 no. 2（2012）：pp. 190-178の附表に、戯曲集『風月錦囊』、『六十種曲』や、弋陽腔系諸腔散齣集『樂府青華』、『摘錦奇音』、『詞林一枝』、『八能奏錦』、『大明春』、『徽池雅調』、『堯天樂』、『時調青崑』、『玉樹英』、『万象新』、『天下春』、『樂府紅珊』、弋陽腔系、崑山腔両方を収録する『群音類選』、『歌林拾翠』、崑山腔散齣集15種における散齣の収録状況が整理されている。

¹¹ 弋陽腔系散齣集については、土屋育子「弋陽腔系散齣集の書誌について」『汲古』第46号（2004）：pp. 42-48、「『琵琶記』テキストの明代における變遷—弋陽腔系テキストを中心に」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』vol. 13 no. 2（2009）：pp. 318-301、および注10前掲の土屋（2012）に詳しい。

【表 2】

書名	完本	節略本	戯曲選集			弋陽腔系散齣集												
	『富春堂本 商絡三元記』	『風月錦囊』	『歌林拾翠』	『群音類選』	『樂府歌舞台』	『樂府菁華』	『玉谷新簧』	『摘錦奇音』	『詞林一枝』	『八能奏錦』	『徽池雅調』	『堯天樂』	『時調青崑』	『玉樹英』	『萬象新』	『大明天下春』	『樂府紅珊』	
場面／演目	第5折	母子閑賞	相府邀賞	秦府賞春														
	第8折	題目無 テキストのみ																
	第9折		雪梅觀畫		(原欠) 觀畫	秦雪梅觀畫	雪梅觀畫 有感						書館觀畫	秦雪梅觀畫 有感 (原欠)	(原欠) 有感	雪梅觀畫	雪梅觀畫	
	第11折	商林相思病										愛玉成婚						
	第13折						香蘭寄衫						香蘭寄衫					
	第14折		商霖遺囑															
	第16折		秦親送殯					雪梅商門 吊孝	雪梅吊孝	雪梅商門 吊孝 (原欠)				商門吊孝				
	第17折							雪梅立志守節 (原欠)										
	第18折																	
	第20折									雪梅填頭 (原欠) 掛帛								
	第22折	華堂飲宴 節婦心不 異	賀生商絡														賀生商絡	商三元湯 餅佳會
	第24折		商霖托夢													雪梅關? (原欠) 伴讀		
	第26折	斷機教子 (公婆借 勸解) 孫	斷機教子	斷機教子	斷機教子		雪梅斷機 教子							秦雪梅斷 機教子 (原欠)		斷機訓子	秦雪梅斷 機教子	
	第27折	題目無 テキストのみ																
	第29折	太守考士 子																
	第36折	雪梅自嘆 深閑雅 喜接家君 (書)	三元捷報										秦小姐憶 子得捷	三元捷報			三元捷報	
	第38折	衣錦榮歸																

【表 2】を見ると、『風月錦囊』に収録された場面の中でも、特に挿絵のある場面は、弋陽腔系諸腔においても散齣として上演されたこと、また各散齣集に収録される演目は殆ど共通し、明末の弋陽腔系の地方劇では、「雪梅観画」、「雪梅吊孝」、「賀生商輅」、「断機教子」、「三元捷報」の散齣が、「秦雪梅」故事を代表するハイライトとして人気があり、広く流布していたことが分かる。

1.2.2. 明の万暦年間の上演記録

また、散齣集だけでなく、実際に弋陽腔系諸腔によって各地で「秦雪梅」故事が上演された様子を伝える記録もある。以下は、万暦八年（1580）の進士の龍庸が、故郷の湖南省武陵に戻った時に詠んだ詩である。

弥空冰霰似篩糠、雜劇尊前笑滿堂、梁泊旋風塗臉漢、沙陀腊雪咬齣郎、断機節烈情無奈、投筆英雄意可傷、何物最娛庸俗耳、敲鑼打鼓鬧青陽¹²

空に弥つ冰霰は篩糠に似る、雜劇尊前笑い堂に満つ、梁泊の旋風、塗臉の漢、沙陀腊雪の咬齣郎、断機節烈の情、奈ともする無し、投筆の英雄、意を傷むべし、何物も最も庸俗を娛しむのみ、鑼を敲き鼓を打ち青陽を鬧がす

青陽腔で「沙陀腊雪咬齣郎」すなわち、沙陀村の劉知遠と李三娘と子の咬齣郎を描いた『白兔記』や、「投筆英雄意可傷」すなわち『投筆記』などと共に「断機節烈情無奈」すなわち『商輅三元記』の演目がにぎやかに演じられ、また、太鼓や銅鑼など打楽器系の伴奏を主とする弋陽腔の流れを汲む青陽腔の演唱形態の特徴も描かれている。これらの作品は、いずれも『商輅三元記』と同じように、南戲伝奇に『劉智遠白兔記』、『魏仲雪批評投筆記』があり、弋陽腔系諸腔で盛んに演じられ、散齣集にも関連する散齣が多数収録されており、「秦雪梅」故事と類似の伝承形態をたどる。

では、江西の弋陽腔を継承して安徽で発祥した青陽腔は、どのように湖南へ伝わり、上記の龍庸が青陽腔の『白兔記』、『投筆記』、『商輅三元記』を目にするに至ったのだろうか。一般的に、演劇を各地へと運ぶ受け皿となったのは、ひとつに、当時活躍した商人であったと言われる。明清期の演劇の発展と商人の活躍との密接な関係についてはしばしば言及され、特に明代中期以降、南中国においては、江西出身の江西商人と安徽出身の徽州商人は、地の利を生かして躍進し、貿易を通じて大きな財力と勢力を持つようになった。彼らは貿易のために他地域へ進出すると同時に、各地に同郷の商人たちが集う会館を建設し、江西会館や徽州会館と呼ばれる会館には、立派な戲台（舞台）が設けられ、故郷の劇団を招聘しては演劇を楽しみ、劇団や俳優養成のための多大な援助も惜しまなかった。弋陽腔の湖南への流入は、江西商人が劇団を招聘して芝居を上演させたことや、明初の江西から湖南への大量移民の中に民間芸人が多く存在したことが大きかった¹³。また、安徽の青陽

¹² 中国戲曲志編集委員会編『中国戲曲志・湖南卷』（文化芸術出版社、1990）、「明代的戲曲活動」p. 11 に記載がある。

¹³ 注 12 前掲書『中国戲曲志・湖南卷』「明代的戲曲活動」p. 8 に「在由江西来湘滴移民中、有能演唱目偶戲《目連伝》的民間芸人。他們唱的是何種腔調、雖無直接的史料說明但徐渭

腔の湖南への伝来と発展も、湖南における徽州商人の活躍と切り離すことは出来ない。¹⁴

演劇と商人との密接な関係は、その上演演目にも表れていると言え、例えば弋陽腔系散齣集『楽府紅珊』の巻頭目次を見ると、一卷「慶壽類」、二巻「伉儷類」、三巻「誕育類」、四巻「訓誨類」、五巻「激励類」の項目が並び、それぞれに該当する散齣の演目を収める。ここから、各種物語の中でも、長寿、婚姻、子孫の誕生を寿ぐもの、或いは子弟への訓戒、学問の奨励を行う内容が好まれていたことが想像できる。ちなみに、「秦雪梅」故事は、『楽府紅珊』では三巻「誕育類」に「商三元湯餅佳會」、五巻「激励類」に「秦雪梅断機教子」の散齣が収録されている。富裕商人にとって、自分たちの社会的地位の向上と政治的権力を掌握するために必要なのは、官界に入る事であった。三元及第した商輅のような優秀な男子の誕生を喜び、また途中で諦めること無く学問に勤しむよう激励する節婦を描くこれらの演目は、模範的な宗族演劇として人気があり、盛んに所望されたとも考えられる。

演劇は、商人というひとつの大きな受け皿を以て発展しながら、各地へと流布する過程で付随して起こる俳優や楽団の育成と排出にもつながり、より下層の人々も演劇が受容される機会が増え、龍庸が『中原音韻問』の中で「青陽等腔、徒取悦於市井嬾童遊女之耳（青陽腔等は、市井の下僕遊女の耳を喜ばせるだけである）」¹⁵と述べたように、万暦の世において青陽等腔つまり弋陽腔系諸腔の演劇は、一般大衆にも広く親しまれていったのである。

1.2.3. 清代初期の上演記録

続いて時代は下り、清代初期の福建省泉州の人、李光地（1642-1718）による「秦雪梅」故事の上演に関する記録を挙げる。

問、今之填詞、都是立定曲牌名、然後案其字數平仄而為之詞。古人是如何。曰、古人是看他的詩、又看他的志。此字宜黃鍾則黃鍾之、此字宜大呂則大呂之、律隨詩、非詩隨律也。少時見土戲、於断機教子、商輅母怒其子云、他又說我不是他的親生母。母字其學徒高聲唱、其師呵之云、母字大聲便不是、他是不會成婚的處女、於此字尚含羞澀、低微些方是。如此之類、却是從志上斟酌、此謂聲依永也。

（『榕村語錄』卷之十二「書」）

聞く、今の填詞は、いずれも曲牌名を定めた後に、その字数、平仄に応じて詞を作るが、古人はどうだったのか。曰く、古人は自身の詩、自身の志を重視した。その字が黄鍾に適していれば黄鍾にし、その字が大呂ならば大呂にし、音律は詩に随うものであって、詩は音律に随うものでは無かった。幼い時に土戲を観ていたら、断機教子の場面で、商輅の母親が子供に怒り、「他又說我不是他的親生母（彼はわたしが生みの母親ではないと言った）」と言った。母の字をその役者見習いが声高に唱うと、師匠は叱って、母の字は大声で述べてはいけない、商輅の母は未婚の女性だから、この字は

《南詞叙録》中有“今唱家称弋陽腔、則出自江西。兩京、湖南、閩、広用之”的記載、可知即是弋陽腔。這一点、也可從現今仍然活動在桃源、沅陵等地的一帶木偶班所唱的腔調得到佐証。」とある。

¹⁴ 注 12 前掲書『中国戲曲志・湖南卷』「明代的戲曲活動」 pp. 7-13 参照。

¹⁵ 注 12 前掲書『中国戲曲志・湖南卷』「明代的戲曲活動」 p. 12 より引用。

恥ずかしそうに、小さく微かな声であるべきだ、と言った。このように、志に随い斟酌すること、これを「声依永（メロディーが歌に合わせて変化する）」と言う。

この文章は、李光地と門人が填詞の方法について論じたものであるが、傍線を引いた箇所には、李光地が幼い頃「土戯」すなわち福建省の泉州の演劇で、商輅の母と秦雪梅とのやりとりを描く「断機教子」の場面を観たとある。「断機教子」は、富春堂本『商輅三元記』第二十六折に該当し、弋陽腔系散齣集『玉谷新篋』、『玉樹英』（原欠）、『大明天下春』、『樂府紅珊』や、戯曲選集『歌林拾翠』、『群音類選』、『樂府歌舞台』にも収録された明代の人気演目であり、それが清代まで脈々と演じられていたことが窺える。

また、傍線部で着目したいのが、「他又說我不是他的親生母」という秦雪梅のセリフである。これは、芝居中に商輅が秦雪梅に「自分の生みの母親ではない」と言ったことに対して、秦雪梅が憤って吐いた言葉だが、このセリフは、富春堂本『商輅三元記』の場面中には存在しない。一方、弋陽腔系散齣集の「断機教子」の中には見られるため、明清期における「秦雪梅」故事の各地への流布は、専ら弋陽腔系諸腔を以て行われていたと推察される。

1.2.4. 「断機教子」の変遷と流布

「自分の生みの親ではない」というセリフは、弋陽腔系諸腔で演じられるようになるなどどのように変遷したのか。清の李光地が記した「他又說我不是他的親生母」をてがかりに、弋陽腔系諸腔「断機教子」の場面を中心に提起し、弋陽腔系演劇によって広まる「秦雪梅」故事の流布の様相についてみていきたい。

以下、富春堂本『商輅三元記』の内容と、明代に出版された弋陽腔系散齣集に収められる「断機教子」の場面、更に弋陽腔、青陽腔が発展して生まれた高腔のテキスト（清車王府蔵本）の該当する場面を比較しながら再現的に確認していく。

（a）富春堂本『商輅三元記』第二十六折

先ず、『商輅三元記』第二十六折の前半部のあらすじを述べる。

秦雪梅は商霖に先立たれた後、必死に商家を守り、商輅の勉強の面倒を見ながら、機を織って生計を立てていた。商輅が15歳になり、学校へ通っていたある日、学友が訪れ、商輅が学校をさぼって街へ遊びに繰り出し、また友人らに悪行を働いたと告げ口する。愕然とした秦雪梅は、帰宅した商輅を詰問するが、商輅は堪らず祖父母を呼ぶ。騒ぎを聞いて来た舅姑に対し、秦雪梅はやり切れない思いを切々と訴える。

以下に挙げる【前腔】は、その前の【紅芍藥】にて秦雪梅が帰宅した商輅を問い詰めた後、続いて舅と姑に対して自分の想いを述べるところである。（本文引用は富春堂本に拠る。網掛けは曲辞、標点は論者。）

【前腔】[旦] 老公婆容奴稟覆、[浄云] 我曉得了、你要學昔日孟軻之母教子成才、[旦] 你媳婦、怎學得斷機孟母、你孫兒背師遠遊、與學生上街去打場戲毬、奴本要責罰、又恐傍人道、奴不是親生嫡母、今日教子不成、因此上把機頭斷了。

(秦雪梅) お義父さま、お義母さまに申し上げます。(姑セリフ) 分かったよ、お前はかつて孟軻の母が子供を立派に育て上げたのを学ぼうと。(秦雪梅) わたくしなぞ、どうして孟母のまねができません。あなたの孫は先生に背いて遠くへ遊びに出かけ、学生たちと街へ繰り出し毬遊びをしました。本来なら叱りたいのですが、また、周りの人たちが私を本当の生みの親ではないと言うでしょう。今、きちんと子供をしつけることができないため、それゆえ機を断つのです。

下線部を見ると、「不是親生嫡母（生みの母親ではない）」という文言が出てくるが、ここでは、秦雪梅が商輅のことを叱ると、他人から自分が生みの母親ではないから叱るのだと後ろ指を指されるのではないかと憂慮したセリフとして発せられる。これが、次に挙げる弋陽腔系散齣集の「断機教子」の場面では異なってくる。

(b) 弋陽腔系散齣集

明の万暦年間に主に刊行された弋陽腔系散齣集のうち、「断機教子」の場面を収録するものは、『玉谷新簧』、『玉樹英』（原欠）、『大明天下春』、『楽府紅珊』、戯曲選集『歌林拾翠』、『群音類選』、『楽府歌舞台』である。諸テキストをひとつひとつ見ていくと、あるテキストは富春堂本『商輅三元記』とほぼ同じであり、あるテキストは『商輅三元記』を一部踏襲しているが、「滾調」やセリフが大幅に増えて内容が改編されているなど、テキストによって傾向があることが分かった。

そこで、試みに、先の(a)で挙げた富春堂本『商輅三元記』第三十六折の【前腔】と、その前の【紅芍薬】の部分について、弋陽腔系散齣集で該当する部分とを比較してみたところ、次のような系統に分類することができた。(富春堂本の流れを継ぐものをA群、弋陽腔系諸腔の新たな内容で広がるものをB群とする)

A群（富春堂本系）：『大明天下春』

B群（弋陽腔系）：『玉谷新簧』、『歌林拾翠』、『楽府歌舞台』

A+B群（富春堂+弋陽腔系）：『楽府紅珊』

これは、あくまで「断機教子」の場面の曲牌【紅芍薬】と【前腔】の唱とセリフの部分に限定して比較した結果ではあるが、弋陽腔系散齣集の諸テキスト間でも、A群とB群の二つの大きな流れがある。A+B群の『楽府紅珊』は、「滾調」やセリフの付加も殆ど無く、ほぼA群に属するのだが、【前腔】だけB群の物語展開を採用するため、どちらの系統も受け継いだ内容となっている。

以下に、A群とB群に見える【紅芍薬】と【前腔】の内容を、便宜的に、富春堂本『商輅三元記』(A)と『玉谷新簧』(B)の【表3】、『大明天下春』(A)と『歌林拾翠』(B)の【表4】、『楽府紅珊』(A+B)をA群として『楽府歌舞台』(B)の【表5】という具合に、A群とB群に属す諸テキストを三種に分けて並べて比較し、表にまとめた。各テキストで「生みの親ではない」という文言のとらえ方がどのように変容していったのかを、下線部に注意しながら見ていきたい。なお、各テキストで曲辞（唱）とされる箇所はゴチックで表記し、判読不明な字は■で補った。

【表 3】

A 群 富春堂本 第二十六折	B 群 『玉谷新簧』「雪梅斷機教子」
<p>【紅芍藥】[旦] 我為甚的空房獨守商郎夫短命鬼</p> <p>閃得我不前不後兒我在家守節時</p> <p>指望你做場榮耀 [詩] 步月登雲莫道難青灯黃卷要勤觀 [白] 眼前朱紫轟轟貴未必生成便做官畜生你是個大丈夫須當萬里去封侯</p> <p>到如今不成就不啣嚙</p> <p>恰如斷了機頭</p> <p>……</p> <p>【前腔】[旦] 老公婆容奴稟覆 [淨云] 我曉得了你要學昔日孟軻之母教子成才</p> <p>[旦] 你媳婦怎學得斷機孟母你孫兒背師遠遊與學生上街去打場戲毬</p> <p>奴本要責罰又恐傍人道奴不是親生嫡母</p> <p>今日教子不成因此上把機頭斷了</p>	<p>【紅芍藥】為甚的空房獨守商郎的夫 [滾] 你那里渺渺魂靈居何地撇下冤家抗陷了人</p> <p>閃得奴有前沒後自古道養子必教教則必嚴嚴則必勤勤則必成學則庶人之子為公卿不學則公卿之子為庶人我為母之心望你何切我實指望你做場榮耀 [滾] 登天步月莫道難青燈黃卷要勤觀眼前朱紫轟轟烈未必生成去做官你是個男子漢大丈夫須當學班超萬里萬里覓看封侯畜生勿謂今年不學而有來年勿謂今日不學而有來日日月逝矣歲不■與嗚呼老矣是誰之愆 [滾] 為人須要惜光陰一寸光陰一寸金寸金失却還尋得失却光陰那里去尋為學如撐了水舟一篙纔緩便隨流直須努力撐將去不到原頭不肯休</p> <p>今日裡不啣嚙異日里焉能成就畜生今日不打你又慣了你下次了 [小] 我不是你生的只管打我怎的 [旦] 畜生這話兒誰教你講的 [小] 這句話難道我也不会講 [旦] 是你自己講的你起來正是栽林養虎虎大傷人我見你這等不成器打你幾下以戒下次誰想你出言無狀 [滾] 聽說言詞心大煎擡頭那得見青天雖然不是親遺體也曾與你爹爹結下緣遺霜露告蒼天哀哀哭得眼兒穿指望琢磨成大器誰知今日反成冤罷罷我自今日為始從今後有口不來罵你有手不來打你畜生 [滾] 成龍成鯨獨自遊我好沒來由空自守說出好來反成惱一點良心付却東流良言相勸反為仇商郎夫你在黃泉路上■■候我不久相逢到九幽</p> <p>今日裡教子不成不如斷了機頭</p> <p>……</p> <p>【前腔】[旦] 老公婆容奴稟覆 [外] 我知你要學孟母斷機</p> <p>[旦] 你媳婦怎學得斷機孟母 [外] 既不效他為着甚事 [旦] 為兒孫背師遠遊與學生上長街打場戲毬 [外] 你在家中怎的曉得 [旦] 方纔張哥兒拿這個石頭趕上門來口口聲聲要打這畜生也是媳婦陪個小心方纔去了</p> <p>到惹得小廝們登門罵辱回時叫他背書一字也忘了我只打他幾下以做他下次了誰想這畜生出言大拗 [外] 他年紀小休要計較他罷 [旦] 公婆他人小心不小說出的話兒激得奴難忍罵奴不是他親生嫡母</p> <p>[外] 為何將此機頭斷了 [旦] 激得我怒氣沖胸教子不成沒奈何這得把機頭斷了</p>

【表 4】

A 群 『大明天下春』 「断機教子」	B 群 『歌林拾翠』 「断機教子」
<p>【紅芍藥】 [旦哭介] 我為甚的空房獨守商郎夫短命鬼</p> <p>閃得我沒前沒後我在家守節呵</p> <p>指望你做場榮耀步月登天莫道難青灯黃卷要勤觀眼前 金紫轟轟烈未必生成便做官畜生 你是個大丈夫須當萬里去封侯</p> <p>到如今不成就不接流</p> <p>却不如斷了機頭</p> <p>.....</p> <p>【前腔】 [旦] 老公婆容奴稟覆 [淨] 曉得了你要學昔日孟軻之母教子成才 [旦] 你媳婦怎學得断機孟母你孫兒背師遠遊與學生上街去打場戲毬</p> <p>奴本要責罰又恐傍人道</p> <p>奴不是親生嫡母</p> <p>今日教子不成因此上把機頭斷了</p>	<p>【紅芍藥】 [旦] 為甚的空房獨守自古道嫁一夫靠一主靠你父親你父親早喪若是靠你你又不肯篤志如今到被你父子呵閃得我沒前沒後父母養子不教是不愛其子雖教而不嚴是亦不愛其子為子不學是不愛其身雖學而不勤是亦不愛其身是故養子必教教則必嚴嚴則必勤勤則必成學則庶人之子為公卿不學則公卿之子為庶人畜生為母之心望你何其切也指望你做場榮耀步月登天莫道難青灯黃卷要勤觀眼前朱紫轟轟烈未必生成便做官畜生你是個男子漢大丈夫須當要班超萬里萬里覓封侯 [小] 娘我今日不學而有來日 [旦] 畜生你說今日不學而有來日今年不學而有來年嗚呼老矣是誰之愆為人須要惜光陰一寸光陰一寸金寸金難買寸光陰寸金失却還尋得失却光陰那里尋畜生我今日不打你又慣了你下次今日里不啣嚙異日里焉能成就 [小] 我又不是你養的只管打我怎的 [旦] 畜生這話兒誰教你講的 [小] 難道這句話也不會講 [旦] 既是你自己講的你起來正是栽林養虎虎大傷人我見你這等不成器只得打你幾下以戒你下次誰想你出言無狀【鷓鴣天】聽說言詞心火煎抬頭那得見青天雖然不是我親遺體也曾與你爹爹結下緣無門訴告蒼天哀哀哭得眼兒穿指望琢磨成大器誰知今日反成冤畜生娘是甚麼人乃太師之女少了穿的少了吃的罷罷罷我自今以後有口也不來說你有手也不來打你畜生呵成龍成鯨任你獨自遊我好沒來由空自守說出話兒反成仇一點良心盡付東流商郎夫你在黃泉路上相等候我不久相逢到九幽今日裡教子不成還織此機怎的 [怒介] 到不如斷了機頭 [小] 公公婆婆快來</p> <p>.....</p> <p>【前腔】 [旦] 老公婆容奴稟覆 [外] 我曉得了你要學昔日孟母断機教子之意 [旦] 你媳婦怎學得断機孟母 [外] 既不效他為着何事 [旦] 為兒孫背師遠遊與學生上長街打場戲毬 [外] 他上街耍毬你在家中怎麼曉得 [旦] 方纔蔡伯兒拿了一塊石頭趕上門來口口声声要打死這畜生也是你媳婦再三陪了小心他方纔去了到惹得小廝們登門罵辱 [外] 原來如此這等該打</p> <p>[旦] 欲要責他又恐怕傍人道奴 [外] 為母責子那個敢道 [旦] 莫說傍人就是老公婆這孫子也曾道來道奴不是他親生嫡母 [外] 為何將此機頭斷了 [旦] 激得奴怒氣沖胸教子不成沒奈何把機頭斷了</p>

【表 5】

A+B 群 『樂府紅珊』 「秦雪梅斷機教子」	B 群 『樂府歌舞台』 「斷機教子」
<p>【紅芍藥】 [旦] 我為甚的空房獨守商郎夫 閃得我不前不後兒我在家守節時呵</p> <p>指望你做場榮耀步月登雲莫道難青燈黃卷要勤觀眼 前朱紫轟轟貴未必生成便做官畜生你是個大丈夫須 當萬里覓封侯</p> <p>到如今不成就 不啣嚙教子不成</p> <p>到不如斷了機頭</p> <p>.....</p> <p>【前腔】 [旦] 老公婆容奴稟覆 [淨] 我曉得了你 要學昔日孟軻之母教子成才 [旦] 你媳婦怎學得斷 機孟母你孫兒背師遠遊與學生上長街打場戲毬</p> <p>到惹得小廝門登門罵辱 這畜生回來我本要責罰幾下 他到說得好呵</p> <p>道奴不是他親生嫡母今日裏教子不成因此上把機頭 斷了</p>	<p>【紅芍藥】 [旦] 為甚的空房獨守商郎夫你渺渺魂 靈歸何地撇下冤家坑陷人閃得奴有前沒後自古道養 子必教教則必嚴嚴則必勤勤則必成學則庶人之子為 公卿不學則公卿之子為庶人我為母之心望你何其切 也實指望你做場榮耀步月登天莫道難青燈黃卷要勤 觀眼前朱紫轟轟烈烈未必生成便做官畜生你是個男 子漢大丈夫須當要班超萬里萬里覓封侯畜生勿謂今 年不學而有來年今日不學而有來日嗚呼老矣。是誰 之愆為人須要惜光陰一寸光陰一寸金寸金難買寸光 陰寸金失却還尋得失却光陰那里尋畜生我今日不打 你又慣了你下次今日里不啣嚙異日焉能成就 [小] 我又不是你生的只管打我怎的 [旦] 畜生這話兒誰 教你講的 [小] 難道這幾句話也不會講 [旦] 你是 自己講的你起來正是栽林養虎虎大傷人我見你這等 不成器只得打你幾下以戒你下次誰想你出言無狀聽 說言詞心火煎抬頭那得見青天雖然不是親遺體也曾 與你爹爹結下緣遺霜露告蒼天哀哀哭得眼兒穿指望 琢磨成大器誰知今日反成冤罷罷我自今日為始有口 也不來罵你有手也不來打你畜生呵成龍成鯨任你獨 自遊我好沒來由空自守說出話兒反成惱一點良心却 付東流良言相勸反為仇商郎夫你在黃泉路上相等候 我不久相達到九幽今日里教子不成不如斷了機頭 [小] 公公婆婆快來</p> <p>.....</p> <p>【前腔】 [旦] 老公婆容奴稟覆 [外] 我曉得了你 要學昔日孟母斷機教子之意 [旦] 你媳婦怎學得斷 機孟母 [外] 既不效他為着何事 [旦] 為兒孫背師 遠遊與學生上長街打場戲毬 [外] 他上長街戲耍你 在家中怎麼知道他 [旦] 方纔張角兒拿了一塊石頭 趕上門來口口声声要打死這畜生也是你媳婦再三陪 個小心他方纔去了</p> <p>到惹得小廝們登門罵辱回來要他背書一字也忘了我 只打他幾下戒他下次誰想這畜生出言太拗 [外] 他 年紀小不要計較他罷了 [旦] 公婆你道他人小我看 他心不小說出的話兒激得奴家難忍 [淨] 他罵你怎 的 [旦] 他罵奴不是他親生嫡母 [外] 為何將此機 頭斷了激得奴怒氣沖胸教子不成沒奈何把機頭斷了</p>

【表3】～【表5】から一目瞭然であるように、A群に比べてB群は、曲の間のセリフ量が圧倒的に増え、「滾調」も差し挟まれて、秦雪梅（旦）、商輅（小）、舅（外）、姑（浄）とのやりとりが豊かに表現されるようになる。

従来の南戯伝奇『商輅三元記』の唱の部分を中心に踏襲しながら、実際の上演を通して親子間の掛け合いが増え、観客の耳目を引くように、セリフの部分が新たに創作されていったと推測される。その過程で、「生みの母親ではない」というセリフも、後世に伝わったような商輅が発したものと変わるのだが、では、どのように商輅による「自分の生みの母親ではない」というセリフが登場したのだろうか。

A群については、先ほど富春堂本の該当場面を取り上げたので、以下に、表の中からB群に属す『玉谷新簧』「雪梅断機教子」の【紅芍薬】と【前腔】を取り上げて、唱の間に膨大に挟まれるセリフの応酬の一部を見ていきたい。

B群『玉谷新簧』「雪梅断機教子」

【紅芍薬】

[旦] 畜生、今日不打你又慣了你下次了、[小] 我不是你生的只管打我怎的、

[旦] 畜生、這話兒誰教你講的、[小] 這句話難道我也不會講

(秦雪梅) …まったく、今日お前を叩かないとまた甘えたことをするだろう。

(商輅) わたしはあなたが生んだ子供ではないのだから、叩いてどうするのですか。

(秦雪梅) まったく、誰がそんな事をお前に言わせたのか。

(商輅) この事を、まさかわたしが言うはずないとでも思ったのですか。

A群の富春堂本『商輅三元記』第二十六折の【紅芍薬】では、秦雪梅が自分の教育の不甲斐なさを嘆くだけの内容だったが、『玉谷新簧』に収められる「雪梅断機教子」では、富春堂本と同じ歌をうたった後で、富春堂本には無かった秦雪梅と商輅の会話のやりとりが追加される。秦雪梅が商輅に対して、打つ、打たないと責め立てると、売り言葉に買い言葉のように、商輅は「我不是你生的只管打我怎的（わたしはあなたが生んだ子ではないのに叩いてどうするののか）」と言い返して秦雪梅がショックを受けるという展開になり、そして続く【前腔】で、騒ぎを聞きつけた舅と姑に対して、秦雪梅は以下のように述べるのである。

B群『玉谷新簧』「雪梅断機教子」

【前腔】

[旦] 你媳婦、怎學得断機孟母、[外] 既不效他為着甚事、[旦] 為兒孫、背師遠遊、與學生、上長街打場戲毬、[外] 你在家中怎的曉得、[旦] 方纔張哥兒拿這個石頭趕上門來、口口聲聲要打這畜生也是媳婦陪個小心、方纔去了、到惹得小廝們登門罵辱、回時叫他背書、一字也忘了、我只打他幾下、以儆他下次了、誰想、這畜生出言大拗、[外] 他年紀小休要計較他罷、[旦] 公婆他人小心不小、說出的話兒、激得奴難忍、罵奴不是他親生嫡母、[外] 為何將此機頭斷了…

(秦雪梅) わたしがどうして孟母断機の真似ができましたよう

(舅) 孟母に倣うのでないなら何のためだね。

(秦雪梅) あなたの孫は、先生に背いて遠くへ遊びに出かけ、学生たちと街へ繰り出し毬遊びをしました。

(舅) 家に居たのに何故分かったのだ。

(秦雪梅) 今しがた張哥兒がこの石を手に家の門までやって来て、口々にこの商輅を叩きのめすと言うのを何とかなだめて、先ほど帰ったばかりです。

(秦雪梅ウタ) 子供たちが家にまで来て侮辱をし、

(秦雪梅) 商輅が帰って来たので学んだことを暗唱させてみたら、一字たりとも覚えていません、わたしはただ、今後の戒めにと何度か叩いただけなのに、思いのほか、この子とはんでもない口ごたえを、

(舅) 商輅はまだ幼いから、とやかく気にははいけないよ。

(秦雪梅) お義父さま、お義母さま、商輅は歳は子供でも心は子供ではありません。先ほどの言葉は、忍び難いほどの怒りを覚えました。

(秦雪梅ウタ) わたしが彼の生みの母親ではないと罵ったのです。

(舅) なぜ、この機を断ったのか。

ここで、秦雪梅による、「(商輅) 罵奴不是他親生嫡母 (商輅がわたしを生みの母親ではないと罵った)」という言葉が登場する。

ちなみに、弋陽腔系散齣集のうち B 群に挙げたその他のテキストを見てみると、【表 4】B 群『歌林拾翠』「断機教子」では、「[旦] 莫說傍人就是老公婆這孫子也曾道來、道奴不是他親生嫡母 (周りの人は言うまでもなく、お義父さま、お義母さま、あなたの孫までもこう言ったのです。わたしが彼の生みの母親ではないと)」と述べ、富春堂本の「又恐傍人道、奴不是親生嫡母 (周りの人はわたしが生みの母親ではないと言うでしょう)」の「傍人道」というニュアンスを少し残しつつ、商輅が秦雪梅に浴びせた罵言として描く。また、【表 5】B 群『樂府歌舞台』「断機教子」では、「[旦] 他罵奴不是他親生嫡母 (商輅はわたしが生みの母親ではないと罵った)」とあり、【表 3】B 群『玉谷新簧』とほぼ同じである。このように、B 群のテキストは、一律「商輅が秦雪梅を生みの母親ではないと罵った」という内容で伝わっていた。

一方、A 群に属すテキストについて言うと、【表 3】の富春堂本、『大明天下春』では「又恐傍人道、奴不是親生嫡母 (周りの人はわたしが生みの母親ではないと言うでしょう)」とするが、【表 5】A+B 群『樂府紅珊』「秦雪梅断機教子」は少し異なる。一見したところ、ほとんど A 群の富春堂本を踏襲し、新たなセリフなどは一切挿入されていないのだが、唯一、【前腔】の「又恐傍人道… (また周りの人はこう言うでしょう…)」のセリフを、「他到說得好呵 (商輅はなんとこう言ったのです)」という文言に置き換えて、「他到說得好呵、道奴不是他親生嫡母 (商輅はなんとこう言ったのです、わたしが彼の本当の生みの親じゃないと)」とし、商輅が「奴不是他親生嫡母 (あなたは生みの母親ではない)」と述べたという展開に改編した。ここからも、「断機教子」の場面で広く流布した物語展開は、商輅が育ての母親である秦雪梅に対して、生みの母親ではないと罵り、それを聞いた秦雪梅が悲憤して織かけの機を断つという内容であったことが分かる。この場面は弋陽腔系諸腔で演じられながら各地へ広まり、そして、清の李光地が福建で観た芝居のセリフ「他又說我不是他的親生母」へと繋がっていくのである。

(c) 高腔

明代に勃興した弋陽腔や青陽腔は、更に数百年の変遷の中で各地の民間音楽と結びついて高腔を生む。清代における地方劇の発展史を以下に述べると、

…崑山腔と弋陽諸腔劇盛行の後を継いで、18世紀初めから19世紀なかばまで民間地方劇の興起と盛行の時期となる。明末からの弋陽諸腔の民間での流布、発展を受け継ぎ、崑山腔の芸術成果をも吸収して既存の戯曲形式を革新して創造を加えたもので、伝奇のメロディーの異なる曲を連ねる(曲牌連套)形式を突破した、リズムの変化(板式変化)を主とする形式にその特徴がある。康熙年間(1662-1722)後期以来、全国各地に新興の地方劇である「乱弾」諸腔が出現する。商品経済の発展に伴い各地の商人組織が大・中都市につくった地域・業種別の会館が、地方劇団の職業公演の重要な方式の一つとなった。

ついで乾隆年間(1736-1795)末葉から、この「花部」乱弾諸腔と士大夫層が正統とする「雅部」崑曲の激しい競争の局面となり、北京の劇壇で前後して高腔、秦腔、徽調が雅部と覇を競う。北京でのこれら花部の勝利は全国の形勢に影響を与え、各地の地方劇種の発展のなかで五大声腔系統が形成された。とりわけ梆子、皮簧両系統がもっとも発達して、崑山腔と主導地位を交替し、乱弾優勢、戯曲芸術のよりいっそうの大衆化、豊富多彩化の状況をつくりだした。そして嘉慶・道光年間(1796~1850)、各声腔の交流と合流によって各地に相次いで新しい総合性の大型劇種が形成されていく…¹⁶

また、清の乾隆年間には崑曲(「雅部」)が次第に衰微し、それに伴い、高腔(弋陽腔)、梆子腔、二簧調など崑曲以外の各地方劇(「花部」)が隆盛し、全国的に勢力を拡大していく。「秦雪梅」故事も崑曲や高腔で演じられ、清の車王府蔵曲本には、崑曲の『伴讀』、高腔では『掛帛』、『伴讀』、『断機教子』、『三元記』のテキストが残されている。

以下、『商輅三元記』や弋陽腔系散齣集の内容と比較するため、高腔『断機教子』の場面から、同じく【紅芍藥】と【前腔】の該当箇所を見てみたい。

【紅芍藥】

[旦白]畜生我将好言教訓与他、他反来挺撞与我、我不打他幾下慣了下次[唱]今日里不急流(即溜)、異日里焉能成就、焉能成就[打介][生撒頗哭介白]住了罷、你又不是我親娘打我怎麼、要打你自己生一個養一個、打好沒來由哇、[旦白]□此話但不知那個對你講的…¹⁷

(秦雪梅セリフ)お前に良く言って教え諭そうとしても、わたしに反抗するんだね。何回か打たないとまた甘えたことをするだろう。(ウタ)今きちんとしておかないと、他日どうして学業が成就するだろうか、どうして成就するだろうか。(叩くしぐさ)
(商輅、泣きわめくしぐさ、セリフ) やめてください、あなたは私の生みの親でも

¹⁶ 『日本大百科全書』15(小学館、1994) p. 448

¹⁷ 高腔『断機教子』(『清蒙古車王府蔵曲本』所収)

ないのに打ってどうするのです。自分で生んで育てて打てばいいじゃないか。(秦雪梅セリフ) 誰がそんな話をお前に教えたのか。…

【前腔】

[旦唱] 媳婦兒怎學得斷機孟母、為輅背師遠遊上長街與學生們打場戲毬、[丑白] 吓媳婦你怎麼知道他在外面打戲毬貪玩耍、你有隔山照順風耳不成麼 [旦白] 婆婆言之有理、媳婦在家那里知道、方才有一蔡家學生手拿石趕上門來、口口聲聲、只要打死這畜生、[丑白] 這是誰家的孩子小子把你奶奶領了他們家裡去、我就合他爹並了骨咧、[生白] 不用胡說了、[旦白] 輅兒回來教他背書背又背不出、打了幾下以戒下次、[唱] 誰想他出言誣撞 [丑外全白] 孫兒小你擔待些罷 [旦白] 婆婆說那裡話來 [唱] 你道人小、心不小、說出來的話兒如山倒了麼他還說得我好 [外丑全白] 他說什麼來 [旦唱] 他道我不是親生母…

(秦雪梅ウタ) わたしがどうして孟母断機の教えを会得できましようか、商輅は先生に背いて遠くへ遊びに出かけ、学生たちと街へ繰り出し毬遊び、(姑セリフ) ええ、どうしてこの子が外で毬遊びに耽っていたのを知っているのか、お前は千里眼に早耳の持ち主かい。(秦雪梅セリフ) お義母さまの言う事はごもつとも、わたしが家で知ったのは、先ほど蔡家の学生が石を手に家の門まで来て、口々にこの子を叩きのめしてやると言いました。(姑セリフ) どこの家の子供かね。わたしをそいつの家に連れて行っておくれ。そこの父親をとっちめてやるから。(商輅セリフ) でたらめを言わないで。(秦雪梅セリフ) 商輅が帰って来たので書物を誦んじさせてみたところ、出来ないのです。わたしは数回打って次にこのようなことが無いよう戒めました。(ウタ) この子が嘘をつくなんて誰が思うのでしょうか。(舅姑セリフ) 商輅はまだ幼いから大目にみておやり。(秦雪梅セリフ) お義母さま何をおっしゃいますか。(ウタ) 幼いとおっしゃいましたが、心は幼くありません、彼は山が倒れるほど驚くことをわたしに言いました。(舅姑セリフ) この子が何と言ったのか。(秦雪梅ウタ) わたしが生みの母親ではないと言ったのです。…

セリフや曲辞の文言に若干の異同は見られるが、高腔『断機教子』は、ほぼ弋陽腔系散齣集の諸テキストの内容を踏襲していることが分かる。その他、高腔『掛帛』、『伴読』、『三元記』のテキストも、「断機教子」と同様、基本的に弋陽腔系散齣集の内容を継承したものとなっており、現存する諸テキストを通して、地方劇の発展史を再現的に確認することができる。

1.3. 清雜劇『三元報』

「秦雪梅」故事が弋陽腔系の発展と共に民間に広まる中、清の雍正、乾隆年間の戯曲家である唐英（1682-1758）によって、新たに『三元報』雜劇が編まれた。作者の唐英は、字は俊公、号は蝸寄先生といい、奉天（現在の瀋陽）の人で、長年、江西省の景德鎮や九江などの地で宮廷督陶を勤め、乾隆七年（1742）から乾隆二十年（1755）までに、『三元報』を含む十七の演目を創作、改編にたずさわった人物である。

また、唐英が戯曲創作に従事した乾隆年間、伝奇特有の長篇というスタイルが観客の要求と合わなくなり、長篇劇の退屈な場面を削除したハイライトを中心とする一幕劇が流行した。また、一幕劇の流行でバラバラになった物語をいくつか繋ぎ合わせて、ダイジェストではあるが芝居の全景を保つようにする演出も行われた。唐英もその風潮の影響を受け、作品はほとんどが十齣以下、場合によっては一齣劇も創作した¹⁸。

彼の編んだ『三元報』雑劇も、物語の大本である明の南戯伝奇『商輅三元記』は、全三十六折から成る長篇伝奇であり、明末から清代にかけて、弋陽腔系諸腔では「雪梅観画」、「雪梅吊孝」、「賀生商輅」、「断機教子」などの散齣が盛んに演じられて南中国を中心に広く流布し、更には高腔でも演じられたが、それらの散齣の中から唐英は、第一齣「驚訃」、第二齣「吊孝」、第三齣「断機」、第四齣「榮帰」の場面を取り上げて、全四齣から成る芝居に編み直した。

第一齣「驚訃」は、秦雪梅が婚約者の商文佑（南戯伝奇、弋陽腔系諸腔のテキストでは商霖にあたる）の訃報を聞く場面である。第一齣の冒頭で既に商文佑は重病を患っており、南戯伝奇や弋陽腔系散齣で描かれる、商霖が秦家で秦雪梅を見かけ、その美しさに恋煩いになり病床に臥す等の件は全て割愛されている。

第二齣「吊孝」では、訃報を聞いた秦雪梅が商家にお悔みに行き、下女の愛玉が遺児を宿していることを知り、愛玉と姉妹の契りを結び、商家に入り機を織って生計を立て、子供を共に育てることを誓う場面である。

第三齣「断機」は、先ほど、伝奇や弋陽腔系散齣集の諸テキストの文言を取り上げて比較した「断機教子」の場面に該当する。『三元報』雑劇も物語の展開は変わらず、ある日、商輅が学問を怠ったことを知り、激憤した秦雪梅は、帰宅した商輅を責めて打つ。すると商輅は、「大娘你既愛打人何不自己生一箇打、却把別人的孩兒如此狠打、你心裏忍得過麼（おばさん、そんなに人を打つのが好きなら、何で自分の子を生んで打たないのか。他人の子供をこのように激しく打って、あなたは平気なのですか）」という言葉に浴びせる。その発言にショックを受けた秦雪梅は、「哦你道你不是我親生的不該打你麼（ああ、おまえは、わたしが生んだ子ではないから打つべきではないと言うのか）」と泣き崩れる。

「断機教子」の場面は、弋陽腔系諸腔で広まって以降、秦雪梅が生母か否かという複雑な親子関係に焦点が当てられ、商輅と秦雪梅、舅と姑のセリフの応酬が増えて、彼らの激しい心のぶつかり合いが丁寧に描かれるようになる。そして、次齣の三元及第へと続くことも、人々から歓迎された演目となった要因のひとつではないかと思われる。

第四齣「榮帰」は、一念発起した商輅が三元及第し、故郷に錦を飾る場面である。

『三元報』雑劇の各齣は、それまで広く流布していた弋陽腔系散齣集の内容と、基本的に物語の設定や構成は変わらないが、劇中で使用される曲牌や、曲辞、セリフの文言は殆ど全面的に改変され、弋陽腔系の流れを継ぐものとは異なる、新たな芝居として書き起こされた作品であった。また同時に、新たな「秦雪梅」故事の流布系統のひとつにもなった。

¹⁸ 李静「唐英戯曲創作在芸術形式上的創新」『湖北大学学报』（哲学社会科学版）第28卷第5期（2001）：pp. 45-48 参照。本論で使用した『三元報』雑劇のテキストは『続修四庫全書』所収『燈月閒情』（清嘉慶間古柏堂刻本）に収録されるものである。

2. 地方劇における「秦雪梅」故事の流布

時代は更に下り、各地方劇においても「秦雪梅」故事は盛んに演じられた。現在、目録等で確認できる地方劇の演目には主に以下の種類がある。全幕通し、折子戯、清代或いは民国期の刻本、抄本なども残されているが、現行の地方劇や演目は、殆どが改革解放後に改めて編み直されたものが多い。

梆子腔『秦雪梅観文』¹⁹、『秦雪梅弔孝』²⁰、『秦雪梅上墳』²¹、『秦雪梅做梦』²²

河北二呼嚕『秦雪梅弔孝』²³

河北梆子『雙弔孝』²⁴

秦腔『秦雪梅観文』、『雪梅弔孝』、『秦雪梅教子』²⁵

蒲劇（山西）『大娘教子』²⁶

豫劇『観文』、『訓女』、『別府』、『弔孝』²⁷

越劇（浙江・上海）『秦雪梅弔孝』²⁸

揚劇（江蘇・揚州）『秦雪梅弔孝』²⁹

婺劇（浙江・金華）『三元坊』³⁰

新昌高腔（江蘇・紹興）、皮影戯『雪梅教子』³¹

常錫戯（江蘇）『秦雪梅』³²

黄梅戯（安徽）『秦雪梅』³³

廬劇（安徽）『三元記』³⁴、『観画』、『書房會』、『遊園』

倒七戯（安徽）『秦雪梅弔孝』³⁵

¹⁹ 王森然遺稿『中国劇目辞典』（河北教育出版社、1997）p. 508によると、陝西省城南院「義興堂書局本」第三十六冊に記載がある。

²⁰ 注 19 前掲書『中国劇目辞典』p. 507によると陝西省城南院「義興堂書局」本第三十八冊に記載がある。北京学古堂排印本（早稲田大学風陵文庫、台湾中央研究院傅斯年図書館蔵）

²¹ 注 19 前掲書『中国劇目辞典』p. 508によると陝西省城南院門「義興堂書局」本第二十九冊に記載がある。

²² 注 19 前掲書『中国劇目辞典』p. 508によると陝西省城南院「義興堂書局」本第三十八冊に記載がある。

²³ 注 19 前掲書『中国劇目辞典』p. 507によると『河北戯曲資料滙編』第二十輯にある。

²⁴ 北京学古堂排印本（早稲田大学風陵文庫蔵）

²⁵ 注 19 前掲書『中国劇目辞典』pp. 507-508によると、清代大荔「三友書局」本、民国西安「徳華書局」刊本、陝西省芸術研究所蔵張隆玉口述抄録本があるという。

²⁶ 譚正璧・譚尋『弾詞叙録』（上海古籍出版社、1981）pp. 38-39 参照

²⁷ 中央人民広播電台文芸部戯曲組編『豫劇小戯考』（上海：上海文芸出版社、1987）

²⁸ 注 26 前掲書『弾詞叙録』pp. 38-39 参照。

²⁹ 注 26 前掲書『弾詞叙録』pp. 38-39 参照。

³⁰ 注 26 前掲書『弾詞叙録』pp. 38-39 参照。

³¹ 注 26 前掲書『弾詞叙録』pp. 38-39 参照。

³² 注 26 前掲書『弾詞叙録』pp. 38-39 参照。

³³ 注 26 前掲書『弾詞叙録』pp. 38-39 参照。

³⁴ 注 26 前掲書『弾詞叙録』pp. 38-39 参照、注 19 前掲書『中国劇目辞典』p. 36によると『安徽伝統劇目滙編・廬劇』第一集所収王業明口述本がある。

³⁵ 注 26 前掲書『弾詞叙録』pp. 38-39 参照。

呂戲、皖南花鼓戲（安徽）『秦雪梅觀画』³⁶

梨園戲、莆仙劇（福建）『商輅』³⁷

潮劇（広東・福建）『秦雪梅』³⁸

川劇（四川）『中三元』³⁹

桂劇（広西）『雪梅吊孝』⁴⁰、『雪梅教子』⁴¹

【湖南地域のもの】⁴²

湘劇『雪梅教子』

祁劇『秦雪梅』（整本）、『雪梅吊孝』、『雪梅教子』

辰河戲『秦雪梅』（整本）、『雪梅教子』

衡陽湘劇『雪梅吊孝』、『雪梅教子』

武陵戲『秦雪梅』（整本）、『雪梅吊孝』、『雪梅教子』

荊河戲『秦雪梅』（整本）、『雪梅吊孝』、『雪梅教子』

花鼓戲（長沙、邵陽、常德、岳陽）『觀画游楼』、『雪梅吊孝』、『雪梅教子』

花鼓戲（長沙）『張仙送子』

これら各地方劇で流布した演目名は、弋陽腔系で流布したものと同じであるが、各演目の梗概を目録等で確認すると、弋陽腔系で流布した内容と大きく異なるものがある。それは、椰子腔『秦雪梅做觀文』、皖南花鼓戲『秦雪梅觀画』、豫劇『觀文』など、秦雪梅が商霖の書いた文章をこっそり読んで感激する場面である。

この「觀文」、「觀画」の場面は、明の南戲伝奇『商輅三元記』では第九折に該当し、更に、弋陽腔系演劇でも散齣として独立して演じられ、散齣集にも多く収められた。『歌林拾翠』所収の「雪梅觀画」、『樂府青華』所収の「秦雪梅觀画」、『玉谷新簧』所収の「雪梅觀画有感」、『時調青崑』所収の「書館觀画」、『大明天下春』所収の「雪梅觀画」が、テキストとして現存する。また、テキスト自体は散逸したが、その他の散齣集『樂府歌舞台』、『玉樹英』、『萬象新』には、目次に演目名が残されており、「秦雪梅」故事の中でもよく演じられた人気の場面であったことが分かる。これらの散齣集に収められた内容は、南戲伝奇『商輅三元記』をほぼ踏襲したものとなっている。

以下にあらすじを挙げると、

³⁶ 注 26 前掲書『弾詞叙録』 pp. 38-39 参照。皖南花鼓戲については、注 19 前掲書『中国劇目辞典』 p. 508 によると、『安徽省伝統劇目滙編・皖南花鼓戲』第六集所収傅安華口述本があるという。

³⁷ 注 26 前掲書『弾詞叙録』 pp. 38-39 参照。

³⁸ 林淳鈞、陳歷明編『潮劇劇目滙考』（広州：広東人民出版社、1999）

³⁹ 注 26 前掲書『弾詞叙録』 pp. 38-39 参照。

⁴⁰ 注 19 前掲書『中国劇目辞典』 p. 606 によると、『桂劇伝統劇目紹介』に記載があるという。

⁴¹ 注 19 前掲書『中国劇目辞典』 p. 606 によると、『広西伝統劇目滙編』第六十集所収本があるという。

⁴² 湖南省戯曲研究所編、李恕基責任編輯『湖南地方劇種誌（五）下：長沙市花鼓戲誌』所収「湖南地方大戯劇種伝統劇目表」、「花鼓戲、陽戲伝統劇目表」に記載あり。

秦府に挨拶に訪れた商霖は、秦徹（婚約者である秦雪梅の父）から四季画に詩を作るよう言われ、出来た作品は立派なものだった。秦雪梅はこっそり商霖の詩を見て、その素晴らしさに感激する。科挙試験に良い成績で合格するに違いないと確信し、未だ逢えないことを嘆く。

商霖の詩をこっそり見た秦雪梅は、彼の才能の豊かさを知り、逢いたい想いを募らせるが、この段階では、二人はまだ直接顔を合わせていない。ところが、後世に地方劇で広く演じられた「観文」、「観画」の場面は、伝奇や弋陽腔系演劇とは異なり、以下のような展開になる。各目録で紹介される演目の概容をいくつか挙げると、

梆子腔『秦雪梅做観文』

商琳と秦雪梅は幼い頃から婚約関係にあった。ある日、商琳が外出している際に、雪梅は下女と彼の書斎に忍び込み文章を読む。先に劣悪な文章を見て落胆していたが、後から優れた文章が沢山出て来たので喜び、声高に朗読していると、ちょうど商琳が戻って来る。商琳はその場で結ばれることを願ったが、雪梅は拒絶して去った。⁴³

皖南花鼓戲『秦雪梅観畫』

秦雪梅が未婚の夫の商林の書斎で絵を見ていると、ちょうど商林が戻って来て、二人は顔を合わせる。⁴⁴

豫劇『秦雪梅』

ある日、秦雪梅は悪夢を見た後、こっそり書斎で商林の文章を見ていると、商林に出くわし、泊まるように請われるが、下女に助けられる。⁴⁵

いずれも、商琳（林）が未婚の身のまま秦府に書斎を持ち、勉強をしているという設定になっている。明伝奇や弋陽腔系散齣の演目では、商霖は秦府へ挨拶に訪れた際に、請われて文章を作っただけで、秦府に書斎があるわけでもなく、秦雪梅と出くわすこともない。「観文」、「観画」の場面でもこのように内容に大きな変化があり、しかも改変後の内容の方が寧ろ一般的となり、各地方劇でも演じられている。

ここから、明清期に南戲伝奇や弋陽腔系演劇で広まった「秦雪梅」故事は、その流布の過程で、新たな「秦雪梅」故事を生み、またその新興勢力は、古い層の物語に取って代わるだけの、確固たる支持基盤を以て全国に広まり各地に根付き、各地の地方劇で演じられる内容も、新しい「秦雪梅」故事のストーリーに拠るようになった。つまり、新たな「秦

⁴³ 原文は以下のとおり。「演商琳與秦雪梅自幼訂婚。一日、商琳外出游春、雪梅趁機與婢潛入其書齋觀其所作文字。先見劣文，大為灰心；後見佳文甚多，乃反悲為喜，高聲朗誦。適商琳歸、乃強與合歡、雪梅不從、竟去。」（注19前掲書『中国劇目辞典』p.508）

⁴⁴ 原文は以下のとおり。「演秦雪梅往未婚夫商林書房中觀畫、適商林回房、二人相見。」（注19前掲書『中国劇目辞典』p.508）

⁴⁵ 原文は以下のとおり。「…一日、雪梅夜做惡夢後、私至書館觀商之書文、被商林闖見、欲留宿、為Y環解圍。…」（芸生（執筆）、文灿、李斌『豫劇伝統劇目滙釋』黄河文芸出版社、1986、p.390）

雪梅」故事の流布と定着の背景に、弋陽腔系演劇による古い層の伝承系統とは異なる、もうひとつの大きな新たな層の伝承系統があったと推察される。

3. 清末民初の説唱文芸における「秦雪梅」故事の流行

その新たな層の伝承系統として浮かび上がるのが、清末民初に隆盛した説唱文芸である。語りもの芸能である説唱は、小説や戯曲などと同じように、物語の伝承媒体のひとつとして明清期に各地で次第に発展し、更には出版活動と結びついて、文字テキストも出版されて流通した。各地域の民間説唱文芸、例えば北方の鼓詞、子弟書、江南地方の宝卷、弾詞、福建、広東を中心とする木魚書、潮州歌、閩南歌仔などは、地域ごとに活発に行われていた出版活動を伴い、それぞれのスタイルを確立して流行した。出版時期は、江南の弾詞が早くて清の嘉慶年間（1796-1820）辺りから、北方の鼓詞は乾隆（1711-1799）から同治（1862-1874）年間にかけて盛り上がりを見せ、その他の地域の説唱本は、やや遅れて清末から民国期にかけてピークを迎える。

「秦雪梅」故事も、各種説唱文芸において、整本（全幕通し）、一幕劇、全体のあらすじを略述するものなどが上演され、同時に文字テキストである説唱本が出版され、印刷技術の展開と変遷により、木刻本、鉛印本、排印本、上海では石印本が出版された。

現在、各地の図書館に所蔵される、或いは目録等で確認できる「秦雪梅」故事の説唱本には、以下の種類がある。

まず、説唱ジャンルが明確で、テキストが現存するものに、大鼓書『秦雪梅吊孝』⁴⁶、子弟書『雪梅弔孝』⁴⁷、『掛帛』⁴⁸、『商郎回熬』⁴⁹、馬頭調『掛帛』⁵⁰、弾詞『断機教子三元全伝』⁵¹、宝卷『絵図秦雪梅三元記宝卷』⁵²、『増像秦雪梅宝卷』⁵³、潮州歌『新造秦雪梅歌』⁵⁴、木魚書『節義伝芳雪梅傳』⁵⁵、『断子教子』⁵⁶、閩南歌仔『新刻断機教商略全歌』⁵⁷、『雪梅思君歌』⁵⁸、『新編愛玉歌』⁵⁹などがある。

⁴⁶ 北京：寶文堂刻本（国家図書館、中央研究院傅斯年図書館、早稲田大学風陵文庫蔵）

⁴⁷ 清抄本（『清蒙古車王府蔵曲本』所収）

⁴⁸ 清抄本（『清蒙古車王府蔵曲本』所収）

⁴⁹ 清抄本（『清蒙古車王府蔵曲本』所収）

⁵⁰ 劉復・李家瑞等編『中国俗曲叢目稿』下冊（中央研究院歴史語言研究所、1932.5 初版、1993.2 重版）p.1013

⁵¹ 注26 前掲書『弾詞叙録』pp.38-39

⁵² 上海：惜陰書局石印本（早稲田大学風陵文庫蔵）

⁵³ 廣記書局石印本（浙江図書館蔵）

⁵⁴ 潮城：王生記刻本（復旦大学古籍所、早稲田大学演劇博物館蔵、及び『潮州歌冊卷』（北京：北京図書館出版社、2002）第47冊所収）潮州：李萬記刻本（早稲田大学演劇博物館蔵）潮安刻本（上海図書館蔵）がある。いずれも封面は『秦雪梅全歌』と記される。

⁵⁵ 広州：五桂堂（香港大学亜州研究中心、天理図書館蔵）、金文京・稲葉明子・渡辺浩司編著『木魚書目録』（好文出版、1995）によると中山大学民俗週刊にも所収される。

⁵⁶ 佛山：瑞雲樓板（順徳県図書館蔵、據『木魚書目録』）

⁵⁷ 刻本（中央研究院傅斯年図書館蔵）

⁵⁸ 厦門：會文堂石印本（中央研究院傅斯年図書館蔵）、竹林書局石印本（中央研究院傅斯年図書館蔵）、民国46年（1957）文林出版社（中央研究院傅斯年図書館蔵）

⁵⁹ 厦門：民国22年（1933）博文齋刻本（中央研究院傅斯年図書館蔵）

大鼓書『秦雪梅吊孝』は、「秦雪梅」故事の全体のあらすじを簡単に述べる形式をとり、子弟書、馬頭調、木魚書『断子教子』、閩南歌仔の各演目は、それぞれ単独の場面を描くものである。弾詞、宝卷、潮州歌、木魚書『節義伝芳雪梅傳』は、いずれも全幕通しの長編作品で、それぞれ「断機教子」などの基本的なモチーフを踏まえつつ、ストーリーは創作性豊かに展開する。このように各地で各説唱ジャンル独自の「秦雪梅」故事が編まれ、流布していたことが窺える。

その他に、テキストの形式や字句をほぼ同じくする、「秦雪梅」故事の全幕通しの説唱本が多数発見された。しかもこれらは、ひとつの地域だけでなく、各地でほぼ同一のテキストが出版されており、限定的な地域で流布した大鼓書、子弟書、弾詞、宝卷などの特定の説唱文芸とは一線を画して、地域性の高い流通をしており、物語の流布に大きな影響を与えたのではないかと推察される。次に挙げる説唱本『秦雪梅三元記』がそれである。

3.1. 説唱本『秦雪梅三元記』の流通

「秦雪梅」故事に関する説唱本のうち、以下に挙げるテキストは、全て類似の版本形式を採り、物語の内容、構成、文言もほぼ同じくするものである。本論では、【表 6】1～17のテキストを総じて「説唱本『秦雪梅三元記』系列」と称す。

【表 6】

	書名	封面題	刊記	所蔵・所収
1	新刻秦雪梅三元記全部 (六卷本)	繡像三元記/新抄/秦雪梅旌節傳 /三百五十冊/中湘九總黃三元堂	中湘:九總黃三元 堂刻本	湖南、復旦、上図 ×3部、浙図
2	新刻秦雪梅三元記 (六卷本)	三元記/上卷/新刻/秦雪梅旌節 傳/百冊/星沙小西門外□□碼頭 左三元堂發客	星沙:左三元堂刻 本	中山
3	新刻秦雪梅三元記全部 (六卷本)	繡像三元記/新刻/秦雪梅教子/ 七百□/洪江豐泰新堂書文發客	洪江:豐泰新堂刻 本	上図
4	秦雪梅三元記全部 (六卷本)	繡像三元記/新刻/秦雪梅斷機教 子/壹百冊/武昌省保安門内廣發 堂發兌	武昌:廣發堂刻本	復旦
5	新刻秦雪梅三元記全部 (六卷本)	繪圖秦雪梅吊孝三元記	桂林:全文堂刻本	上図
6	新刻秦雪梅三元記全部 (六卷本、附繡像)	三元記全集/秦雪梅守節教子中 三元/繡像/辛丑年福興堂梓行	清光緒辛丑年 (1901)福興堂刻本	傅斯年
7	新刻三元記全部 (六卷本)	新刻三元記全部/□□堂	刻本	傅斯年
8	新刻秦雪梅三元記全部 (六卷本)	繡像三元記/新刻/秦雪梅教子全 集	刻本	上図
9	三元記 (上中下集)	三元記上集	刻本	上図
10	三元記		四川刻本	『中国俗曲総目』
11	三元記		河南刻本	『中国俗曲総目』
12	新刻秦雪梅三元記全部 (十二卷本)		漢口:漢賢堂刻本	浙図
13	新抄秦雪梅三元記全部 (残欠)		抄本	川浩二氏私蔵(安 徽省屯溪で購入)
14	新刻秦雪梅三元記全部 (十二卷本)	(中扉)新出秦雪梅吊孝三元記	石印本	復旦×2部
15	繡像説唱秦雪梅三元記	(中扉)繡像秦雪梅三元記/上海 鑄記書局印行	上海:鑄記書局石 印本	上図
16	新刻秦雪梅三元記全部 (十二卷本)		上海:昌文書局石 印本	国図
17	新刻秦雪梅三元記全部 (十二卷本)		石印本	浙図

なお、本文中に【表】で取り上げた説唱本の書影を用いる際、書影に付す番号は、全て【表】中のテキストに付した番号と連動させる。例えば【表6】1の書影には「図【表6】1」と付す。

【表6】1～17のテキストのうち、10、11は『中国俗曲総目稿』⁶⁰を確認したのみで実物は見ていないが、同書に付記される各テキストの冒頭の文言から、同一テキストであると判断した。また、これらのテキストは、各図書館によって分類法がまちまちで、「弾詞」、「鼓詞」、もしくは大きく「説唱」に分類されたりしており、明確な説唱ジャンルは無い。いずれのテキストも、下に挙げた図【表6】1のように、『西江月』の導入詞の後に、七字、十字句の韻文と、「説話～」で介入する散文の叙述を交互に挟む説唱形式を以て物語が展開する。



図【表6】1 『新刻秦雪梅三元記全部』中湘：九總黃三元堂刻本
挿図1b、本文1a/1b、2a

出版地は、湖南の中湘（湘潭）、洪江、湖北の武昌、漢口、広西の桂林、四川、河南など、湖南を中心に点在し、地域、厳密な説唱ジャンルを問わない、「説唱形式を借りた読み物」として広く流通した説唱本だったと考えられる。

【表6】1の黄三元堂刻本、2星沙の左三元堂刻本、3洪江の豊泰新刻本、4武昌の廣發堂刻本の封面には、それぞれ「三百五十、百、七百、壹百冊」という印刷数と思しき数字が記されている。その他のテキストの封面には印刷数が書かれていないので、正確な出版量は把握できないが、説唱本『秦雪梅三元記』系列のテキストは、湖南や湖北では相当数が印刷され、流通していたと言えるだろう。

また、六巻本と十二巻本があるが、十二巻本は六巻をより細かく分けただけであり、内容が増加した等の変化は全く無い。印刷形態は木刻本が主だが、時代が下り、上海で石版印刷が隆盛するようになると、木刻本の『秦雪梅三元記』はそのまま翻印されて石印本と

⁶⁰ 中央研究院歴史語言研究所、1932.5 初版、1993.2 重版。四川刻本、河南刻本ともに p. 81 に記載される。

しても出版された（【表 6】14～17）。このように同じ形式、同じ内容を持つテキストが、刻本、抄本、石印本と出版形態を変えて各地に流通したことは、説唱本『秦雪梅三元記』系列の物語が、それ以前の演劇作品とは別に、新たな「秦雪梅」故事として確固たる地位を築いていたことを物語る。人気作品として版木が流通し、各地で盛んに出版され、そして説唱本『秦雪梅三元記』系列は、「秦雪梅」故事の広範な流布を支える新たな基盤になっていったと考えられる。

3.2. 弋陽腔系演劇と説唱本『秦雪梅三元記』の内容比較

では、説唱本『秦雪梅三元記』系列を以て流布した新たな「秦雪梅」故事は、従来の弋陽腔系演劇で伝承した内容と、どのような相違があるのだろうか。

主な場面と物語内容を比較したものを以下に挙げ、併せて地方劇の内容がどちらの系統を継ぐのかも示した。弋陽腔系の内容を継承する場合は「○」、説唱本『秦雪梅三元記』系列の内容を継承する場合は「●」、該当する場面が無い場合は「×」で表した。

【表 7】

場面	南戲伝奇『商賈三元記』 弋陽腔系演劇系	説唱本『秦雪梅三元記』系列	地方劇
	西浙の商瓊の息子商霖と、嚴州淳安縣の進士秦徹の娘秦雪梅は婚約関係にあった。秦徹が病により太師の職を辞し帰郷したので、商霖は大羊を携え秦府へお見舞いに行く。	明の成化年間、杭州太平街の商定国の息子商琳と、秦国政の娘秦雪梅は婚約関係にあった。商家が天災により没落し、父は商琳を連れ、息子の世話を頼む。秦氏は没落した家との婚約を煙たがるが、秦夫人の取りなしで商琳は秦府に身を寄せ勉学に励む。	●
秦府賞春	秦雪梅と父母が連れ立って、庭の春景色を鑑賞する。	×	
雪梅観画	秦雪梅は商霖の書いた文章をこっそり見て感激する。逢えないことを嘆く	秦雪梅は下女の梅香と共に、商琳が留守の隙に書斎に忍び込む。彼が書いた文章を読み感嘆していると、商琳が戻って来る。商琳は雪梅を引き留め、一晚共にすることを迫るが、下女の取り成しで逃げる。次の夜、再び商琳は秦雪梅の部屋を訪ねるも拒絶される。	●
思婚病	秦雪梅を見かけた商霖は、帰宅後に相思病にかかる。	商琳は相思病に伏す。重症化してしまい、秦氏によって帰省させられる。	●
愛玉成婚	商霖は両親の勧めで下女の愛玉と結婚するが、祈祷の甲斐無く死去する。愛玉は商霖の遺児を宿す。	商琳の両親は、下女の愛玉を雪梅に扮装させ偽装結婚させる。商琳は喜んだが事実を知って悲憤し、病は益々重くなり死去。愛玉は遺児を宿す。	●
雪梅弔孝	秦氏は商家へお悔みに。秦雪梅も懇願して共に行く。商家を守り、商家の両親に仕え、遺児を育て、夫への守節を誓う。	商琳の訃報を聞き、秦氏は大喜び。雪梅は父の猛反対を押し切って商家へお悔みに行く。商家を守り、商家の両親に仕え、遺児を育て、夫への守節を誓う。	●

游地府	×	秦雪梅は商琳の棺の前で悲しみのあまり頭を打ち付け後を追う。冥界に商琳を尋ね、地獄巡りをする。そこで左金童から二人は天界の金童・玉女が下凡したもので、姻縁を全うするために三世にわたり（梁山伯と祝英台、郭華と王月英）転生したことを知らされ、また遺児の商輅は三元及第すると告げられる。	●
掛帛	清明節のお墓参り。牧童が現れ、商霖の墓の位置が風水的に悪いと指摘。	○	○
商輅誕生	湯餅會に秦夫人も商家を訪ねる。	商輅誕生（玉堂星の下凡）	
改嫁	×	秦雪梅の父母は三年の喪が満ちても戻らない雪梅を気に病む。母が重病であると騙って帰省させ、当年の科挙合格者の陶榮と再婚させようとするが、雪梅が相手を罵り破談に。	●
伴讀 商輅回熬	雪梅は終日商輅の勉強の面倒を見る。ある日、疲れて休んでいると夢に商霖が現れる。	×	○
断機教子	商輅が学問を怠り遊びに出かけて学友と悪さを働いたことを知り、雪梅は織りかけの機を断ち、厳しく戒める。心を入れ替えて商輅は学問に励む。	○	○
三元捷報	商輅は、郷試、会試、殿試に全て首席で合格する。	○	○

先ず、地方劇は、殆どが説唱本『秦雪梅三元記』系列で新たに編み直された内容を採用していたことが分かる。ただし、弋陽腔系演劇に描かれるが説唱本には無い『伴讀』の場面について言えば、北方を中心に梆子腔『秦雪梅做梦』、崑曲『伴讀』や、また説唱では子弟書に『商郎回熬』という演目があり、弋陽腔系演劇の古い層の内容を留めて伝えている。

また、弋陽腔系演劇系と説唱本『秦雪梅三元記』系列の間で大きく異なるのが、物語の時間と登場人物の境遇である。説唱本では明の成化年間、商霖の家が天災により没落したため、商琳（霖）は婚約関係にある秦家に身を寄せ、科挙試験に向けて勉学に励むという設定になる。先ほど挙げた地方劇的一幕劇、梆子戯や豫劇の『秦雪梅観画』において商琳が秦府に書齋をあてがわれている設定になっていたのは、これに因ることが分かる。

その『観画』の場面での秦雪梅と商琳のやりとりも、弋陽腔系演劇とは大きく異なり、商琳が病床に伏す原因が具体的に描かれている。自身が留守に書齋に忍び込んだ秦雪梅と、戻って来て鉢合わせした商琳は、嬉しさの余りその場で関係を迫るが、秦雪梅に拒絶されショックで相思病を患うという展開になる。

商琳の病を回復させるための厄払いに下女の愛玉と結婚させる場面も、弋陽腔系演劇とは異なり、説唱では商琳を喜ばせたい一心で両親が嘘をつき、愛玉を秦雪梅に扮装させる。地方劇も基本的に説唱本の内容を継承したが、廬劇『三元記』は少し異なり、商琳の両親が秦氏に秦雪梅との結婚を頼むと、秦雪梅の下女を秦雪梅に扮装させて寄越す展開になる。

中でも、説唱本『秦雪梅三元記』系列で特徴的なのが、弋陽腔系演劇には無い、新たに設けられた、「遊地府」すなわち秦雪梅が商琳の後を追って冥府へ行き、地獄めぐりをする場面と、「改嫁」すなわち秦雪梅の父親が娘を強制的に再婚させようとする場面である。これらも地方劇で採用された。蹦蹦戲『秦雪梅魂遊地府』は「游池府」の場面を単独で取り上げたものである。その他、淮戲『改良新纂秦雪梅十集』⁶¹は、説唱本『秦雪梅三元記』系列と歌詞は異なるが物語構成はほぼ同じであるため、説唱で新たに付加された「游地府」も「改嫁」の場面も全て描かれている。

また、説唱本『秦雪梅三元記』系列以外にも、説唱ジャンルが明確でない全幕通しの長編物、或いは物語をダイジェストで描いた説唱本に、『綉像三元記秦府攻書全本』（益陽：頭堡文元堂刻本）⁶²、『新刻三班鼓三元記』（常德：錦華堂刻本）⁶³、『秦雪梅吊孝』（湘潭：黄三元堂刻本）⁶⁴、『秦雪梅吊孝』（永州：文順堂刻本）⁶⁵、『秦雪梅吊孝』（民国乙亥（1935）年、成都：源盛堂刻本）⁶⁶、『秦雪梅三元記』（光緒三十年（1904）滇省榮煥堂刻本）⁶⁷や、『三元傳』（泰山堂刻本）⁶⁸、『秦雪梅吊孝三元記全本』（石印本）⁶⁹、『綉像三元記秦雪梅全傳』（上海椿蔭書莊石印本⁷⁰、民益書局石印本⁷¹）などがある。いずれも、版本形式や文言などはまちまちだが、説唱本『秦雪梅三元記』系列の内容を踏襲するため、説唱本『秦雪梅三元記』系列の流通によって流布した物語を軸に、個別に編まれたものだと考えられる。

以上の内容比較を通して、「秦雪梅」故事は、大きく二つの流布系統、ひとつが弋陽腔系演劇という古い層による伝承、もうひとつが説唱本という新しい層による伝承を以て、広く流布したことが明らかとなった。今一度、流布系統をまとめると以下のようなになる。

【弋陽腔系演劇系統】

○地方劇：崑曲『伴讀』

○説唱：子弟書『雪梅吊孝』、『掛帛』、『商郎回熬』

大鼓書（鼓詞）『秦雪梅吊孝』（※物語のあらすじを略述したもの）

⁶¹ 上海大達書局石印本（中央研究院傅斯年図書館蔵）

⁶² 湖南図書館蔵

⁶³ 湖南図書館蔵

⁶⁴ 復旦大学図書館、国家図書館、上海図書館、湖南図書館、浙江図書館、首都図書館蔵

⁶⁵ 上海図書館蔵

⁶⁶ 上海図書館蔵

⁶⁷ 中央研究院傅斯年図書館蔵

⁶⁸ 『中国俗曲総目稿』上冊（中央研究院歴史語言研究所、1932.5 初版、1993.2 重版）p. 32

⁶⁹ 上海図書館蔵

⁷⁰ 上海図書館蔵

⁷¹ 中央研究院傅斯年図書館蔵

【説唱本『秦雪梅三元記』系統】

○地方劇全般

○説唱：宝巻、木魚書など。その他説唱本：『綉像三元記秦府攻書全本』（益陽：頭堡文元堂刻本）、『新刻三班鼓三元記』（常德：錦華堂刻本）、『秦雪梅吊孝』（湘潭：黃三元堂刻本）、『秦雪梅吊孝』（永州：文順堂刻本）、『秦雪梅吊孝』（成都：源盛堂刻本）、『秦雪梅三元記』（滇省榮煥堂刻本）、『三元傳』（泰山堂刻本）、『秦雪梅吊孝三元記全本』（石印本）、『綉像三元記秦雪梅全傳』（上海：椿蔭書莊石印本）

【上記二系統以外】

○全幕通しの長編作品

弾詞『断機教子三元全伝』

（※「愛玉代嫁」、「断機教子」、「三元及第」のモチーフを留めるが、登場人物や物語の展開に大きな異同がある異色作。）

潮州歌『新造秦雪梅歌』

（※商輅の子孫にまで物語が展開する。）

○その他

閩南歌仔『新編愛玉歌』（※愛玉が亡き商琳を思って歌う）、『雪梅思君歌』（※秦雪梅が亡き商琳を思って歌う）、『新刻断機教商輅全歌』（※商輅が三元及第し、立派に育ったのを見届けた秦雪梅は夫の商琳を追って命を絶つ）

以上の「秦雪梅」故事に関する説唱本に対する網羅的な収集を通して明らかとなったのは、子弟書や大鼓書は、弋陽腔系演劇の古い層の「秦雪梅」故事を継承したが、地方劇やその他説唱ジャンルに影響を与え、全国的に広く流布した「秦雪梅」故事は、説唱本『秦雪梅三元記』系列のものであり、弾詞、潮州歌、閩南歌仔は、「秦雪梅」故事の従来のモチーフを踏まえつつ、独自の創作を展開して局地的に流行した、ということである。

その後、清の光緒後期から民国期にかけて上海で石印出版が隆盛すると、各地で行われていた木版印刷活動は衰微し、従来の小説、戯曲、説唱などのテキストも、全て上海に集約されて、上海石印本として大量に翻印されるようになる。このような背景のもと、説唱本『秦雪梅元記』の【表6】1～17のテキストも、【表6】14～17のように上海の複数の書肆で翻印されて石印本としても流通した。その他にも、上海の惜陰書局から石印出版された宝巻『絵図秦雪梅三元記宝巻』は、説唱本『秦雪梅三元記』系列の内容に沿って新たにリメイクした作品となっており、また『秦雪梅吊孝三元記全本』（石印本）や、『綉像三元記秦雪梅全傳』（上海：椿蔭書莊石印本）など、新たな説唱本も出版されたが、いずれも宝巻と同様に、説唱本『秦雪梅三元記』系列の内容を踏襲したものとなっている。

このように地域性の高い流布をみせ、後世まで最も広く影響を与えたと言える、説唱本『秦雪梅三元記』系統の「秦雪梅」故事は、どの地域が流行の中心となっていたのだろうか。以下に、説唱テキストの種類や、現存数、出版地などから考察していきたい。

3.3. 湖南における「秦雪梅」故事の流行

「秦雪梅」故事に関する説唱テキストのうち、出版地に着目すると、最も多く見られるのが湖南の地名であり、またそれらは現存数も多い。【表 8】は、湖南で出版された説唱本の一覧である。

【表 8】

	書名	封面題	刊記	所蔵・所収
1	新刻秦雪梅三元記全部 (六巻本)	繡像三元記/新抄/秦雪梅旌節傳/ 三百五十冊/中湘九總黃三元堂	湘潭:九總黃三元堂刻本	湖南、復旦、上図 ×3部、浙図
2	新刻秦雪梅三元記 (六巻本)	三元記/上巻/新刻/秦雪梅旌節傳/ 百冊/星沙小西門外□□碼頭左 三元堂發客	星沙:左三元堂 刻本	中山
3	新刻秦雪梅三元記全部 (六巻本)	繡像三元記/新刻/秦雪梅教子/七 百□/洪江豐泰新堂書文發客	洪江:豐泰新堂 刻本	上図
4	繡像三元記秦府攻書全	繡像三元記/断機教子三槌鼓調/ 八十冊/益陽頭堡文元堂歌書發販 不悞	益陽:文元堂刻 本	湖南
5	新刻三班鼓三元記	三元記全本/新刻/秦府攻書得病 歸家商林婦天 吊孝守節教子受屈 連中三元/九十冊/常德□街□錦 華堂歌書發客	常德:錦華堂刻 本	湖南
6	秦雪梅吊孝	秦雪梅吊孝/新刻/過門盡節/四本 /中湘九總黃三元堂發售	湘潭:黃三元堂 刻本	復旦、国図、上図、 湖南、浙図、首図 ×2部
7	秦雪梅吊孝	秦雪梅吊孝/文順堂/秦小姐靈前 結拜 玉堂星商門降生/五百折	永州:文順堂刻 本	上図

刊記をみると、湘潭、洪江、益陽、常德、永州という具合に、湖南省の各地の名前が散見する。このように湖南省各地で説唱本の出版が盛んに行われた背景に、清末民初の湖南における芸能活動や出版活動の繁栄がある。既に述べた通り、嘉慶、道光年間前後から、湖南では各地に書肆が立ち並んでいたが、特に太平天国の乱を経て、同治年間以降の湖南の芸能は更なる発展を遂げた。太平天国軍を陥落させた湘軍の活躍により、故郷に莫大な富がもたらされると、湖南は享樂的、娯樂的雰囲気になり、説唱や、芝居の上演なども日常的に行われたという。また、各地に林立した書肆による説唱本の印刷は民国期まで続き、更には説唱本の販売も行われ、湖南地域に留まらず、湖北、広西、貴州など周辺地域へとその販売網を広げ、湖南説唱本は地域を越えて流通し、出版物の形態も、全幕通し、ダイジェスト、折子戯と様々であった。

【表 8】1～3 は、【表 6】でも既に取り上げた、「秦雪梅」故事の新たな流布基盤となった、説唱本『秦雪梅三元記』系列のテキストのうち、湖南で出版されたものである。それぞれ、三百五十冊、百冊、七百冊とかなりの冊数が印刷され、湖南地域だけでなく、周辺

地域、更には全国的に広く流通し、物語の流布に最も影響を与えたと考えられる。

次に【表 8】4～7 のテキストについて見ていくが、いずれも【表 6】（【表 8】1～3 を含む）の説唱本『秦雪梅三元記』系統の流れを汲む。

【表 8】4、5 は、全篇五字句と七字句の韻文で構成され、「秦雪梅」故事の全体の内容をダイジェストで紡ぐ説唱テキストである。冒頭で、商琳と秦雪梅は金童と玉女の生まれ変わりだという設定が語られる。【表 8】4 は毎半葉十字十二字不等×九行、二十三葉、5 は毎半葉十字十二字不等×七行、二十二葉から成る。【表 8】4、5 とも形式や物語構成は同じだが、使用される文言が異なる。

【表 8】6 は、全篇十字句を重ねる説唱形式で、毎半葉十字×五行、七葉の非常に短いテキストである。秦雪梅が商琳の訃報を聞き、商家にお悔みに行き、守節を誓う場面を描く。商家を訪れた秦雪梅が、二人の出会いを回顧して、秦府で居候をしていた商琳の誘いを拒絶したことを悔やむ件があり、ここからも、弋陽腔系演劇の「観画」の場面の内容ではなく、説唱本『秦雪梅三元記』系列の展開を継承していることが分かる。

【表 8】7 も、秦雪梅が商琳の訃報を聞き、商家にお悔みに行き、守節を誓う場面を描く。毎半葉二十三字×十一行、十一葉、全四回から成り、韻文の間に「白（セリフ）」を挿む説唱形式のテキスト。最後に『商輅降生』の内容が付記されている。

また、湖南では説唱本の出版だけでなく、実際の上演も盛んに行われた。例えば、説唱芸能では、絲弦（常德、桃源）『秦雪梅吊孝』⁷²、絲弦（常德）『秦雪梅教子』⁷³などの演目が残されており、地方劇については先にも挙げたが、湘劇『雪梅教子』、祁劇『秦雪梅』、『雪梅吊孝』、『雪梅教子』、辰河戲『秦雪梅』、『雪梅教子』、衡陽湘劇『雪梅吊孝』、『雪梅教子』、武陵戲『秦雪梅』、『雪梅吊孝』、『雪梅教子』、荊河戲『秦雪梅』、『雪梅吊孝』、『雪梅教子』、花鼓戲（長沙、邵陽、常德、岳陽）『観画游楼』、『雪梅吊孝』、『雪梅教子』、花鼓戲（長沙）『張仙送子』などの演目が残されている。それぞれ、全幕通しの『秦雪梅』の他に、『雪梅吊孝』、『雪梅教子』の場面を中心に、長沙、湘潭、邵陽、常德、桃源、岳陽、武陵、沅江、荊河と、湖南全域で流行していたことが窺える。

全幕通しの説唱本『秦雪梅三元記』系列を中心とする各種説唱本の出版と、説唱や芝居での実際の上演を伴って、「秦雪梅」故事が湖南省全域に広く流布したという流行現象は、鼓詞、弾詞、宝卷、木魚書、潮州歌など、他地域の説唱ジャンルにはみられないため、湖南地域で独自に築かれた、特異な現象だったと言えるだろう。また、この湖南地域における流行が、新たな層の「秦雪梅」故事の全国的な流布と流通を支える基盤となったと考えられる。

3.4. 説唱本『秦雪梅三元記』「游地府」の場面と「転生姻縁」

つまり、説唱本『秦雪梅三元記』系列の全国的な流布に、湖南地域における「秦雪梅」故事の特異な流行が大きく関わっていると推測されるのだが、この推測を裏付けるように、説唱本『秦雪梅三元記』の物語の中に湖南独自の現象が反映された箇所がある。

⁷² 『中国曲芸志』全国編集委員会・『中国曲芸志・湖南卷』編集委員会編『中国曲芸志・湖南卷』（北京：新華社出版社、1992）、「伝統曲目（書目）表」p. 201

⁷³ 注 72 前掲書『中国曲芸志・湖南卷』「伝統曲目（書目）表」p. 203

それは、弋陽腔系演劇で伝わる「秦雪梅」故事には存在しない、民間説唱で新たに付加された、秦雪梅による「游地府（地獄めぐり）」の場面に見える。「游地府」の場面は、【表6】に挙げた説唱本『秦雪梅三元記』系列のテキストのうち、六卷本では巻四に、十二卷本では巻七と巻八に紙幅を割いて描かれており、物語の中盤の大事な部分となる。その簡単なあらすじは、

相思病を患い自宅に戻っていた商琳の訃報を聞き、秦雪梅は商家に駆けつけ、悲しみのあまり棺の前で頭を打ちつけて後を追う。冥府に到り商琳を探しに地獄めぐりしていると金童が現れ、商琳と秦雪梅は、天界に仕える金童・玉女の生まれ変わりであり、俗世で男女の姻縁を全うしなければ天界に戻れない身であることを告げる。また、金童と玉女は既に二度転生をしており、第一世目の「梁山伯と祝英台」で結ばれず、第二世目の「郭華と王月英」でも結ばれず、現在が第三世目であること、また下女の愛玉が身ごもっている子供は玉堂星が下凡したもので、後に三元及第するだろうと言う。そして、秦雪梅は寿命が残っているからと現世に戻される。

秦雪梅による地獄めぐりも、金童玉女の三世にわたる転生姻縁も、いずれも説唱本で新たに加えられた設定である。また、転生先として挙がる、「梁山伯と祝英台」と「郭華と王月英」は、それぞれを主人公とする「梁祝」故事と「売臙脂」故事が湖南説唱本でも単独で編まれており、『新抄繡像祝英墓』（湘潭：九總三元堂刻本、長沙：誠典堂刻本）と、『王月英賣臙脂』（長沙刻本）が現存する。両テキストの物語内容を確認すると、全てが共通して、主人公は金童玉女の生まれ変わりであり、男女の姻縁を全うするため、「商琳と秦雪梅」、「梁山伯と祝英台」、「郭華と王月英」の人物の間で転生するという設定になっている。

このような、従来単独で流布していた「秦雪梅」故事、「梁祝」故事、「売臙脂」故事の間に、「三世姻縁」を介した繋がりが生まれる現象は、他の説唱本には見られない、湖南説唱本独自のものであった。また、湖南説唱本にみえる「三世姻縁」は、金童玉女が有名民間故事の主人公に多世にわたって転生する、後の「多世姻縁」の物語の出現にも影響を与えるため非常に興味深い。これらについては、第3章で詳しく考察することにする。

説唱本『秦雪梅三元記』系列の「游地府」の場面に描かれる「三世姻縁」を取り上げて考察してみても、清末民初に全国的に流通した説唱本『秦雪梅三元記』系列のテキストは、湖南を中心に出版され、湖南を介して周辺地域、そして各地へと広まったのではないかと考えられるのである。「秦雪梅」故事の全国的な流布において、湖南説唱本『秦雪梅三元記』は、その基盤として重要な位置を占め、湖南は、新しい層の「秦雪梅」故事の発信地でもあったと言えるだろう。

4. 本章のまとめ

以上、現存する戯曲、説唱テキスト等に対する網羅的な収集と分析を通して、全国的に流布した「秦雪梅」故事の伝承系統を体系的に明らかにし、その中で湖南説唱本の果たした役割を考察した。

第1節では、主に明清期における戯曲作品としての「秦雪梅」故事の流行について考察した。「秦雪梅」故事は、明の南戯伝奇『商輅三元記』全三十六折を立ち上がりとし、その成書年代は不明だが、物語の登場人物で唯一実在する商輅の事跡や上演記録から、正統十年（1445）から正徳年間（1506 - 1521）辺りまでには完成していたと特定した。以来人気を博し、中でも、『秦雪梅観画』、『秦雪梅吊孝』、『断機教子』など、人気の場面は一幕劇となって独立し、江西を発祥とする弋陽腔や、その流れを承ける安徽発祥の青陽腔など、弋陽腔系諸腔によって盛んに演じられるようになった。万暦八年（1580）の進士の龍庸も、湖南地域で『断機教子』が青陽腔で演じられたという記録を残している。

同時に、嘉靖（1522 - 1566）、万暦（1573 - 1620）年間には弋陽腔系散齣集が多数編まれ、福建の書肆を中心に書物としても出版されて流通した。このように、明代における「秦雪梅」故事の流布は、弋陽腔系演劇による実際の上演と散齣集の出版を以て、特に南方を中心に広く行われたと言えるだろう。また、その伝承は清代まで続き、弋陽腔系を継ぐ高腔のテキストも、清蒙古車王府蔵本が幾つか残されている。また、清初の李光地（1642-1718）が記録した、彼が幼い頃に福建で観た『断機教子』における秦雪梅のセリフの文言に対する検討を通して、物語の流布は、やはり専ら弋陽腔系演劇であったと確認することができた。

第2節では、現行の地方劇を中心に、各種目録に収録される演目や現存するテキストから、「秦雪梅」故事の演目がどのような内容で伝わったかを調査したところ、例えば各地方劇で広く演じられた『秦雪梅観画』の場面は、従来の弋陽腔系演劇で伝わる同場面の内容とは、設定や展開が大きく異なることが明らかとなった。ここから、新たな「秦雪梅」故事の存在と、それらを広く伝え、定着させるだけの勢力をもつ、新たな層の伝承系統が浮かび上がった。

そこで第3節では、物語の伝承媒体のひとつとして民間説唱を取り上げ、特に、清の嘉慶年間辺りから各地の出版活動と結びついて隆盛した、説唱文芸における「秦雪梅」故事の流布を確認した。現存する説唱本を網羅的に収集した結果、新しい内容の「秦雪梅」故事の全容を描く同一説唱テキストが、湖南と周辺地域を中心に各地で多数出版されていることが明らかとなった。本論では、全国的に出版・流通したこれらの同一テキストを、便宜的に説唱本『秦雪梅三元記』系列と総称し、ひとつの完成された、普遍的な、新しい層の「秦雪梅」故事と位置づけた。また、諸テキストの中でも、湖南地域から出版された湖南説唱本が多く残されていることから、「秦雪梅」故事の湖南における特別な流行の可能性を指摘した。

調査の結果、湖南での流行を裏付けるように、説唱本『秦雪梅三元記』系列に存在する「地獄めぐり」の場面で言及される「三世姻縁」で、「商琳と秦雪梅」の転生先として挙がる「梁山伯と祝英台」と「郭華と王月英」は、湖南独自の設定であり、湖南説唱本『新抄繡像祝英台』、『王月英賣胭脂』にも共通してこの「三世姻縁」の設定が描かれたことが明らかとなった。この転生姻縁の組み合わせは、他地域説唱本には見られないことから、説

唱本『秦雪梅三元記』の形成、流布、流通に、湖南地域が大きな影響力を持っていたのではないかと結論付けた。

光緒年間に上海で石版印刷が勃興し、これまで各地で隆盛していた木版本が、廉価で刷り上がりが美しく大量生産が可能な石印本に取って代わられるようになると、各地の木刻本の説唱テキストも上海へ集約し、石印本として出版された。説唱本『秦雪梅三元記』系列は、「秦雪梅」故事の代表として、上海の幾つかの書肆から翻印されたり、或いは内容を元にした簡略本も出版されたりと、石印説唱本としても広く流通した。これは、北方から東南海沿海部にかけて各地で隆盛した、鼓詞、弾詞、潮州歌、木魚書などで編まれた、各説唱ジャンル独自の「秦雪梅」故事が、地域限定的な流行で終わったのとは異なる。

明代に中国の南方から発祥した「秦雪梅」故事は、弋陽腔系演劇を以て南中国を中心に流布し、清代以降に隆盛した説唱文芸によって、物語の伝承は大きな転換期を迎えた。説唱文芸や地方劇の中でも、大鼓書、子弟書や崑曲などの演目のテキストを見ると、弋陽腔系演劇の古い層の内容を継承するものも存在するが、清代以降に圧倒的な勢力で広まったのは、古い層の内容を基礎に新たに展開した、説唱文芸における新しい層の「秦雪梅」故事であった。清末民国期の湖南地域における芸能、出版活動の空前絶後の隆盛を背景に、湖南説唱本『秦雪梅三元記』が、新たな「秦雪梅」故事の全国的な流布と定着に大きな影響を与えたということが、「秦雪梅」故事の伝承系統を体系的に捉え直す作業を通して、具体的な事例を以て明らかとなった。

第3章 湖南説唱本と多世姻縁の物語

0. はじめに

本章では、湖南説唱本の物語中に現れる湖南独自の現象が、物語の伝播、テキストの流通を通して、各地域の現象と関わり合いながら全国的なものとなる過程を、第2章第3節で取り上げた、説唱本『秦雪梅三元記』系列（第2章【表6】）の「游地府」の場面に見える「三世姻縁」を手がかりに検証していく。

説唱本『秦雪梅三元記』に描かれる「三世姻縁」とは、主人公の商琳と秦雪梅に付加された、①実は天界の金童と玉女が俗世に降ろされた姿であり、人間の男女として修練を積み、男女の姻縁を全うして天界へ戻るため、②第一世目に「梁山伯と祝英台」、第二世目に「郭華と王月英」に転生したが、いずれも悲恋に終わって結ばれず、第三世目の「商琳と秦雪梅」に転生中であるという設定のことを言う。

もともと、①「天界に仕える金童と玉女が下界に降ろされ、人間の男女に生まれ変わって姻縁を全うして天界に戻る」というモチーフは、中国古典通俗文芸では常套的に用いられ、例えば元代の『鉄拐李度金童玉女雜劇』¹という、金童玉女が人間の夫婦に生まれ変わり、天界に戻るのを拒否して、李鉄拐に濟度されて戻る芝居や、明の南戯伝奇『金童玉女嬌紅記』²での、金童玉女が晋申純と理嬌娘に生まれ変わり、互いに好意を寄せ合い、紆余曲折の末に結ばれて天界に戻る話などが編まれた³。

その他にも、主人公は金童玉女の生まれ変わりである、という要素が従来無かった民間伝説とも結びつき、例えば、万杞梁と孟杞梁の悲恋を描く「孟姜女」故事は、明の戯曲集『風月錦囊』⁴所収『摘滙奇妙統編全家錦囊姜女寒衣記』の中で「杞梁原是金童、姜女原是玉女、只因思情、下降凡間受苦（杞梁はもとは金童、姜女はもとは玉女でしたが、情を寄せ合ったために、俗世に降ろされ苦難を味わうことになりました）」と描かれ⁵、更には、上述の説唱本『秦雪梅三元記』系列のように、主に説唱テキストを中心に、②の要素が加わり、一世だけで物語を終わらせるのではなく、悲恋に終わって結ばれない男女の姻縁を全うすべく、他の有名民間伝説の男女に転生を繰り返し、二世、三世と姻縁を増幅させていくようになる。

¹ 賈仲明撰。『元曲選』所収

² 劉東生撰。明・宣徳間（1426-1435）金陵積徳堂刊本が『古本戯曲叢刊』初集に影印で収められる。

³ 黄海蘭「試論中国古典戯曲中的“金童玉女”題材劇」『語文學刊』22期（2010）において、黄氏は李修生編纂『古本戯曲劇目提要』（北京：文化芸術出版社、1997）をもとに、古典戯曲中の「金童玉女」を題材とする劇を「仙謫式的的神話愛情劇」と「度脱式的的神仙道化劇」の大きく二つに分類し分析する。

⁴ 王秋桂主編『善本戯曲叢刊』（臺灣學生書局、1987）に、明・徐文昭編輯『風月錦囊』嘉靖三十二年（1553）詹氏進賢堂重刊本が影印収録される。孫崇濤・黄仕忠箋校『風月錦囊箋校』（北京：中華書局、2000）も併せて参照。

⁵ 楊振良『孟姜女研究』（臺灣學生書局、1985）では、「第一章 緒論」「二、金童玉女與七世夫妻」pp. 10-20に、説唱では清同治間（1862-1874）忍徳館抄本『長城宝卷』、民国二年上海翼化堂『孟姜女卷』なども、主人公の男女が金童玉女の生まれ変わりと描かれると述べる。

そして、近代には『七世夫妻』⁶と題するいわゆる「多世姻縁」を描く小説が出版された。その内容は、全二十四回のうち、一世夫妻は万杞梁と孟杞梁（第一～三回）、二世夫妻は梁山伯と祝英台（第四～九回）、三世夫妻は郭華郎と王月英（第十～十二回）、四世夫妻は王十朋と銭玉蓮（第十三～十四回）、五世夫妻は商琳と秦雪梅（第十六～十九回）、六世夫妻は韋燕春と賈玉珍（第二十～二十二回）、七世夫妻は李奎元と劉瑞蓮（第二十三～二十四回）という具合に、七夕における金童玉女の転生を介して七種の有名民間伝説が寄り合わさってひとつになっている。現在でも、例えばC-pop歌手丁噹の『手掌心』の歌詞に「七世夫妻」という文言が使用されるように⁷、有名民間伝説の主人公が転生を繰り返す物語は、言わば国民的な現象ともなっている。

このような「多世姻縁」の物語の形成過程を紐解くと、実は、清末民初に各地で盛んに語られ、また同時に大量に出版、流通した説唱テキスト、特に湖南説唱本および湖南説唱本と関わりの強い上海石印説唱本に、手がかりとなる資料が残されていた。そこで本章では、本来単独のものであった有名民間伝説が、転生姻縁という設定のもとで、いかに「多世姻縁」の物語としてひとつに寄り合わさっていくのか、その過程を、説唱本『秦雪梅三元記』系列にみられる「三世姻縁」を中心に、説唱本の出版、流通と合わせて再現的に検証しながら、各種伝承媒体の中で湖南説唱本が果たした役割を明らかにしたい。

1. 従来の研究

楊振良『孟姜女研究』に、金童玉女の転生姻縁と近代小説『七世夫妻』に関する簡単な考察がある⁸。楊氏は、金童玉女の姻縁が七世にまで増幅するようになったおおよその時期について、以下のように述べる。

…この『七世夫妻』の物語のうち、最も遅いのは第七世目の李奎元と劉瑞蓮の時代で、いずれも伝説では明の崇禎年間の人物とされる。李自成が動乱を起こして闖王と名乗ると、ある一人の忠臣が家族を連れて逃げた。途中谷間で一人の子を拾い、奎元と名付け、後に成長して劉瑞蓮と結婚した。つまり、七世夫妻の形が出来たのは明末から

⁶ 『七世夫妻』のテキストについて、注5前掲書『孟姜女研究』では、台南北一出版社『七世夫妻』および泰華堂『足本七世夫妻』があると記されるが、本論では『中國民間通俗小説』（台北：文化圖書公司再版、中華民國六十六（1977）年）所収の物語を参照した。

⁷ 丁噹（1983-）『手掌心』の歌詞は以下の通り。下線部に「七世夫妻は、ただ神話の世界のこと、七夕にまた一世紀待つしかない」とある。

一干而尽、愛恨嗔痴的幻影、我敬你一杯一干二净的黎明、我在南极憧憬你的北极星、我等你不信心心不相印、你是天意、你是达达的马蹄、滚滚了我的红尘、苦苦追寻冰天雪地、一寸光阴一寸心一朵昙花一朵云、一朵雪花一朵梦境、一一捧在手掌心、一颗尘埃一菩提、一颗流星一个你、一心一意捧在手掌心。七世夫妻、只是神话的魔镜、第七夕只能再等一世纪、你是天地、你是风雨、你是晴、你是温柔的叛逆、逆转我的一年四季、一寸光阴一寸心、一朵昙花一朵云、一朵雪花一朵梦境、一一捧在手掌心、一颗尘埃一菩提、一颗流星一个你、一心一意捧在手掌心。偏偏我越抱越紧、偏偏我越爱越贪心、偏偏我要爱到万箭穿了心、才死心、左手掌握着空心 右手掌握着痴心、十指紧扣一本心经 刻骨铭心着苦心。可不可以不甘心 可不可以不认命、如果可以 拿我换给你。

⁸ 注5前掲書『孟姜女研究』「第一章緒論」「二、金童玉女與七世夫妻」pp. 10-20 に詳しい。

清代中期以降だろうとされる。しかし、民間説唱を調べると、例えば清の光緒鈔本『英台卷』で、馬文才の魂が地獄で閻魔に「祝英台は自分の結婚相手であると」訴えると、閻魔は、梁山伯と祝英台はもともと金童玉女であり、「自從打破琉璃盞、罰下凡間走三巡（玻璃の杯を壊してから、罰として俗世に三度転生した）」、「一世郭華買臙脂（一世で郭華は臙脂を買い）」、「二世藍橋韋郎保（二世は藍橋の韋郎保）」、三世は梁山伯と祝英台であるのは当然だと述べた。ここでは僅かに「三世姻縁」だけで、七世は見られない。もし三世姻縁を参考に、一世目の孟姜女故事を物語の始まりとするなら、七世の説は光緒年間から民国初期に出たのではないだろうか。⁹

このように楊氏は、金童玉女の姻縁が七世まで増幅するのは、光緒年間から民国初期と推測し、民間説唱と何らかの関係があることを示唆するが、指摘にとどまるのみでそれ以上の詳細な考察はなされていない。

実際に、『七世夫妻』に挙がる男女を主人公とする各民間伝説に関する説唱本を調べると、金童玉女による転生姻縁の描写が散見する。それらは、楊氏が引用した光緒鈔本『英台卷』と同様に、物語の冒頭あるいは結末で、「(主人公の) 何某は、実は金童玉女の生まれ変わりで、今世で姻縁を全うできなかったので、次の世は何某に転生する」と、種明かしの様に姻縁について語り、「第一世は何某と何某、第二世は何某と何某…」と転生先の名前を挙げる。また、その転生の回数も、二世、三世が殆どである。この現象は、梁山伯と祝英台（「梁祝」故事）、郭華郎と王月英（「売臙脂」故事）、商琳と秦雪梅（「秦雪梅」故事）、韋燕春と賈玉珍（「藍橋会」故事）を主人公とする説唱本に散見し、誰が誰に転生するか、転生姻縁の組み合わせも説唱本によって様々である。

その中でも特に注目に値するのが、湖南説唱本の「秦雪梅」故事、「売臙脂」故事、「梁祝」故事の間に見られる転生姻縁を介した特殊な結びつきである。以下に、先ず湖南説唱本の「秦雪梅」故事、「売臙脂」故事、「梁祝」故事をひとつずつ確認しながら、その特殊な結びつきを検証する¹⁰。

2. 湖南説唱本にみえる転生姻縁の物語

2.1. 「秦雪梅」故事の地獄めぐり

2.1.1. 湖南説唱本『新刻秦雪梅三元記全部』

「秦雪梅」故事は、第2章で既に述べた通り、明の南戲傳奇『商輅三元記』に取材する。

⁹ 「此一故事，當成説極晚，以末世夫妻李奎元與劉瑞蓮之時代，相傳皆明朝崇禎時人。李自成亂天下，号闖王，有一忠臣携眷避禍，於山澗拾得一子，取名奎元，後長成與劉瑞蓮完婚。則七世夫妻成型於明末清中葉之後。然而稽諸民間説唱，如：光緒鈔本「英台卷」馬文才魂告陰司，閻王謂：梁祝本是金童玉女，三世為梁祝蓋無疑。僅有「三世姻縁」，未見七世。若由三世姻縁比附，並尋及最前之孟姜故事以為故事之首，則七世之説，又在光緒民初。」（注5前掲書『孟姜女研究』p. 11）

¹⁰ なお、この現象を検証するため、現在まで口承で伝わるもの、芝居の脚本などではなく、時代の特長と、正確に類型の変遷を追うことができる、出版物としての文字テキストである説唱本を対象を絞った。また補填のため当該する故事に関する民間故事や地方劇の内容なども参考にした。

未婚の夫である商霖（説唱本では商琳）に相思病で先立たれた秦雪梅は、商家の下女愛玉が彼の遺児商輅を宿していることを知ると商家に入り、商輅を我が子のように厳しく育てて三元及第させる。この節婦譚は主に弋陽腔系演劇で演じられ、且つ同時代に刊行された弋陽腔系散齣集にも多数収録され、明清期にかけて南中国を中心に広く上演された。

また、清代以降の出版活動を伴った民間説唱の隆盛により、弋陽系演劇の内容を骨子としながら、場面の付加や改変を経て、新たな全幕通しの説唱本『秦雪梅三元記』系列のテキストが編まれ、湖南省および湖北、広西など周辺地域で木版印刷され、更に上海でも石印出版され、全国的に最も広く流通した。

「秦雪梅」故事の中で金童玉女の「三世姻縁」が出現するのも、説唱本で新たに付加された、秦雪梅が亡くなった商琳を探しに地獄めぐりをする場面である。本節では湖南説唱本における「三世姻縁」の結びつきを検証するため、説唱本『秦雪梅三元記』系列のテキストの中から、湖南で出版されたものを取り上げてみていく。（※本章で示す「秦雪梅」故事のテキストに関しては、第2章に挙げた表の番号を使用する）

先ず、秦雪梅による地獄めぐりの前に、物語の中で商琳が金童だと明かされる箇所がある。相思病を患う商琳の病状を心配した両親が厄払いのためにと、商家の下女である愛玉を秦雪梅に扮装させて結婚させるが、事の次第を知った商琳の病は益々悪化してしまう。そこで場面が天上界に切り替わり、以下のように描かれる。

却説玉帝駕坐靈宝声（殿）群仙侍立兩旁、玉帝開口問道、左金童下凡一十六年已滿、速即将他受上天界、太白金星奏道、都御史近前來俯伏在地、啓玉皇洗聖耳且聽原音（因）、左金童降凡間商家為子、原叫他生下接代商門、論陽壽原註定三月之内…

さて、玉帝は靈宝殿に鎮座し両側に仙人を侍らせる、玉帝が口を開いて問うに、左金童が下凡して既に十六年になる、もうすぐ天界に戻さねばならぬ。太白金星が申し上げるに、都御史前へお近くへ寄り頭を伏して、玉皇にお聞き頂きたい事があります、左金童は俗世に降りて商家の子となりました、彼に商家の跡継ぎを生まれさせ、寿命は後三ヵ月以内と決まっております…

【表6】1 中湘：九總黃三元堂刻本『新刻秦雪梅三元記全部』卷三、3b)

ここで初めて、相思病で苦しむ商琳は、実は天界の金童の生まれ変わり、俗世での修行年数が満期を迎え、もうすぐ天界に戻るのだと明かされる。商琳の両親が病回復を願って愛玉と結婚させる場面は弋陽腔系演劇にも存在するが、玉帝、太白金星、金童といった天界との繋がりはないので、これは民間説唱独自の展開と言える。

その後、現世で商琳は寿命が来て亡くなり、金童と知らない秦雪梅は、商琳の後を追って自尽し、地獄の閻魔の役所にたどり着き、土地神と共に死んだばかりの商琳を探すために地獄めぐりに出かける。途中、寂れた村に立つ茶庵を通りかかる。その茶庵のお茶は、飲むと心が乱れて昇天せんばかりの効力がある。老婆が秦雪梅にお茶を勧めて来た時に、土地神が「這佳人他元是金童妻子、他前來找丈夫仍要還生、你若是把他的心性迷住、他一家老少們依靠何人（このお方は金童の妻で、夫を探してからまた生き返る身です。もし彼

女の心を惑わしたら、彼女の家族は誰に頼ればいいのか)」¹¹と注意する。ここでも、土地神によって二人が金童と玉女であることが述べられる。そして本格的に地獄めぐりに入って行く。例えば、殺生をした者を刀で切り裂く地獄、神明を冒瀆した者を油釜で煮る地獄、良心に背いた者を大きな石臼で粉々に挽く地獄、殺人放火、他人の家財を盗んだ者を火の海で灰塵に帰す地獄、五穀を粗末にした者の頭や顔を男女の見分けが付かないまで打つ地獄などが登場し、全ての地獄を捜したが、結局商琳は見つからない。すると、天界から金童（商琳）が呼ばれて秦雪梅のもとへやって来る。

我與你做夫妻本是虛名、到于今這一次連是三次、只為我在上方眼角留宮（情）¹²、那玉皇張大帝知此就裡、將你我一雙雙貶下凡呈、頭一次在杭州英台山伯、同學堂三年正未曾沾身、也只為害相思你坑我命、你過了半年正也上天宮、到後來五百年又該劫數、第二次將你我貶下凡呈、每日裡賣臙脂朝思暮想、我名字叫郭華你叫月英、依然是兩下裡何嘗成就、到後來害相思又喪殘生、你母親一心的將你改嫁、王月英繩縊死也上天宮、在上界又過了五百千年、又逢着劫數到三下凡呈、把你我又貶在杭州城內、我生在商門裡你在秦門

私とあなたが夫婦であることも本当は偽りで、今に至るまで一回ならず続けて三回、ただ私が天界で情を寄せたばかりに、玉皇大帝がこの内情を知り、あなたと私は二人そろって俗世に降ろされ、最初は杭州の祝英台と梁山伯、同じ學堂で三年学び名を成す前に、あなたへの相思病でわたしは命を落とし、あなたも半年後には天宮に戻った。後に五百年経ち、また巡り合わせで、二度目の俗世に降ろされ、毎日臙脂を売りつつ思い慕う、私は郭華であなたは月英、相変わらず二人は結ばれず、後に相思病にかかってまた命を落とした。あなたの母は一心に再婚をすすめるが、王月英は首を括って天宮に戻り、天界で五百、千年が経ち、また巡り合わせで三度目の俗世へ、二人は杭州城内に落とされ、私は商門に、あなたは秦門に生まれた。

（【表 6】 1 中湘：九總黃三元堂刻本『新刻秦雪梅三元記全部』卷四、10b）

二人は天界の金童と玉女だったが、俗念を起こして天帝の気分を害し、一回だけでなく、三回も転生を繰り返していること、また、「一世は梁山伯と祝英台、二世は郭華と王月英、三世は商琳と秦雪梅」という「三世姻縁」の組み合わせが語られる。

2.1.2. 「金童玉女」の生まれ変わり

また、湖南説唱本では、上記の全幕通しの『新刻秦雪梅三元記全部』以外に、「秦雪梅」故事の全体の内容をダイジェストで収めた『新刻三班鼓三元記』（常德：錦華堂刻本）、『綉像三元記秦府攻書全本』（益陽：文元堂刻本）も存在する。これらのテキストには、「三世姻縁」に関する描写はないが、「金童玉女の生まれ変わり」という設定は揃って採用されている。

『新刻三班鼓三元記』と『綉像三元記秦府攻書全本』は、共に全篇五字句と七字句の韻

¹¹ 『新刻秦雪梅三元記全部』卷四 3b、中湘：九總黃三元堂刻本

¹² 上図蔵の刻本では「留情」。武昌廣發堂刻本は「田情」とある。「田」は「留」か。

文で構成され、『新刻三班鼓三元記』は『綉像三元記秦府攻書全本』をより簡略化した内容となっている¹³。以下に、『綉像三元記秦府攻書全本』から金童玉女について言及がある冒頭の部分を挙げる。¹⁴

閑来把書習、唱本三元記、歌真曲假戲無益、此書本真的、説起秦雪梅、誰是女裙釵、乃是天宮貶下来、玉女降投胎、四徳與三従、貞節無比論、桃花繡朶件件能、博古又通今、國政他父親、太師在朝廷、相交戸部商大人、指腹結為婚、商爺生商琳、前身是金童、時不通来運不通、三次天火焚、商爺着了急、夫人来商議、商琳無書又無筆、秦家把書習…

暇なら書を習う、唱本三元記、歌は真、曲は偽り、劇は無益、この書はもとより真である。さて秦雪梅、何を隠そうこのご婦人は、天宮から降ろされた、玉女の生まれ変わり、四徳三従、貞節は言うまでもなく、桃花の刺繡も上手で、広く古今に通じ、国政は彼女の父親、太師として朝廷に在り、戸部の商大人と親交があり、子供がお腹にいる時に既に縁組をした、商大人に生まれた商琳の、前身は金童、時運悪く、三回の火災に遭い、商大人は慌てて、夫人と相談し、商琳は書物も筆も無く、秦家で勉強をすることになった…

（【表 8】3 益陽：文元堂刻本『綉像三元記秦府攻書全本』、1ab）

ダイジェスト版であるため地獄めぐりの部分は割愛されており、梁山伯と祝英台、郭華と王月英、商琳と秦雪梅の「三世姻縁」の件も描かれない。ただし、「秦雪梅」故事が湖南地域の説唱文芸で語られる際には、「商琳と秦雪梅は天界の金童と玉女の生まれ変わり」が基本設定であったことが窺える。

2.2. 「売臙脂」故事の変遷

2.2.1. 「売臙脂」故事とは

続いて、転生先として挙がる郭華と王月英が主人公の「売臙脂」故事について見ていきたい。「売臙脂」故事は、市で白粉或いは臙脂を売る女に恋をした男の話で、宋・李昉『太平広記』卷二七四所収の『買粉児』が物語の立ち上がりとされる。『太平広記』には、六朝宋・劉義慶『幽明録』が出典であると記されているため、六朝期には既に有名な話として伝わっていたと考えられる。あらすじは、

ある男が市で白粉を売る女に恋し、毎日店を訪れては何も言わずに白粉を買って帰った。女は訝しく思い、ある日その理由を聞くと、男は女への恋心を伝える。女は驚くが、逢瀬を約束し、夜に男の部屋を訪ねる。男は宿願がかなったと述べると嬉しさの余り死んでしまい、女は恐れて店に帰る。男の両親は息子の部屋に残された大量の

¹³ テキストの詳細情報は、第2章「3.3 湖南における「秦雪梅」故事の流行」を参照されたい。

¹⁴ 湖南説唱本『新刻三班鼓三元記』では、「(秦雪梅) 乃是天上玉女星 (秦雪梅は天上の玉女星)」とある。商琳については未確認。

白粉から、白粉売りの女が息子を殺した犯人だと県令に訴える。女が泣いて男の死体に語りかけると、男は覚醒し二人は夫婦となった。

また、宋・皇都風月主人『緑窗新話』に『郭華買脂慕粉郎』という話が収録される。内容は前出の『買粉児』とほぼ同じだが、男女に郭華と王月英という名前が付き、また結末に若干異同が生じる。あらすじは、

主人公の郭華は行商を生業としていた。ある日、市で臙脂を売る女に恋し、毎日臙脂を買い続けて半年が過ぎた。女は怪しんで理由を聞くと、男は切々と恋心を訴える。女は感じ入り、女の両親が出かける夜に仮病で家に残るので、郭華に裏門から入ったところにある花園のあずまやで会おうと伝える。ところが当日、郭華は親友と夜遅くまで話し込んでしまい、女は待ちくたびれて靴を残して家に戻る。郭華が訪れた時には既に女の姿は無く、残された靴を手に取り、嗚咽して帰り、靴を呑み込み窒息して息絶える。翌朝、郭華の主人が発見し、まだ少し息があったので靴を取り出し、大量の臙脂粉と靴を手がかりに臙脂店を訪ねた。女の父が驚いて郭華を見に行くと、郭華は既に蘇生していた。主人が媒酌し二人は夫婦となった。

後に、元雑劇『王月英元夜留鞋記』や明伝奇『新刻全像臙脂記』¹⁵などが編まれたが、いずれも『緑窗新話』の話を踏襲し、臙脂売りの王月英に恋をした郭華が、逢引きの時間に遅刻し、失意の中、月英が残した靴を呑み込んで生死を彷徨するも、最後は蘇生して二人は夫婦になるという展開で描かれる。

『幽明録』、『緑窗新話』、元雑劇、明伝奇ともに、古くから伝わる物語内容は、全て最終的にはハッピーエンドを迎えるが、一方、清代以降の説唱文芸の中でも湖南説唱本で描かれる「売臙脂」故事は、郭華と王月英が現世で結ばれずに転生するという悲恋の展開に変容する。

2.2.2. 湖南説唱本『王月英賣胭脂』

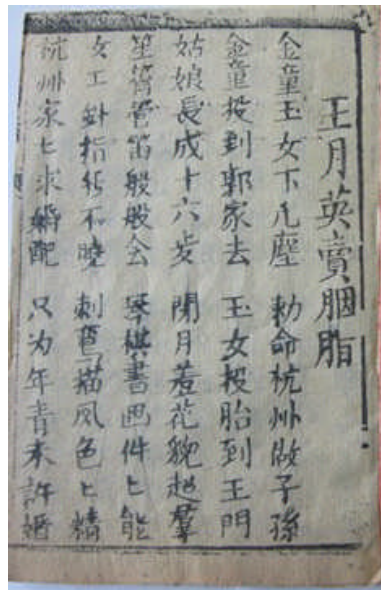
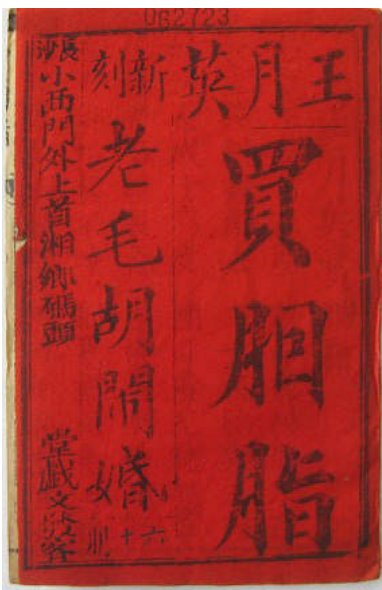
転生姻縁の要素をもつ「売臙脂」故事は、筆者による各図書館所蔵の説唱本に対する調査の限りでは、湖南説唱本と上海石印説唱本にしか見られない。以下に挙げるのは、湖南説唱本『王月英賣胭脂』のテキストの書誌情報と、転生姻縁の類型である。（※文字が磨滅或いは削られて印字されていない箇所は□□で補った。）

【表 9】

	書名	封面題	刊記	所蔵・収蔵	転生姻縁の類型
1	王月英賣胭脂	王月英買胭脂/新刻老毛胡鬧婚/六十冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭□□堂戲文發客	長沙刻本	上図	郭華・王月英 ↓ 梁山伯・祝英台
2	王月英賣胭脂	王月英買胭脂/新刻老毛胡鬧婚/□□冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭□□堂戲文發客	長沙刻本	首図×2部、 浙図	同上

¹⁵ 童養中撰。『古本戯曲叢刊』初集に萬曆間金陵文林閣刻本が影印収録される。

図【表9】1 上図蔵『王月英賣胭脂』長沙刻本 封面、1a



形式：七行×七字句二句
 1巻、全14葉
 14×9cm
 12.3×8cm（匡郭寸法）

【表9】1、2の湖南説唱本『王月英賣胭脂』は、本文は全く同じで、封面に記される冊数がひとつは削られ、書肆名は共に削られた重版本である。また、以下のように、物語の冒頭で、主人公である郭華と王月英は金童と玉女の生まれ変わりであると紹介される。

金童玉女下凡塵、救命杭州做子孫、金童投到郭家去、玉女投胎到王門…
 金童玉女は俗世へ降ろされ、杭州で子孫となるよう命じられた。金童は郭家に生まれ変わり、玉女は王家へ生まれ変わった…

（【表9】1 長沙刻本『王月英賣胭脂』1a）

『王月英賣胭脂』の簡単なあらすじを述べると、ある日、杭州の書生の郭華は、銭塘街の胭脂店に美人が居るとの評判を聞いて訪れる。ちょうど王月英の母親が留守中だったので恋仲になるが、途中で雑貨売りの毛胡が入って来て、郭華の隠れる様子を見かけて故意に邪魔をする。郭華は毛胡に銀子三銭を持たせて追い出し、王月英と夜に土地廟での逢瀬を約束する。その後の展開と結末については、本文で以下のように描かれる。

二人私約土地廟、土地廟内會佳期、月英佳人去得早、等候郭家小書生、更深不見情人到、姑娘珠淚往下傾、睡鞋一雙來丟下、粉壁題詩與情人。詩曰、月英寫詩、約定佳期臨此廟、誰知天意不成雙、今宵莫想偕連理、淚洒湘妃兩斷腸。佳人哭罷回去了、再言郭華小才郎、只因多飲幾杯酒、耽誤終身好風光、次日來到土地廟、不見多姣月英女、只見粉壁留詩句、一雙睡鞋地當中、方知姻緣自誤了、想思病兒纏在身、回家未到一個月、一命歸陰見閻君、月英也得想思病、雙雙魂靈到天堂、玉皇面前掛了號、准他二次下凡程、金童投到梁家去、玉女投生祝英台。欲知轉世姻緣事、山伯書中再追尋。月英在此講完了、要看二本說清白。

ふたりは土地廟で会うことを約束した。土地廟での逢瀬の期日、月英は早く行き、郭家の書生を待った。夜が更けても想い人は現れない。娘は涙をはらはら落とし、睡鞋

をその場に捨て置き、壁に想い人への詩を書きつけた。詩に曰く、「月英詩を写く、佳期に約定し此の廟に臨む、誰が知る天意雙つに成らざるを、今宵連理を偕にするを想う莫れ、涙洒ぎし湘妃は両ながら腸を断たれん。」月英は泣きやむと家路についた。さて、郭華はというと、ただ酒を飲み過ぎたばかりに、一生の大事をしくじってしまった。翌日、土地廟を訪れたが、月英の姿は無く、ただあるのは壁に残された詩のみ。睡鞋が一足床にある。ようやく姻縁を反故にしてしまったことを悟ると、相思病を患い、家に帰って一か月もしないうちに、閻君と会うことになった。月英も相思病を患い、二人の靈魂は天宮に到り、玉皇の御前に呼ばれ、二度目は、金童は梁家へ生まれ変わり、玉女は祝英台に生まれ変わるよう言いつけられた。転生姻縁の事が知りたければ、山伯の書で続きをご覧ください。王月英のお話はここで終わり、詳しくは二冊目を読めば明らかに。

【表 9】1 長沙刻本『王月英賣胭脂』13a~14a)

『緑窗新話』などで古くから伝わる内容と異なり、郭華と王月英は結ばれず、共に相思病を患って死んでしまう。そして、金童と玉女は天界に戻り、玉皇から次は梁山伯と祝英台に生まれ変わって姻縁を全うするように言われた。ここから、湖南説唱本『王月英賣胭脂』は、郭華と王月英から梁山伯と祝英台への「二世姻縁」で語られていたことが分かる。

また、第3節でも改めて論じるが、湖南説唱本以外に、上海石印説唱本、北方の子弟書や、梆子腔、京劇、豫劇、黄梅戲などの各地方劇でも「売胭脂」故事は広く採用された。上海石印説唱本は湖南説唱本を翻印したものだが、その他の内容は、いずれも二人の恋の駆け引きや、恋仲になったところで母親が帰って来て邪魔をされたり或いは許されたりと喜劇的な要素が多く、金童玉女の転生姻縁という要素は描かれない。

もしかしたら、湖南説唱本での「売胭脂」故事の悲劇的な展開は、上に引用した物語の最末尾で、転生姻縁の続きが知りたければ、「山伯」の書、つまり「梁祝」故事を読むようにという宣伝文句が記されたように、転生姻縁の物語として出版するために、湖南の書肆が意図的に改変したものとも考えられる。

2.3. 「梁祝」故事と湖南における「三世姻縁」の流行

2.3.1. 「梁祝」故事形成の背景

次に、湖南説唱本『新刻秦雪梅三元記』、『王月英賣胭脂』が共に転生先として採用する「梁山伯と祝英台」の「梁祝」故事と転生姻縁について考察したい。

「梁祝」故事は、梁山伯と祝英台を主人公とする中国の四大民間故事のひとつである。以下に挙げるのは、清の翟灏『通俗編』卷三十七「梁山伯訪友」である。この話は、唐・張説『宣室志』を引くため、「梁祝」故事の古い記録とされる¹⁶。

上虞の祝氏の娘の祝英台が男装して遊学し、会稽の梁山伯と共に学ぶ。祝英台は先に故郷へ帰り、梁山伯は二年後に祝英台を訪ねる。そこで初めて祝英台が女性だと知り驚く。梁山伯は祝英台を娶ろうと考えたが、既に馬氏と婚約していた。その後、梁

¹⁶ 現存する『宣室志』にこの話は未収録であるため、確実な資料だと断定はできないが、唐末に晋の話として「梁祝」故事が伝わっていた可能性を示す。

山伯は鄞県の知事となるも病死し、鄞城の西に葬られた。祝英台が馬氏に嫁ぐ日、彼女を載せた舟が梁山伯の墓の近くを通りかかると大風が吹き前に進めない。梁山伯の墓があると知った祝英台は、墓を訪ねて行き慟哭する。すると、たちまち地面が割け、祝英台が地中に飛び込むと地面は閉じ、二人は同じ墓に共に埋葬された。晋の謝安はこの墓を「義婦塚」と奏上した。¹⁷

また、現在までに伝わる「梁祝」故事では、祝英台が梁山伯の墓に飛び込んだ後、現世で結ばれなかった二人の魂は蝶と化して天に飛び去るのが一般的である。越劇などでも、この場面は幻想的な演出で演じられている。梁山伯と祝英台の伝説と、蝶に化すという要素が結びついたのは比較的早く、唐末の羅鄴の佚詩「蛺蝶」に見ることができる。

「蛺蝶」詩 羅鄴（『夾注名賢十抄詩』¹⁸卷下）

草色花光小院明	草色花光き小院明らかに
短牆飛過勢便輕	短牆飛び過ぎ勢便ち輕ろし
紅枝裊裊如無力	紅枝裊裊として力無きが如し
粉翅高高別有情	粉翅高高として別れて情有り
俗説義妻衣化狀	俗に義妻は衣狀を化すと説き
書稱傲吏夢彰名	書に傲吏は夢に名を彰らかにすと稱す
四時羨爾尋芳去	四時羨む爾の芳を尋ね去り
長傍佳人襟袖行	長に佳人の襟袖に傍ひて行くを ¹⁹

唐末の羅鄴の「蛺蝶」詩を収録する朝鮮本『夾注名賢十抄詩』は、新羅末・高麗初に編選された『十抄詩』に、朝鮮神印宗の学僧子山が注釈を施した書で、唐・新羅人 105 首の佚詩と佚文が収められる。高麗忠王（復位）六年（後三年、1337）の刊本があり、およそ南宋末から元中期に成立したと推定される。『夾注名賢十抄詩』と「梁祝」故事の関係について、日本では、芳村（2006）²⁰による論考があり、上記の羅鄴「蛺蝶」詩の第五句「俗説義妻衣化狀（俗に義妻は衣狀を化すと説き）」についても、「この句は、梁山伯の死に殉じ、黄泉路に向かった「義妻」祝英台の衣が蝶に化す「梁祝故事」の最も印象的な情節を詠じており、この説話と蝶の結びつきが相当に古いことを示す貴重な資料となっている。」と指摘される。従来、宋の薛季宣「遊竹陵善権洞」詩をもとに「魂が蝶に化す」という観

¹⁷ 原文は以下の通り。「英台、上虞祝氏女、偽為男装游学、與会稽梁山伯者同肄業。山伯、字處仁。祝先歸。二年、山伯訪之、方知其為女子、悵然如有所失。告其父母求聘、而祝已字馬氏子矣。山伯後為鄞令、病死、葬鄞城西。祝適馬氏、舟過墓所、風濤不能進。問知山伯墓、祝登号慟、地忽自裂陷、祝氏遂并埋焉。晋丞相謝安奏表其墓曰義婦塚。」

¹⁸ 芳村弘道編『十抄詩・夾注名賢十抄詩』（汲古書院、2011）参照。

¹⁹ 書き下しは、芳村弘道「朝鮮本『夾注名賢十抄詩』中の「梁山伯祝英臺傳」と「梁祝故事」説唱作品との關聯」『松浦友久博士追悼記念中国古典文学論集』（研文出版、2006）p. 785 に拠った。

²⁰ 朝鮮本『夾注名賢十抄詩』については、芳村弘道「朝鮮本『夾注名賢十抄詩』の基礎的考察」『学林』第 39 号（2004）：pp. 44-99 に詳しい。「梁祝」故事との関係については、注 19 前掲論文芳村（2006）pp. 784-798 や、査屏球「新見最早的《梁山伯與祝英台傳》——兼論梁祝故事在唐宋流行」『中国古代文学研究高層論壇論文集』（中華書局、2004）がある。

点から「梁祝」故事の形成が考察されてきたが、羅鄴の佚詩「蛺蝶」の発見により、「衣が蝶に化す」という伝説の方がそれよりも早く、遅くとも唐末までに存在したことが明らかとなった²¹。

また、『夾注名賢十抄詩』には、第五句の注²²に『梁山伯祝英台伝』という民間の歌辞を録している。『梁山伯祝英台伝』は、全文七言六十句、四百二十字（欠二字）から成り、途中「云云」と省略されている部分も多いが、『夾注名賢十抄詩』の成立年代から鑑みて、中国から高麗に伝わった南宋・元の説唱作品の唱詞である可能性が指摘される²³。以下に、五句の注に収録される『梁山伯祝英台伝』から、梁山伯が祝英台を訪ねて女と知った箇所から最後までを挙げると、

因茲感得相思病、當時身死五魂颺、葬在越州東大路、託夢英台到寢堂、英台跪拜
哀哀哭殷勤、酒向墳堂、云云、祭曰、君既為奴身已死、妾今相憶到墳傍、君若無靈教
妾退、有靈須遣塚開張、言訖塚堂面破裂、英台透入也身亡、郷人驚動粉々散、親情隨
後援衣裳、片片化為胡蝶子、身變塵灰事可傷、云云

これにより相思病を患うと、すぐ身罷り五魂飛び、越州東大路に葬られ、英台の寢室に到りて夢枕に立つ。英台は哀哭して丁寧に墓を祭った。（略）祭文を捧げるに、あなたは私を想い亡くなりました。私は今あなたを想い墓まで来ました。もしあなたの靈魂がここに居なければ私を去らせ、居るのであればどうぞ墓を開けてください。言い終わると墓が裂け開き、英台は飛び込んで命を落とした。人々は驚いて散り散りに去り、親族はすぐに衣服を取りつかんだが、ひらひらと蝶と化し、体は灰塵に帰し痛ましいばかりであった。（略）

梁山伯が相思病を患って亡くなる等の件は、『宣室志』の話には描かれていないが、『梁山伯祝英台伝』には描かれる。『梁山伯祝英台伝』は、後世まで伝わる最も人口に膾炙した民間故事や説唱の内容と近似しており、この種の「梁祝」故事では最古の作品に位置づけられる。また、この「梁祝」故事は、物語の骨子そのままに、時代を経て、小説、戯曲、説唱文芸、民間伝説など様々な媒体によって語られ、演じられ続け、各地の地域文化

²¹ 注 19 前掲論文芳村（2006）は、「祝英台の魂が蝶になったという「魂化蝶」説が最も早く見られるのは、宋の薛季宣「游祝（ママ）陵善権洞」詩（四庫全書本『浪語集』巻四・『宋詩記事』巻五七「游竹陵善権洞二首」其一）であり、「魂化蝶」は宋代になって韓憑説話から変転して「梁祝故事」の説話になった、と銭南楊「祝英台故事叙論」（1930年2月「民俗周刊」第93～95合刊初出。いま2000年10月、中華書局『梁祝文化大観』学術論文巻による）が論じて以来、後続の研究はすべてこれに従っている。銭氏の説は「目今の材料に拠って論ずれば」と前提していたが、羅鄴「蛺蝶」詩という新資料によって、「梁祝故事」の「化蝶」説話が唐末にまで早まることになり、「魂化蝶」よりも祝英台の衣装が変じたという「裙化蝶」伝承のほうが古いと見なさねばならなくなった。」と述べる。

²² 第五句の注には併せて初唐の梁載言『十道志（十道四蕃志）』を挙げ、「十道志明州有梁山伯塚。注、義婦竺（祝）英台同塚」が引用される。注 19 前掲論文芳村（2006）は、『十道志』の記載が梁山伯と祝英台について言及する最古かつ確実な資料であるとし、「明末の徐樹丕『識小録』巻三に梁祝伝説が梁の元帝『金樓子』に記載されているというが、現行の『永樂大典』輯佚本に見えない。徐樹丕が旧本に拠った可能性もあるが、他の証左なく、『識小録』を確実な資料とみなすことは困難である。」と指摘する。

²³ 注 19 前掲論文芳村（2006）に詳しい。

を吸収して様々に変容しながら、全国各地に広く流布した²⁴。

その流布の過程で、現世で結ばれない梁山伯と祝英台が、他の有名民間故事の男女に転生するという展開の「梁祝」故事も、各地の民間伝説、説唱など各種媒体で編まれるようになるのだが、文字テキストとして広く流通したのは、清末民初の湖南説唱本と上海石印本が主である。

なお、本章での「梁祝」故事に関する資料収集範囲は、筆者による国内外の図書館に所蔵される説唱本調査以外に、路工編『梁祝故事説唱集』（上海古籍出版社、1985年）、周静書主編『梁祝文化大観』故事歌謡巻、曲芸小説巻、戯劇影視巻、學術論文巻（中華書局、1999年）、周静書編、渡辺明次訳『梁祝リャンチュウロ承伝説集』（日本僑報社、2007年）などを含む。各書に収録される「梁祝」故事に関する資料は、路工編『梁祝故事説唱集』に鼓詞2編、木魚書3編、弾詞2編、周静書主編『梁祝文化大観』の「故事歌謡巻」には民間歌謡資料36編、「曲芸小説巻」には説唱資料として、弾詞4編（2種は『梁祝故事説唱集』と重複）、木魚書3編（全て『梁祝故事説唱集』と重複）、鼓詞3編（1種は『梁祝故事説唱集』と重複）、宝巻1編を中心に、蓮花落、揚州清曲、淮北花鼓調など全25編が収録されている。いずれの書にも湖南説唱本、上海石印説唱本は収録されていない。

2.3.2. 湖南説唱本『新抄繡像祝英台』

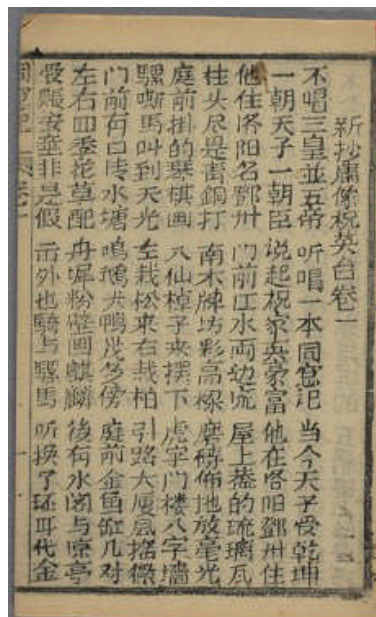
湖南説唱本で出された「梁祝」故事のテキストの書誌情報は以下の通り。1、2とも中身は同じくし、封面の書肆名のみ異なる。また、【表10】1の中湘：九總三元堂刻本は巻四の巻首題下に「文星堂」という書肆名が印刷されており、湖南省の各書肆で版木を使い回して刷っていたことが窺える。

【表10】

書名	封面題	刊記	所蔵箇所	転生姻縁の類型
1 新抄繡像祝英台	繡像祝英台/新抄/梁山伯同窗記/百五十冊/中湘九總三元堂歌書發客	中湘：九總三元堂刻本（巻四巻首題下に文星堂）	上図、復旦、湖南、浙江、首図×2部、演博	梁山伯・祝英台 → 郭華・王月英 → 商琳・秦雪梅
2 新抄繡像祝英台	梁山伯祝英墓/新抄/梁山伯同窗記/百五十冊/長沙誠典堂發兌	長沙：誠典堂刻本	早大、大木	同上
3 新刻祝英臺全本		洪江：左文堂刻本	上図（欠本）	不明
4 新刻祝英台全本		永州：文順堂刻本	上図（欠本）	不明

²⁴ 澤田瑞穂『中国の伝承と説話』「考説祝英台」（研文出版、1988）に詳しい考察がある。

図【表 10】1 『新抄繡像祝英台』中湘：九總三元堂刻本 封面、1a



形式：10行×7字句3句
 4巻、全41葉
 15.5×9.5cm
 13.6×8.5cm(匡郭寸法)

湖南説唱本『新抄繡像祝英台』の中で、金童玉女の転生姻縁が語られる結末の場面を以下に挙げる。

…我妻闖入何方去、英台今日闖入墳、等我與你一同行、馬郎也闖墳台内、即刻開來即刻閉、黃土開釋放毫光、轎夫嚇得無主法、轎夫就把三家報、報與三家得知道、三家父母得知音、就往墳前見分明、來到墳前仔細看、並無形引怎麼幹、這庄奇事慌了張、三家哭得泪汪汪、三家哭得肝腸斷、怎麼不見嬌兒面、怎奈只得挖墳台、挖開墳台再安排、開棺揚蓋把屍見、看他真假如□□、開了棺木並無人、三塊麻石在中存、吩咐轎夫抬麻石、抬回家中看緣故、狂風大雨起烏雲、青天蔽日響雷公、抬至□□橋上過、忽然橋上把□□、三塊麻石吊江心、毫光閃雷不非輕、左尋右尋尋不見、哭見三隻鴛鴦現、三隻鴛鴦一齊飛、父母哭得好傷悲、變作三隻水鳴鳥、馬郎跟在後頭□、兩隻同伴一隻單、古記留得此時間、一世英台梁山伯、姻縁未成少修得、二世月英與郭華、販買臙脂就是他、三世商淋(ママ)雪梅女、命將投胎宰相府、□□□□割手巾、三世才得結為婚

…妻は飛び込んでどこへ行ったのか、祝英台が今日墓に飛び込んだ、私も一緒に行くから待ってくれ、と馬郎も墓の中へ飛び込んだ。墓は開いたかと思うとあっという間に閉じ、地面からまばゆい光が一面に放たれた。籠かきは驚くがどうすることも出来ず、すぐ三家に報告した。三家に事の次第を伝え、各家の両親は知らせを聞くと、墓までやって来て確かめた。墓前に来て仔細に見ても、影も形も無くどうしたことか、この奇妙な出来事におろおると、三家はとめどなく涙を流し、胸も張り裂けんばかりに慟哭する。どうして娘は消えたのか、ただ墓を掘り起こすほかなく、墓を掘り起こすよう手配し、棺を開けふたを持ち上げ屍を見るに、嘘か真か(判読不明)、棺の中に人影は無く、三つの麻石が転がっていた。籠かきに言いつけて麻石を運ばせた。家まで担いでいってわけを調べようとしたが、狂風と大雨に黒雲たれこめ、青空はかき消

され雷が鳴り響く。(判読不明)橋を過ぎたところで、突然、三つの麻石が川の真ん中へと転がり落ちた。激しく閃光が走り雷鳴がとどろく。左右を探しても見つからず、泣きながら見れば三羽の鴛鴦が現れ、三羽の鴛鴦は一齊に飛び立った。両親たちがひどく悲しむ中、三羽の水鳴鳥に変化した。馬郎は後ろに付き、二羽は連れ立ち一羽は単独で飛んでいった。昔の話にこの時のことが残されており、一世の祝英台と梁山伯が、姻縁を全うしなかったのは修行が足りず、二世の王月英と郭華、臙脂を買い入れたのがまさに彼、三世の商琳と秦雪梅は、宰相の屋敷に生まれ変わり、(判読不明)、三世でようやく結ばれた。

(【表 10】1 中湘：九總三元堂刻本『新抄繡像祝英台』40b～41a)

この結末は、民間伝説などで広く知られる「梁祝」故事とは異なり、祝英台だけでなく馬郎も後を追って梁山伯の墓に飛び込み、三人は先ず石となり、その後鳥に変化し飛び去って行く²⁵。そして、三世にわたる姻縁が語られ、一世が梁山伯と祝英台、二世が郭華と王月英、更に三世では商琳と秦雪梅に転生し、そこで姻縁は全うしたと述べられる。

また、湖南説唱本以外にも、金童玉女の転生姻縁について言及する「梁祝」故事、上海石印説唱本、浙江地域の民間故事などにも存在することが分かっている。「転生姻縁」の人物の組み合わせが湖南説唱本のものと共通するのかどうかに関する詳しい分析は次節で行いたい。

以上のように、湖南説唱本の各物語を、金童玉女の転生姻縁を手がかりにひとつひとつ調べて行くと、3種の物語の中に転生姻縁を介した繋がりを確認することができた。そのうち『新刻秦雪梅三元記全部』、『新抄繡像祝英台』の間では、「梁山伯・祝英台→郭華・王月英→商琳・秦雪梅」と転生の組み合わせを同じくし、『王月英賣臙脂』は「郭華・王月英→梁山伯・祝英台」の「二世姻縁」で描かれた。『王月英賣臙脂』の転生の組み合わせは、『新刻秦雪梅三元記全部』、『新抄繡像祝英台』と一世、二世の順序は逆ではあるが、いずれにせよそれぞれの物語は相互に転生姻縁による関わりを持っていたことが明らかとなった。「売臙脂」故事、「秦雪梅」故事、「梁祝」故事は、湖南の書肆から出版される際に、転生姻縁の組み合わせを共有することを前提に創作されていたのではないかと推察される。

²⁵ 梁山伯と祝英台が石に変化する件は珍しいが、注 24 前掲書『中国の伝承と説話』pp. 33-57 に、伝承地不詳として、梁山伯と祝英台の魂が白石、両竹、青虹へと三段変化をした伝説が収録される(林蘭編『民間伝説』下冊、北新書局、1930 を引く)。また、澤田氏は、二人が鳥に化す伝説は浙江には無く、川劇演出『柳蔭記』第十一場「祭墳化鳥」(中国戯劇家協会編『戯曲劇本選集』北京：人民文学出版社、1953 所収)のト書きに「墳中より飛び出した二鳥が翼を比べて飛び去り、衆人大いに驚く」とあることから、川劇で上演する際に、四川に伝わる化鳥伝説を取り入れたと考察する。ただし、周静書編、渡辺明次訳『梁祝リャンチュウロ承伝説集』(日本僑報社、2007) pp. 130-137 には、浙江、江蘇省地域に広く伝わる伝説として、祝英台が墓に飛び込んだ際に、輿の担ぎ手が慌てて裳裾を引っ張ると、蝶に化して飛び去り墓が閉じ、掘り起こすと二人の姿は無く、二羽の鴛鴦が飛び去った。馬家の息子はこれを聞いて憤慨し、水に飛び込み溺死したという話が収録される。また、広州の中山大学に所蔵される説唱本『新刻祝英台全本』(楽平：寶仁堂刻本)も、祝英台が墓に飛び込んだ後、二人は鴛鴦に変化して飛び去る。楽平は江西省の地名なので、江西でも鳥に化す話は伝わった。寶仁堂刻本には金童玉女の転生姻縁の件は描かれない。

3. 湖南説唱本以外に見える転生姻縁の展開

では、湖南説唱本で「三世姻縁」を介して結び付いた「秦雪梅」故事、「売臙脂」故事、「梁祝」故事は、上海石印説唱本や他地域の説唱本で伝わる時、物語中の金童玉女の転生姻縁はどのように描かれたのだろうか。湖南説唱本と同じ転生姻縁の類型で広まったのか、或いは地域ごと、芸能ジャンルごとに異なる展開をみせたのだろうか。以下、「秦雪梅」故事、「売臙脂」故事、「梁祝」故事について、ひとつひとつ再現的に検証しながらその特徴を見ていく。

3.1. 「秦雪梅」故事と地獄めぐり

湖南説唱本以外で、金童玉女の転生姻縁を盛り込む「秦雪梅」故事の説唱テキストは、以下のものが現存する。いずれも湖南説唱本よりも後に出版された石印説唱本である。

【表 11】

	書名	封面題	刊記	所蔵箇所	転生姻縁の類型
1	新刻秦雪梅三元記全部	(中扉) 新出秦雪梅吊孝三元記	石印本	復旦	梁山伯・祝英台 →郭華・王月英 →商琳・秦雪梅
2	新刻秦雪梅三元記全部	(中扉) 新出秦雪梅吊孝三元記	石印本	復旦	同上
3	繡像説唱秦雪梅三元記	(中扉) 繡像秦雪梅三元記 /上海鑄記書局印行	上海：鑄記書局石印本	上図	同上
4	新刻秦雪梅三元記全部		上海：昌文書局石印本	国図	同上
5	秦雪梅吊孝三元記全本	醒世節義女子/秦雪梅吊孝三元記全本	石印本	上図	同上
6	繡像三元記秦雪梅全傳	秦雪梅三元記上卷/吟詩時相會 閨房中托夢 商公子求親 秦烈女吊孝/上海椿蔭書莊印行	上海：椿蔭書莊石印本	上図	同上
		秦雪梅三元記下卷/遊地府機房教子 状元榮歸 寫血書/上海椿蔭書莊印行			
7	絵図秦雪梅三元記宝巻	絵圖三元記秦雪梅寶巻/惜陰書局	上海：惜陰書局石印本	早大	なし

【表 11】 1~4 説唱本『秦雪梅三元記』系列

【表 11】 1~4 のテキストは、第 2 章【表 6】の説唱本『秦雪梅三元記』系列に属し、石印本として翻印されたものである。湖南説唱本と若干の文字の異同はあるが、同一系統のテキストであるため、第 2 節で挙げた「商琳と秦雪梅は金童玉女の生まれ変わりである」と説明する場面は全て存在する。

【表 11】 1、2 のテキストは中扉も巻首題も同じだが、魚尾がそれぞれ異なる。1 の魚尾は「繡像三元記」、2 は「秦雪梅」となっている。また、2 のテキストは相思病の場面で天界の玉帝や太白金星が登場して商琳（金童）の寿命について語る部分をカットしている。

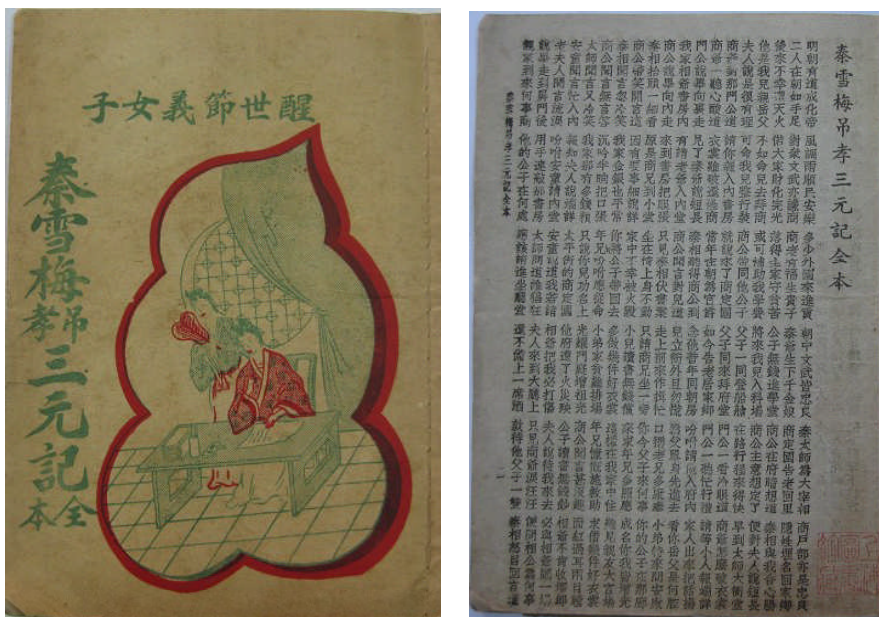
前節で挙げた湖南説唱本の引用文とほぼ同じだが、若干文言が異なるので、参考までに転生姻縁の描写がある箇所を以下に挙げる。（網掛けは刻本と異同のある部分）

…我與你做夫妻不過虛名、到只會只一次連是三次、因為我在上方眼角發情、只因為玉皇帝知此就理、將你我一雙雙貶下凡塵、頭一次在杭州英台山伯、同學堂三年正未曾沾身、也只為害相思你坑我命、你過了半年正也上天宮、到後來五百載又該劫數、第二次將你我貶下凡塵、每日裡買臙脂朝思暮想、我名字叫郭華你是月英、依然是兩下裡何嘗成就、到後來害相思又喪殘身、王月英尋自盡也上天宮、你母親一心的將你改嫁、在上界又過了五百餘載、又逢着該劫數三下凡塵、把你我又貶在杭州城內、我生年商門裡你在秦門…
 (【表 11】 1『新刻秦雪梅三元記全部』石印本、29b)

一世が梁山伯と祝英台、二世が郭華と王月英、三世が商琳と秦雪梅というこの「三世姻縁」の組み合わせは、湖南説唱本を初めとする説唱本『秦雪梅三元記』系列のテキストの流通によって広く流布したと考えられる。

【表 11】 5 『秦雪梅吊孝三元記全本』

全篇七字句で構成される。22 行×7 字句 6 句、全 20 頁。



図【表 11】 5 『秦雪梅吊孝三元記全本』石印本 封面、1 頁

このテキストは、第2章【表6】の説唱本『秦雪梅三元記』系列の内容を簡略化し、全面的に編み直されたものである。天界で玉帝と太白金星が商琳の寿命について協議する場面や、秦雪梅による地獄めぐりにおける三世姻縁の描写も共に存在するが、地獄めぐりに行く途中の茶庵の老婆などの件はカットされる。先ず、玉帝と太白金星が登場する場面を引用すると、

且表太白在天堂、太白金星奏玉帝、金童下凡商琳郎、他今已有十六歳、應該回職到天堂、前因商家無後代、伴同玉女下凡場…

さて、太白金星は天界で、玉帝に申し上げる、金童が俗世に降りて商琳となり、現在既に十六年が経ちました、もとの天界に戻さねばなりません。商家に跡継ぎがないので、共に玉女を俗世に降ろしました…

（【表11】5『秦雪梅吊孝三元記全本』8頁）

続いて、地獄めぐりの後に再会した金童（商琳）のセリフを挙げる。

我是金童你玉女、你我同在玉帝旁、一日你我偶調笑、玉帝知情怒胸膛、你我同遭貶下界、頭次投胎在蘇杭、頭次我是梁山伯、你是英台祝姣娘、杭州同学三年正、未曾識破是女娘、後來知你是女子、累我相思病臥床、後來一病身亡故、你也追我入墳堂、你我同把天庭上、五百年後又遭殃、二次你我貶下界、我叫郭懷買脂坊、你叫王月英小姐、二人許配成空場、後來仍然想病故、月英自盡回天堂、在天又過五百載、三次遭劫下凡場、投胎同在杭州地、你姓秦來我姓商…

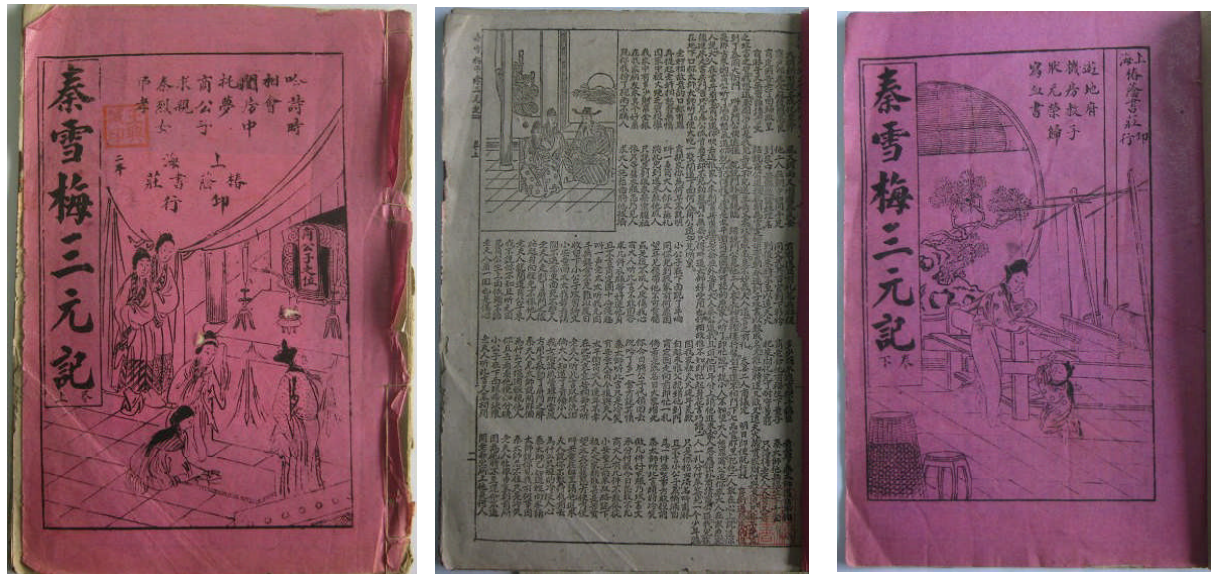
私は金童であなたは玉女、私たちは玉帝に仕えていたが、ある日偶々二人で戯れ合っていたら、玉帝が知ってお怒りになり、下界に落とされた。最初は蘇州と杭州、初め私は梁山伯、あなたは祝英台のお嬢さん、杭州で共に三年学び、女であることに気付かず、後にあなたが女だと知り、私は相思病で寝込み、後に病で死んでしまうが、あなたも私を追って墓に入り、二人で天界に戻って来たが、五百年後にまた災いに遭い、二度目に下界に落とされた。私は郭懷と言ひ臙脂店で買ひ、あなたは王月英、二人の婚約も虚しく、後に同じく相思病で死に、月英も自尽し天界に戻り、また天界で五百年が過ぎ、三度目に災いに遭って下凡し、共に杭州で生まれ変わり、あなたは秦姓で私は商姓…

（【表11】5『秦雪梅吊孝三元記全本』12、13頁）

物語の大筋は【表11】1～4と同じであるため、金童と玉女の生まれ変わりの説明も省略することなく描かれている。また、転生姻縁の組み合わせも、一世が梁山伯と祝英台、二世が郭懷（華）と王月英、三世が商琳と秦雪梅で共通している。

【表11】6 『繡像三元記秦雪梅全傳』

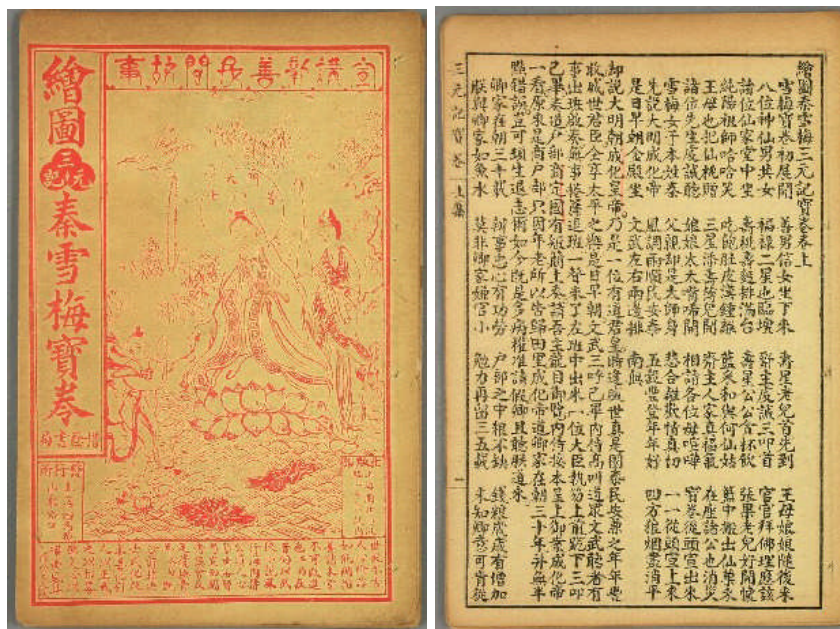
『繡像三元記秦雪梅全傳』は、第2章【表6】の説唱本『秦雪梅三元記』系列のテキストの文言を踏襲しながら節略したもの。



図【表 11】6 『繡像三元記秦雪梅全傳』上海:椿蔭書莊石印本
上卷封面、上卷 1 頁、下卷封面

【表 11】7 『絵図秦雪梅三元記宝巻』

『絵図秦雪梅三元記宝巻』は、いわゆる「新宝巻」²⁶と呼ばれる読み物として出版された宝巻テキストである。七字句と十字句（十字攢）の韻文と、合間に挿入される散文とで構成され、七字句の韻文の末尾に「南無」の文言を配して、若干ではあるが宝巻特有の宗教色も残している。



- ・ 18 行×32 字
- 7 字句 4 句、
- 10 (3・3・4) 字句 2 句
- ・ 全 18 頁

図【表 11】7
『絵図秦雪梅三元記宝巻』上海:惜
陰書局石印本 封面、1 頁

²⁶ 宝巻の変遷は、嘉慶初期をおよその境として大きく古宝巻時代と新宝巻時代に分けられる。元末明初に出現した原初宝巻、明の正徳初年から明末まで約二百年あまり盛行された教派宝巻を「古宝巻」とし、嘉慶以降から民国にかけて大量に刊行されたものを「新宝巻」される。光緒以後には、石印・鉛印のものも現れ、民国時代になるとほとんど読物化して、新聞実話や映画物語を種としたものまで作られ、宗教色はますます希薄になった。(辻リッ『宝巻と女性文化』早稲田大学博士學位論文 (2007) 参照)

『絵図秦雪梅三元記宝巻』の物語の大筋は、説唱本『秦雪梅三元記』系列と類似するが、全体的に編み直されて異同がある。以下に商琳が相思病を患う場面から見ていきたい。

相思病にかかった商琳は実家に戻る。秦家では商琳の身を案じる秦雪梅が、毎日夕暮れ時に庭に出て線香をあげ、商琳の病回復を天地に祈り続ける。信心深く祈祷を続けて一か月が経った頃、天界の太白金星が知るところとなる。

虔心祷告一ヶ月、惊動天上太白星、推開雲頭朝下看、指算来便知情、原来玉女園中告、保佑金童病離身。太白星一看、知道十六年前、玉帝開靈霄大會、金童对着玉女一笑、玉帝罰他二人下界、三世不同婚、以為儆戒失禮者戒、如今十六年已滿、商琳該當三月中歸天、不免待我去奏知玉皇、請旨定奪。

信心深く祈祷すること一か月、天界の太白星は驚き、雲を押し開け下界を見て、あれこれ考えて事情が分かった。なんと玉女が園中で、金童の身体から病が離れるよう天の加護をお祈りしているのではないか。太白金星は十六年前に玉帝が靈霄殿で大会を開いた際に、金童が玉女に笑いかけたので、玉帝が罰として二人を下界に降ろし、三世に亘って異なる婚姻を結び、礼を欠いた者への戒めとした。今十六年の期が満ち、商琳は三ヵ月中に天界に帰らねばならないはずである。玉皇のところへ行ってお知らせし、連れ戻すご許可を頂かねば。

【表 11】 7 惜陰書局石印本『絵図秦雪梅三元記宝巻 巻下』 4 頁)

そして、太白金星の知らせを聞いた玉帝は、下界から金童を連れ戻す決定を下す。太白金星は地府へ行き、閻魔に商琳の寿命を調べさせ、既に期が満ちていることが分かったと、牛頭馬に現世へ行き金童を捕えて来るよう命ずる。

その後、商琳は死去し、訃報を聞いた秦雪梅は商家に赴き、商琳の霊前で頭を打ちつけて後を追う、閻魔大王の居る冥界の役所に到着する。

…閻王一聲来吩咐、下面跪的是何人、青衣土地上前稟、她来尋夫叫商琳、大王命下来查看、片刻之間報王聽、啓稟大王查得商琳、乃是上界金童星下凡、壽該十六歲五月十五日身亡、已歸上界、陰司並無此人、秦雪梅乃是玉女下凡、但壽元未終、理該二十年後、尚要享福、然後歸位。

閻魔王は言い付けて、殿下で跪いている者は誰かと尋ねると、青衣の土地神が進み出て申し上げた、彼女は商琳という名の夫を探しに来ました。大王は命じて調べさせ、しばらくして報告を受けた。大王様に申し上げます、調べたところ商琳は天上界の金童の生まれ変わり、ちょうど十六歳五月十五日で死亡し、既に天界に戻っている、閻魔殿の役所にはもう居ません。秦雪梅は玉女の生まれ変わりですが、寿命はまだ終わっておらず、二十年後に福を享受してから、天界に戻ることになっています。

【表 11】 7 惜陰書局石印本『絵図秦雪梅三元記宝巻 巻下』 12 頁)

この後、秦雪梅は地獄めぐりに出かけるのだが、宝巻では、地獄めぐりを終えて金童（商琳）と再会し、二人が金童と玉女の生まれ変わりだと告げられるのみで、「三世姻縁」の件についてはカットされている。これは他の説唱本のテキストと大きく異なる点である。

淮戯『改良新纂秦雪梅十集』

その他、【表 11】には挙げなかったが、説唱本以外の出版物で、金童玉女の転生姻縁のモチーフを採り入れる「秦雪梅」故事に、淮戯『改良新纂秦雪梅十集』がある。現在、淮戯については、主に上海の大達書局、大通書荘から石版印刷された各種テキストが、台湾中央研究院傅斯年図書館に多数収蔵されている²⁷。

中でも大達書局のテキストは、出版年代が明記されているものがあるため、大よそ民国十七～十九年（1928-1930）年辺りに出版されていたことが分かる。また、大達書局は各物語共に統一した封面を用い、封面には『羅英訪賢』、『殺子報』、『蘭芳草』、『双槐樹』、『水漫藍橋』、『藥茶記』、『瓦車蓬』、『王清明』など、当時出版したと思われる48種の演目が印刷されている。その大達書局から石印出版された『改良新纂秦雪梅十集』は、全篇七字句を重ねる形式で、12行×32字（7字句4句）、10集、全90葉、途中でセリフや語りの散文が挿入される。基本的に、説唱本『秦雪梅三元記』系列の内容を踏襲するが、場面の描写が丁寧且つ詳細になり、分量も説唱本『秦雪梅三元記』系列よりも圧倒的に増えている。

中でも、秦雪梅が商琳を尋ねて冥界へ行き、土地神と共に地獄めぐりをし、現世に戻るまでの場面に紙幅が多く割かれ、全十集のうち三集の終わり（8b葉）から六集（5a葉）まで長々と、物語全体の約三分の一を占める。淮戯での秦雪梅は、四集、五集にわたる長くて辛い地獄めぐりの末に、六集でようやく商琳を探し当てる。以下は、地獄めぐりの果てに出会った金童（商琳）が秦雪梅に語りかける場面である。

雪梅姑娘你是聽、我把言詞説真情、我們不是凡間的、本是上方二星君、我是金童你玉女、二人還是在天庭、打壞一對玻璃盞、玉皇貶我下凡塵、新主貶我去受罪、叫我二人去投生、頭次我是梁山伯、你是英台祝釵裙、杭州攻書二年正、未曾失節去為婚、山伯相思歸西去、英台日後到幽冥、一直到靈霄殿、二次下凡又投生、郭華本是你投的、我就投的王雪英、買了胭脂有了意、兩下未就各離分、誰知一命生亡故、又到上界南天門、三次又把凡來下、商秦二家去投生…

雪梅よくお聞き、私が本当の話をしよう。私たちは俗世の者ではなく、もとは天界の二星君、私が金童であなたは玉女、二人がまだ天界に居た頃、対の玻璃杯を壊してしまい、玉皇は私を俗世に落とし、更に苦しい目に遭わせる為、私たちを生まれ変わらせた、最初は私が梁山伯で、あなたは祝英台、杭州で二年勉強に励み、婚約をしたが、山伯は相思病で亡くなり、英台もその後冥府に到り、靈霄殿にずっと居たが、二度目も下凡し生まれ変わった、郭華はあなたで、わたしは王雪英、胭脂を買い思い合ったが、二人は結ばれることなく離ればなれ、誰が生死の理由を知るだろう、また天界の南天門に到り、三度もまた下凡し、商家と秦家に生まれ変わった…

（淮戯『改良新纂秦雪梅六集』、4ab）

一世は梁山伯と祝英台、二世は玉女が郭華に、金童が王雪英に転生したとされる。「王雪英」と記されるが、胭脂を買う話なので恐らく郭華と「王月英」のことであろう。三世は商琳と秦雪梅となっており、ここでも転生姻縁の類型は、「梁山伯・祝英台→郭華・王月英→商

²⁷ 『俗文学叢刊』114-121冊に影印収録される。

琳・秦雪梅」とお決まりのパターンで変わることなく伝わっていたことが窺える。

蹦蹦戲『秦雪梅魂遊地府』



図 23 蹦蹦戲『秦雪梅魂遊地府』(北京:中華印書局鉛印本)¹ 封面、1 頁

また、蹦蹦戲『秦雪梅游魂地府』も、【表 11】には挙げていないが、書名から分かるように、秦雪梅による地獄めぐりの前半、すなわち、秦雪梅が商琳の霊前で頭を打ちつけて冥府に辿り着き、土地神と共に死んだばかりの商琳を探すため、一つ一つ地獄を見て回り、結局見つからなかった所までの場面を描く(全 10 頁)。以下に、第 2 章【表 6】説唱本『秦雪梅三元記』系列に属す石印本(【表 11】1~4)を取り上げて比較すると、蹦蹦戲と説唱本『秦雪梅三元記』系列の石印本は、使用される文言が非常に類似する²⁸。以下に、秦雪梅が商家にお悔みに行き、棺の前で頭を打ちつけ後を追う場面を比較してみたい。

説唱本『秦雪梅三元記』系列(【表 11】1 石印本)

我今日更深後無人知道、到陰司找好讓我尋夫君、想起來商公子去也不遠、只等我黃泉路下午(ママ)之人、那小姐在靈前燒錢化昏、雙膝跪哭一陣一陣傷心、叫一聲商公子等我一等、你那裡等等我泉下同行、我今日在靈前燒錢化紙、到後來再莫想我把紙焚、即退回三四步一頭撞死、撞死了女住人命赴幽冥、那魂靈在空中全然不曉

蹦蹦戲『秦雪梅游魂地府』(図 23 北京:中華印書局鉛印本)

我今夜三更後無人知曉、到陰司去找我的夫君、我思想商公子去也不遠、黃泉路必然得相逢、(燒紙)、雪梅女在靈前焚化小紙、雙膝跪哭一聲一陣傷心、叫一聲商公等我一等、黃泉路等等我做伴同行、我今日在靈前燒錢化紙、到後來在莫想我把紙焚、我不如在靈前一頭撞死、到陰間同夫主好去相逢、哭罷多時抬身起、不如一死赴幽冥

²⁸ 湖南説唱本など刻本よりも、出版年代の新しい石印本テキストの文言と近似するため、蹦蹦戲は上海を中心に流通した石印説唱本『秦雪梅三元記』を参考にしたと考えられる。

下線で対照したように、文字レベルで石印説唱本の影響を受けて、蹦蹦戲のテキストが創作されたことが分かる。「三世姻縁」の件は、この『秦雪梅游魂地府』の続きの後半で金童（商琳）が登場してから語られるはずなので、本テキスト内では「三世姻縁」を述べる場面は現れない。ただし、第2章【表6】説唱本『秦雪梅三元記』系列と同様に、地獄めぐりの最初に、土地神と秦雪梅が寂れた村に立つ茶館を通りかかる場面があり、そこで土地神が「千萬不可將茶飲、如飲此茶不能回生（絶対にお茶を飲んではいけない、もしこのお茶を飲んだら生き返ることが出来なくなるぞ）」と秦雪梅を戒めたが、お茶を飲もうとしたので、土地神が老婆に対し、「（土地唱）叫茶婆你不知聽我細講、他本是金童妻玉女遊陰、將地府全遊遍還回陽世、若吃茶迷心壳（殼）難以回生（土地神ウタ、婆さん、知らないなら良く聞きなさい、彼女は金童の妻の玉女で地獄めぐりをしている、全てめぐり終わったら現世に戻るのも、もしお茶を飲んで心に迷いが出たら生き返るのが難しくなる）」と注意したセリフに、金童玉女の生まれ変わりであることが言及されている。

「三世姻縁」の類型への調査、および淮戲や蹦蹦戲などの文字テキストとの比較を通して、【表6】説唱本『秦雪梅三元記』系列のテキストは、「秦雪梅」故事の流通の中心を築いていたこと、また説唱本だけでなく、他の芸能で演じられ且つテキストとしても出版された「秦雪梅」故事の内容にも、大きな影響を与えていたことが分かる。また、物語によっては伝承の過程で転生姻縁の組み合わせが変わってしまうものもあるが、「秦雪梅」故事は、【表6】説唱本『秦雪梅三元記』系列のテキストが、「秦雪梅」故事の全国的な流布を支える基盤として、広く流通していたので、上海石印説唱本においても「三世姻縁」の類型は変容することなく、「梁山伯・祝英台→郭華・王月英→商琳・秦雪梅」のお決まりの組み合わせで流布したのであろう。

3.2. 「売臙脂」故事

3.2.1. 上海石印説唱本『新出抄本買臙脂』

第2節でも既に述べたが、「売臙脂」故事は、湖南説唱本と上海石印説唱本で出版されたテキストにのみ、金童玉女の転生姻縁が描かれる。上海石印説唱本の現存するテキストは一点のみ確認することができる。

【表12】

	書名	封面	刊記	所蔵	転生姻縁の類型
1	新出抄本買臙脂	繪圖藍橋相會 附王月英賣臙脂 最新改良唱詞/金童玉女三次被 謫藍橋虛會仍返天庭	上海:文益書 局石印本	上図	郭華・王月英 →梁山伯・祝英台

【表 12】 1 『新出抄本買胭脂』

毎半葉 17 行×7 字句 4 句、全 7 頁。



図【表 12】 1 『新出抄本買胭脂』 上海：文益書局石印本 封面、10、11 頁

このテキストの出版形態で特徴的なのは、封面題「繪圖藍橋相會 附三月英賣胭脂」からも分かるように、『繪圖藍橋相會』（1-9 頁）の物語の後ろに、『新出抄本買胭脂』（10-16 頁）が付録として置かれ、二つの物語が合本で出版されたことである。また、封面にはその他に「金童玉女三次被謫藍橋虛會仍返天庭（金童と玉女、三度謫せられて藍橋にて虚しく会うもやはり天庭に返る）」とあり、あくまで出版のメインは『繪圖藍橋相會』であった。

付録で付いてくる『新出抄本買胭脂』の中身は、湖南説唱本『王月英賣胭脂』を完全に翻印したものであるため、転生姻縁の組み合わせも、湖南説唱本そのままに、「郭華・王月英→梁山伯・祝英台」であり、本文も同じく「欲知轉世姻縁事、山伯書中再追尋。（転生姻縁の事が知りたければ、続きは『山伯』書をご覧ください）」という文言で締めくくられる。つまり、石印説唱本『新出抄本買胭脂』の物語中には、合本出版された『繪圖藍橋相會』と繋がる転生姻縁の要素は一つも出て来ないのである。では、何故「藍橋会」故事が、上海石印説唱本で出版される際に関連するようになったのか。このことについては改めて第 4 節で考察したい。

3.2.2. その他

「売胭脂」故事は、その他の説唱や地方劇などでは、どのような内容で伝わったのか。子弟書『賣胭脂』、京劇『買胭脂』、安徽廬劇『郭華買胭脂』、黄梅戲『買胭脂』、梆子腔『買胭脂』について、それぞれ現存するテキストや目録などを通して内容を確認する。

先ず、子弟書『賣胭脂』は、清蒙古車王府所蔵の抄本テキストが残されている。内容は、ある日、郭華が胭脂店の王月英を見かけ、その美貌に惹かれて店を訪れ、胭脂を買うことなく王月英を口説きにかかる。娘は店の看板を下ろして閉店にし、二人が懇ろになってい

る所へ、外で商売をしていた王月英の母親が戻って来たので、娘は観念して恐る恐る事の次第を話し出す所で終わる。

京劇『買胭脂』²⁹も、子弟書の展開と殆ど同じで、科挙受験生の郭懐（華）が、受験に向かう途中、胭脂店の王月英を見かける。娘の美しさに惹かれ、何度も店に来て話しかけ、遂に結ばれるが、ちょうど母親が戻って来てしまう。一度は郭懐を叱り飛ばして追い出した母親が、最後に娘に対し「愛約約莫說是我女兒、見了這樣縹緞面孔、就愛他、就是年紀這樣大的人見了、我也喜歡他哩（ああ、お前、こんなに美しい顔を見たら、好きになるわね。こんないい年した自分が見ても、彼を好きになるもの）」と理解を示して許すという、子弟書には無い喜劇的な終わり方をする。

安徽廬劇『郭華買胭脂』³⁰、黄梅戲『買胭脂』³¹なども、『中国劇目辞典』では、いずれも京劇とほぼ同じ内容であると記されているので、郭華が王月英にちょっかいを出しながら結ばれ、途中で母親が帰ってくるという展開だと推測される。

梆子腔『買胭脂』³²で演じられる物語は、湖南説唱本『王月英賣胭脂』と殆ど展開を同じくし、途中で雑貨売りの老人が店に邪魔に入って来てからの三人のやりとりも、銀子三銭を持たせて追い出す件も同じである。ただし、両者は結末が大きく異なる。梆子腔『買胭脂』は、雑貨売りを追いだした後、郭華と王月英が天地を拝して結婚の誓いをするとともに、再び雑貨売りが現れ、間違えて郭華とキスをしてしまうという落ちで終わる。一方、湖南説唱本および上海石印説唱本は、先述のとおり、雑貨売りの毛胡を追い出した後、二人で天地を拝して結婚の誓いをし、夜に土地廟での密会を約束するが、深酒をした郭華が約束の時間に現れず、失意のまま二人は相思病を患って亡くなり、現世で結ばれずに転生するという結末になる。

各種テキストの内容から鑑みても、「売胭脂」故事の悲恋化と、金童と玉女の転生姻縁の付加は、湖南説唱本独自のものだったと言えるだろう。

²⁹ 『戲考』（上海：中華図書館、1917）参照。

³⁰ 王森然遺稿『中国劇目辞典』（河北教育出版社、1997）著録、p. 641

³¹ 注 31 前掲書『中国劇目辞典』著録、p. 706

³² 『綴白裘』所収

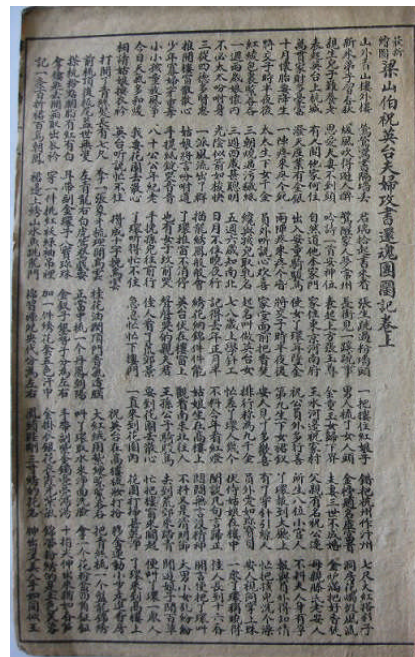
3.3. 「梁祝」故事

3.3.1. 上海石印說唱本

次に挙げるのは、金童玉女の転生姻縁が描かれる「梁祝」故事のうち、上海石印說唱本として出版されたテキストである。

【表 13】

書名	封面	刊記	所蔵	転生姻縁の類型
1 最新繪圖梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記	梁山伯祝英台卷上/上海椿蔭書莊發行	上海：椿蔭書局石印本	上図	郭華・王月英 →韋郎保・賈玉貞 →梁山伯・祝英台
2 繡像梁山伯祝英台夫婦功書還魂團圓記	梁山伯祝英台全本 二卷	上海：協成書局石印本	傅斯年	同上
3 新刻梁山伯祝英臺夫婦攻書還魂團圓記		民国石印本	上図×2部	同上
4 繡像梁山伯祝英臺夫婦攻書還魂團圓記		上海：槐蔭火房書莊石印本	上図	同上
5 新刻梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記	(中扉)	上海：文益書局石印本	復旦	同上



図【表 13】1

『最新繪圖梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記』上海：椿蔭書局石印本 封面、1頁

先ず【表 13】1~5 で注目したいのが転生姻縁の類型である。これまで見て来た湖南說唱本には無かった、「韋郎保と賈玉貞」という新たな主人公の名前が出現する。上海石印說唱本の「梁祝」故事では、湖南說唱本の「梁山伯・祝英台→郭華・王月英→商琳・秦雪梅」

とは異なる、「郭華・王月英→韋郎保・賈玉貞→梁山伯・祝英台」の組み合わせで統一されたテキストが流通したようである。

【表 13】1～5 のテキストは、いずれも全篇 7 字句と 10 字句の韻文から成り、首巻題、形式、全文の文言もほぼ同じくする。このような規格を共有した「梁祝」故事が、確認できるだけでも、椿蔭書局、協成書局、文益書局、槐蔭山房といった上海の各書肆から出版されており、当時の人気作品だったと考えられる。また、湖南説唱本とは転生姻縁の組み合わせだけでなく、物語の結末も大きく異なるので、上海では「転生姻縁の物語」というモチーフだけ残しつつ独自に創作されたと言える。

【表 13】1～5 の「梁祝」故事の結末を簡単に述べると、祝英台が梁山伯の墓に飛び込むのを見た馬三郎は、驚いて祝英台の裳裙をつかむ。すると裳裙は蝶に変化してしまう³³。慌てた馬三郎は、自ら頭を打ちつけて冥府へ行き、閻羅殿に辿り着くと、泣きながら閻羅王に自分の妻となるはずだった祝英台を戻すよう訴える。すると閻羅は、

閻羅天子開言叫、三郎你且聽中腸、他是上方天仙女、玉女怎能配凡人、只因打破玻璃盞、夫妻三世不成婚、三郎聽說作了慌、閻羅天子聽端詳、非是我今將他愛、只因父母配成双、菩薩忙查簿子看、你的陽壽未曾終、今日送你還陽轉、莫想佳人女千金。

閻羅は口を開いて言うに、馬三郎よく聞きなさい、彼女は天界の天仙女、玉女がどうして俗人と結婚できよう、ただ琉璃の杯を壊したばかりに、夫妻は三世に亘り結ばれなかったのである。馬三郎は聴くと狼狽し、閻羅が話を詳しく聞くと、彼女を愛しているのではなく、両親が結婚を定めただけだと言う。菩薩が急いで帳簿を調べ、お前の寿命はまだ終わっていない、今日現世に送り返すから、女のことはもう考えるな。

(【表 13】1 『最新繪圖梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記』、12 頁)

このように、梁山伯と祝英台は金童玉女の生まれ変わりであること、彼らは三世にわたり結ばれない運命であることを告げる。現世に戻された馬三郎が墓を掘り起こすと、一対の白鶴が飛び去り³⁴、墓の中には何も無かった。事情が分からず家族が驚き涙を流す中、馬三郎は父親に「三郎就把爹爹叫、爹爹在上听原因、說起英台祝家女、本是仙女下凡塵、金童却是梁山伯、玉女就是祝家人（馬三郎は父親を呼び、父上原因をお聞きください、祝家の娘の英台は、実は仙女が俗世に降りたものでした。金童が梁山伯で、玉女が祝家の人になったそうです。）」と伝える。

そして、最後は、天界に戻った金童玉女の三世姻縁で物語が締めくくられる。

再表金童玉女星、山伯見了祝英台、喜笑盈盈到天台、金童玉女歸上界、去見天上玉帝君、玉皇大帝開金口、自從打破琉璃盞、罰下凡間走三巡、一世郭華賈臙脂、你是小姐王月英、二世藍橋韋郎保、你是玉女賈玉珍、三世他是梁山伯、你是英台女佳人、

³³ 祝英台の衣が蝶になる件は、『夾注名賢十抄詩』所収の羅鄴の「蛺蝶」詩と『梁山伯祝英台伝』に描かれており、古くから伝わる伝説を留めている。

³⁴ ここでも鳥に変化して飛び去る結末となる。注 25 前掲書『梁祝リャンチュウロ承伝説集』pp. 130-137 に収録される、浙江、江蘇省地域で広く伝わる、祝英台が墓に飛び込んだ際に、輿の担ぎ手が慌てて裳裙を引っ張ると、蝶に化して飛び去り墓が閉じた。掘り起こすと二人の姿は無く、二羽の鴛鴦が飛び去るという伝説とも類似する。

三世不曾為夫婦、一對童生上天台、紙馬錢糧火内焚、吟詩一首上天台、千里姻縁一綫牽、男婚女嫁總由天、不信且看梁山伯、夫妻三世不團圓、完。

さて、金童玉女であるが、山伯は祝英台を見ると、喜び笑いに満ち溢れ天台に着いた。金童玉女は天界に戻り、天界の玉帝君に拝謁すると、玉皇大帝が言うに、かつて琉璃の杯を割ってから、罰として俗世に降ろして三巡させた、一世で郭華が臙脂を買い、そなたが王月英、二世は藍橋の韋郎保、そなたは賈玉貞、三世は梁山伯、そなたが祝英台、三世にわたり夫婦になれなかった。天界に仕える童子が天台に上り、紙馬錢糧を火に燃やし、詩を一首吟じるに、千里離れた姻縁も少しの事で繋がりが出来るもの、男女の婚姻は全て天が定めるもの、信じなければ梁山伯をご覧あれ、夫婦は三世にわたって団円せず。お終い。(同上、12頁)

ちなみに、【表 13】1～5の石印説唱本が、翻印の際に基づいたと思しいテキストが存在する。路工『梁祝故事説唱集』に収録される『新刻梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓』（河南清末刻本³⁵）と物語中の文言が酷似する。ただし、大きく異なるのが、上海石印説唱本には冒頭4行目で「金童玉女歸下界、夫婦三年不成婚」と金童玉女の転生姻縁が述べられるが、この部分が河南刻本には全く無く、馬氏は冥府にも行かない。つまり、河南刻本を上海で翻印する際に、「三世姻縁」のモチーフは新たに付加されたものだったと考えられる。

木魚書『全本梁山伯即係牡丹記南音』³⁶や弾詞『新編東調大雙蝴蝶』³⁷にも、馬氏が二人の後を追って冥界へ行き、閻羅に祝英台の奪還を訴える件があるが、転生姻縁についての描写はない。一方、浙江、上海に伝わる民間伝説の中に、馬氏が閻羅から梁山伯と祝英台が金童玉女の生まれ変わりであり、二人は三世にわたり一緒になれない定めであることを聴くものがあるという³⁸。

3.3.2. その他

湖南説唱本、上海石印説唱本以外にも、金童玉女の転生姻縁を取り入れた「梁祝」故事は存在し、記録されている。

江苏、浙江、安徽、广西等地有梁祝原本是金童玉女下凡，以“三世姻縁”模式实现大团圆的传说；清代上海槐荫火房书庄刻本《梁山伯与祝英台全史》、鼓词《新刻梁山伯祝英台夫妇攻书还魂团圆记》及黄梅戏《下天台》、《三世縁》都提到梁山伯乃天上金童下凡、与玉女祝英台天生有姻縁关系、闽剧《裙边蝶》、越剧《梁祝哀史》等亦有类似情节。

³⁵ 路工編『梁祝故事説唱集』（上海古籍出版社、1985年）所収。末尾に「河南清末刻本に基づき、上海清末石印本で校勘をした」と付記がある。

³⁶ 36 前掲書路工編『梁祝故事説唱集』所収、清末広州芹香閣刻本編印のテキストを参照

³⁷ 注 36 前掲書『梁祝故事説唱集』所収、乾隆三十四年（1769）写定、道光三年（1823）文會堂補刻刊本編印のテキストを参照

³⁸ 注 25 前掲書『梁祝リャンチュウ口承伝説集』 pp. 86-93 参照。三世姻縁の詳しい類型は記されないが、編者による注記で、三世の夫婦とは孟姜女と万喜良、牽牛と織女、梁山伯と祝英台だとする。

江蘇、浙江、安徽、広西には、梁山伯と祝英台は実は金童玉女が俗世に降ろされたもので、「三世姻縁」の形式で大団円を遂げる伝説がある。清代上海槐蔭火書莊刻本『梁山伯与祝英台全史』、鼓詞『新刻梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記』および黄梅戲『下天台』『三世縁』は、いずれも梁山伯と祝英台は天界の金童玉女が下凡したもので、玉女である祝英台には生まれながらに姻縁の関係があるとす。閩劇『裙辺蝶』、越劇『梁祝哀史』なども類似の内容である

(王寧邦 (2012) 「梁山伯考」³⁹⁾

王寧邦 (2012) は、転生先の人物を具体的に挙げないが、「鼓詞『新刻梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記』」は、書名から判断して恐らく上海石印説唱本のことであり、「郭華・王月英→韋郎保・賈玉貞→梁山伯・祝英台」の組み合わせだと推測される。また、金童玉女の転生姻縁を描く「梁祝」故事の地域的な広がりには、江蘇、浙江、安徽、広西の地域の民間伝説や、福建の閩劇、浙江の越劇など、主に南中国を中心に語られていたと考えられる。

以下に、転生先の人物が明記される「梁祝」故事を取り上げ、転生姻縁の類型の特徴を見ていきたい。浙江地域に伝わる多数の「梁祝」故事を類型ごとに整理した、莫高 (1987) の考察によると、

三世、七世姻縁型：如流传宁波、嵊县等地的《蝴蝶会》、《三世縁》故事都叙述梁山伯与祝英台本为天上王母娘娘面前的金童玉女，因在蟠桃会上当众狂笑失礼。王母娘娘大怒，惩罚他们下凡投胎，受尽三世或七世生离死别的痛苦。太白星君若带他们下凡投胎。第一世是梁山伯与祝英台，第二世是郭华与王月英，第三世是韦郎保与贾玉珍。又说第一世是孟姜女与万喜良，第二世是牛郎与织女，第三世是梁山伯与祝英台。

三世、七世姻縁型：寧波、嵊県などの地の『蝴蝶会』、『三世縁』の物語は、いずれも梁山伯と祝英台が天界の王母娘娘に仕える金童玉女であり、彼らは蟠桃会にて公衆の面前で大笑いをするという失礼な振る舞いをしたので、王母娘娘は大いに怒り、罰として彼らを俗世に降ろし、三世或いは七世にわたる生き別れと死別の苦しみを味あわせた。太白星君が彼らの転生を任されたようだ。第一世は梁山伯と祝英台、第二世は郭華と王月英、第三世は韋郎保と賈玉珍であった。また、第一世が孟姜女と万喜良、第二世が牛郎と織女、第三世が梁山伯と祝英台というものもある。

莫高 (1987) 「浙江梁祝伝説流変考察記」⁴⁰⁾

「三世、七世姻縁型」に分類される「梁祝」故事が、浙江地域では多く存在したとある。転生姻縁の類型は、「梁山伯・祝英台→郭華・王月英→韋郎保・賈玉貞」とあり、上海石印説唱本『新刻梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記』と、転生の順序は異なるが、同じ人物の組み合わせを採用している。

また、河南の三弦書、墜子書、大調子、南路琴書では、梁山伯と祝英台から「藍橋会」

³⁹⁾ 王寧邦「梁山伯考」『江海學刊』第4期 (2012) :pp. 198-204

⁴⁰⁾ 莫高「浙江梁祝伝説流変考察記」『江、浙、瀘梁祝學術研討會論文』(1987)、周静書主編『梁祝文化大觀』學術論文卷 (中華書局、1999) pp. 341-359 所収のものを参照。

故事の主人公の魏世秀と藍瑞蓮へと転生するパターンで語られたという。

三弦書、墜子書、大調曲子和南路琴書都说“梁祝”转世将成为《蓝桥会》中的魏世秀和蓝瑞莲…

三弦書、墜子書、大調子、南路琴書は、「梁祝」が転生して『藍橋会』の魏世秀と藍瑞蓮になったと言う…

馬紫晨（1997）「梁祝中原説」⁴¹

その他、湖北省伍家淘村に伝わる民間故事『梁山伯与祝英台』では、梁山伯と祝英台は、魏奎元と藍玉蓮（「藍橋会」故事）から玉堂春と王三（「玉堂春」故事）へと生まれ変わる「三世姻縁」を以て描かれている。

梁山伯和祝英台一辈子未成亲，他俩死后又重新投胎，来到阳世。梁山伯姓魏，叫魏奎元；祝英台姓蓝，叫蓝玉莲。两个在蓝桥上相好，只为父母阻挡，又不能成亲。蓝玉莲脱只鞋放在桥边，魏奎元摘下帽子挂在桥上，一男一女又双双跳河死了。到第三代，祝英台投胎是玉堂春，梁山伯投胎是王三公子。“苏三爬堂”这天晚上，两个人才算团圆了。

梁山伯と祝英台は生涯結ばれることは無く、死後にまた新たに生まれ変わって現世に到った。梁山伯は姓は魏、魏奎元、祝英台は姓は藍、藍玉蓮。二人は藍橋で恋に落ちたが、両親の反対に遭い、また結ばれなかった。藍玉蓮は鞋を脱いで橋に置き、魏奎元は帽子を取り橋に掛け、それぞれ川に飛び込み自殺した。第三代目は、祝英台は玉堂春に生まれ変わり、梁山伯は王三に生まれ変わった。「蘇三爬堂」この日の夜に、二人はようやく団円を迎えた。

（湖北省伍家淘村民間故事『梁山伯与祝英台』⁴²）

以上の「梁祝」故事の主な転生姻縁の類型をまとめると次のようになる。

【湖南説唱本】 郭華・王月英→商琳・秦雪梅→梁山伯・祝英台

【その他】 郭華・王月英→韋郎保・賈玉貞→梁山伯・祝英台

梁山伯・祝英台→魏世秀・藍瑞蓮

梁山伯・祝英台→魏奎元・藍玉蓮→王三・玉堂春

このように、湖南説唱本とそれ以外で大きく二分されることから、湖南説唱本にみえる三世姻縁は、やはり湖南説唱本独自の組み合わせだったと言えるだろう。また、転生先として多く出現する「韋郎保と賈玉貞」や「魏世秀と藍瑞蓮」などの名前は一体誰かという、いずれも「藍橋会」故事の主人公を指す。伝承する「藍橋会」故事のテキストによっ

⁴¹ 馬紫晨「梁祝中原説」『尋根』第3期（1997）を参照。

⁴² 陶陽選編『中国民間故事大観』（北京出版社、1991）pp. 345-350 所収。また、注25前掲書『梁祝リャンチュウロ承伝説集』にも、湖北省に伝わる伝説として記載される。当該故事に関する研究に、劉守華「湖北“故事村”里伝承的梁祝伝説」『鄖陽師範高等専科学校学報』第23巻、第1期（2003）がある。

て、主人公の名前に当てられる漢字が異なるため、大きく上記の2種の呼称が存在するのだが、いずれにせよ、各種媒体で編まれた金童玉女の転生姻縁の要素を含む「梁祝」故事は、二世姻縁であれ、三世姻縁であれ、「藍橋会」故事の主人公との転生関係の組み合わせが主流であったことが分かる。

4. 「藍橋会」故事との関わり

4.1. 「藍橋会」故事とは

上述の通り、「梁祝」故事で描かれる転生姻縁の類型の中に「藍橋会」故事の主人公の名が良く取り上げられたが、「藍橋会」故事では、どのように転生姻縁が描かれたのだろうか。説唱テキストを中心に以下に見ていきたい。

清代から民国期に出版された説唱テキストによって広く伝わった「藍橋会」故事の大筋はこうである(主人公の名前は、説唱本により異なるので、ここでは便宜的に男女とする)。

ある日、男が藍橋近くの川で水を汲みに来ていた女と出会い恋仲になり、夜に藍橋の下で密会の約束をする。男は先に藍橋に着いたが、女はまだ来ていなかった。突然大雨になり川が氾濫するも、男は約束を守り待ち続けて溺死してしまう。雨が止んでから到着した女は事の次第を知ると、入水して後を追った、という結ばれない男女の悲劇を描く。そして、結末で転生姻縁が語られる。

この「藍橋会」故事の起源は、戦国期におけるエピソードとして文献にしばしば記録され、後に「尾生の信」で知られる、尾生の話に溯ることができる⁴³。『戦国策』「燕卷第九」にそのエピソードの記載があるので以下に挙げると、斉国から燕に舞い戻った蘇秦は、易王から「武安君、天下不信人也。(武安君は天下の不信の人なり)」と冷遇されるが、それに対して蘇秦が弁解をするセリフの中に、「使臣信如尾生、廉如伯夷、孝如曾参(臣をして信なること尾生の如く、廉なること伯夷の如く、孝なること曾参の如く)」という文言がある。続けて蘇秦は、この尾生が篤信であったばかりに起きた悲劇について、「信如尾生、期而不来、抱梁柱而死(信なること尾生の如きは、期して来らず、梁の柱を抱きて死せり)」と語った。信に篤い尾生は、(女と橋の下で会う)約束をし、(その女が)来なければ、(川が増水しても約束を守ることを頑なにしたため)橋梁を抱いたまま水に吞まれて死んでしまった⁴⁴、というこのエピソードは、『莊子』盗跖編にも「尾生与女子期於梁下、女子不来、水至不去、抱梁柱而死。(尾生は女子と梁下に期す。女子来たらず。水至れども去らず、梁柱を抱きて死す)」とあり、また、『淮南子』卷十三にも「尾生与婦人期而死之。直而證父。信而溺死。雖有直信、孰能貴之。(尾生は婦人と期して之に死す。直にして父を証し、信にして溺死するは、直信有りとも、孰か能く之を貴ばん)」とあり、高誘の注で「尾生、魯人、与婦人期於梁下、不至而水溺死。(尾生は魯の人なり。婦人と梁下に期し、至らずして

⁴³ 顧頡剛「尾生故事」(『史林雜識』中華書局、1963 初出)『顧頡剛民俗学論集』(上海文芸出版社、1998) pp. 179-186、王夔「黄梅戲『藍橋会』考論」『文芸争鳴・芸術史』(2011) pp. 92-96 を参照した。

⁴⁴ 『史記』卷六九「蘇秦列伝」にも「信如尾生、與女子期於梁下、女子不來、水至不去、抱柱而死。(信なること尾生の如きは、女子と梁下に期し、女子来たらず、水至れども去らず、柱を抱きて死す。)」と描かれる。

水に溺れて死す)」と紹介された。

①男が橋梁の下で女と会う約束をする、②女が時間に遅れる、③川が氾濫、④男は約束を守ってその場を離れず溺死、という悲劇の要素は、金・元代になると、芝居で演じられるようになる。また、待ち合わせの橋の名前が「藍橋」に定まる。例えば、陶宗儀『南村輟耕録』『院本名目・諸雜大小院本』には『澮藍橋』の著録があり、また、元の鍾嗣成『録鬼簿』に、女真の人、李直夫⁴⁵の作品として『水澮藍橋』の著録があり、その下に『尾生期女澮藍橋』と注記されるため、尾生の話と藍橋が結びついて演じられていたことが分かる。ただし、金院本も元雜劇もいずれもテキストが現存しないため、演目名から物語を推測するしかないが、尾生が藍橋で密会の待ち合わせをしたが、川の氾濫で水に吞まれて死んだという内容で、金代から元代の頃に演じられたのではないかと想像できる。

また、尾生が待ち合わせにした橋の名称が「藍橋」に定まった原因として、唐・裴鉞『伝奇』所収『裴航』⁴⁶の話との関連も指摘される。『裴航』のあらすじは、唐の秀才裴航が、藍橋驛を通りかかった際、喉が渴いたので老婆に水を求めた。老婆は孫娘の雲英を呼び、水を汲んで裴航に飲ませた。裴航は娘に一目ぼれし、老婆に結婚を申し込む。すると老婆は玉の杵と臼を結納の品とし、それで百日薬を搗けば結婚を認めると言う。裴航は玉の杵と臼を探し求めることが出来たので、遂に雲英と結ばれ、後に夫婦ともに仙人となった。

この『裴航』の物語は当時非常に広く伝わり、宋代の話本小説、元雜劇、明伝奇などにも盛んに編まれたが⁴⁷、その一方で、新たに、①「藍橋」という場所での男女の出会いと、②男主人公が、喉が渴いて水を求め、水を捧げた女に一目ぼれをするという『裴航』の物語の二つの要素が、「尾生が約束を守り、女を待って溺死した」という尾生の悲劇と結びつき、金院本『澮藍橋』、元雜劇『水澮藍橋』が生まれ、流布する過程で、現存する清代から民国期に各地で出版された説唱テキストの「藍橋会」故事にみられるような内容の物語となったと考えられる。

以下に挙げる各種説唱テキストは、古くから伝承する物語の骨子を最大限留めながら、それだけでなく、金童玉女の転生姻縁の要素を取り入れたことが大きな特徴と言えるだろう。

4.2. 転生姻縁の類型の特徴

⁴⁵ 鍾嗣成『録鬼簿』に、「徳興人、女真郎蒲察李五」とある。徳興府は今の河北省

⁴⁶ 『伝奇』の原文は既に散逸しているが、『太平広記』巻五十に「出『伝奇』」として収録される。

⁴⁷ 譚正璧『話本与古劇』(上海古典文学出版社、1956年)「寶文堂書目所録宋元明人話本考」に、『寶文堂書目』著録の『藍橋記』に関する以下の考察がある。

「清平山堂刊本があり、唐・裴鉞『伝奇』中の「裴航」(『太平広記』巻五十に引用される)を改作したものである。『萬錦情林』巻二『裴航遇仙』、『燕居筆記』巻七『裴航遇雲英記』、『醉翁談録』辛集巻一「神仙会類」に『裴航遇雲英於藍橋』があり(清平山堂本は全て『醉翁談録』に拠り、「入話」と「散場」詩を加えたもの)、これらはいずれもこの故事を承けたものである。また、宋の官本雜劇に『裴航相遇楽』があり、元・庾天錫『裴航遇仙』雜劇、明・龍備『藍橋記』、楊之炯『玉杵記』、清・黄兆森『裴航遇仙』伝奇がある。いずれも、唐の長慶年間、秀才の裴航が落第し、湘漢で樊夫人と出会う。藍橋で水を求めて仙女の雲英と夫婦となり、結婚の際に仙人の賓客を見て、樊夫人が雲英の姉であることを知る。夫婦は共に俗世を離れ仙人となった事を述べる。」

【表 14】

	書名	封面題	版本	所藏	転生姻縁の類型
1	藍橋會		京都:□□堂刻本	早大	魏公子・藍瑞蓮 →王三官・玉堂春
2	藍橋會			早大	魏公子・藍瑞蓮 →王三官・玉堂春
3	藍橋会			『中国伝統鼓詞精彙』所収	魏景元・藍瑞蓮 →王公子・玉堂春
4	藍橋会		那月朋口述本	『鼓詞彙集』所収	(金童玉女) 魏景源・藍瑞蓮
5	新刻水滄藍橋		奉天:東都石印局石印本	『鼓詞彙集』所収	(金童玉女) 王公子・蘇三 →魏公子・藍瑞蓮
6	水滄藍橋		北平:中華書局排印本	東文研雙紅堂	(金童玉女) 王公子・蘇三 →魏公子・藍瑞蓮
7	新藍橋		奉天:東都石印局石印本	『鼓詞彙集』所収	(金童玉女) 魏景元・藍瑞蓮 →張官保・李瑞蓮
8	改良藍橋會	藍橋會鬧天宮/文明大鼓書詞/鬧天宮/八陣圖/北京打磨廠學古堂印行	北京:學古堂排印本	早大	魏景元、藍瑞蓮
9	藍橋會 (牌子、絃子書)			『清蒙古車王府藏曲本』所収	韋景元・藍瑞蓮 →王公子・玉堂春
10	藍橋汲水	南橋汲水/六百冊/源盛堂	源盛堂刻本	上図	魏魁元・藍玉蓮 →王金龍・蘇三
11	南橋會	南橋會/二本/光緒三年冬月/甯鄉綿芳堂梓	寧鄉:綿芳堂光緒三年(1877)刻本	浙図、首図×2部、	魏魁元・藍玉蓮 →王金龍・玉堂春
12	南橋会 (西湖調、双川調)			首図	梁山伯・祝英台 →魏魁元・蘭瑞蓮 →王金龍・玉堂春
13	繪圖水漫藍橋相會	繪圖水漫藍橋相會附王月英賣胭脂/最新改良唱詞/金童玉女三次被謫藍橋虛會仍返天庭	上海:文益書局石印本	上図	(金童玉女) 郭華・王月英 →梁山伯・祝英台 →韋郎保・賈玉貞
14	水漫藍橋相會		上海:槐蔭山房石印本	顧頡剛「尾生故事」『顧頡剛民俗学論集』著録	同上

【表 14】に挙げたのは、現存する「藍橋会」故事の説唱本と、そこに描かれる転生姻縁の類型である。一見して【表 14】1～12 と 13～14 上海石印説唱本との間で、大きく二つに分かれることに気付く。「藍橋会」故事の流布と転生姻縁の類型に地域的な特徴はあるのか、現存するテキストを一つ一つ分析しながら体系的に捉え直してみたい。

【表 14】1～3 鼓詞『藍橋会』

【表 14】1 は北京刻本で、毎半葉 9 行×18 字、2 は出版地の明記はないが、毎半葉 10 行×15 字、から成る。1、2 共に説唱形式は全篇 7～10 字句不等を繰り返し、使用される文言も類似する。【表 14】6～8 のような石印本や排印本のテキストよりも、比較的早い時期に流通したものではないかと思われる。

【表 14】3 は、『中国伝統鼓詞精彙』に活字収録されたもので、全篇 7～13 字句不等を繰り返す。1、2 とは本文で使用される文言は異なるが、1～3 共にあらすじはほぼ以下の通り。

魏公子は華山で学んでいたが、ある日朝陽洞から藍橋の川辺へまでやって来ると、美しい娘が水を汲んでいる。水を求める口実で近づき女に聞けば、藍橋の近くに住む周一子（3 は「周易子」）に嫁いだ藍瑞蓮という。戯れて好意を寄せ合い、夜に藍橋での逢瀬を約束し、証として白綾扇と金簪を交換する。先に着いた魏公子は大雨に遭い、藍橋の柱に着ていた上着をかけたまま溺死する、舅姑が寝静まってから遅れて現れた藍瑞蓮は、それを見て後を追う。翌日、両家が探しに来て、どちらが誘ったのだと騒ぎになり、判官に訴えると、女の家を銀十両を与え棺桶を買わせることで決着した。死んだ魂は閻羅の元へ戻ると、まだ姻縁は終わっていないと、次の世は、南京と北京の燕山に送られ、それぞれ玉堂春と王三官（3 は王公子）に転生し、「三堂会審」⁴⁸の後に結ばれた。

転生姻縁が描かれる箇所原文は、【表 14】1、2 のテキストには「女子轉生玉堂春女、男子轉生王三官（女は玉堂春に転生し、男は王三官に転生した）」、【表 14】3 には「痴公子癡落南京王公子、藍瑞蓮托生北地玉堂春（痴公子（魏景元）は南京の王公子に降り、藍瑞蓮は北の玉堂春に転生した）」と記される。次の世は、「王三官と玉堂春」つまり、「玉堂春」故事の主人公に生まれ変わるの。ここで注意したいのが、主人公が金童玉女の生まれ変わりだと言う設定は出てこない。

【転生姻縁の類型】 魏公子・藍瑞蓮 → 王三官・玉堂春（【表 14】1、2）

魏公子・藍瑞蓮 → 王三官・玉堂春（【表 14】3）

【金童玉女の転生】 なし

⁴⁸ 明の吏部尚書の公子王金龍は、妓女蘇三と結婚を誓い、入れ揚げのうちに無一文になり、妓楼から追い出される。客を取るのを拒否した蘇三は、山西の豪商沈燕林に妾として売られてしまう。沈の妻皮氏は趙監生と私通していた。皮氏と趙は共謀して沈を殺し、その罪を蘇三になすりつけ、蘇三は太原に護送されてしまう。王金龍は山西巡按となり、蘇三の事件を担当する。王金龍、潘必正、劉秉義は「三堂会審」（三部門の最高長官が同時に案件を審理する）を行う。後に冤罪を晴らし蘇三と結ばれる。



図【表 14】1 『藍橋會』北京刻本 封面、1a

【表 14】4 鼓詞『藍橋會』那月朋口述本

【表 14】4 は口述本を『鼓詞彙集』⁴⁹に活字収録したものである。華山の朝陽洞で勉強に励んでいる魏景源が散歩に出かけた際に、藍橋付近の川辺で藍瑞蓮に出会い、水を求める口実で女の素性をあれこれ聞くとところで終わる。

物語の冒頭で、「左金童噲啣啣打了温涼盞、右玉女吃醉了酒打了一塊碧玉盤（左金童がガチャンと温涼盞を壊し、右玉女は酒に酔い碧玉盤を壊した）」ので、王母娘娘の怒りを買って、俗世に降ろされて「左金童一轉魏門去、右玉女轉生小瑞蓮他的娘家本姓藍（左金童は魏家に転生し、右玉女は瑞蓮に転生し、彼女の実家は藍姓）」と、二人は金童玉女の生まれ変わりであることが語られる。

【転生姻縁の類型】（金童・玉女） → 魏景源・藍瑞蓮

【金童玉女の転生】あり

【表 14】5、6 鼓詞『水滸藍橋』

【表 14】5、6 は、5 が『鼓詞彙編』に活字収録される奉天の東都石印書局本、6 が北京の中華書局排印本である。両者とも形式や文言が完全に一致するため、恐らく同系列の底本から分かれて出版されたものと思われる。全篇ほぼ 7 字句、7 字～13 字句不等で繰り返される。

転生姻縁については、物語の前半で「金童玉女飲個醉瘋顛、金童星失手打了温涼盞、玉女摔壞了玉帝紫金盤、王母娘娘心中惱、金童玉女貶落凡、金童他投胎生在魏奎府、玉女生在藍橋湾（金童玉女は酒に酔っ払い、金童は手を滑らせて温涼盞を壊し、玉女は玉帝の紫金盤を落として壊した。王母娘娘は怒り、金童玉女を俗世に降ろし、金童は魏奎府に、玉女は藍橋湾に生まれ変わった）」と語られる。この展開は 4 の口述本と同じである。

⁴⁹ 瀋陽市文學芸術工作者聯合会編『鼓詞彙編』（1957）

物語の展開で他のテキストと若干異なる所は、藍瑞蓮が藍橋で出会った魏公子を、川の水ではなく家にお酒と食事があるから来るよう誘うが、姑に怒られてしまい、二人は夜に藍橋での密会を約束する。また、次の世ではなく、前世が「王公子と蘇三（玉堂春）」であったとする。

【転生姻縁の類型】（金童・玉女）→ 王公子・蘇三 → 魏公子・藍瑞蓮
 【金童玉女の転生】あり



図【表 14】6 『水滸藍橋』北京:中華書局排印本 4、5 頁

【表 14】7 鼓詞『新藍橋』奉天:東都石印局石印本

【表 14】7 は、『鼓詞彙集』に活字収録されたもので、1~3 とあらすじは殆ど同じである。相違点は、金童玉女の生まれ変わりという設定の付加と、蘭瑞蓮は夫との結婚は不本意であったこと、転生先が「這個托生南京去、那個托生北順天去、魏公子一轉張官保、藍瑞蓮一轉李瑞蓮（ひとり南京で生まれ変わり、ひとは北の順天で生まれ変わった、魏公子は張官保に、藍瑞蓮は李瑞蓮となった）」と、「玉堂春」故事ではない男女の名が挙がることである。

実は、この「南京の張官保と北の順天の李瑞蓮」には意味があり、同じく奉天の東都石印局から続編の『續新藍橋』が出版され、その主人公の名前となる⁵⁰。また、転生先の順天という地名は、民国期の初めに使われた北京市の名称であるため、5、7 の奉天の東都石印局のテキストはいずれも民国期に出版されたことが分かる。

【転生姻縁の類型】（金童・玉女）→ 魏景元・藍瑞蓮 → 張官保・李瑞蓮
 【金童玉女の転生】あり

⁵⁰ 『鼓詞彙編』pp. 173-180 所収。ただし、『續新藍橋』では、転生先の主人公の地名は変わらないが、姓が変更され、「南京の李官保と北の順天の劉瑞蓮」となる。

【表 14】8 鼓詞『改良藍橋會』北京：學古堂排印本

【表 14】8 は、魏景源と藍瑞蓮が藍橋での密会を約束し、白玉佩と蜻蜓墜を交換して証とするところで場面が終わり、続きの川が氾濫して溺死する件までは無いので、転生姻縁までは語られない。藍瑞蓮の夫の名は周文貴とされる。

【転生姻縁の類型】なし、【金童玉女の転生】なし



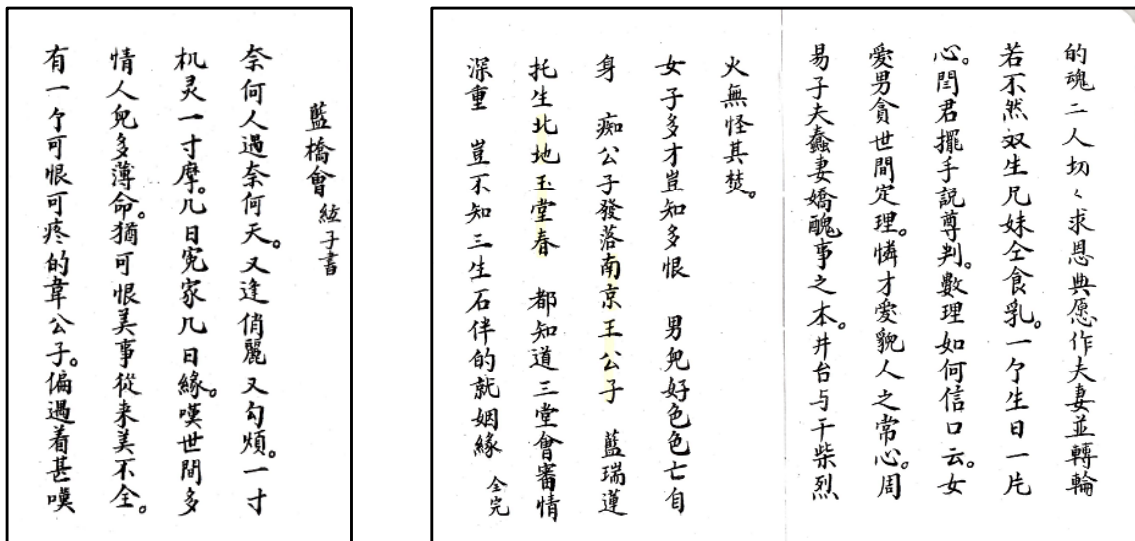
図【表 14】8 『改良藍橋會』北京：学古堂排印本 封面、1 頁

【表 14】9 子弟書『藍橋會』抄本

【表 14】9 は、子弟書として『清蒙古車王府藏曲本』に抄本が収録されるが、3 の『中国鼓詞伝統鼓詞精彙』⁵¹に、鼓詞として収録されるものと、形式、文言全てを同じくする。金童玉女の生まれ変わりの設定は無く、次の世は「王公子と玉堂春」に生まれ変わる。

【転生姻縁の類型】魏公子・藍瑞蓮 → 王三官・玉堂春

【金童玉女の転生】なし



図【表 14】9 『清蒙古車王府藏曲本』所収『藍橋會』 1 頁、最終頁

⁵¹ 劉英男顧問、陳新主編『中国伝統鼓詞精彙』（北京：華芸出版社、2003）

【表 14】 10 四川説唱本『藍橋汲水』

【表 14】 10 は、源盛堂から出版されたテキストで、途中に「上小生（小生登場）」、「小生白（小生セリフ）」、「小旦唱（小旦ウタ）」などが挿入される。「唱」の部分は 7 字句で構成される。また、封面に記される「源盛堂」という書肆名は、現存する各種説唱本に対する調査から、「瀘州の源盛堂」である可能性が高く、【表 14】 10 のテキストは、恐らく四川の瀘州（1913 年に瀘県に変更）の源盛堂による清刻本ではないかと推定される。四川説唱本の「藍橋会」故事の内容は、

河南の正清県の魏魁元は実家に戻る途中、藍橋（南橋とも）のそばの川で藍玉蓮と出会う。水を求める口実で話せば、藍瑞蓮には親が決めた朱子貴という相手がいるという。それでも魏魁元は諦めず、藍橋での逢瀬を約束する。この事が南河水神の耳に入り、淫らな情を起こした二人に怒り、洪水で南橋を破壊して阻止することにする。

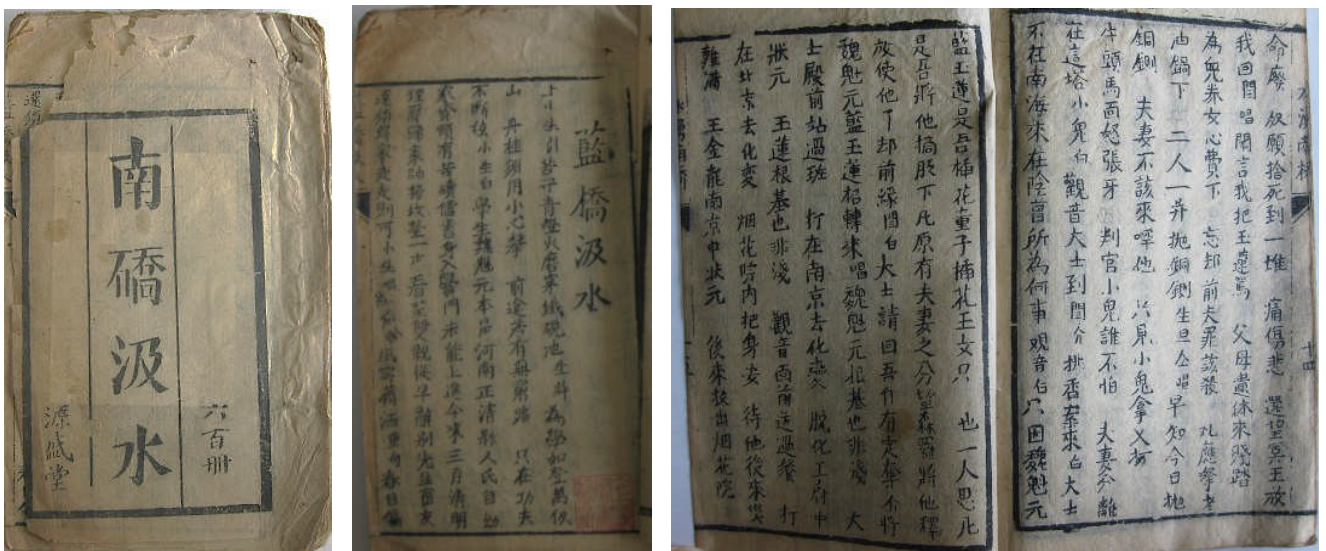
洪水に呑まれた魏魁元と後を追って入水した藍瑞蓮は、あの世で再会し閻羅のもとへ行くが、不義密通の罪で油鍋地獄へ落されそうになる。そこへ観音大士が来て、二人は挿華童子と挿華玉女であると告げ、助かる。

しかし、閻羅はまだしっかりしていない二人を、「（魏魁元）打在南京去化變、脱化王府中状元、（藍玉蓮）打在北京去化變、烟花院内把身安（南京に転じ、王府に生まれ変わり状元及第、北京へ転じ、妓楼に身を置く）」、「王金龍南京中状元、後來救出烟花院、大審蘇三得團圓（王金龍は南京で状元に合格、後に妓楼から救出し、蘇三の裁判で団円となる）」と述べて転生させる。ここでも、「玉堂春」故事の主人公に転生するが、金童玉女の生まれ変わりという設定は無い。

このテキストで最も特徴的なのは、「二人の不義密通に腹を立てた水神が川を氾濫させる」という件であろう。これは、後で挙げる上海石印説唱本にも採用される。

【転生姻縁の類型】 魏魁元・藍玉蓮 → 王金龍・蘇三

【金童玉女の転生】 なし



図【表 14】 10 『藍橋汲水』源盛堂刻本 封面、1a 葉、14b、15a

【表 14】 11 湖南説唱本『南橋會』

【表 14】 11 は、清の光緒三年（1877）に湖南省の寧郷から出版されたテキストである。8行×18字、全6葉で、「引（開場詩）」、「上（登場）」、「白（セリフ）」、「唱（ウタ）」が挿入される。また、「藍橋」ではなく「南橋」となっている。



図【表 14】 11 『新刻南橋会』寧郷綿芳堂刻本 封面、1a、6b

【表 14】 1、2 のテキストと形式、文言は異なるが、物語のあらすじは殆ど同じ（裁判沙汰の件は除く）。また魏魁元は華容館で勉学に励んでいる設定となっており、華容とは湖南の地名である。次の【表 14】 12 の花鼓戯のテキストには、魏魁元の出身地に華容の地名が登場する。恐らくご当地で物語が語られる際に、一般的な「華山」から変容したと考えられる。

魏魁元と蘭瑞蓮の転生姻縁については、物語の末尾に「蘭瑞蓮発往河東去女轉男身為王金龍公子、魏魁元発往河西去男轉女身為玉堂春（蘭瑞蓮は河東へ向かい女は男の王金龍に転生し、魏魁元は河西に向かい男は女の玉堂春に転生した）」と記されるが、金童玉女の生まれ変わりという設定は無い。

【転生姻縁の類型】 魏魁元・藍玉蓮 → 王金龍・玉堂春

【金童玉女の転生】 なし

【表 14】 12 花鼓戲『南橋會』

【表 14】 12 は湖南の花鼓戲のテキスト。「引（開場詩）」、「上（登場）」、「白（セリフ）」、「唱（ウタ）」が挿入される。【表 14】 11 と使用される文言は異なるが物語内容はほぼ同じ。

ただし内容が大きく異なる所がある。それは、華容の魏魁元と、姑の言い付けで水汲みに来た蘭瑞蓮が、南橋で出会い恋仲になり、その後、契りを交わそうと東山、南山、西山、北山、中山に入るも、そこで漁夫、樵夫、農夫、同学、獵師に阻まれてしまい、夜に南橋での再会を約束するという展開が付加されることである。

この魏魁元と蘭瑞蓮の情交が漁夫、樵夫、耕夫などに邪魔されて、夜に藍橋で逢瀬を約束するという展開をもつ「藍橋会」故事は、湖北の地方劇である打鑼腔、大筒腔『藍橋会』（『大藍橋』）でも演じられたといい⁵²、湖南・湖北地域に伝わる特有のものだったと考えられる。

また、転生姻縁は、物語の末尾に「蘭瑞蓮前世梁山伯今世蘭瑞蓮、魏魁元前世祝英台今世魏魁元、蘭瑞蓮發往河東去女轉男身為王金龍公子、魏魁元發往河西去男轉女身為玉堂春（藍瑞蓮の前世は梁山伯で今は蘭瑞蓮、魏魁元の前世は祝英台で今は魏魁元、蘭瑞蓮は河東へ向かい女は男の王金龍に転生し、魏魁元は河西に向かい男は女の玉堂春に転生した）」と記され、11 の湖南説唱本と文言を部分的に共有する。

1～12 のうち、12 だけ転生姻縁の類型に「梁山伯と祝英台」が出てくる。ちなみに、前節の「梁祝」故事で取り上げた、湖北民間故事『梁山伯与祝英台』の転生姻縁の組み合わせも、「梁山伯・祝英台 → 魏奎元・藍玉蓮 → 玉堂春・王三」と同じくし、これらは湖北・湖南地域に伝わる類型だったと考えられる。

また、金童玉女の生まれ変わりという設定は無い。

【転生姻縁の類型】 梁山伯・祝英台 → 魏魁元・藍玉蓮 → 王金龍・玉堂春
 【金童玉女の転生】 なし



図【表 14】 12 『南橋會』 封面、1a、8b

⁵² 『中国戯曲志・湖北卷』「劇目」 pp188-189。ここでは、漁夫、樵夫、耕夫、書生によって阻まれると記される。

以上、【表 14】1～12 の説唱テキストへの調査から、各地で流布・流通した「藍橋會」故事は、地域ごとに内容を新たに付加したものもあるが、主人公の名前は「魏公子（魏魁元、魏景元など）と藍玉蓮」が全国的であり、転生姻縁は「王公子（王三官、王金龍など）と玉堂春（蘇三）」すなわち「玉堂春」故事の主人公との二世にわたる組み合わせが一般的であったことが分かる。

また、転生姻縁のモチーフはあるが、【表 14】1、2、10～12 など、清代の木刻本や、清蒙古車王府所蔵の抄本テキストには、金童玉女の生まれ変わりという設定が見られない。一方、奉天や北京で石印本や排印本で出版されたテキストには、金童玉女の生まれ変わりという設定が散見するため、「金童玉女の転生姻縁」というモチーフは、「藍橋會」故事においては、出版・流通の過程で他の物語の影響を受けて、比較的新しい時期に取り込まれた要素だったのかもしれない。

また、古くから語られ、これほど全国的であった「藍橋會」故事における転生姻縁の類型「魏魁元・藍玉蓮 → 王金龍・玉堂春」が、以下に挙げる【表 14】13、14 のテキストのように、上海で石印出版されると大きく変容し、「郭華・王月英」、「梁山伯・祝英台」という「売臙脂」故事や「梁祝」故事と結び付くようになるのである。

4.3. 上海石印説唱本

4.3.1. 『繪圖水漫藍橋相會』、『水漫藍橋相會』

清末民初、上海で石版印刷が盛んになると、各地の説唱テキストは上海の書肆に集まり、翻印されたり、編み直されたりして出版された。以下に、上海石印説唱本における「藍橋會」故事の状況を見ていきたい。

【表 14】13 は、文益書局石印本『繪圖水漫藍橋相會』で、後ろに付録で、前節「売臙脂」故事でも取り上げた『新出抄本買胭脂』が収められる。【表 14】14 については、原本を所蔵する図書館が無いのため、直接確認できなかったが、顧頡剛（1963）「尾生故事」⁵³の論考に著録される。顧氏が記した物語の概容から判断して、【表 14】13『繪圖水漫藍橋相會』と【表 14】14『水漫藍橋相會』のテキストは、全く同一のものであると思われる。以下に、顧氏による記述を挙げる。

比来偶在地摊获槐荫山房所印《水漫蓝桥相会》一册，即鼓词脚本，如睹旧友，因拨冗叙录其事，示尾生故事活跃于今日人民群众之精神界者如此。略云：河东韦家村有韦郎保，学名燕春，十九岁，读书白云庵。清明放学游春，口渴甚，见一女子方就井汲水，向之乞饮；爱其韶秀，又谎言能算命。女遂自陈名贾玉贞，居河西贾家庄，年十八。韦生挑之，女亦意浹，约以即夕至蓝桥为终身之托。届时，生俟父母寢息，急至桥上。玉帝知之，遣神将收金童。天本晴好，忽然云起，天地昏暗，狂风骤雨突至，水渐没膝，继至胸口；生终不去，抱柱死焉。及云收复晴，玉贞本侍帝玉女，在天庭中与金童相爱，帝罚之，使三世不得谐伉俪，以童身死，一世为《卖胭脂》之郭华、王月英，二世为《楼台会》之梁山伯、祝英台，今罚满矣，得归其原职云。

⁵³ 注 44 前掲論文顧頡剛（1963）、『顧頡剛民俗学論集』 pp. 179-186 参照。

近頃、偶然露店で槐蔭山房の『水漫藍橋相會』一冊を手に入れた、即ち鼓詞の脚本であった。旧友に会ったかの如く、時間があればその事を記録することで、「尾生」故事が今日も人民の心の中でこの様に息づいていることをここに示す。物語の概容は、河東の韋家村の韋郎保は、幼名を燕春といい、十九歳で白雲庵に学んでいた。清明節の休みに外出したところ、ひどく喉が渇き、女が井戸から水を汲んでいるのを見かけ、水を求めた。女の見目麗しさに、算命ができると騙る。女は賈玉貞といい、河西の賈家荘に住んでいて、年は十八だと言う。韋は女をからかい、女も満更でもなく、夜に藍橋で結ばれる約束をする。その時になり、韋は父母が寝静まるのを待ち、急いで橋に来た。玉帝は二人の藍橋での密会を知ると、金童を連れ戻すよう神将を派遣した。天気は晴れていたのに、突然雲が立ち込め、真っ暗になり、狂風豪雨がにわか起こり、河の水かさが膝から胸に達した。韋はとうとう帰らずに、柱を抱えたまま死んだ。雲が引き再び晴れた。玉貞は、もとは玉帝に仕える玉女で、天界で金童と恋仲になり、玉帝から罰を受け、三世にわたり夫婦の契りを結ぶことが出来ずに死に、一世が『売臙脂』の郭華と王月英、二世が『楼台会』の梁山伯と祝英台、現在罰を全うし、もとの位置に戻ることが出来た。（顧頡剛（1963）「尾生故事」）

「鼓詞の脚本」とあるのは、上記引用文の前に、顧氏は、昔北京の寄席で、京韻大鼓で演じられる「藍橋会」を観たことがあると回顧しており、数十年後に偶然槐蔭山房の『水漫藍橋相會』を見つけて、まさにこれが曾て観た鼓詞の脚本だと喜んだのである。しかし、顧氏が北京で観た京韻大鼓の『藍橋會』は、もしかしたら上海石印本のものよりも、【表 14】に挙げた 1~8 の鼓詞のテキストの方が近かったかもしれない。

では、物語の概容の下線部に注目しながら、【表 14】 13、14 の上海石印本と【表 14】 1~12 のテキストとの異同を確認したい。

まず、主人公の男女の名であるが、【表 14】 1~12 の「魏公子（魏魁元、魏景元など）と藍玉蓮」から、「韋郎保（燕春）と賈玉貞」に変更される。また、物語の中盤で、藍橋での密会を知った玉帝が、天神と天将を派遣して大雨洪水を引き起こさせる件は、【表 14】 10 の四川説唱本にも類似の要素が存在する。

以下に【表 14】 13 のテキストから、韋郎保の死を知り賈玉貞が後を追って入水した後の場面から原文を引用すると、

姑娘魂靈抬頭看、船頭站的韋相公、高叫賢妹賈玉貞、你我不是等閑人、俱是金童和玉女、眉来眼去犯天庭、…罰在陽間走一巡、一世郭華臙脂買、又被故（ママ）毛兩分開、一上天台二次来、我是山伯你英台、又被馬家来折去、二上天台三番来、我是河東韋郎保、你是河西賈玉貞、三世不曾為夫婦

娘の魂が頭をもたげると、船の先に立つ韋郎保が、声高に賈玉貞と呼びかける。あなたと私は一般の人間ではないのです。私たち金童と玉女は、情を通わせ天界の掟を破り、…罰として俗世で過ごすことになった。一世は郭華が臙脂を買い、毛胡に仲を裂かれ、天界へ戻り二度目には、私が梁山伯であなたが祝英台、また馬家によって離されて、再び天界へ戻り三度目は、私は河東の韋郎保、あなたは河西の賈玉貞、三世に亘り夫婦になれなかった。（【表 14】 13『繪圖水漫藍橋相會』上海：文益書局石印本）

金童玉女の転生姻縁の類型は、【表 14】1～12 のテキストなどで、各地で広範に流布していた「王公子（王三官、王金龍など）と玉堂春（蘇三）」との組み合わせではなくなり、「郭華と王月英」、「梁山伯と祝英台」の名が挙がるようになる。

この「郭華・王月英→梁山伯・祝英台→韋郎保・賈玉貞」という転生姻縁の組み合わせは、前節の「梁祝」故事で取り上げた、上海石印説唱本『最新繪圖梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記』に挙がる「郭華・王月英→韋郎保・賈玉貞→梁山伯・祝英台」の三世姻縁と同じである。つまり、「梁祝」故事と、「藍橋会」故事は、上海で石印出版する際に、それまで他地域の説唱本で伝わって来た複数の転生姻縁の類型を整理し、「郭華・王月英」、「梁山伯・祝英台」、「韋郎保・賈玉貞」の組み合わせで統一したようである。

4.3.2. 続編の存在

【表 14】13、14 のテキストには、それぞれ付録の物語が存在する。【表 14】13 の文益書局のテキストは、既述のとおり『新出抄本買胭脂』と合本で出版された。また、【表 14】14 の槐蔭山房のテキストも、『藍前二世姻縁團圓記』という物語と合本で出版されたそうである。顧頡剛は、先程の引用文に続けて、槐蔭山房の『藍前二世姻縁團圓記』について以下のように述べている。

此词之后附《蓝前二世姻缘团圆记》一篇，为别一人作。起句云：“闲来无事翻书篇，观见蓝桥事一番；总有上册无下卷，我今要把下本添。”按《蓝桥会》文足事完，此乃云“有上册，无下卷”者，一般人怯于承受悲剧，常思化为团圆，兹篇虽已同归天班而终未谐花烛，故必欲为之增出一下卷，犹作《续红楼梦》者之心也。其大意云：韦郎保世为李官保，学名奎元，生于南京王家滩，十七岁至顺天赶考。中途遇贼，劫其行李，大哭觅死。土地神怜之，风送至京；身无一钱，卖文为活。一日，过一圆门，百花盛放，楼前立一女子，花容月貌，为之留连不忍去；婢仆见而疑之，执以见主人。李生自陈父、祖官阶，主人刘吏部大喜，盖其妇乃李生之姑也。；刘只一女，即所见之丽姝，名瑞莲，年十七，遂与生缔婚姻。其后李生赴试，御点状元。夫、妻寿至六十，上天归班。此所云云，皆作者踌躇满志之想象，无书本与传说为根据者。末云：“二人若得再相会，至五云观景再团圆。那个住在苏州府，这个山东有家园。明公若问后来事，《五云传》上说周全”，则又牵合《五云传》为一事。

この説唱本（※槐蔭山房『水漫藍橋相會』のこと）の後ろに付く『藍前二世姻縁團圓記』という一篇は、別人の作である。冒頭の句で「閑に任せて書を開き、藍橋の話を読んだ。いつも上冊はあっても下巻が無いので、ここに続きを添えてみた。」と言う。思うに、『藍橋会』の物語が終わり、この「上冊はあるが下巻が無い」と言うのは、一般の人は悲劇を受け入れ難く、常に団円になって欲しいと願うからであろう。この物語は一緒に天界に帰るが結婚はしないので、話を続けて下巻を出したくなかったに違いない。『続紅樓夢』を創作した人物の気持ちのようなものである。

物語の大意は、韋郎保は李官保となり、幼名を奎元といい、南京の王家灘に生まれた。十七歳で順天に科挙試験に赴いた。途中、賊に出会い、荷物を奪われ、大泣きして死のうとした。土地神が憐れに思い、風を吹かせて京まで送り届けた。無一文なの

で、文を売って生活していた。ある日、庭園を通りかかると、花々が咲き乱れ、建物の門の前にひとりの女が立っていた。あまりの美しさに、去りがたく、居続けていると、下女に疑われて捕まり、主人に会った。李は父の話をし、先祖代々官職に就いている事を話すと、主人の劉吏部は大いに喜んだ、その女性は李生のおばであったのだ。劉氏には一人娘が居り、見目麗しく、名を瑞蓮と言ひ、年は十七歳、遂に李生と婚姻を結んだ。その後、李生は科挙試験に赴き、状元となった。夫、妻共に六十歳で天界に戻った、という。これは全て作者の自己満足の想像の世界であり、本書の根拠となる伝説は無い。物語の末尾では「二人がもし再会できるなら、五雲観景で再び一緒になるでしょう。一人は蘇州府に住み、一人は山東に屋敷を持つ。皆様その後の話を知りたければ、『五雲伝』で全て完結します。」と述べ、『五雲伝』を無理にくっ付けている。

(顧頡剛 (1963)「尾生故事」)

顧氏は、本編である『水漫藍橋相會』の最後で韋郎保と賈玉貞が夫婦になれなかったので、続編として新たに李官保(奎元)と劉瑞蓮を主人公とする、『藍前二世姻縁団圓記』が創作されたのだろうとする。

ところが、筆者の調査から、この『藍前二世姻縁団圓記』は、奉天の東都石印書局の鼓詞『新藍橋』(【表 14】7)の続編として出版された『續新藍橋』と内容を全く同じくすることが分かった。顧氏が挙げた『藍前二世姻縁団圓記』からの引用文「二人若得再相会，至五云观景再団圓。那个住在苏州府，这个山东有家园。明公若问后来事，《五远传》上说周全」は、東都石印書局の『續新藍橋』の末文と合致する。

また、東都石印書局本『新藍橋』は、物語の主人公が魏公子と藍瑞蓮、物語の末文で「魏公子は南京の張官保に、藍瑞蓮は北の順天の李瑞蓮に生まれ変わる」と述べられ、続く『續新藍橋』では、その転生先である南京の李官保と順天の劉瑞蓮(※姓に異同有り)の物語が展開されるという、本編と続編の関係を以て出版されている。

一方、上海槐蔭山房石印本『水漫藍橋相會』は、物語の主人公が韋郎保と賈玉貞、物語の最後で転生するのは、「郭華・王月英」と「梁山伯と祝英台」であるのに、付録の『藍前二世姻縁団圓記』では、いきなり「南京の李官保と順天の劉瑞蓮」の話が続くので、顧氏が言う続編というよりは、無理矢理に合本にした感が否めない。恐らく、上海の槐蔭山房から『水漫藍橋相會』を出版する際に、北方で流通していた鼓詞『續新藍橋』の物語を取り入れ、『藍前二世姻縁団圓記』と題名を変え、付録として合冊にしたと考えられる。

4.3.3. 淮戲『藍橋相會全部』

前節の「秦雪梅」故事でも取り上げたように、上海の大通書社や大達書局から石印出版された淮戲のテキストは、上海石印説唱本の内容と非常に近似する。「藍橋会」故事も、説唱本『繪圖水漫藍橋相會』と形式と文言は異なるが内容をほぼ同じくする淮戲『藍橋相會全部』が出版された。『俗文学叢刊』120冊には、淮戲のテキストとして『藍橋相會全部』(上海:大通書社石印本)、『特別名伶秘本水漫藍橋全部』(上海:大達書局石印本)が収録され、共に殆ど同じ形式、文言で構成される。

淮戲『藍橋相會全部』、『特別名伶秘本水漫藍橋全部』の文末で語られる転生姻縁は、説唱本のそれとは大きく異なり、三世姻縁ではなく八世姻縁までに膨れ上がるのが特徴的である。

以下に、『特別名伶秘本水漫藍橋全部』の物語の最後に描かれる転生姻縁の部分を挙げる。なお、『藍橋相會全部』と異同のある文字は（ ）で補った。

[生]一世我是萬喜良、[旦]奴是貞節女孟姜、[生]只因始皇長城造、[旦]捉去我夫未同房、[生]二世投生韓湘子、[旦]奴是林英女娘行（羅英女紅粧）、[生]夫婦同床三日正（假三日）、[旦]你去修行奔（道上）山崗、[生]三世郭華就是我、[旦]月英王氏我身當、[生]正賣胭脂來相會、[旦]毛鬍子打了（鬧）兩分張、[生]四世托生商郎做、[旦]奴是雪梅女姑娘、[生]約定花園來相會、[旦]丫環打破好淒慘（淒涼）、[生]五世投生投生梁山伯、[旦]奴是英台女娥皇（九姑娘）、[生]杭城攻書三年整（正）、[旦]馬家拆散好鴛鴦、[生]六世我是楊二善、[旦]奴是美容王姣娘、[生]夫妻隔牆來相會、[旦]仍然分離各一方、[生]七世我是韋郎保、[旦]奴是賈氏女紅粧、[生]約定今晚成婚配、[旦]水漫藍橋把命亡、[生]要想你我為夫婦、[旦]八世為人再成雙、[生]我今投到姜家去、[旦]奴去投胎王家庄、[生]我轉姜詩龍在世、[旦]奴轉玉屏本姓王、[生]夫婦百年同偕老

（上海：大達書局石印本『特別名伶秘本水漫藍橋全部』）

ここに挙がる男女の名前から判断できるものだけでも、一世は「孟姜女」故事、二世は「韓湘子」故事、三世は「売胭脂」故事、四世は「秦雪梅」故事、五世は「梁祝」故事、七世は「藍橋會」故事と、あらゆる物語の主人公の名を列挙していることが分かる。従来は、二世、三世を中心に広まっていた転生姻縁が、次第にその転生の回数を増やし、この八世姻縁は恐らく最終段階の形ではないだろうか。

このような「多世姻縁」化の現象は、後の『七世夫妻』などの民間故事を生むきっかけともなったと考えられるので興味深い。

5. 転生姻縁一覧

これまで取り上げてきた物語に描かれる転生姻縁の組み合わせについて、【表 15】で一覧にした。転生の順序は厳密に考えず、人物の組み合わせの傾向と地域差を見ることにする。

表の見方を先ず「秦雪梅」故事を例に挙げて説明すると、湖南説唱本では、「梁山伯・祝英台」「郭華・王月英」「商琳・秦雪梅」の組み合わせで、上海石印説唱本、四川、桂林、湖北、河南などで出版された説唱本でも、物語中に描かれる三世姻縁は、同じく「梁山伯・祝英台」「郭華・王月英」「商琳・秦雪梅」の間で転生していることが分かる。また、点線の楕円は「梁山伯・祝英台」「郭華・王月英」「商琳・秦雪梅」の間のいずれかの組み合わせで伝わったものを示し、点線の四角は「郭華・王月英」「梁山伯・祝英台」「韋郎保（燕春）・賈玉貞」の組み合わせを中心に伝わったものを示す。4種の物語の中で「売臙脂」故事だけは三世ではなく二世姻縁で伝わり、どの組合せにも柔軟に対応している。

【表 15】

	「秦雪梅」故事	「売臙脂」故事	「梁祝」故事	「藍橋会」故事
湖南説唱本	梁山伯・祝英台 郭華・王月英 商琳・秦雪梅	郭華・王月英 梁山伯・祝英台	梁山伯・祝英台 郭華・王月英 商琳・秦雪梅	魏魁元・藍玉蓮 王金龍・玉堂春 梁山伯・祝英台 魏魁元・蘭瑞蓮 王金龍・玉堂春
上海石印説唱本	梁山伯・祝英台 郭華・王月英 商琳・秦雪梅	郭華・王月英 梁山伯・祝英台	郭華・王月英 韋郎保（燕春）・賈玉貞 梁山伯・祝英台	郭華・王月英 梁山伯・祝英台 韋郎保（燕春）・賈玉貞
その他（参考）	【四川・桂林・湖北・河南等説唱本】 梁山伯・祝英台 郭華・王月英 商琳・秦雪梅		【浙江地域民間故事】 郭華・王月英 韋郎保・賈玉貞 梁山伯・祝英台 孟姜女・万喜良 牛郎・織女 梁山伯・祝英台	【鼓詞・子弟書・四川説唱本】 魏公子（景元、魁元） ・藍瑞蓮 王三官（公子、金龍） ・玉堂春（蘇三）
			【湖北民間故事】 梁山伯・祝英台 魏奎元・藍玉蓮 王三・玉堂春	【鼓詞】 王公子・蘇三 魏公子・藍瑞蓮
			【河南三弦書など】 梁山伯・祝英台 魏世秀・藍瑞蓮	【鼓詞】 魏景元・藍瑞蓮 張官保・李瑞蓮

以下に【表 15】を改めて整理すると、「梁山伯・祝英台」と「郭華・王月英」と「商琳・秦雪梅」の三世にわたる転生姻縁の組み合わせは、湖南説唱本『新抄繡像祝英台』、『王月英賣胭脂』、『新刻秦雪梅三元記全部』でのみ共有された、湖南独自のものであった。これらの作品は、湖南において転生姻縁三部作のような位置づけで出版されたとも考えられる。そのうち、『新刻秦雪梅三元記全部』は、各地で同一テキストが盛んに出版されたこともあり（第 2 章【表 6】説唱本『秦雪梅三元記』テキスト一覧参照）、この「梁山伯・祝英台」と「郭華・王月英」と「商琳・秦雪梅」の三世姻縁の組み合わせは、説唱本『秦雪梅三元記』の流通を介して変容することなく全国に流布したと言えるだろう。

「売臙脂」故事で金童玉女の転生姻縁について述べるテキストは、管見の限りでは、湖南説唱本とそれをそのまま翻印した上海石印説唱本しか確認できないが、「郭華と王月英」と「梁山伯と祝英台」の二世姻縁を以て変わらずに伝わった。恐らく、三世姻縁ほど転生姻縁の類型に縛りが無いためか、湖南説唱本では「秦雪梅」故事と、上海石印本で出版される際には、柔軟に「藍橋会」故事と、組み合わせることが出来たのかもしれない。

「梁祝」故事に描かれる金童玉女の転生姻縁は、「秦雪梅」故事や「売臙脂」故事とは異なる振舞いをみせる。上海石印説唱本「梁祝」故事（【表 13】）は、湖南説唱本『新抄繡像祝英台』を翻印したものではなく、新たに編み直されたものであり、転生姻縁の類型も、湖南説唱本の三世姻縁は採用せず、「郭華・王月英」は残し、「商琳・秦雪梅」との関係は解消して、新たに「藍橋の韋郎保と賈玉貞」という「藍橋会」故事の主人公を転生先に採用し、「梁山伯・祝英台」と「郭華・王月英」と「韋郎保・賈玉貞」という上海石印説唱本独自の三世姻縁を打ち立てた。ただ、説唱本だけでなく、各地の民間故事や地方劇などでも、転生姻縁の要素を取り入れた「梁祝」故事が広く語られたため、恐らく【表 15】に挙げたもの以外にも転生姻縁の類型が存在する可能性はある。

また、「藍橋会」故事は、古くから北方を中心に四川、湖南、湖北地域に至るまで、各地の民間説唱などで、転生姻縁の物語として広く流布していた物語であったが、従来伝わっていた主人公「魏公子と藍瑞蓮」と「王金龍・玉堂春（蘇三）」との転生姻縁の関係は、上海石印説唱本として出版されるようになると淘汰され、主人公の名前も「韋郎保と賈玉貞」に変更されてしまった。これは、先ほど述べた湖南説唱本の三世姻縁の繋がりが、上海石印説唱本において解消されたのと類似の現象と見なせよう。

「梁祝」故事、「藍橋会」故事は、上海石印説唱本として新たに編み直す際に、各地域で独自の流行を築いていたものを排除し、「梁山伯・祝英台」と「郭華・王月英」と「韋郎保と賈玉貞」という上海独自の転生姻縁の組み合わせを新たに再構築した。次第に、上海石印説唱本が流通の中心を占めるようになると、新興勢力であった「韋郎保と賈玉貞」の名が一般化するようになる。その例として、本章で取り上げてきた説唱本「梁祝」故事、「売臙脂」故事、「秦雪梅」故事、「藍橋会」故事、「続藍橋会」故事などをひとつに繋げた物語である、近代小説『七世夫妻』をみると、一世夫妻は万杞梁と孟杞梁、二世夫妻は梁山伯と祝英台、三世夫妻は郭華郎と王月英、四世夫妻は王十朋と錢玉蓮、五世夫妻は商琳と秦雪梅、六世夫妻は韋燕春と賈玉珍、七世夫妻は李奎元と劉瑞蓮、そのうち六世目は「韋燕春と賈玉珍」とあり、上海石印説唱本と同じ名前が採用されている。これは、上海石印説唱本の流通により、従来の北方鼓詞などで広まっていた「魏公子と藍瑞蓮」に取って代わり、「韋燕春と賈玉珍」の名が後世まで伝わり定着したことを示す。

以上、湖南説唱本と上海石印本において特徴的に現れた、有名民間故事に付加された転生姻縁とその類型の形成過程を、現存する文献を通して再度復元しながら検証し、それぞれの転生姻縁の類型が、地域や各種媒体においてどのように分化し、また多様化していったのかを明らかにした。金童玉女による転生姻縁の組み合わせは、清末民初の説唱テキストの出版、流通を背景に、結び付いたり、離れたり、淘汰されたりと、複雑に絡み合いながら構築を続け、後世の小説『七世夫妻』を誕生させるまでに至ったと推察される⁵⁴。

しかし、説唱本の「梁祝」故事、「売臙脂」故事、「秦雪梅」故事、「藍橋会」故事、「続藍橋会」故事などは、もともと単独で出版されたものであり、物語中で金童玉女の転生姻縁を描く場合も、冒頭や文末で「次の世は何某と何某に生まれ変わる」と、二世、三世にわたる姻縁だけを述べて完結しており、小説『七世夫妻』のように転生先の物語を全てまとめて出版するまでには至っていない。

ただ、湖南説唱本には、これらの個別で出版されていた物語を、「金童玉女の転生姻縁」を以てひとつに寄り集めようとした、湖南の書肆の動きを示す形跡が残されている。

6. 「三世姻縁」の長編化と湖南の書肆の販促意識

「梁山伯・祝英台」と「郭華・王月英」と「商琳・秦雪梅」の三世姻縁の組み合わせが、湖南説唱本『新抄繡像祝英台』、『王月英賣臙脂』、『新刻秦雪梅三元記全部』の間でのみ共有されることから、この三作品について、湖南において転生姻縁三部作のような位置づけだったと指摘したが、実際に、湖南の書肆がこれらを意図的にひとつのシリーズと見立てて販売したと思しき痕跡がテキストに残されているので、以下に引用したい。

それは、『王月英賣臙脂』と『新抄繡像祝英台』の物語の終わりで、二世、三世にわたる転生姻縁を語った後に加えられる最末尾の文言に見ることが出来る。

【表 9】 1 『王月英賣臙脂』長沙刻本、14a

准他二次下凡程、金童投到梁家去、玉女投生祝英台、欲知轉世姻縁事、山伯書中再追尋。月英在此講完了、要看二本說清白。

二度目は、金童は梁家へ生まれ変わり、玉女は祝英台に生まれ変わるよう言いつけられた。転生姻縁の事が知りたければ、山伯の書で続きをご覧ください。王月英のお話はここで終わり、詳しくは二冊目を読めば明らかに。

【表 10】 1 『新抄繡像祝英台』中湘：九總三元堂歌書發客、41ab

一世英台梁山伯、姻縁未成少修得、二世月英與郭華、販買臙脂就是他、三世商淋（琳）雪梅女、命將投胎宰相府、□□□□割手巾、三世才得結為婚、雖然婚姻有三世、

⁵⁴ 「藍橋会」故事の中で、頻繁に転生先として取り上げられていた「王金龍と玉堂春（蘇三）」を主人公とする「玉堂春」故事は、何故転生姻縁の組み合わせの中から淘汰されてしまったのか。想像の域を越えないが、「玉堂春」故事は、「三堂会審」の後で王金龍と蘇三が大団円を迎えるという結末で広く伝わり、二人は他の主人公に転生する必要が無い。また、転生姻縁の物語の順序の中に組み込むために、悲劇に改作するにも無理があるため、淘汰されていったのではないだろうか。現存する説唱本の「玉堂春」故事自体にも、金童玉女の転生姻縁の要素は取り入れられていない。

無縁不得成夫婦、不料商門家業貧、秦府嫌貧愛富人、商郎秦府把書讀、觀見小姐容顏厚、後來得病送歸家、可憐一病染黃沙、雪梅聽信了不得、過門弔孝來守節、愛玉生下一小兒、斷機教子去功書、好個真節雪梅女、子讀詩書教得苦、後來輅兒中三元、全家福祿大團圓、我看此書真有趣、後來作本三元記、列位要知此斷情、三元記上看分明。

一世の祝英台と梁山伯が、姻縁を全うしなかったのは修行が足りず、二世の王月英と郭華、臙脂を買い入れたのがまさに彼、三世の商琳と秦雪梅は、宰相の屋敷に生まれ変わり、(判読不明)、三世でようやく結ばれた。婚姻は三世にわたるといえど、縁が無ければ夫婦になれない。思いがけず商門の家は貧しく、秦府は貧乏を嫌い金持ちを愛した。商郎は秦府で勉学に励み、娘の美しい姿を見かけると、後に病気となり実家に帰った。可哀想に病で黄泉へ旅立ち、雪梅はその知らせを聞くと堪らず、商家に嫁ぎ喪を弔い節を守った。愛玉が生んだ遺児を、織かけの機を断って子を戒め厳しく勉強させた。真の節婦である雪梅は、子が勉強するとなると懸命に教え、後に輅兒は三元及第、一家は幸せな大団円を迎えた。私はこの書を読んだところ本当に面白く、後に『三元記』を作った。皆さまこの内容を知りたいければ、『三元記』をご覧いただければ明らかに。

それぞれ、「詳しくは続きをご覧ください」という宣伝文句を付加し、『王月英賣臙脂』は『山伯書』すなわち「梁祝」故事の書籍の購入を勧める。

特に『新抄繡像祝英台』では、三世目の転生先である「商琳と秦雪梅」に関する物語、つまり「秦雪梅」故事のあらすじを予告のように簡単に紹介し、読者の興味を次の作品へつなげる効果を狙う。この宣伝文句は、物語を購入させるために、湖南の書肆が意図的に挿入した販売戦略の一貫だったと言えるが、それだけでなく、これによって、もともと単独で流通していた物語が、ひとつのシリーズとして、転生姻縁三部作へと仕立てられていったとも指摘できる。

また、下線部「我看此書真有趣、後來作本三元記、列位要知此斷情、三元記上看分明」の文言は、他地域の説唱本には無く、湖南説唱本『新抄繡像祝英台』(中湘：九總三元堂刻本、長沙：誠典堂刻本)にのみ見られるものである。もしこの文言を信じるのであれば、弋陽腔系演劇などで古くから伝わっていた「秦雪梅」故事は、湖南の書肆で新たに「三世姻縁」の要素を持つ、『新抄繡像祝英台』の続編という体で編み直され、湖南説唱本「転生姻縁三部作」のひとつとして『新刻秦雪梅三元記全部』が出版されたとも考えられる⁵⁵。

一方、上海石印説唱本は、湖南説唱本ほど明白にテキストの中に書肆の販売意図を表現してないが、例えば、「藍橋會」故事の上海石印説唱本『繪圖水漫藍橋相會』(上海：文益書局)は、末尾に「続きは「売臙脂」故事をご覧ください」等の宣伝文句を入れなくても、同じく転生姻縁の要素を持つ『新出抄本買臙脂』を合本で販売し、また顧頡剛によれば、上海の槐蔭山房の『水漫藍橋相會』は、続編の『藍前二世姻縁團圓記』とセットで販売されたようである。つまり、上海の書肆では、「藍橋會」故事を中心に、合本という形で転生

⁵⁵ 黄樸「祝英台与秦雪梅」『民俗週刊』第93、94、95期合刊(1930)、今『梁祝文化大観』「學術論文卷」pp.21-24所収で、黄氏は坊刊本の「梁祝」故事と「秦雪梅」故事、また「売臙脂」故事とおぼしき物語を挙げ、「秦雪梅」故事が「梁祝」故事の第二期作品であると指摘するが、懸案のまま具体的な状況は明らかにされていない。

姻縁の物語をひとつにまとめる動きはあったと言える。

湖南の書肆による説唱本販売戦略と連動した「転生姻縁三部作」としてのシリーズ化への志向や、上海石印説唱本のように合本販売する動きなどを通して、個別に語られていた転生姻縁の要素を持つ物語が、半ば強引ではあるが寄り合わさり、長編化していく過程に、清末民初の説唱本出版活動が少なからず関わっていたことが具体的に明らかにされた。また、近代小説『七世夫妻』や、地方戯では豫劇『五世姻縁』⁵⁶や、湖南の連台本戯『七世姻縁』⁵⁷などにも見られるような、多世姻縁の物語という新たなジャンルを生み出すのにも、一役を担ったと言えるのではないだろうか。

7. 本章のまとめ

本章では、現代でも七夕伝説として知られる、天界に仕える金童玉女が俗念を起こして俗世に降ろされ、人間の男女として姻縁を全うすべく、一世夫妻は万杞梁と孟杞梁（「孟姜女」故事）、二世夫妻は梁山伯と祝英台（「梁祝」故事）、三世夫妻は郭華郎と王月英（「売臙脂」故事）、四世夫妻は王十朋と銭玉蓮（「荊釵記」故事）、五世夫妻は商琳と秦雪梅（「秦雪梅」故事）、六世夫妻は韋燕春と賈玉珍（「藍橋会」故事）、七世夫妻は李奎元と劉瑞蓮（「続藍橋会」故事）と、今世で姻縁を成就できない男女（金童と玉女）が次世で結ばれんと七夕に転生を繰り返す、近代小説『七世夫妻』における「金童玉女の転生姻縁」を介して有名民間伝説がひとつに寄り合わさる現象に着目し、このいわゆる「多世姻縁」の物語の形成の背景にあると考えられる、清末民初に出版された関連する有名民間伝説の説唱本を網羅的に収集し分析を試みた。

分析の方法として、七つの民間故事の中でも、湖南説唱本では「梁山伯・祝英台」「郭華・王月英」「商琳・秦雪梅」のセット、上海石印説唱本では「郭華・王月英」「梁山伯・祝英台」「韋郎保（燕春）・賈玉貞」がセットの三世姻縁の組み合わせを中心に、その他、各種媒体でも編まれた関連する物語にみえる二世、三世姻縁と併せて、その転生姻縁の類型をひとつひとつ確認しながら、転生姻縁の類型が、物語の流通・流布の過程でどのように分化し、多様化したのか、並びに「金童玉女の転生姻縁」という設定のもとで、如何に単独の有名民間伝説同士がひとつに寄り合わさったのかを再現的に検証し、その上で、湖南説唱本「秦雪梅」故事、「梁祝」故事、「売臙脂」故事の間に現れる湖南独自の現象が、物語の伝播・テキストの流通を通して、各地域の文化現象と関わり合いながら、全国的なものとなる過程を明らかにした。

第1節は、従来の研究として、楊振良（1985）は『七世夫妻』つまり「多世姻縁」の物

⁵⁶ 劉康健「千古絶唱出中原—河南省汝県梁山伯与祝英台故里考」『中国地方誌』第6期（2004）に「…查《中国戏曲曲艺词典》、有《五世姻縁》戏剧、该剧目为河南豫剧传统剧目、该剧写孟姜女与范杞梁的爱情悲剧未果、投胎转世为梁山伯与祝英台、后梁祝爱情仍以悲剧未果、投胎转世为白娘子、许仙、白娘子与许仙爱情未果、有投胎转世为魏世秀与蓝瑞莲、蓝桥会仍以悲剧终、魏世秀与蓝瑞莲有投胎转世为商琳与秦雪梅、亦没有结果。」とある。

⁵⁷ 胡健国「從音樂角度看小戯形成發展的軌跡」『艺海』4期（2000）、に「邵阳花鼓戏……还将民间流传的孟姜女与范杞良、祝英台与梁山伯、郭华郎与王月英、王十朋与钱玉郎、商琳与秦雪梅、韦郎与贾珍等爱情故事编成连台本《七世姻縁》」とある。

語の形成と、清末民初の説唱本との関連を示唆するが、指摘にとどまるのみで、網羅的に各民間伝説の説唱本を収集した分析が行われていないことを確認した。

第2節は、湖南説唱本にみえる転生姻縁の物語、「秦雪梅」故事、「売臙脂」故事、「梁祝」故事を取り上げ、それぞれの物語の成立背景、湖南説唱本の書誌情報、「金童玉女の転生姻縁」が描かれる箇所抽出と転生姻縁の類型について調査した。

まず、「秦雪梅」故事は、明の南戯伝奇『商輅三元記』に取材し、明清期に弋陽系演劇を中心に広まり、一方、民間説唱では場面の付加や改変を経て、新たな全幕通しの説唱本『秦雪梅三元記』系列のテキストが編まれ、このテキストは、湖南説唱本『新刻秦雪梅三元記全部』（中湘：九總黄三元堂刻本、洪江：豊泰新堂刻本）をはじめとする、湖北、広西など周辺地域で木版印刷され、更に上海でも石印出版され、全国的に最も流通したものである。金童と玉女の「三世姻縁」が描かれるのは、説唱本で新たに付加された、秦雪梅が亡くなった商琳を探しに地獄めぐりをする場面であり、その類型は「一世が梁山伯と祝英台、二世が郭華と王月英、三世が商琳と秦雪梅」である。

また、湖南説唱本には、その他に全幕通しの『秦雪梅三元記』のダイジェスト版である『新刻三班鼓三元記』（常德：錦華堂刻本）、『綉像三元記秦府攻書全本』（益陽：文元堂刻本）も存在する。地獄めぐりの場面が割愛されているため、「三世姻縁」の件は無いが、「商琳と秦雪梅は天界の金童と玉女の生まれ変わり」という設定は守られていた。

次に、「売臙脂」故事は、宋・李昉『太平広記』卷二七四所収『買粉児』（出『幽明録』）を始め、宋・皇都風月主人『緑窗新話』所収『郭華買脂慕粉郎』、元雜劇『王月英元夜留鞋記』や明伝奇『新刻全像臙脂記』によって伝わった、臙脂売りの王月英に恋をした郭華が、逢引きの時間に遅刻し、失意の中、月英が残した靴を呑み込んで生死を彷徨するも、最後は蘇生して二人は夫婦になるというハッピーエンドの物語である。清代以降の説唱文芸の中でも、湖南説唱本として出版された『王月英賣臙脂』（長沙刻本）は、郭華と王月英が共に相思病で死に、現世で結ばれずに転生するという、「金童玉女の転生姻縁」を付加した悲恋の展開に変容することが明らかとなった。また、転生姻縁の類型は、「一世が郭華と王月英、二世が梁山伯と祝英台」の二世姻縁を以て描かれた。

また、「梁祝」故事は、清の翟灝『通俗編』卷三十七「梁山伯訪友」（唐・張誥『宣室志』を引く）に、祝英台は男装して遊学し梁山伯と共に学ぶ。後に再会して二人は想い合うが、祝英台は馬氏と婚約し、梁山伯は病死する。祝英台が馬氏に嫁ぐ日、梁山伯の墓の近くを通りかかると、墓の地面が割け祝英台は飛び込み、二人は共に埋葬されたという伝説が残されている。また、宋末から元中期に成立したとされる朝鮮本『夾注名賢十抄詩』所収の唐末の羅鄴の佚詩「蛺蝶」と、その注に引かれる『梁山伯祝英台伝』には、墓に飛び込んだ祝英台の衣服が蝶になったと描かれ、後に、二人の魂が蝶になって天へ飛び去る「梁祝」故事が生まれる。

一方、現世で結ばれない梁山伯と祝英台が、他の有名民間故事の男女に転生するという展開の「梁祝」故事も、各地の民間伝説、説唱など各種媒体において編まれるようになる。文字テキストとして広く流通したのは、やはり清末民初の湖南説唱本と上海石印本が主であった。湖南説唱本で出された「梁祝」故事には、『新抄綉像祝英台』（中湘：九總三元堂刻本、長沙：誠典堂刻本）があり、物語中で描かれる転生姻縁の類型は、「一世が梁山伯と祝

英台、二世が郭華と王月英、三世が商琳と秦雪梅」であった。

以上、湖南説唱本にみえる各物語の分析を通し、民間説唱における「金童玉女の転生姻縁」のモチーフの付加により、従来伝わる物語には無かった場面の増設や、ハッピーエンドの物語が結ばれない悲恋に改作されたことが明らかとなった。

また、湖南説唱本『新刻秦雪梅三元記全部』、『新抄繡像祝英台』の間では、「梁山伯と祝英台→郭華と王月英→商琳と秦雪梅」と転生先の組み合わせを同じくし、『王月英賣臙脂』は「郭華と王月英→梁山伯と祝英台」の二世姻縁で描かれ、『新刻秦雪梅三元記全部』、『新抄繡像祝英台』と一世、二世の順序は逆だが、それぞれの物語の間で繋がりを持つことが明らかとなった。ここから、湖南説唱本では、「売臙脂」故事、「秦雪梅」故事、「梁祝」故事は、湖南の書肆から出版される際に、転生姻縁の組み合わせを共有することを前提に創作されていたと推察した。

第3節は、湖南説唱本で「三世姻縁」を介して結び付いた「秦雪梅」故事、「売臙脂」故事、「梁祝」故事が、上海石印説唱本や他地域の説唱本で伝わる時、物語中の金童玉女の転生姻縁はどのように描かれるのか、その傾向や特徴を明らかにした。

先ず、「秦雪梅」故事は、全国的に広く流通した説唱本『秦雪梅三元記』系列のテキストに含まれる上海石印説唱本『新刻秦雪梅三元記全部』（上海：昌文書局など）、『繡像説唱秦雪梅三元記』（上海：鑄記書局）以外に、説唱本『秦雪梅三元記』系列テキストの流れを汲む、石印説唱本『秦雪梅吊孝三元記全本』、『繡像三元記秦雪梅全伝』（上海：椿蔭書莊）や、淮戯『改良新纂秦雪梅十集』（大達書局石印本）など、如何なる媒体でも「三世姻縁」の類型は変容することなく、「一世は梁山伯と祝英台、二世は郭華と王月英、三世は商琳と秦雪梅」という確立された組み合わせで流布したことが明らかとなった。

次に、「売臙脂」故事は、湖南説唱本以外には、上海石印説唱本『新出抄本買臙脂』（上海：文益書局）のみ金童玉女の転生姻縁の描写が確認された。上海石印説唱本『新出抄本買臙脂』は湖南説唱本『王月英買臙脂』の翻印であるため、転生姻縁の類型も、湖南説唱本のまま「一世は郭華と王月英、二世は梁山伯と祝英台」であった。また、子弟書『賣臙脂』、京劇『買臙脂』、安徽廬劇『郭華買臙脂』、黄梅戲『買臙脂』、梆子腔『買臙脂』等、その他の説唱や地方劇を調査したところ、「売臙脂」故事の悲恋化と金童と玉女の転生姻縁の付加は、湖南説唱本とそれを翻印した上海石印説唱本独自のものであることが明らかとなった。

文益書局本で特徴的なのは、『絵圖水漫藍橋相會』と合冊という出版形態で販売されたことである。また、『絵圖水漫藍橋相會』に描かれる転生姻縁の類型は、「一世は郭華と王月英、二世は梁山伯と祝英台、三世は韋郎保と賈玉貞」と、「藍橋会」故事の主人公「韋郎保と賈玉貞」が新たに採用された。

また、「梁祝」故事は、上海石印説唱本『最新絵図梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記』（椿蔭書局）、『繡像梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記』（協成書局、槐蔭火房書莊）、『新刻梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記』（文益書局）があり、いずれも形式や全文の文言をほぼ同じくする同系列のテキストで、そこで描かれる結末と転生姻縁の類型は、湖南説唱本『新抄繡像祝英台』とは異なり、「一世は郭華と王月英、二世は韋郎保と賈玉貞、三世は梁山伯と祝英台」であった。これは、先ほどの『絵圖水漫藍橋相會』と類型を同じくするため、上海石印説唱本では、「売臙脂」故事、「梁祝」故事と、新たに「藍橋会」故事の間で、「三世

姻縁」が築かれたと言える。

第4節は、新たな転生先として出現した「韋郎保と賈玉貞」の「藍橋会」故事について、説唱本の種類と転生姻縁の類型を調査したところ、北方の鼓詞のテキストが数多く出版され、その他に四川、湖南、湖北の説唱本も存在し、いずれも主人公の名は「魏公子と藍瑞蓮」で広まっていたことが明らかとなった。また、転生姻縁の類型も「一世は魏公子と藍瑞蓮、二世は王金龍・玉堂春（蘇三）」という「玉堂春」故事の主人公の名が広く採用されていた。しかし、第3節の「売臙脂」故事でも挙げたが、上海石印説唱本『絵圖水漫藍橋相會』では転生姻縁の類型が「一世は郭華と王月英、二世は梁山伯と祝英台、三世は韋郎保と賈玉貞」と大きく変容し、上海において新たに「売臙脂」故事や「梁祝」故事と結びつき、主人公の名前も「韋郎保と賈玉貞」に改まったことを確認した。また、「藍橋会」故事の続編である北方鼓詞『続新藍橋』を上海石印説唱本で翻印し、「一世は郭華と王月英、二世は梁山伯と祝英台、三世は韋郎保と賈玉貞」の他に、「続藍橋会」故事の主人公「李奎元と劉瑞蓮」を新たな転生先として増幅させたことも明らかとなった。

第5節では、第2、3、4節で明らかとなった、湖南および上海で出版された説唱本を中心に、転生姻縁の類型についてまとめ、湖南説唱本「秦雪梅」故事、「売臙脂」故事、「梁祝」故事の間に生まれた「商琳・秦雪梅」と「郭華・王月英」と「梁山伯・祝英台」の「三世姻縁」は、湖南独自の組み合わせであったこと、一方、上海石印説唱本では、「売臙脂」故事、「梁祝」故事、「藍橋会」故事、「続藍橋会」故事の間で「郭華・王月英」と「梁山伯・祝英台」と「韋郎保と賈玉貞」と「李奎元と劉瑞蓮」が、転生姻縁を介して新たな繋がりを持ち、また説唱本の流通を以て、これらの新たに構築された類型が一般化していったことを確認した。また、「郭華・王月英」と「梁山伯・祝英台」と「韋郎保と賈玉貞」と「李奎元と劉瑞蓮」と「商琳と秦雪梅」の間で変容する転生姻縁の類型の流布系統を明らかにしたことで、当時の湖南と上海は、「転生姻縁」という設定の付加という出版手法を共有しながら、地域独自の転生姻縁の組み合わせで創作がなされていたことが分かった。

第6節では、これらの単独で出版されていた有名民間伝説の説唱本が、如何に「金童玉女の転生姻縁」を介してひとつに寄り合わさったのか、近代小説『七世夫妻』のような「多世姻縁」の物語が生まれる契機となる背景や、そこに現れる民間書肆の販促意識を分析した。湖南説唱本『新刻秦雪梅三元記全部』、『王月英賣臙脂』、『新抄繡像祝英台』のテキストの末尾には、湖南の書肆から「続きは〇〇をご覧ください」という「転生姻縁三部作」としてシリーズ化を狙った宣伝文句が挿入され、一方、上海石印説唱本にも、転生姻縁の要素のある物語同士を半ば強引に合本販売する現象が見られた。これまで単独で語られていた転生姻縁の物語が、寄り合わさって長編化し、後の全国的な七夕伝説『七世夫妻』を生む過程に、清末民初の書肆による意図的な説唱本出版活動が少なからず介在していたことが明らかとなった。

第4章 湖南説唱本「私訪」故事の流行と流通

0. はじめに

本章では、湖南説唱本の中でも特に人気があり、湖南地域で大量に出回った物語を取り上げ、その流行と流通の仕組みについて、歴史的、社会的、文化的背景から明らかにする。

現存する湖南説唱本の100種以上にのぼる物語の中で目を引くのが、書名に「私訪」という文言を採る物語が数多く存在することである。特に『彭大人私訪蘇州』、『彭大人私訪蓮花廳』、『陶大人私訪江南』、『吳大人私訪漢陽』など、「彭大人」、「陶大人」、「吳大人」を主人公とするものは、物語の種類およびテキストの種類が群を抜いて多い。これらは、出版の形態においてシリーズ化されていたと言ってよく、その人気のほどがうかがえる。その他、湖南省華容県知事の馬金龍による『私訪華容』¹、盧知県による『盧知県私訪武陵』²、湖南巡撫の趙陞喬による『私訪長沙』³など、「私訪」と湖南にゆかりのある地名とが結び付いた書名が散見し、また乾隆帝の『新刻私訪遊南京』⁴、嘉慶帝の『新刻私訪桂花城』⁵など、皇帝による「私訪」故事も出版された。

「私訪」とは、私行、微行などとも言い、皇帝や地方清官が変装をして秘密裡に各地へ民情調査に出かける行為である。古くは元雜劇『陳州糶米』や明成化説唱詞話『陳州糶米伝』における包拯(999-1062)の「私訪」から、包拯を扱った明代後期の『百家公案』、『龍図公案』や、清代の彭鵬(1637-1704)、施世綸(?-1722)、劉墉(1719-1804)という実在の人物を主人公に据えて創作された、『彭公案』、『施公案』、『劉公案』などの公案小説に至るまで、「私訪」は公案物の常套として使用される⁶。また、現在も康熙帝や乾隆帝の諸国漫遊などの長編テレビドラマが放送されるように、普遍的なモチーフとして脈々と民間に根付くものである。

その「私訪」故事が、清末民初の湖南において陸続と創作され、且つ永州、湘潭、長沙、洪江、武岡など、湖南省各地の書肆から、説唱本として大量に出版された。また、これらの作品は、前章までに取り上げた、「秦雪梅」故事、「梁祝」故事、「売臙脂」故事などの民間伝説、小説、戯曲に取材する伝統的な物語とは異なり、「私訪」という普遍的なモチーフを採用してはいるが、内容は全て湖南オリジナルである。このような湖南における「私訪」故事の大量発生は、他地域の民間説唱にはみられない単独で起きた特殊な文化現象であったと考えられる⁷。

¹ 長沙刻本(湖南図書館、復旦図書館蔵)、湘潭:同華堂刻本(国家図書館蔵)、蕭福祥刻本(湖南図書館蔵)がある。

² 常德:明経堂刻本(湖南図書館蔵)がある。但し現物は損壊しているため閲覧出来なかった。刊記は湖南図書館の目録に従う。

³ 姚逸之・鍾貢勛述『湖南唱本提要』(国立中山大學語言歴史研究所、1929) p. 110 に著録あり。ただし、各図書館に所蔵が無いのでテキストを直接確認することはできなかった。

⁴ 洪江刻本(上海図書館蔵)

⁵ 永州:王文順堂刻本(上海図書館蔵)、湘潭:黄三元堂刻本(国家図書館、上海図書館蔵)

⁶ 金海南『水戸黄門「漫遊」考』(東京・新人物往来社、1999)、および改訂版である金文京『水戸黄門「漫遊」考』(講談社学術文庫、2012)に詳しい論考がある。

⁷ 論者が行った各図書館における説唱本調査に拠ると、書名や封面に「私訪」という文言を採用するものは、本文で取り上げる物語以外にも、例えば『新刻小清官烏江渡私訪全部』(封面「七美图全部/喻文榜私訪江南」中湘刻本、湖南図等所蔵)や、『新刻烏金記』(封

この特殊な文化現象が引き起こされる契機は何だったのか。流行・流通を支える背景はどのようなものがあったのか。湖南説唱本「私訪」故事の収集、テキストの整理および物語内容に対する分析を通して、説唱本の出版・流通における地方文化モデルの成立過程を考察したい。

1. 湖南説唱本「私訪」故事の出版ブーム

1.1. 「私訪」故事説唱テキストの種類と特徴

先述のとおり、「吳大人」、「陶大人」、「彭大人」に関する「私訪」故事は、現存するテキストの種類や点数が多く、湖南地域で流行を築いた代表的な作品だと言える。以下に、各大人の物語の書誌情報、物語の概容を確認しながら、出版形態の主な特徴を見ていく。

1.1.1. 吳大人

【表 16】

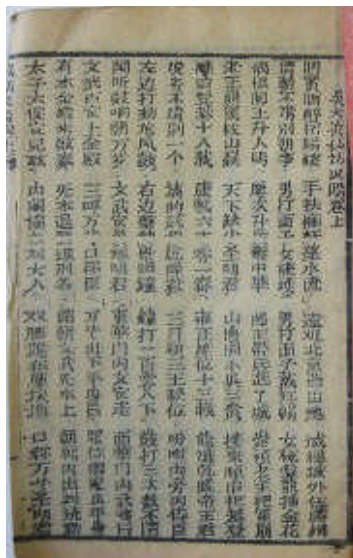
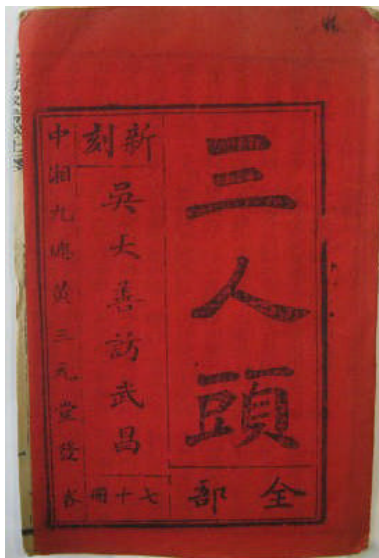
	書名	封面	刊記	所蔵箇所
1	吳大善私訪漢陽	三人頭全部/新刻吳大善訪武昌/七十冊/中湘九總黃三元堂發客	中湘：九總黃三元堂刻本	湖南、国図、復旦、上図×2部、浙図、大木
2	新刻九人頭吳大人私訪	吳大人私訪九人頭/新刻漢陽府 獄神殿明冤 捉拿張大紅/二百廿冊/星沙小西門外上河街□□歌書發客	星沙刻本	湖南、復旦、上図×3部（四巻のみ4部）、首図、浙図、大木、中山
		吳公案 下巻/後本 長發救親得妻財楊春龍拜干父昇官/□□歌書發客		
3	新刻九人頭吳大人私訪（存一卷）	吳大人 私訪九人頭/新刻 漢陽府 獄神殿明冤 捉拿張大紅/百七十冊/星沙小西門外上河街左三元堂歌書發客	長沙：左三元堂刻本	国図
4	吳大人私訪九人頭	吳大人私訪九人頭下巻 上海椿蔭書莊發行/總督監牢訪案 大紅案發被捕 長發鳴冤出首 惡棍難逃伏法	上海：椿蔭書莊石印本	傅斯年、北大
5	校正吳大人私訪九人頭奇案全傳	吳大人私訪九人頭卷上 上海協成書局印行/春龍落第投江 妬姦刀二命 圖財推人下井 買頭反成鐵案	上海：協成書局石印本	傅斯年

面「烏金記全部/張大人私訪捉拿雷龍 陳氏女救夫伸冤報仇」、中湘：黃三元堂刻本、上図等所蔵）があり、これらは後に石印本『新抄小清官私訪烏江渡全本』（椿蔭書莊、傅斯年所蔵）、『繪圖王小姐烏金記全集』（上海姚文海書局他、上図所蔵）としても出版される。その他、出版地が明記されないテキストは『劉大人私訪』（泰山堂刻本、国図所蔵）や、『新刻魏大人私訪海州記』（清刻本、国図所蔵）、『新刻劉都堂私訪大清傳』（懷徳堂刻本、国図所蔵）があり、これらも後に石印本『繪圖魏大人私訪海州記全本』（椿蔭書莊、傅斯年所蔵）や『改良劉貴成寫退婚私訪釧金鐲記全本』（槐蔭山房、復旦所蔵。協成書局、劉徳記書局、傅斯年所蔵）が出版された。また『新刻殺子報私訪天齊廟大剛許氏全本』（別墅山房刻本、傅斯年・国図所蔵。石印本、傅斯年所蔵）等もあるが、やはり物語の種類やテキストの種類で圧倒的多数を占めるのは湖南説唱本である。その他、例えば潮州歌には皇帝の漫遊記として題名に「私訪」ではなく「遊」を採る『新造乾隆君游山東』、『乾隆君游蘇州』などの物語が幾つか存在する。

【表 16】1 吳大善私訪漢陽（三人頭）

先ず、【表 16】1 のテキスト『吳大善私訪漢陽』を見てみたい。物語のあらすじは以下の通り。

吳大善は陝西長安の人で、乾隆帝より兩湖制台に任命され、「上方劍」（殺生与奪の専権を有す劍）と「先斬後奏」（許可なく処刑できる）の特権を賜る。湖北湖南の民は粗暴だと聞いていたが訴訟案件が少ないので易者に変装して民情調査へ出かける。武漢の万伯侯という書辦は「害人精」と呼ばれ胥吏とつるみ悪行三昧、武昌で王貴の家を通りかかり、未亡人の吳氏を手籠めにしようとしたが隣人に止められる。しかし、隣人は万伯侯の恨みを買うのを恐れ、彼を広合楼で接待する。広合楼に居合わせた吳大善は万伯侯を知り隠密に調査する。後に未亡人の吳氏は武昌から漢陽府へ万伯侯を訴えに出かける。吳大善も後を追うが、渡し場で高豹子に渡し賃の代わりに荷物を強奪される。さて、吳氏は漢陽令に訴えるも追い返され、それを知った吳大善は、万伯侯、漢陽令および悪党の高豹子を捕えて斬罪とした。



- 12行×31字（7字句4句）
- 全11葉
- 16×12cm / 14.5×9.9cm（匡郭寸法）
- 7字句の韻文、途中「白」「説話」等で始まる散文が挿入される。

図【表 16】1 『吳大善私訪漢陽』中湘：九總黃三元堂刻本 封面、1a

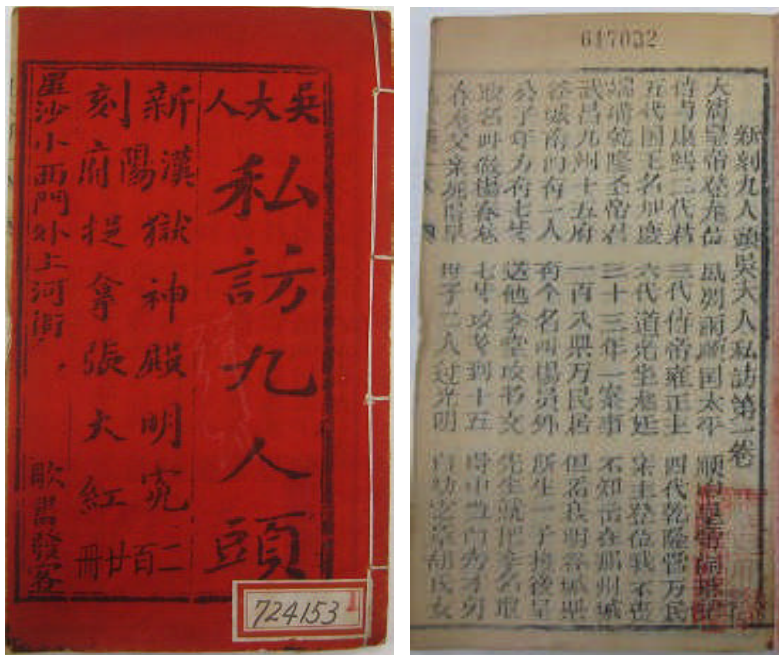
【表 16】2～5 九人頭吳大人私訪

【表 16】2～5 は、全テキストの説唱形式は全篇 7 字句、若干の文言の異同はあるが内容は同一の物語である。【表 16】4、5 の上海石印説唱本は、【表 16】2、3 の湖南説唱本を翻印したものである。「三人頭」同様、九人の首切り事件を描く。

物語のあらすじは以下の通り。

乾隆三十三年（1768）、湖広総督の吳大善が武昌谷城県の楊春龍の冤罪を晴らした話。楊春龍は科挙試験に落第し失意の中、王天成の所で居候をしながら勉強することになる。王天成には娘の玉環、息子の王中が居た。ある日、近くの薬屋の張大紅が楊春龍に変装して、玉環の部屋に忍び込み、思いを遂げると、頻繁に通うようになる。王天成を泥棒と勘違いした王中は、妹の部屋で妻の柳氏と見張りをしたまま酒に酔って寝てしまう。そこへ張大紅が会いに来て、勘違いから寝ている二人を殺して首を捨ててしまう。しかし、楊春龍の仕業だと誤解をされて、楊春龍は無実の罪で捕まってしまう。斬首事件が引き金とな

り、首が捨てられた家の下男も殺害事件に巻き込まれ、楊春龍の妻も殺され、また楊春龍に金で首を売るために獄卒が自分の母を殺害する等、連鎖的に斬首事件が起こる。呉大善は医者に扮して調査し、芋蔓式に事件を全て解決した。



- ・ 10行×7字句3句
- ・ 四巻、全59葉
- ・ 16.3×9.7cm/14.1×8.4cm
- ・ 全篇7字句の韻文

図【表16】2 『新刻九人頭吳大人私訪』星沙刻本 封面、1a

これらのテキストは、本文の冒頭で「大清皇帝登龍位、風調雨順國太平、順治皇帝開基業、傳与康熙二代君、三代傳帝雍正主、四代乾隆管万民、五代國王名加（嘉）慶、六代道光坐龍廷、親主登位我不表、端講乾隆聖帝君…」と歴代の皇帝を挙げるが、道光帝で終わるため、道光年間に編まれた作品ではないかという指摘がある⁸。また、【表16】2のテキストは2冊組で、1冊目の全体の封面は上図のように「私訪」だが、呉大人が登場して事件を解決する内容の2冊目は、公案の要素が強いせい、封面は「公案」となっている。

1.1.2. 陶大人

【表17】

	書名	封面	刊記	所蔵箇所
6	新刻清官傳陶大人私訪南京道情真本	清官傳全部/新抄 陶大人私訪南京省道情真本/二百冊/益陽縣頭堡文元堂書坊梓	益陽：文元堂刻本	湖南
7	新刻私訪江南	新刻陶大人私訪南京/百二十折/清官傳全部/武岡州正街大林堂福記	武岡：大林堂福記刻本	上図
8	新刻私訪江南	清官傳全部/新刻 陶大人私訪南京道情真本/六百冊/洪江□□堂書坊梓	洪江刻本	上図

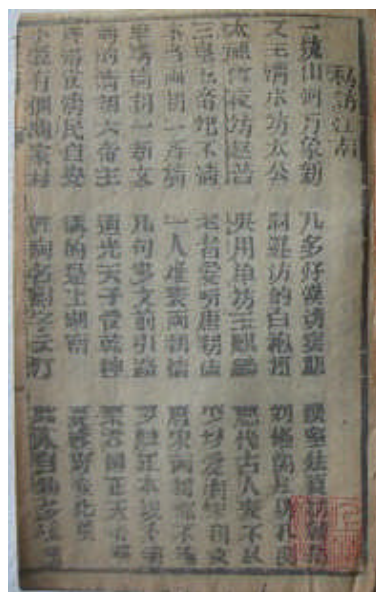
⁸ 張繼光「一百五十種湖南唱本書録」『中国文哲研究通訊』第8巻・第2輯（1998）p.115

9	私訪江南	陶大人私訪江南/新抄 真本 私訪曹百萬 捉拿尤子金/□□冊/□□堂揀抄真本發客	刻本	湖南、復旦、上図、浙図、首図、演博
		劉龍李豹 搜曹府/真傳/後本 吳官保頂職 蔡秀英受封		
10	私訪江南(存卷四)	劉龍李豹 搜曹府/真傳/後本 吳官保頂職 蔡秀英受封 /八十冊/中湘九摠 黃三元 堂藏板	湘潭:黃三元 堂刻本	国図

【表 17】 6～10 陶大人私訪江南

陶大人を主人公とする「私訪」故事は 1 種類のみ現存する。【表 17】 6～10 は、文言の異同はあるが、内容は同じ。益陽、武岡、洪江、湘潭などの各書肆から出版されており、広範に流通したと思しい。物語のあらすじは以下の通り。

道光年間、湖南の安化の陶澍は両江総督として、「三千人馬」、手下に劉龍と李豹、「先斬後奏」の特権を賜り、船で江南（南京）へ行く。江南では強盗が徒党を組み、官吏と結託して家財を強奪しているという噂を聞き、易者に扮装し、劉龍と李豹と共に調査へ出かける。途中で出会った吳官保は、親と帰省中に船上で強盗に遭い南京に辿り着いたという。後に、吳官保は大盗人の尤子金の銀子を拾ったことから災難に遭い、陶澍がそれを助ける。陶澍が尤子金を調査すると、仲間に曹百万と弟の曹龍、曹虎、曹彪、九門提督の蔡大朋、甘肅巡撫の任燕平という、盗賊と役人との繋がりが浮かび上がる。陶澍は調査の途中で却って曹百万に捕まり牢屋に繋がれるが、助けを得て役所に戻り、江南の強盗集団を全て捕えた。



- ・ 10 行×23 字（7 字句 3 句）
- ・ 五巻、全 58 葉
- ・ 15.1×9.5cm/14.1×8.7cm
- ・ 7 字句の韻文と途中に「白」、
「説話」で始まる散文を挿む

図【表 17】 6 『私訪江南』刻本 封面、1a

1.1.3. 彭大人

以下に挙げる彭大人の「私訪」故事は、6種類の物語が現存し、それぞれ彭大人が、蘇州（【表 18】11、12）、南京（【表 18】13～16）、山西の蓮花廳（【表 18】17～22）、広東（【表 18】23～26）、山東の九龍山（【表 18】27～29）、湖北漢陽（【表 18】30～33）の地に赴き民情調査をするという内容となっている。また、テキストの出版地は、湘潭、宝慶、永州、洪江、長沙、益陽などの湖南各地の名が見え、それぞれの物語が各地で広く出版されていたことが分かる。湖南説唱本全体の中でも、彭大人の「私訪」故事のように、一人の主人公で幾つも連作があるのは珍しく、特に人気を博したものだと考えられる。ちなみに、異なる書肆から同一物語が出版され、テキストが複数ある場合、各テキストの文言に若干の異同はあっても内容は大よそ同じである。

【表 18】

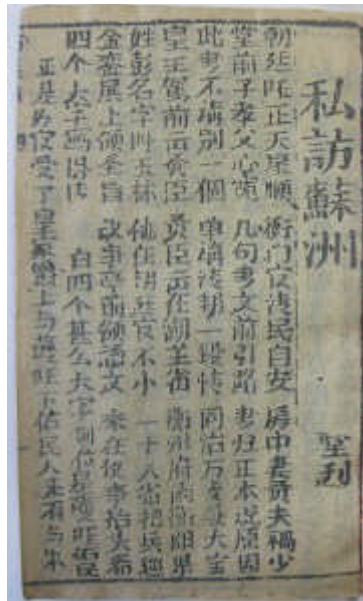
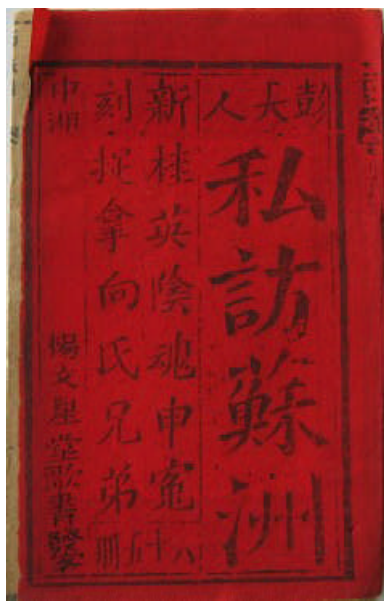
	書名	封面	刊記	所蔵箇所
11	私訪蘇州	彭大人私訪蘇洲/新刻 桂英陰魂申冤 捉拿向氏兄弟/八十五冊/中湘楊文星堂歌書發客	中湘：楊文星堂刻本	演博、早大、国図、首図×2部、復旦、上図×3部、湖南、大木、浙図
12	(私訪蘇州)	彭大人私訪蘇洲/新刻/桂英陰魂申冤 捉拿向氏兄弟/五十五冊/星沙小西門外上河街 左三元堂歌書發客	星沙：左三元堂刻本	中山(3葉～終り存)
13	彭大人私訪南京	彭大人私訪南京/新板 湖南人南京受害 劉大人洩恨報仇/八十冊/光緒丙午年文元堂書坊梓	清光緒三十二年(1906) 文元堂刻本	湖南
14	彭大人私訪南京	彭大人私訪南京/新刻 湖南人南京受害 劉大人洩恨報仇/六十冊	刻本	湖南、浙図
15	彭大人私訪南京	彭大人私訪南京/新刻 湖南人南京受害 劉大人洩恨報仇/五十冊	刻本	国図
16	彭大人私訪南京	彭大人私訪南京/新刻 湖南人南京受害 劉大人洩恨報仇/五十冊/星沙小西門外河 文元堂藏板	星沙：文元堂刻本	中山
17	彭大人私訪蓮花廳		宝慶：文元堂刻本	湖南
18	私訪蓮花廳全部	彭大人私訪蓮花廳/新鈔 江西省賓文秀冤魂伸冤 捉拿石匠朱大龍/八十六冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭□□堂發客	長沙刻本	湖南、首図×2部、復旦、上図×3部、浙図
19	彭大人私訪蓮花廳全部	民国丙寅年新刻/私訪蓮花廳/五金山冤魂頭應 奉聖旨二次出京/一千折/永州西郷渡楓塘文順慶記印兌	永州：民国十五年(1926) 文順慶記刻本	上図
20	彭大人私訪蓮花廳全部		永州：西郷田洞餘家刻本	国図(抛目錄)

21	私訪蓮花廳全部	彭大人私訪江西/新刻 蓮花廳 廳官進京面聖 皇娘保本復訪/八十六冊/中湘十摠正街同華堂歌書戲文發客	湘潭：同華堂刻本	国図
22	私訪蓮花廳全部	彭大人/私訪蓮花廳/新鈔/江西省/賓文秀冤魂伸冤 捉拿石匠朱大龍/六十六冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭左三元堂發客	長沙：左三元堂刻本	中山
23	私訪廣東 左三元刊	私訪廣東全部/新抄真本彭大人私訪萬花樓捉拿馬三洪/口十六冊/楊文星堂發兌	楊文星堂（左三元）刻本	湖南、演博、復旦、上図×3部、首図×3部、浙図（下冊×2部）
24	私訪廣東	私訪廣東全部/新刻真本彭大人私訪萬花樓捉拿馬三洪/式百八十/洪江豐泰新堂揀抄真本發客	洪江：豐泰新堂刻本	上図
25	彭大人私訪廣東省	民國乙丑年新刻/私訪廣東/折毀萬花樓 捉拿馬三洪/一千折/永州西鄉渡楓塘文順慶記印兌	永州：民国十四年（1925）文順慶記刻本	上図
26	私訪廣東	私訪廣東全部/新刻真本彭大人私訪萬花樓捉拿馬三洪/六十冊/太平街文珍堂抄揀真本發客	長沙：文珍堂	中山
27	私訪九龍山	私訪九龍山/新抄 姜大岸指路 師爺算八卦/七拾冊/星沙黃三元堂歌書發售	星沙：黃三元堂刻本	湖南、首図、演博、浙図
28	私訪九龍山	彭大人私訪九龍山/新刻 姜大岸指路 師爺算八卦/七十冊/益陽頭堡文元堂歌書發販	益陽：文元堂刻本	湖南
29	私訪九龍山	私訪九龍山/新抄 姜大岸指路 師爺算八卦/口拾冊/中湘楊文星堂刊刻	中湘：楊文星堂刻本	首図、復旦、上図×3部、浙図
30	私訪湖北漢陽全部	彭大人私訪湖北/新刻/漢陽府/嚴玉春買糖封提台 日英拜干父做夫人/口口冊/中湘楊文星堂戲文發客	中湘：楊文星堂刻本	湖南、首図×2部、復旦、上図×2部、浙図
31	私訪湖北漢陽		黃三元堂刻本	湖南（損壞）
32	私訪湖北漢陽全部	彭大人/私訪湖北/新刻/漢陽府/嚴玉春買糖封提台 日英拜干父做夫人/八十冊/中湘十摠正街蕭同華堂歌書戲文發販	中湘：同華堂刻本	湖南、中山
33		彭大人/私訪湖北/新刻/漢陽府/嚴玉春買糖封提台 日英拜干父做夫人/五十五冊/星沙小西門外上河街左三元堂戲文發客	長沙：左三元堂刻本	中山、湖南（1~3葉欠）、大木（13葉~終り存）

【表 18】 11、12 彭大人私訪蘇州

【表 18】 11、12 の物語のあらすじは以下の通り。

同治八年（1869）同治帝は「護国祐民」の扁額を彭玉林に与え、各省の巡查を命じる。彭大人は、蘇州に強盗が多く官吏も愚昧であるという噂を聞き、船で蘇州へ向かう。到着すると船上で易者に変装し民情調査へ出かける。酒楼「東風楼」で情報収集をし、北門の向和順飯店でよく強盗が行われている事を知る。彭大人は宝石売りに変装して向和順飯店に泊まると、偶然兵士の馬三保が銀 300 両を携えて投宿する。向氏兄弟は夜中に馬三保を殺害し、彭大人の部屋に死体を移して濡れ衣を着せる。向氏と役人は通じていたため、彭大人は殺人犯として護送されてしまう。運よく獄中の門役に逃がしてもらい、事件を解決した。また、彭大人の夢に、蘇州で謀殺された湖南省常德出身の王桂英の魂が現れ、冤罪を訴えていたので、その事件も解決した。

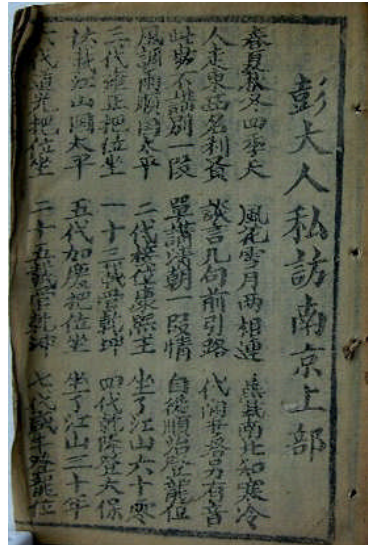
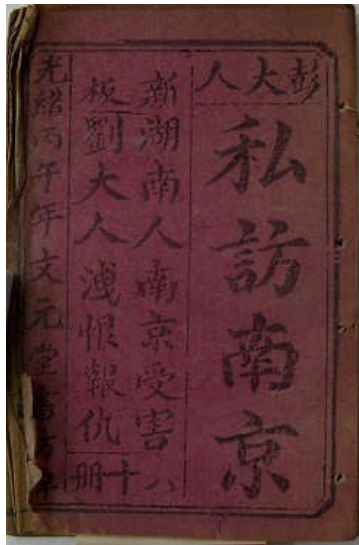


- ・ 10 行×21 字（7 字句 3 句）
- ・ 全 22 葉
- ・ 14.8×9.3/13.9×8.2cm
- ・ 7 字句の韻文、途中「白」「説話」等で始まる散文が挿入される。

図【表 18】 11 『私訪蘇州』中湘：楊文星堂刻本 封面、1a

【表 18】 13～16 彭大人私訪南京

【表 18】 13～16 の物語のあらすじは以下の通り。同治帝は、太平天国軍の洪秀全を平定した、湖南の彭玉林を非常に信頼し、「上方劍」、「先斬後奏」の特権と「三千人和馬（三千の兵馬）」を与え、各地の民情と官吏の治績の調査へ行くよう命じる。三千の兵を連れて彭大人は南京に到着する。南京では、南京総督の李大人（安徽出身）が湖南人に恨みを抱き、南京から湖南人を駆逐しようとしている事を知り、彭大人は同治帝に奏上し、李大人を罷免し、湖南人の劉大人を新たに南京総督に任じ、湖南人の南京での勢力を拡大させた。

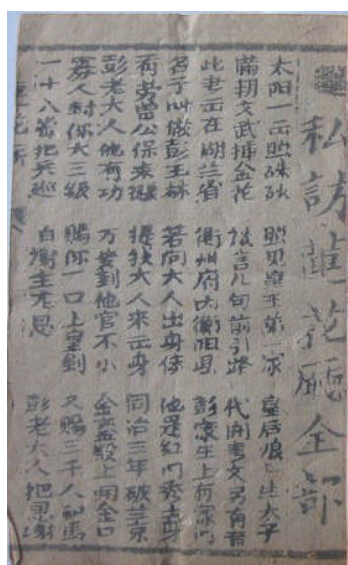


- 9行×22字 (7字句3句)
- 14.7×9.6/13.5×8.7cm
- 7字句の韻文、途中「白」「說話」等で始まる散文が挿入される。

図【表 18】13 『彭大人私訪南京』光緒 32 年（1906）文元堂刻本 封面、1a

【表 18】17～22 彭大人私訪蓮花廳

【表 18】17～22 の物語のあらすじは以下の通り。同治三年（1864）に洪秀全が占領した南京を陥落した彭大人に、同治帝は「上皇宝剣」と「三千人和馬（三千の兵馬）」、「護国祐民」の扁額を与え、各州県の管理状況の調査を命じる。彭大人は江西の蓮花廳へ行き、易者に扮装して民情調査に出かける。夢に冤罪を訴える賓文秀の魂が現れる。彭大人は賓文秀の指示で、彼の遺体が埋められている朱家の墓を調べるが、何も出て来ず、却って高官の子孫である朱氏に訴えられ、彭大人は死罪となる。同治帝に助けられ、彭大人は再度江西に行き調査すると、朱氏の墓の更に下の層に賓文秀が埋められていた。

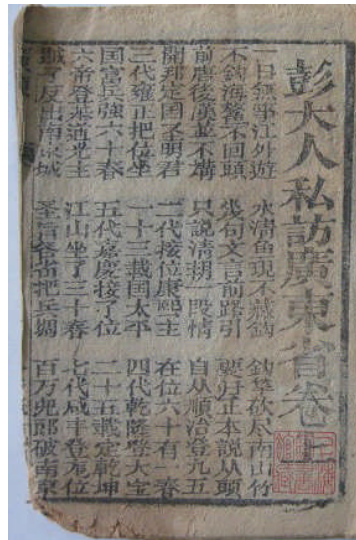
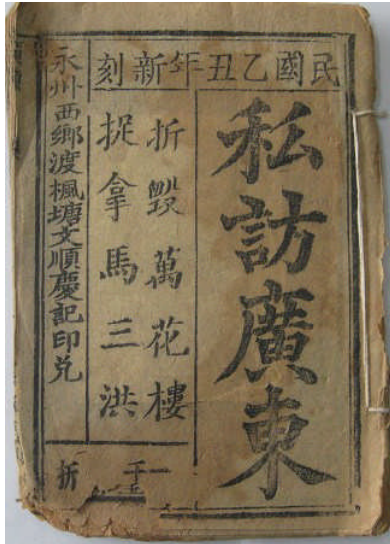


- 10行×21字 (7字句3句)
- 全 26 葉
- 15.4×9.6/13×8.6cm
- 7字句の韻文、途中「白」で始まる散文が挿入される。

図【表 18】18 『私訪蓮花廳全部』長沙刻本 封面、1a

【表 18】23～26 彭大人私訪廣東

【表 18】23～26 の物語のあらすじは以下の通り。彭玉林は同治帝より「上方宝剣」、「先斬後奏」の特権を賜り、船で広東に着くと易者に変装して調査をする。偶然小屋の隅で泣いている沈蘭英（河南開封府出身）に出会う。聞けば大盗の馬三洪に一家皆殺しにされた挙句、捕らわれの身となり、六年の喪が明けたら結婚させられるという。馬三洪は広東で義兄弟の契りを交わした千總（少尉）の黃成龍、范雲、白地炮と酒楼「万花楼」を所有し財を築いていた。事情を知った彭大人は、万花楼を調査し、途中で馬、黄、范、白氏に囲まれるが、武芸に秀でた山西の陳祥と馬道に助けられ、万花楼に火を放った。



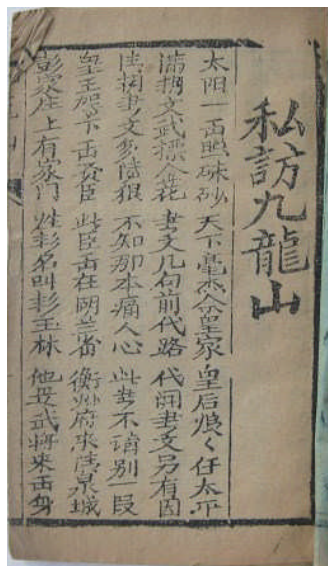
- ・ 10 行×23 字（7 字句 3 句）
- ・ 全 26 葉
- ・ 16.4×11/13.7×9.4cm
- ・ 7 字句の韻文、途中「白」「説話」等で始まる散文が挿入される。

図【表 18】25

『彭大人私訪広東省』
永州：民国十四年（1925）文順慶記刻本 封面、1a

【表 18】27～29 彭大人私訪九龍山

【表 18】27～29 の物語のあらすじは以下の通り。湖南省衡州の彭玉林は同治帝の命で各省を巡察するが、盗賊らはこの噂を耳にして身を隠す。彭大人は山東の九龍山に盗賊が多いと聞き、商人に変装して山に入る。山麓に住む姜大岸の家に投宿し、山中の状況を色々尋ねると、山に潜む盗賊の勢力は何百人、何万人と大きく、また非常に裕福であると知る。実際に山に入ると、先に彭大人が来る事を知っていた盗賊たちは、殺さずに二度と九龍山に近づかないよう、勢力を見せつけることにする。盗賊の強さは朝廷では抑えることは出来ないと悟った彭大人は、巡察から戻ると老年を理由に故郷に帰った。



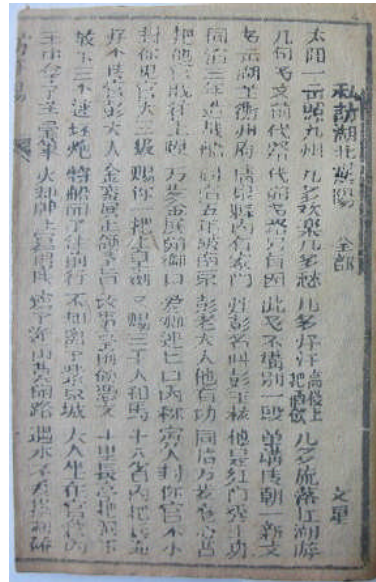
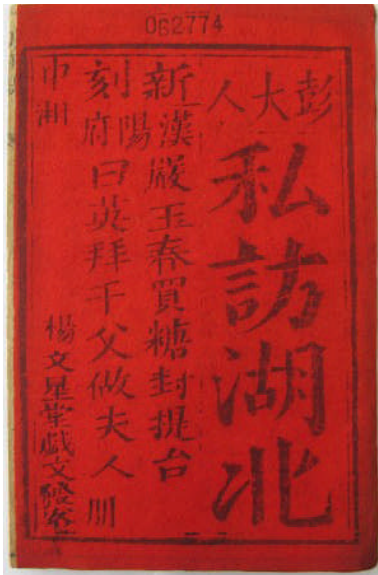
- ・ 7 行×21 字（7 字句 3 句）
- ・ 全 20 葉
- ・ 13.5×8.2/11.3×7cm
- ・ 7 字句の韻文、途中「白」「説話」等で始まる散文が挿入される。

図【表 18】28

『私訪九龍山』益陽：文元堂刻本 封面、1a

【表 18】 30～33 彭大人私訪湖北

【表 18】 30～33 の物語のあらすじは以下の通り。湖南衡州府の彭玉林は同治帝より「上皇劍」、「三千人和馬」を賜り、各省を巡察に行く。漢陽では強盗が出て、官吏が財を貪り、商売が成り立たないという噂を聞き、易者に扮装して調査に出かける。先ず、城隍廟で悪党の陳東亮と賭け事をして殴られるというトラブルに見舞われる。次に、糖売りの嚴玉春から故意に無銭で糖を買い、自分の上着を質屋に出すよう指示する。質屋の三和当と張店員は悪巧みを働き、上着に付いている高価な釦を安価なものに取り換えてしまう。また、漢陽江には花船（娼妓が客を取る船）が多く、人身売買などが行われていた。漢陽江に馬天爵が来ると知った花船のおかみの王嫗は、嫌がる黄日女を馬天爵の船に派遣する。彭大人は調査のため船夫に変装して馬天爵の船に忍び込み、黄日女から事情を聞き、花船を禁止にする。後に、王嫗、陳東亮、三和当、張店員を捕えてそれぞれ処罰し、嚴玉春を水陸提台に封じ、黄日女を娶らせた。



- ・ 10 行×28 字（7 字句 4 句）
- ・ 全 22 葉
- ・ 14.7×9.5/13.9×8.6cm
- ・ 7 字句の韻文、途中「白」「説話」等で始まる散文が挿入される。

図【表 18】 30
『私訪湖北漢陽全部』
中湘：楊文星堂刻本 封面、1a

以上、【表 16】 1～5、【表 17】 6～10、【表 18】 11～33 のテキストを通して 9 種（呉大人 2 種、陶大人 1 種、彭大人 6 種）の「私訪」故事をみてきたが、各種テキストの特徴として、【表 16】 2～5『新刻九人頭呉大人私訪』の説唱形式が全篇 7 字句の韻文で構成される以外、その他のテキストはいずれも、7 字句の韻文と「白（セリフ）」、「説話（さて）」などで始まる散文の介入句で構成される。「呉大人」、「陶大人」、「彭大人」の作品群は、ほぼ共通する説唱形式を以て創作された。

また、封面の情報から、刊行地には、長沙、湘潭、宝慶（邵陽）、永州、洪江、益陽、武岡の地名や、様々な書肆名が見え、これらの作品が湖南省ほぼ全域で出版、流通していたことも分かる。テキストの中には、【表 17】 8 や【表 18】 18 などのように地名のみを記して書肆名が削除されるものや、【表 18】 23、29、30 のように冊数が削られるものや、【表 18】 23 のように封面の情報と本文の巻首題下に刻される書肆名が異なるもの等もあるが、これらは何れかの書肆で使用された版木が、湖南省内の各書肆に渡り、場所を変えて繰り返し印刷、出版されるうちに生まれた現象だと思われ、「私訪」故事の説唱本が大量に出回っていた事を示す例と言えるだろう。また、封面に付いている表題、例えば、【表 18】 11

の「桂英陰魂申冤 捉拿向氏兄弟（桂英の陰魂は冤を申し、向氏兄弟を捉拿す）」や、【表 18】13 の「湖南人南京受害 劉大人洩恨報仇（湖南人南京で害を受け、劉大人恨みを洩らし仇を報いる）」などは、いずれも章回小説の回目に倣って、読者に物語内容を簡潔に伝える役割を果たしており、まるで長編の章回小説のうち、「私訪」にまつわる回を切り取り、単独で出版したかのような体裁が取られている。

2. 湖南における「私訪」故事説唱の流行のしくみ

湖南地域において「私訪」故事が大量に創作され、特異な流行を築いた要因について、以下に湖南の書肆による販促意識と併せて検証していきたい。

2.1. 「私訪」故事のパターン化とシリーズ化

2.1.1. 物語設定の枠組みの共有と封面の統一

流行を築いた要因のひとつに、湖南の書肆による物語内容および出版形態のパターン化が挙げられる。前節で示した各種物語の概容からも大よそを把握することが出来るが、湖南説唱本「私訪」故事は、決まったフォーマットに基づいて創作されている。

それぞれ、物語の冒頭で、歴代皇帝を列挙したり、時代背景や主人公である各大人の出自や功績などを簡単に紹介したり、その功績により皇帝から「一十八省把兵巡」十八省つまり中国全土を隈なく巡閲するようを命じられ、「上皇劍」、「先斬後奏」の特権および「三千の兵馬」を賜る。

「上皇劍」とは、公案劇や公案小説でお馴染の殺生与奪の専権を有す「尚方宝劍」のことであり、「先斬後奏」も、公案物でお馴染みの、皇帝の許可なく死刑にできる切り捨て御免の特権である。そして各大人は舟に乗り、治安が悪いと噂に聞く地域へ赴く。到着すると船内で易者などに扮装して民情調査へ出向き、途中で様々な危機に遭遇しながらも、事件や問題を解決していく、という展開がひとつのパターンとなっている。

各大人が「私訪」の際に皇帝から特権を与えられる場面を幾つか挙げると、（※判読不明の箇所は■で補う）

…寡人封你三江■、竭力護国管黎民、賜卿一口上皇劍、先斬後奏寡人、三千護兵護圍你、劉龍李豹緊隨身
（【表 17】9 『私訪江南』刻本 3a）

…彭大人他有功、万歳到他官不小、金鑾殿上開金口、寡人封你大三級、賜你一口上皇劍、又賜三千人和馬、一十八省把兵巡
（【表 18】18 『私訪蓮花廳全部』長沙刻本 1a）

…彭大人他有功、同治万歳龍心喜、把他官職往上陞、万歳金殿開御口、愛卿連連口內称、寡人封你官不小、封你見官大三級、賜你一把上皇劍、又賜三千人和馬、十八省內把兵巡

（【表 18】30 『私訪湖北漢陽全部』中湘：楊文星堂刻本 1a）

…同治万歳開金口、金口玉牙叫愛卿、寡人賜你上方劍、上管軍来下管民、有人不遵卿家令、先斬後奏寡人

(【表 18】 23 『私訪廣東』 楊文星堂刻本 2a)

以上、【表 17】 9 は「陶大人」、【表 18】 18、23、30 は「彭大人」の「私訪」故事のテキストから引用したものである。共通して、皇帝は官職の階級を上げたり、「上皇劍」、「先斬後奏」の権利を与えたりして、各地の官民を治めるよう命じ、また物語によっては従者を付けたりもする。

また、各大人の変装の描写もパターン化された。彭大人は主に易者に変装し、頭には黒い布帽をかぶり、藍染の長衣を身にまとい、手には三弦を持ち、胸の前に『百中経』の易書をさげ、時に烏油傘を手に持ち、白布に「看相測字向前程（人相文字判断で将来を占います）」と書いた看板を掲げている。以下に幾つか例を挙げると、

…辦做看相算命人、頭戴一頂青布帽、藍布長衫穿在身、手中拿把三弦子、胸前吊本百中経

(【表 18】 19 『彭大人私訪蓮花廳全部』 永州:文順慶記刻本 2a)

…大人船中来打办、一身庄办不相同、白、他怎的不同、頭上代頂青段帽、方布長■身上穿、粉底涼鞋足下蹬、左手拿的三弦子、右手拿了百中経、白布招牌写大字、看相測字向前程

(【表 18】 23 『私訪廣東』 楊文星堂刻本 2b3a)

…大人船中来打办、巧庄打办不相同、頭上代頂青布帽、蘭布長短身在穿、相辺鞋子足下登、左手拿把烏油傘、右手拿把三弦子、懷中吊本百腸経、白布招牌写大字

(【表 18】 32 『私訪湖北漢陽全部』 中湘:同華堂刻本 2a)

陶大人は庶民の姿に身をやつすこともある。

…我不免束衣小帽打班庶民⁹、私訪江南一會

(【表 17】 7、8 『新刻私訪江南』 武岡:大林堂福記 5b、洪江刻本 5b)

呉大人は、医者に扮することもある。医者 of 描写は易者とはほぼ変わらないが、看板に書かれる文字が「同仁堂」という薬屋の名前になっている。

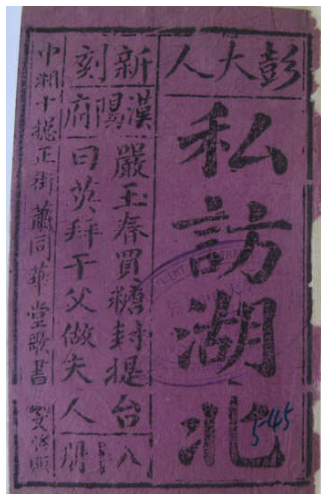
…急忙後面換衣布、頭代一頂刁尾帽、穿的布鞋足下登、身穿皮衣毛朝外、假庄外科老先生、肩背一把雨蓋傘、招牌上面写分明、同仁堂横写三字

(【表 16】 2 『新刻九人頭呉大人私訪』 星沙刻本、第二卷 14b)

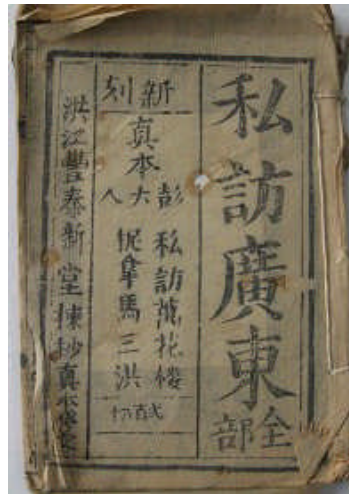
⁹ 【表 17】 9 は「束」を「青」、「班」を「办」に作る。

これらの表現以外にも、例えば各大人が「私訪」の途中に船の渡し場で渡し銭をだまし取られたり、調査対象の悪党に怪しまれ、却って捕まってしまう、しかも悪党が地方の役人と懇意であることから、牢屋に繋がれたりする等の受難のエピソードの挿入も、いずれも明成化説唱詞話『陳州糶米伝』以来の古い語り物に既存の展開を脈々と受け継ぐものである。

また、パターン化の例としても一つ挙げられるのが、説唱本の封面の統一である。



図【表 18】28



図【表 18】21



図【表 18】23

前節で挙げた画像も参照されたいが、上図のように書籍の顔とも言える封面には、共通して「私訪」という文言と訪問先の地名が大文字で書かれ、併せて表題が書き添えられた。一目で読者にこの物語は「私訪」モノであることが分かり、書肆による一つの宣伝方法だったと考えられる。多くの湖南の書肆はこの封面の形式を以て「私訪」故事を出版した。

物語の展開、出版形態など、決まったフォーマットに則ってパターン化された「私訪」故事は、湖南の書肆でひとつの規格商品となったと言えるだろう。「私訪」故事という商品が規格化されたことにより、様々な連作が生まれ、大量生産も可能となり、物語の流行を可能にしたと考えられる。

2.1.2. 書肆による販促意識

もともと読み切り作品のように単独で出版されていたと思しい「私訪」故事は、出版と流通を続ける過程で、「シリーズ物」として意識されるようになる。時代は下り、民国十五年（1926）に文順慶記から出版された『私訪蓮花廳』の初めの部分の一節をみてみたい。

好個清官彭大人、逢山不要来向路、遇水不要搭官亭、到省不准来拜客、到府不准送下呈（程）、只許公買与公賣、不許擾害衆黎民、出京走的保定府、江蘇江寧又来臨、南京貶了李撫院、救了幾多百姓們、廣東毀了万花楼、殺了三洪与范雲、山東山西都訪過、湖北湖南漢陽城、一十八省難表尽

清廉なお役人の彭大人は、山に行きあたっても道を切り開かず、川があっても宿泊

所は作らせず、省に到れば土地の人の訪問を禁じ、府に至れば見送りを禁じ、ただ公正な売買のみを許し、民衆の治安を害すことは許さない、北京を出発して保定府へ向かい、江蘇の江寧（南京）にもお越しになった、南京では李撫院を罷免して、数多の民衆を救出し、広東では万花楼を焼き払い、馬三洪と范雲を処刑した、山東、山西も私訪済み、湖北、湖南、漢陽城、十八省全ては言い尽くせない。

（【表 18】 19 『私訪蓮花廳』 永州：文順慶記刻本 1b）

皇帝の命を受けて私訪に出かける彭大人の様子として、各省、府に着いても役人による出迎えや見送りを禁じ、公正な売買だけを認めて密売を禁止する、彼の清廉潔白な人柄が描かれる。その次に記される南京の李撫院とは誰かという点、『彭大人私訪南京』（【表 18】 13～15）に登場する南京総督の李巡撫のことで、彼は南京に住む湖南人を迫害したので、彭大人が同治帝に相談して李巡撫を罷免したという話や、或いは彭大人が広東で大盗賊の馬三洪、范雲らが所有する万花楼を焼き払い、治安維持につとめた『私訪広東』（【表 18】 23～25）の話や、その他にも山東の九龍山（【表 18】 27～29）、山西の蓮花廳（【表 18】 17～21）、湖北漢陽（【表 18】 30～33）など、これまで単独で出版されていた彭大人の物語の内容や、訪問先の地名がまとめて列挙されている。

ちなみに、現存する他のテキストではこの箇所はどのように描かれているのかというと、

本督各省把辺（兵）巡、逢山不要來開路、遇水不要搭湖礮（橋）、到州不要州府接、逢県不要県官迎、到府不要府官來拜客、到省不准送下程、只許公買來公賣、不準擾害正梨（黎）民、若有不尊本督令、上皇宝劍不容情是吓

私は兵を連れて各省を巡閲する、山に行きあたっても道を切り開かず、川があっても橋を架けない、州に到れば州の役所の出迎えを禁じ、県に到れば県の長官の出迎えを禁じ、府に到れば府の長官の訪問を禁じ、省に到れば見送りを禁じ、ただ公正な売買のみを許し、民衆の治安を害すことは許さない、もし私の命令に従わない者があれば、上皇宝劍で容赦はしない

（【表 18】 18 『私訪蓮花廳全部』 長沙刻本 1b2a）

【表 18】 18 の長沙刻本でも、類似の表現を用いて彭大人の清廉潔白な様を描いているものの、その後、すぐに目的地の江西に到着してしまい、【表 18】 19 の文順慶記刻本のように、彭大人の「私訪」故事を取り上げて、物語内容を簡単に紹介したりはしない。

文順慶記刻本は、民国十五年（1926）という比較的新しい時期に出版されたテキストであるため、恐らく永州の文順慶記という書肆が、これまでに出版され流通していた「私訪」故事の説唱テキストを収集し、改めて整理、編集する中で、彭大人を主人公とするこれらの作品に対し、シリーズ物であるという意識を強く持ち、宣伝する意味も込めて、新たに本文中に簡単な作品紹介を付加したのではないかと推察される。

先ほど、「私訪」故事の出版形態について、章回小説のうち「私訪」にまつわる回を切り取り、単独で出版したかのような体裁を取っていると述べたが、湖南では、公案物の戯曲や小説で描かれる数あるエピソードの中でも、特に「私訪」のモチーフだけを抜き取り、主人公を様々に挿げ替えて、換骨奪胎の物語を量産し、シリーズ物として意識されるほど

までに流行した。ともするとマンネリになりがちなパターン化と、そのシリーズ化を可能にし、流行を築くことが出来たのは、それだけ当時の湖南の人々による「私訪」故事への関心と需要があったからだと推測されるが、「私訪」と湖南を強く結びつける背景や、「私訪」が湖南の人々の共感と支持を得る要因は何だったのだろうか。以下に、湖南説唱本「私訪」故事の物語内容から検証していきたい。

2.2. 「私訪」故事の湖南化

2.2.1. 湖南の有名人による「私訪」故事

「呉大人」、「陶大人」、「彭大人」の物語には幾つか共通点がある。まず、主人公がいずれも湖南に縁のある実在の人物だということである。

① 呉大人

呉大人は説唱本では「呉達善」或いは「呉大善」と記され、清の乾隆年間の呉達善（?-1771）のことを指す¹⁰。

【表 16】1『呉大善私訪漢陽』は、内閣協辦の劉大人が乾隆帝に湖広総督に欠員が出たという報告をする場面から始まり、それを受けた乾隆帝が「湖廣缺少一員制台、朕差那一個官兒去做（湖広総督に欠員が出たが、どの官吏を遣わそうか）」と尋ねると、「陝西長安府長安県端履門人、姓呉名大善（陝西省長安府長安県の端履門の人で、姓は呉、名は大善と申す者がおります）」と、呉大善の名を出す。

実在の呉達善は、満州族正紅旗人であるが、陝西駐防將軍の任を務めたこともあるので、物語の設定は必ずしも完全な虚構ではない。実際に、乾隆二十九年（1764）に湖広總督となり、湖北巡撫を兼任し、同三十三年（1768）に、再び湖広總督（荊州將軍を兼任）を務め、三十五年（1770）には湖南巡撫となった、湖南・湖北と縁のある人物である。

② 陶大人

陶大人こと陶澍（1779-1839）は、字は雲汀、湖南省安化県出身で、道光元年（1821）に福建按察使から安徽布政使と転任し、同三年（1823）には安徽巡撫を授かり、のち同十年（1830）、両江總督となった人物である¹¹。物語で描かれる経歴も実際とほぼ同じ。

此書不講別一個、單講清官陶大人、湖南長沙安化縣、小俺¹²有個陶家庄、有名就叫陶云訂¹³、在朝官名陶澍、陶澍為官多清正、欽點翰林在朝廷、四十三歲未去京、道光萬歲龍心喜、將他官職挑去京、頭次挑在¹⁴安徽省、八撫巡按管萬民¹⁵、安徽為官多清正、回朝參見聖明君

¹⁰ 『清史稿』卷三百九、列伝九十六「呉達善」参照。

¹¹ 『清史稿』卷三百七十九、列伝一百六十六「陶澍」参照。

¹² 【表 17】9 のテキストは「源」に作る。

¹³ 【表 17】9 のテキストは「姓陶名澍字云訂」に作る。

¹⁴ 【表 17】9 のテキストは「挑在」を「出任」に作る。

¹⁵ 【表 17】9 のテキストは「八府巡按管黎民」に作る。

この書が話すのは他でもない、清廉な役人である陶大人のこと、湖南長沙安化県に、陶家荘があり、名を陶云訂と言ひ、朝廷に仕えると陶澍と名乗った、陶澍の仕事は清廉潔白であったため、皇帝のご指名で翰林院に入り、四十三歳まで未だ京を出たことが無かった。道光帝は心から喜び、彼の官職を京から出し、初めは安徽省で任に就いて、八府撫按として民衆を巡視した。安徽の役人として清廉潔白であったので、朝廷に戻り皇帝に謁見することになった。

（【表 17】 7、8『新刻私訪江南』武岡：大林堂福記刻本 1a1b、洪江刻本 1a1b）

物語の陶澍も湖南の安化県出身で、実際に安徽巡撫になったのは、道光三年（1823）、おおよそ四十三歳の時のことである。物語の内容と近似しているのも、やはり実在の人物をモデルにしたことが分かる。

物語では、安徽巡撫を立派に勤めあげた功績と、広東曹州府儒臨県出身の宰相の垂林魁の推薦で、両江総督の要職に抜擢される。江南にやって来た陶大人は、「久聞江南黎民刁蠻、江洋大盜甚廣、為甚麼一月有零、無人伸冤告狀（江南は民衆が粗暴で、海賊も横行していると聞いていたが、どうして一カ月余り過ぎても、誰も訴訟を起こさないのか）」と訝しみ、「…我不免束衣小帽打班庶民¹⁶、私訪江南一會（庶民の姿に身をやつし、江南の民情調査をしよう）」と述べて変装して出かけて行く。

③ 彭大人

彭大人こと彭玉麟（1816-1890）は、湖南省衡陽県の人で、咸豊三年（1853）より曾国藩に従い、湘軍水師を率いて太平天国軍と戦った指揮官である。長江流域を転戦して、同治三年（1864）の天京陥落に貢献し、乱平定後は同治十一年（1872）から亡くなる前年の光緒十五年（1889）まで長江沿いの各省の巡閱を行った¹⁷。

物語の導入部分では、しばしば彭玉麟の太平天国における活躍が語られる。

此書不講別一個、單說清朝彭玉林、家住湖南衡州府、清泉県内有家門、要知玉林出身事、他本洪門秀才身、拜門拜在曾國藩、三江總督元帥身、曾帥賜他一支令、領辦軍務打南京、同治三年破南京、太平天国化灰塵

この本に書いてあるのは他でもない、さては清朝の彭玉林（麟）、住まいは湖南衡州府、清泉県（衡陽県の誤）に一族あり、彭玉麟の出自が知りたければ、彼はもとは博学の秀才であったが、曾国藩の軍門に入り、その三江総督元帥である、曾元帥の命を賜り、軍務を束ねて南京を攻撃、同治三年に南京を撃破し、太平天国は灰塵と帰した。

（【表 18】 19『彭大人私訪蓮花廳全部』永州：文順慶記刻本 1a）

七代咸豊登龍位、廣東反了姓洪人、名子叫做洪秀全、只有賊子多利害、鬧得江山不太平、他今坐了南京省、称孤道寡誰不聞、咸豊万歳福分好、湖南出了幾大人、為困南京有七載、滅了賊子姓洪人、才得江山得太平、咸豊老王崩了駕、同治新主把基登、自從新主登龍位、風調雨順国太平、皇王駕下出賢臣、賢臣出在湖南省、左郭曾彭誰不

¹⁶ 【表 17】 9 のテキストは「束」を「青」、「班」を「办」に作る

¹⁷ 『清史稿』卷四百十、列伝一百九十七「彭玉麟」参照。

聞、幾家清官都亡了、單講清官彭大人、住在湖南衡州府衡陽縣、彭家庄上有家門、是紅門秀士來出身…同治三年造戰船、身為水兵元帥身、同治五年破南京、彭老大人他有功、同治萬歲龍心喜、把他官職往上升…

七代に咸豊帝が即位すると、広東で反乱を起こしたのは洪という人物、彼の名は洪秀全、この反逆者は只者では無い、天下を騒がせ太平を乱し、現在南京省を占拠し、帝王と自称して知らぬ者はいなかったが、咸豊帝は幸運の持ち主、湖南から幾人も立派な人物が出現し、南京を包囲すること七年、悪党の洪秀全を滅ぼし、ついに天下に太平を取り戻した。咸豊帝が崩御すると、新たに同治帝の御世を迎えた、新帝が即位されてからは天下泰平、皇帝のもとで賢臣が排出され、湖南省から現れた、左（宗棠）、郭（嵩焘）、曾（国藩）、彭（玉麟）を知らぬ者はいない、幾人かの清廉官吏は亡くなった、さてお話するのは彭大人のこと、湖南省衡州府衡陽県、彭家庄に家があり、博学な秀才の出身…同治三年に戦艦を造り、水軍の元帥の身となり、同治五年に南京を撃破、彭大人の功績に、同治帝は大変喜び、彼の官職を引き上げた

（【表 18】 13 『彭大人私訪南京』 文元堂刻本 1a1b2a）

説唱本では、彭大人の出身地を、誤って衡州府清泉県とするテキストもあれば（【表 18】 19、23～25、30、32）、実際と同じく衡州府衡陽県とするもの（【表 18】 11～15、18）もある。また、上記の【表 18】 13『彭大人私訪南京』では、咸豊帝の御代に、湖南出身者おそらく湘軍が洪氏を滅ぼし太平の世が訪れたとし、同治帝の御代には、湘軍の指揮官である左宗棠、郭嵩焘、曾国藩、彭玉麟が現れ、彭大人は同治三年に戦艦を造り、水軍を率いて同治五年に南京を陥落したと述べるが、実際には、彭玉麟が水軍を率いて太平天国軍が占拠する南京を陥落したのは同治三年のことなので、史実が入り乱れている¹⁸。一方、【表 18】 19『彭大人私訪蓮花廳全部』では同治三年に破ったと史実通りに語られているが、彭玉麟の出身地は清泉県と記され、厳密ではない。また、テキストによっては、彭玉麟の出自や太平天国の活躍について取り立てて著さず、ただ清廉潔白な役人であったので、朝廷に呼ばれて上皇劍と三千の兵馬と先奏後斬の特権を与えられ、各地の治安維持に出かけたとするものもある（【表 18】 27～29）。

彭玉麟の出自や歴史的事実には若干の混乱はあるが、湖南説唱本の中で強調したかったのは、湖南出身の彭玉麟なる人物が、水軍を率いて太平天国軍と戦い、占拠されていた南京を陥落したという、咸豊、同治年間に大活躍した輝かしい功績を持つ湖南人であったということだろう。

恐らく、陶澍や彭玉麟は、清末民初の湖南人にとって、それ程遠くない時代に全国的な活躍をした湖南の出身者であり、地元の英雄だったと言える。その地元の英雄が、物語の中で湖南を起点に各地へ赴き、様々な事件を解決した。呉大人は湖南出身者ではないが、

¹⁸ 同治三年に戦艦を造り、同治五年に南京を陥落したという記述は、『私訪湖北漢陽全部』（中湘：楊文星堂刻本）にもみえる。本文は、「此書不講別一個、單說清朝一新文、書出湖南衡州府、清泉縣內有家門、姓彭名叫彭玉林、他是紅門秀士身、同治三年造戰船、同治五年破南京、彭大人他有功、同治萬歲龍心喜、把他官職往上陞、萬歲金展開御口、愛卿連連口內稱、寡人封你官不小、封你見官大三級、賜你一把上皇劍、又賜三千人和馬、十八省內把兵巡」

他所の土地から湖南・湖北地域へやって来て、実際にも物語の中でも湖広総督として活躍した湖南に縁のある人物であった。

湖南説唱本「私訪」故事は、「吳大人」、「陶大人」、「彭大人」以外にも、湖南省華容県の馬金龍知県や、湖南省武陵県を私訪する盧知県、湖南巡撫の趙陞喬などを主人公とするものもある。彼らの経歴は不明だが、それぞれ湖南省を拠点に各地域の治安維持に務める人物として描かれた。以上のように、主人公に湖南ゆかりの、清廉潔白で、歴史的にも大活躍した、湖南人にとって誇りとなる人物が採用されたことも、「私訪」故事の人気を支える仕掛けのひとつだったと言えるだろう。

2.2.2. 湖南人のための「私訪」故事

主人公に湖南の英雄を採用しただけでなく、更に物語の中に頻繁に湖南と関連する人物や地名などが登場し、湖南色の強い内容で彩られるのも、「私訪」故事の流行を支える仕掛けになったと考えられる。各大人は、私訪先でしばしば困難に直面する湖南人と出会う。

例えば、【表 18】11『私訪蘇州』では、蘇州の張大人の妾に入った湖南省常德府武林出身の王桂英の冤魂が、彭大人の夢に現れ、正妻の楊氏と王一爺の私通現場を偶然目撃したために、楊氏に謀殺されたと訴える。また、ある日、別の事件を追っていた彭大人は謀られて牢獄に繋がれるが、これまた冤罪により獄中の門役に充てられた湖北出身の周玉英に逃がしてもらう。その後、王桂英の冤罪を晴らし、周玉英も救出する。

『私訪湖北漢陽』には、漢陽で暮らす湖南省湘郷出身の水煙売りの常長子や、漢陽江で叔父に銀六十両で娼妓として花船に売られてしまった、湖南省岳陽府華容の黄国中の娘、黄日英など様々な湖南人が登場し、彭大人は彼らを救済するのである。

また、他地域と湖南を比べて、湖南の優位性を誇示する表現も散見する。先にも挙げたが、【表 18】13『彭大人私訪南京』は、安徽出身の两江総督李大人は、主人公の彭大人と湖南人に恨みを抱き、南京における湖南人の居住、湖南出身の役人、湖南人による商売を尽く禁止した。李大人は、「湖南人、男男女、老老少、大大小、一個一個三天三晩要走盡、…若是三天三晩不走盡、本督親自來巡街、見一個湖南人殺一個、見二個殺一雙（湖南人は男も女も、老いも若きも、大人も子供も、一人残らず、三日三晩のうちに尽く出て行かねばならない。…もし三日三晩で出て行かなければ、私が自ら街を巡邏し、一人の湖南人に出会えば一人を殺し、二人に会えば皆殺しにする）」とし、もし従わねば、南京の湖南会館を焼き払うという旨の諭告を出す。これを知った彭大人は、同治帝に奏上して李大人を罷免し、また「萬歲聖旨來傳令、永不準別省人、來到南京做總督、只準湖南人方可行（天子さまからの命令が伝えられた、永久に他省の人間は、南京総督を務めてはならない、ただ湖南人にのみそれを許す）」という聖旨のもと、後任に湖南の劉東山を連れて来る。

特にこの物語は、太平天国後の南京を舞台に、安徽出身の李大人と湖南出身の彭大人の対立を描くことから、姚逸之（1929）は、咸豊、同治年間の二大軍事勢力であった、李鴻章率いる安徽の淮軍と、曾国藩および彭玉麟率いる湖南の湘軍の対立が背景にあり、それが一連の「彭大人私訪」故事を生むきっかけになったのではないかと指摘する¹⁹。湘軍

¹⁹ 注3前掲書『湖南唱本提要』pp. 116-117に、「註語--這本書中的事實，很值得注意，而這事在正史上也不能察得，不知真假？書中的李大人，無名而其籍貫又係安徽，這自然是李鴻章了。當時軍人有皖湘二系，都有很大的勢力；因為權力意見的不合，難免不有衝突。一

と淮軍の対立も然ることながら、要地であった南京を巡る争いを湖南人が制するという物語の展開には、意識的に湖南の勢力の強さを顕示しようとする意図が見える。

その他にも、【表 17】9『私訪江南』では、陶大人が南京の城隍廟を訪れて芝居を観る場面で、「列位那江南的戲台就不比我的湖南湖北的戲台、有七尺多高（皆様、かの江南の舞台は、我が湖南湖北の舞台には及ばない、こちらの高さは七尺程ある）」と、南京と対比して湖南の豪華さをさりげなく述べたりもする。

また、陶大人と彭大人の「私訪」故事で共通に描かれ、パターン化されているエピソードに、訪問先で冤罪事件と睨んだ案件がなかなか証明出来ず、却って獄に繋がれて処刑されそうになり、各大人が土牢の中で故郷の湖南や家族を思って嘆息する場面がある。

それぞれ、陶大人は「再不能回到湖南去、再不能轉到安化程（もう湖南に戻れないのか、もう安化に帰ることは出来ないのか）」（【表 17】8『新刻私訪江南』）と述べ、また彭大人も「再不能回到湖南省、再不能回家去祖墓、再不能夫妻来相会、再不能父子来相逢（もう湖南省に戻れないのか、もう実家へ墓参りに戻ることも出来ず、夫婦の再会も果たせず、親子の対面も叶わないのか）」（【表 18】18『私訪蓮花廳全部』）と、類似のセリフを述べる。

特に彭玉麟は、実生活においても毎年長江巡閲が終わると、湖南の衡州府城東洲に建てた妻の居る別院「退省庵」へ戻ったというので²⁰、故郷や家族を思うセリフはあながち事実と乖離したものではないだろう。

「私訪」を通じて、湖南に縁の深い主人公が、他郷において湖南人を助け、湖南を称え、湖南を想う。これらの作品はまさに、湖南人の湖南人による湖南人のための、湖南化された「私訪」故事だったと言えるだろう。

2.3. 主人公による実際の私訪

各大人による「私訪」行為は、物語という虚構空間でのみ行われたものではなく、実際に頻繁に行われたものでもあった。

① 陶澍の「改装易服」

その具体例として、陶澍の上奏書には、当時各地に横行した匪徒に対する密偵や拿捕を行い、厳しく取り締まったという報告が多数存在し、その手段としてしばしば「改装易服」つまり変装をしたと記される。

例えば、道光三年（1823）の「臣前於閩潁、鳳一帶、訪有積惡匪徒二十八名、附片具奏在案。臣比即密派員弁、改装易服、不動声色、分路偵緝（臣は先に潁、鳳一帶を巡閲し、罪惡を重ねる盜賊二十八名を調査したので、書類を付して公文書にて奏上します。臣は直ちに文武の官吏を隱密に派遣し、変装をし、気付かれることなく、数方向から捕縛しまし

般人又喜用意氣，結果使皖湘兩省的人民，互相仇視，這事在咸同年間，一定是有的，所以彭大人私訪一書產生。書中事實，自然不確，然當時皖湘二系軍人之不相容，是斷無疑意的了。」と記される。

²⁰ 彭玉麟著『彭玉麟集』（梁紹輝等整理、長沙：岳麓書社、2003）、下冊 pp. 629-683「附録：彭玉麟年表」参照。

た)」²¹という記録や、道光十一年（1831）の「…随即会同副将李恩元帶領弁兵改装易服、水陸潜進。于四月二十八日四更時分、乘梟匪睡熟、出其不意、四面圍住。千總鄭長清首先跳上匪船、打破艙門。（すぐに副将の李恩元と共に下士官と兵卒を率いて変装し、水路、陸路を密かに進んだ。四月二十八日丑の刻に、私塩密売の悪徒等が熟睡している隙に乗じて、不意を突き、四方を包囲した。千總（少尉）の鄭長清が先ず匪船に乗り込み、船室の扉を打ち破った。）」²²などがある。

また、道光五年（1825）「江蘇省、徐、邳、淮、海一帶、与皖、豫、山東等處犬牙相錯、為梟匪出沒之所。逃凶、逃盜、間亦潜匿隱伏（江蘇省の、徐州、邳州、淮州、海州一帶や、安徽、河南、山東などの地は境界の地形が凹凸に入り組んでおり、私塩密売の悪徒が出没する場所であった。逃亡した悪人や、盜賊もしばしば潜伏していた。）」²³や、また道光十一年（1831）に匪船を取り締まったところ、「当於船内搜獲被拐擄之婦女、幼孩二十名口（船内から誘拐された婦女や幼児二十名余りを保護した）」²⁴などの報告も散見する。

物語中にも、陶大人が「江洋大盜」による被害を調査しなければならないと語る場面や、舟で移動中に盜賊の襲撃を受けた人々の話などがしばしば取り上げられる様に、大きな社会問題でもあった。各地の治安維持につとめる任務と、それに付随する「私訪」行為は、当時の中国社会において非常に重要なものだったのである。

② 彭玉麟の改装易服

彭玉麟は、同治十一年（1872）から光緒十五年（1889）まで、しばしば長江沿いの巡閲のために各省に出向いていた。彭玉麟の奏稿にも、各地における偵察の様子が数多く記されている。

例えば、光緒七年（1780）の奏稿では、江西省の贛南を密かに訪ねた際に「均改装易服、不動声色、沿途密訪（均しく変装をし、気付かれぬ様子で、行路沿いに民情調査をした）」²⁵と、変装して民情調査をしていたことが記され、また、光緒四年（1879）の奏稿では、湖北省の武昌、黄冈両県所属の樊口にかかる堤防に関する訴訟の実態を把握するべく、「…拜折後即改装易服、搭坐民船星夜上駛（皇帝への上奏が終わるとすぐに変装をし、民間の船に乗り込み昼夜兼行で走らせた）」²⁶と記される。また同年、彭玉麟は、この樊口の事案について、郭嵩燾（1818-1891）の弟である郭崑燾（1823-1882）に対し、書信の中で次の

²¹ 陶樹著『陶澍集』（長沙：岳麓書社、1998）pp. 386-387、「訪獲穎鳳一帶匪徒惡懲辦附片」

²² 注 21 前掲書『陶澍集』pp. 403-404、【奏疏 緝捕】「拿獲老虎涇梟匪多名飭審附片」

²³ 注 21 前掲書『陶澍集』p. 393、「飭屬嚴拿匪犯懲辦附片」

²⁴ 注 21 前掲書『陶澍集』pp. 402-403、「捕獲盜匪倭梟分別委審懲辦附片」

²⁵ 注 20 前掲書『彭玉麟集』上冊、pp. 297-300。【奏稿】光緒七年「遵查武員參款折」六月初五日「…当將即赴江西省並往贛南密訪各緣由、于五月初二日恭折具奏在案。臣金陵閱操事竣、即于初四日輕舟星夜上駛、于十二日過江西省河、于二十四日行抵贛州、復于六月初三日歸至江西省城、均改装易服、不動声色、沿途密訪、始行印証明確、謹分別据實為我皇太后、皇上陳之。」

²⁶ 注 20 前掲書『彭玉麟集』下冊、pp. 267-272。原文は以下のとおり。【奏稿】光緒四年「遵查樊口情形折」九月十九日「…臣玉麟于八月初十日在瓜洲巡閱差次、先奉八月初一日寄諭、当即奏報起程日期、並声明先行密查等因。拜折後即改装易服、搭坐民船星夜上駛、于八月二十三日行抵湖北武昌、黄冈両県所属之樊口。雇小劃入樊口三里餘、即筑堤、毀堤興訟之處。該堤雖毀、形迹猶存、橫寬不過數十丈、直寬不十丈。」

ように述べている。

『復郭崑燾』光緒四年九月二十三日

以樊口内梁子等湖属七州县、非改装易服親勘其處、不得詳細情形。因随举外委一弁、親兵一名、半肩行李、星夜附輪舟上駛、匿迹至黃州、易民劃入樊口、作為地師、水陸兼行、遍歷濱湖七州县、明勘暗訪、獲免地方官紳迎送之苦、而尽得实在情形。²⁷

樊口（湖北省鄂州市）内の梁子湖などの湖は、七つの州と県に属しているので、変装して自ら調査を行わなければ、詳しい状況が分からない。そこで外委（臨時派遣の武官）を一名、護衛兵を一名選び、最低限の荷物で、日に夜を継いで船を走らせ、密かに黄州（湖北省東部）に到ると、庶民に扮して樊口に漕ぎ入れ、風水師となって、水路、陸路を進み、湖に臨む七つの州と県を遍く巡り、隈なく密かに実地調査をしたので、地方官吏や名士による送迎の煩わしさを免れることができ、また実際の状況も尽く把握することが出来た。

ここでは、庶民の他に「作為地師」つまり風水師にも変装したとある。風水師に身を窶せば、水路も陸路も両方自由に行くことが出来ると述べ、変装への工夫が窺える。また、仕事に支障のある地方官吏からの接待を避けたい旨が記される。この事については説唱本にも、「到州不要州府接、逢县不要县官迎、到府不要府官来拜客、到省不准送下程」（【表18】18『私訪蓮花廳全部』）と、州の長官、県の長官、府の長官などによる送迎接待を禁じたと描かれており、実際の彭玉麟の様子を反映した描写であったことが分かる。

以上のように、陶澍は道光年間に、彭玉麟は同治、光緒年に、それぞれ頻繁に変装して各地を密偵し、匪賊の調査および拿捕、或いは訴訟事の実地調査などを行い、功績を挙げ、皇帝からの信頼も厚い人物であった。清代は、このような地方官による「私訪」は、きわめてありふれた手段となっており²⁸、また文芸作品でも公案物で必ず取り入れられたが、例えば『彭公案』の彭鵬や『施公案』の施世綸らが実際に私訪を行っていたかどうかは不明である。一方、湖南説唱本「私訪」故事で描かれる湖南出身の主人公たちは、実社会においても「私訪」によって功績を挙げたことで名を馳せていた。ここからも、湖南と「私訪」とは非常に密接な結び付きがあったと言えるだろう。

2.4. 湖南における包公「私訪」劇

また、芸能面から言えば、「私訪」劇の流行も、湖南説唱本「私訪」故事に少なからず影響を与えたと考えられる。以下に挙げるのは、陶大人と彭大人の物語に共通して存在する、各大人が訪問先の会館や城隍廟で芝居を観た時の様子である。

三個戲台演戲文、…東边唱的全家福、西边唱的文武陞、普慶班唱高腔、唱的宋室清官訪東京、陶大人西边却不看、单看普慶訪東京、前朝清官把東京訪、我朝清官訪南

²⁷ 注20 前掲書『彭玉麟集』中冊、pp.474-475。

²⁸ 注6 前掲書『水戸黄門「漫遊」考』に、「私行」に関する歴史的状況と、林則徐の私行に関する記述がある。

京、大人越看越有情…

三つの舞台で芝居がかかり、…東側で歌うは『全家福』、西側で歌うは『文武陞』、普慶班²⁹が高腔で、歌うは宋代清官の『訪東京』、陶大人は西側を観ずに、ただ普慶班の『訪東京』を観るばかり、先の清官は東京を私訪し、今朝の清官は南京を私訪する、陶大人、観れば見るほど面白く…

（【表 17】 9『陶大人私訪江南』 刻本 9a）

大人他走城隍廟、就在廟門把脚停、主□（眼）抬頭来觀看、□（要）到廟内看分明、廟内戲文多熱鬧、小買小賣多少人、慢来停脚看戲文、頭句唱的全家福、二句唱的殺四門、三句唱的訪東京、前朝且把東京訪、我今即訪汗陽城…

彭大人は城隍廟までやって来ると、廟の門前で足を止め、頭をもたげて眺めるが、廟内に入れば一目瞭然、廟内は芝居の上演で大賑わい、商売人も大勢行き交う、ゆっくり立ち止まって芝居に見入れば、初めの句は『全家福』、二句目が『殺四門』で、三句目は『訪東京』を歌う、先の時代は東京を私訪、私は今、漢陽城を私訪する…

（【表 18】 30『私訪湖北漢陽』 中湘・楊文星堂刻本 2b）

それぞれ陶大人が南京で、彭大人が湖北省漢陽で、『全家福』³⁰、『文武陞』³¹、『訪東京』、『殺四門』³²の芝居を観たとあり、中でも、宋の清官包拯が東京を私訪する『訪東京』の

²⁹ 湘劇昆腔班のこと。清の乾隆初年に北京から長沙に来た戯班と伝えられる。長沙の口語音で昆曲をうたう戯班となるが、光緒十年（1884）以降、昆曲の衰退に伴い解体した。『中国戯曲志・湖南卷』（文化芸術出版社出版、1990）p. 414 参照。

³⁰ 『全家福』のあらすじは、隋の文帝時の秀才韓幼奇が捕えられ、黒水国の王女黒蓮秀の娘婿となり、息子の吉豹が生まれる。隋の文帝は兵を出して黒水国を征伐する。韓幼奇には前妻との間にもうけた擒龍、擒虎、擒鳳、娟仙が居り、それぞれ隋朝大将として出征し、戦場で親子は再会し、両国は和平を結ぶ。最終的に韓幼奇は国に戻り、隋文帝から「全家福」の扁額を賜る。この芝居は、主に豫劇、山東曹州梆子、山西蒲州梆子、北路、晋中梆子などで演じられた。（王森然遺稿『中国劇目辞典』 拡張委員会拡張編、河北教育出版社、1997、p. 258 参照）。

ちなみに、湖南説唱本にも『全家福』があり、姚逸之、鍾貢勛述『湖南唱本提要』（1969 版参照）p. 100 に著録されるが、それによると、南京の沈萬山は裕福で、九人の子供も出世した。朔望日には必ず庭で焼香し、人々が長寿安寧であることを祈祷し、93 歳まで続けたので、玉帝は感じ入り五寶を呂洞賓に命じて届けさせた。五寶として、前門に金獅子、後門に納涼亭、左に揺錢樹、右に聚寶盆、広間に「全家福祿」の扁額を賜った、とある。

湖南では湘劇、祁劇、衡陽湘劇、武陵戯、荊河戯、巴陵で演じられる（「湖南地方大戯劇種伝統劇目表」『湖南地方劇種誌（五）下：長沙市花鼓戯誌』湖南省戯曲研究所編、李恕基責任編輯、1992、p. 625 参照）があるが、いずれの『全家福』であるかは定かではない。

³¹ 祁劇、衡陽湘劇、辰河戯、湘劇、武陵戯、荊河戯、巴陵戯に演目があり、湖南一帯で演じられる。（注 30 前掲書「湖南地方大戯劇種伝統劇目表」『湖南地方劇種誌（五）下：長沙市花鼓戯誌』 p. 651 参照）。岳飛が朱仙鎮で金兵に大勝し太子少保に、状元の張九成は朱仙鎮への食糧護送に功績があったことから吏部天官に封じられ、文武の昇官を祝うお話。

³² 『殺四門』と、『女殺四門』の話がある。『殺四門』は、唐の太宗が東征した際、敵兵の蓋蘇文に越虎城で包囲されてしまう。秦懷玉が先鋒となり援軍を率いて皇帝を助けたというお話。京劇、徽劇、漢劇、同州梆子などで演じられた。『女殺四門』は、宋の趙匡胤が兵を率いて南唐を攻め、寿州の城で敵軍に包囲されてしまう。趙匡胤の部下の高君保は病気で倒れ、代わりに高の妻の劉金定が救援に駆けつけ、南唐の軍を破ったお話。京劇、秦

芝居は、陶大人、彭大人の現状と重なり、特に目を引いたようである。³³

この『訪東京』とは高腔の演目で、一名『水牢記』ともいい、明の鄭汝耿の南戲傳奇『陳可中剔目記』に取材する³⁴。『訪東京』のあらすじは以下の通り。北宋東京の悪党曹大本が、秀才陳可忠の妻韓氏を手に入れるために陳氏を謀殺しようとする。この計画は失敗に終わったが、陳可忠を広東省潮陽の兵営への流刑に陥れる。ある日、包公は私行中にこの噂を耳にし、実情を調べようと曹氏の後をつけるが、誤って見つかってしまい、却って水牢に閉じ込められてしまう。何とか逃げ出して正式に曹氏を捕らえて処刑した、という包公による「私訪」劇である³⁵。主に、湖南地域を中心に、湘劇、祁劇、辰河戲、衡陽湘劇で演じられたという³⁶。湖南説唱本で、陶大人と彭大人両方の「私訪」故事の中に、敢えて『訪東京』の演目を登場させた背景には、湖南地域で『訪東京』のような「私訪」モノの芝居の流行があったと考えられる。

3. 「私訪」故事の流通のしくみ

3.1. 出版時期

次に、出版の方面から、湖南説唱本「私訪」故事のテキストの流通について考察したい。現存する【表 16】1～5、【表 17】6～10、【表 18】11～33 の書誌情報から、「私訪」故事の各種テキストは、民国十五年（1926）辺りまでは湖南で出版され続け、流通していたことが分かる。では、いつ頃から出版され始めたのだろうか。

湖南における説唱本の出版は、同治年間あたりから勃興したと考えられている。その頃には既に、宝慶府皇恩寺（邵陽市西区長新街）に通俗唱本の専売店が出現し、数十の書店が軒を連ね、また『彭玉麟私訪廣東』も販売されていたとある。

同治年間(1862-1874) 寶慶府皇恩寺(今邵陽市西區長新街)形成專賣《十月飄》《三姑記》《三元記》《孟姜女》等調子書和《五美圖》《彭玉麟私訪廣東》等通俗唱本的一條

腔、豫劇、河北梆子、山西上黨梆子などで演じられた（注 30 前掲書『中国劇目辞典』p. 52、p. 632 参照）。また湖南では、前者が湘劇、武陵戲、荊河戲、巴陵戲、後者が湘劇、祁劇、衡陽湘劇、武陵戲、荊河戲、巴陵戲で演じられる（注 30 前掲書「湖南地方大戲劇種伝統劇目表」『湖南地方劇種誌(五)下：長沙市花鼓戲誌』p. 615、634 頁参照）。

ちなみに、『殺四門』も湖南説唱本（黎綿芳堂刻本）があり、劉金定の事を描く。

³³ ただし、陶大人のテキストは、【表 17】6『新刻清官傳陶大人私訪南京道情真本』（益陽：文元堂刻本）では「東辺唱的是高声、西辺唱的是窄音、南辺唱的是九連灯、北辺唱的是文武昇」となっており、『訪東京』の演目は挙がらない。【表 17】7、8 のテキストでは、陶大人は芝居を目にするが具体的な演目名は書かれていない。一方、彭大人のテキストは、【表 18】32『私訪湖北漢陽全部』（中湘：同華堂刻本）でも「頭句唱的全家福、二句唱的殺四門、三句唱的訪東京、前朝大人他把東京訪、我今要訪漢陽城」となっている。

³⁴ 徐渭（1521-1593）『南詞叙録』「本朝」に著録がある。已佚。鄭汝耿の事跡については不詳。

³⁵ 注 29 前掲書『中国戯曲志・湖南卷』p. 127 参照。また、『訪東京』に関する考察に、朱万曙「《認金梳》、《剔目記》与明代包公戯」『戯曲芸術』一期（1999）pp. 66-71 などがあ

³⁶ 注 30 前掲書「湖南地方大戲劇種伝統劇目表」『湖南地方劇種誌(五)下：長沙市花鼓戲誌』p. 639

街、有書舗數十家。

同治年間、宝慶府皇恩寺(今の邵陽市西区長新街)には『十月飄』、『三姑記』、『三元記』、『孟姜女』などの調子書と『五美图』、『彭玉麟私訪廣東』など通俗唱本を専売する通りが形成され、書肆は数十軒に上った

(『中国曲芸志・湖南卷』³⁷⁾)

現在、全国各地に所蔵される湖南説唱本のうち、刊行年が明記されているもので一番古いテキストは、光緒三年(1877)の『南橋會』(寧郷:錦芳堂刻本)である。恐らく、同治から光緒年間にかけて、湖南では説唱本の出版活動が成長し、隆盛期を迎えたと考えられる。このような芸能やそれにまつわる出版活動が活発化ようになる背景として、湘軍のお膝元であった湖南が、太平天国の乱終結後の恩恵などで非常に繁栄したこと等が挙げられるのは、既に述べた通りである³⁸。

「私訪」故事は、現存する説唱テキストの中では、【表 18】13『彭大人私訪南京』(文元堂刻本)が最も刊行年が古く、遅くても光緒三十二年(1906)までには出版されていたと言える。また、物語の本文に書かれる彭大人の官職名から、おおよその年代を考察すると、【表 18】13『彭大人私訪江南』では、彭大人は「太子太保」を賜り、また、【表 18】24『彭大人私訪広東』も「又賜太子与太保」とする。【表 18】18『私訪蓮花廳全部』の「你看清官彭公保」や、【表 18】11『私訪蘇州』の「你看清官彭公保」などのように、「公保」と記すものもある。「公保(宮保)」とは、太子少保のことも太子太保のことも指す。実世界において彭大人は、同治三年に、太平天国軍陥落の功績から「太子少保銜」を賜り、逝去した光緒十六年(1890)には、長江沿いの各省への巡閱による功績から「太子太保」を贈られたので、現存するテキストや実際の状況から判断して、彭大人の一連の「私訪」故事の出版時期は、同治から光緒三十二年の間にかけてということになるだろう。

3.2. 他地域への流通と流布

では、湖南説唱本「私訪」故事は、具体的にどのような人々に享受され、流通したのだろうか。

湖南省湘潭出身の作家、羅皚嵐(1906-1983)の年譜を見ると、「1907年-1911年……此後、能独自朗読『山伯訪友』、『彭大人私訪』等通俗木刻唱本」³⁹とある。羅氏が幼い頃に「梁祝」故事の折子戯である『山伯訪友』や、『彭大人私訪』などの木刻唱本を一人で朗読することが出来たと述べる。これらの「通俗木刻唱本」は、湖南説唱本を指すと思われる。『山伯訪友』は益陽の華文錦刻本や長沙の袁瑞文刻本が現存し、『彭大人私訪』については私訪先の地名が具体的に挙げられていないので、どの作品かは不明だが、一連の「彭大人私訪シリーズ」のことであろう。このように、清末民初の湖南の人々の間で湖南説唱本は広く普及し、一定の知識階級にある幼い子供によっても享受されていた。しかも「私訪」故事は、有名民間伝説の「梁祝」故事と同じ位、湖南では良く知られた話だったようであ

³⁷ 『中国曲芸志・湖南卷』(北京:新華出版社、1992) p. 26「大事年表」

³⁸ 注 37 前掲書『中国曲芸志・湖南卷』 p. 8「総述 明清以来の湖南曲芸」に詳しい。

³⁹ 叶雪芬「羅皚嵐年譜」『湖南師院学報(哲学社会科学版)』第4期(1983)

る。

また、湖南省長沙の人、李少陵（1898-1970）による以下の記事も興味深い。李氏は後に台湾へ渡り、彭玉麟に関する記事を雑誌等で多数発表している⁴⁰。

在清代末年、長江流域各省、流行着兩種小傳書、一是陶澍私訪江南、一是彭宮保私訪江南。這兩部小冊子、在民国初年、我們還可以見到、可是到了今日、這兩部小冊子、似已絕跡了

清代末年、長江流域の各省に、二種類の小伝書が流行した。一つは『陶澍私訪江南』、一つは『彭宮保私訪江南』。この二部の小冊子は、民国初年には、まだ見かけたが、今日では全く見なくなってしまった。⁴¹

李少陵（1963）「彭玉麟簡介」

ここでの小伝書や小冊子がどのようなものだったのか今日では定かでないが、書名『陶澍私訪江南』、『彭宮保私訪江南』や出版形態、流行の時期、また李少陵の出身地などから鑑みて、恐らく湖南説唱本ではないかと考えられる。また、湖南説唱本は遠隔地まで販売されていたという背景もあるため、これらの小伝書や小冊子が湖南省内のみだけでなく、清末に長江流域にも流通していたという事実は、説唱本の流通を考える上で重要であろう。

ちょうど湖南説唱本の出版活動が隆盛する、同治から光緒年間にかけての時期と、実世界において彭玉麟が長江沿いの各省を巡閲する期間が重なり合うため、恐らく彭玉麟を代表とする各大人の「私訪」行為は、説唱文芸の格好の題材となり、また湖南人にとっても親しみのある噂やニュースとして、広く流布したと思われる。その情報の拡散に、説唱本は一役を担っていたと言えよう。現存する湖南の「私訪」故事説唱の中でも、彭玉麟にまつわる「私訪」故事のみが、テキスト、物語の種類、出版量共に群を抜いて多いのも、その為だと考えられる。

彭大人の「私訪」故事説唱は、清末から民国年間に至るまで、人々に歓迎され続け、また長江一帯へのテキストの流通や、実際の彭玉麟の「私訪」行為との相乗効果によって、民間には多くの彭大人に関する伝説が生まれた。例えば、清・徐珂（1869-1928）『清稗類鈔』所収の「彭剛直崇儉」、「彭剛直殺李文忠猶子」、「彭剛直斬管帶」等や、李少陵「彭宮保與梅花恋史 湘軍掌故叢談（六）」⁴²、清・柴萼『梵天廬叢録』「彭剛直公二十二則」⁴³、『中国民間故事集成・湖南卷』所収の話⁴⁴などは、全て彭玉麟が、長沙、江南、鎮江、九江、合肥、蘇州、福建、広東を「私訪」し、各地の腐敗官僚、民事事件に対して厳しい裁きを行ったことを伝える。そのため、人々から「青天大老爺（清廉公正なお役人）」⁴⁵など

⁴⁰ 彭玉麟に関する李少陵による記事は、『中央日報』副刊（1963年12月16日）の毛一波「彭玉麟簡介」に詳しい。今、『彭玉麟傳記資料』（台北：天一出版社）に収録される。

⁴¹ 前掲注三七に同じ。

⁴² 注40前掲書『彭玉麟傳記資料』所収『芸文誌』第23期

⁴³ 注40前掲書『彭玉麟傳記資料』所収。

⁴⁴ 『中国民間故事集成・湖南卷』（北京：中国 ISBN 中心出版、2002）p.141「打開南京府發洋財」、pp.147-148「彭玉麟游山審案」などを収録する。

⁴⁵ 注40前掲書『彭玉麟傳記資料』所収の『歴史人物故事』（台北正中書局、1973）に記載される李少陵著「七十八、彭玉麟故事」「八、彭宮保私訪江南」による。

とも呼ばれた彭玉麟は、湖南人の誇りであり、まさに当時の包青天（包公）のような存在だったことは、想像に難くない。

3.3. 上海石印説唱本との関係

光緒後期から民国期にかけて、上海で石印出版が勃興し、各地の木刻説唱本は上海で翻印され、石印説唱本が流通の主流となった。この出版界の転換期において、湖南で特殊な流行を築きながら広く流通した湖南説唱本「私訪」故事は、どのような運命をたどったのだろうか。

第1節で挙げた、「呉大人」、「陶大人」、「彭大人」の説唱テキストの一覧からも一目瞭然であるが、最も流行を築いていた「彭大人」と、それに次いでテキストの種類が多い「陶大人」の「私訪」故事には、現存する上海石印説唱本がない。或いは、湖南色が特に強いこれらの「私訪」故事は、上海に集約されたまま淘汰され、石印説唱本として翻印されなかったのかも知れない。管見の限り、湖南説唱本のうち石印出版される殆ど全ては、その内容が湖南と関わりが無い物語であると言っても過言ではない⁴⁶。また、先ほどの李少陵（1963）の記事に、『陶澍私訪江南』と『彭宮保私訪江南』の小伝書は、民国初年までは見かけたが、今日では全く見なくなってしまったとあるのも、上海石印出版における物語の淘汰の影響の可能性がある。

【表 16】1～5、【表 17】6～10、【表 18】11～33 のテキストのうち、【表 16】2～5 の『呉大人私訪九人頭』は、長沙の左三元堂刻本などの他に、上海の椿蔭書莊、協成書局からも石印出版された。石印本として翻印された理由は、もしかしたら【表 16】2～5 の『呉大人私訪九人頭』の物語内容に湖南色がほぼ無かったからかもしれない。また、湖南説唱本「私訪」故事の冒頭に共通してみられる、各大人が功績を称えられ、皇帝から「上皇劍」や「先斬後奏」の権利を授かり、その後、変装して各地を私行する、というパターン化された導入部が、【表 16】2～5 の『呉大人私訪九人頭』には無い。物語の展開は、湖北の漢陽で発生した人頭案（首切り事件）から連鎖的に引き起こされた、悲惨な殺人事件がメインであり、前半の最後によく呉大人が登場し、事件の真相を探るため、薬売りに扮して調査に赴き、後半は事件解決の過程が紙幅を割いて描かれる。

『呉大人私訪九人頭』の創作の背景には、「私訪」劇ではなく、斬首を巡る奇案を描く湖北の楚劇『九人頭』の影響があったのではないと思われる。『九人頭』は蒲劇や潮州劇など各地方戯で広く上演され、人口に膾炙した演目という⁴⁷。恐らく、その人気の斬首事件のプロットが、湖南で流行していた「私訪」故事と融合して、湖南説唱本『呉大人私訪九人頭』となり、物語の中身は「人頭案」だが、封面には湖南で人気の「私訪」という文言を全面に出して出版したのではないだろうか。ただし、物語の中身はあくまで人頭案であり、特有の湖南色がなかったため、湖南地域以外の上海石印説唱本としても流通し、広

⁴⁶ 注7で挙げた説唱本の物語は、全て湖南と関わりのない内容であり、上海で石印説唱本として出版されている。

⁴⁷ 『九人頭』については、『獄卒平冤』と併せた考察が幾つかある。郭啓宏「戯曲古代劇的文学性転変-評楚劇《獄卒平冤》」『劇本』12期（1985）pp. 21-72、武縦「脱胎換骨 移花接木-從《九人頭》到《獄卒平冤》」『戯曲芸術』2期（1986）pp. 12-14。

く受容を得ることが出来たのではないかと考えられる⁴⁸。

また、湖南において説唱本の出版・流通が盛んに行われる一方で、実際の上演も行われ、長沙弾詞の『馬金龍訪華容』、『陶澍訪城隍廟』、『陶澍訪華容』、『陶澍訪榔梨市』、『彭大人訪広東』⁴⁹や、漁鼓の『陶澍訪南京』、『彭大人訪広東』、『彭玉麟訪九龍山』、『彭玉麟訪華容』⁵⁰、湖北の東山番榔鼓の『彭大人私訪漢陽』⁵¹などの演目も残っている。現在も陶澍の「私訪」故事は花鼓戲で演じられているようだが、恐らく方言などの障害もあり、その流布は非常に限定された地域に留まるのみとなっている。

4. 本章のまとめ

本章では、清末民初の湖南省ほぼ全域の書肆から陸続と出版され、ひとつのブームを築いた「私訪」故事説唱を取り上げ、他地域の民間説唱にはみられない、湖南地域で単独で起きたこの特殊な文化現象の解明を試みた。

第1節では、湖南説唱本「私訪」故事の中でも、物語の種類、テキストの種類、現存数が多く、特に流行したと思われる、「吳大人」、「陶大人」、「彭大人」を主人公とする作品を取り上げ、書誌情報の整理を通して、各種テキスト、物語内容の特徴を確認した。

第2節では、これらの作品が湖南において流行を築いた要因を明らかにするため、書物の形式面と内容面の二つの側面から考察を試みた。

「私訪」故事は、多くが物語の展開、出版形態など、決まったフォーマットに基づいて創作され、湖南の書肆でひとつの商品規格となっていたことが明らかとなった。「私訪」故事という商品の規格化により、様々な連作が生まれ、大量生産も可能となり、物語の流行を可能にしたと言える。

内容面については、中身の湖南化が図られ、例えば主人公には、吳達善、陶澍、彭玉麟という、共に湖南に縁のある実在の人物を据え、特に、陶澍と彭玉麟は、実際に皇帝の命を受けて各省の巡閲を行い、強盗、私塩密売を取り締まり、貪官汚吏を厳格に裁き、治安維持に尽力した清官として名高い、湖南の出身者であった。また、彭玉麟は湘軍水師として太平天国軍と交戦し、洪秀全が占拠した南京の陥落にも功績のある地元の英雄でもあった。また、物語にはしばしば湖南人が登場したり、他地域と比較して湖南地域の優位性が語られたりと、現実と虚構を「私訪」を介して融合させながら、湖南の人々の共感、支持を得る工夫がなされたことも、物語の流行を可能にしたと言えるだろう。

第3節では、出版活動の側面から、湖南説唱本「私訪」故事の流通の様相を明らかにし

⁴⁸ 湖南説唱本には、人頭案をモチーフにした『新刻茶碗記六人頭』（封面「私訪六人頭/新刻茶碗記/六十冊/星沙小西門外正華堂發客」国図蔵）も現存する。書名は『茶碗記六人頭』だが、封面には「私訪六人頭」とあり、「私訪」の文言が用いられる。湖南では、人頭案と私訪の融合した物語が流行していたのかも知れない。湖南説唱本『新刻茶碗記六人頭』も、後に上海の槐蔭山房から石印説唱本『張秀英茶碗記全本』（復旦所蔵）が出版されることから、やはり「私訪」だけではなく別の要素が強い物語が石印説唱本として残る。

⁴⁹ 注37『中国曲芸志・湖南卷』p.207、「新編歴史題材曲目（書目）表」参照。

⁵⁰ 注37『中国曲芸志・湖南卷』p.393、396、408、415、442、pp.524-536、「漁鼓弾詞類・漁鼓」参照。

⁵¹ 『中国曲芸志・湖北卷』「伝統曲（書）目表」（中国 ISBN 中心：新華書店北京発行所経銷、2000）p.230 参照。

た。太平天国の乱後、長きにわたり湖南を拠点に長江沿いの各省を巡閲した彭玉麟の活動時期と、湖南における説唱文芸活動の隆盛する時期が重なり合うことも、「私訪」故事の流行、流通を支える大きな要因となった。彭玉麟が変装微行で各地を巡察した事実や、「私訪」と連動して起こる実際の事件は、説唱文芸に吸収され、シリーズ物のように物語を生むのに一役を担ったと言えるだろう。

その一方で、全国的な営利の絡む、光緒後期以降の都市上海における出版文化の形成、成熟に伴い、木版印刷が石印に取って代わられる様になると、翻印される多くは、湖南と関わりの無い故事が中心となった。つまり湖南色の強い「私訪」故事は、演劇としては限定的に存続し続けるが、読み物としては次第に淘汰を経ていったのである。

以上、「私訪」故事の流行という、清末民初の湖南地域で単独に起きた特殊な文化現象の解明を通して、全国的な説唱文芸活動の展開において、太平天国の乱はひとつの契機をもたらし、また湖南という地は、その文化モデルをみるうえでも非常に重要な地域として存在していたことが明らかとなった。

第5章 湖南説唱本「美図」故事の流行と流通 —『五美図』、『後五美図』、『七美図』を中心として—

0. はじめに

前章の「私訪」故事が、パターン化により物語を大量生産し、また内容を湖南化することで湖南の人々の支持を得て、湖南地域において特異な流行を築いた、という現象と非常に似通った動きをする物語を本章で取り上げる。

湖南説唱本には、書名に「美図」と冠する物語も数多く現存する。例えば、『新抄五美圖』、『新抄後五美圖抄洗何坤全部』、『新刻七美圖全部』、『新刻龍袍記九美圖』、『新刻十美圖全部』などである。これらの作品は、物語の基本構成を共有し、「ある男主人公が、紆余曲折の流浪の中で、縁あって出会った女性たちと次々に婚姻を結び、最終的に出世をして一夫多妻の大団円を迎える」というフォーマットに則って創作され、男性が婚姻を結ぶ女性の数が五人なら『五美図』、七人なら『七美図』、八人なら『八美図』という具合に、「美図」の前の数字を増減させて題名が付けられた。現存数や物語の種類などから鑑みて、このいわゆる「美図」故事は「私訪」故事と人気を二分していたと思われる。

ただし、「私訪」故事と異なるのが、「美図」故事の流行は湖南地域のみで単独に起きた現象ではなく、それより以前に、清の嘉慶あたりから道光、同治年間にかけて、江南を代表する説唱文芸である弾詞においても、既にひとつの流行となっていたということである。江南の弾詞も、上述のフォーマットに則って『三美図』、『六美図』、『七美図』、『八美図』、『九美図』などの物語が創作されており、そのうち幾つかは広く伝播し、清末民初の他の説唱文芸、例えば宝巻、広州の木魚書、潮州の潮州歌などでも翻刻されたり、各説唱ジャンル独自の「美図」故事が編まれたりもした。

湖南地域にも、江南の弾詞「美図」故事は持ち込まれ、幾つか翻刻もされたが、それ以外にも湖南独自の新たな「美図」故事が次々と創作された。漁鼓や長沙弾詞などで実際に上演されたり、湖南省各地の書肆から説唱本としても大量に出版されたりと、湖南一帯の説唱文芸において、江南弾詞「美図」故事作品に匹敵するほどの、空前の「美図」故事ブームが築かれたと考えられる。現存する説唱本に対する調査の限りでは、他の説唱文芸でここまでの規模の「美図」故事出版ブームは起きていない。

そこで本章では、湖南において「美図」故事が流通し、流行した仕組みについて、物語の構造、内容に対する分析と、前章の「私訪」故事にみられる文化現象とを比較しながら検証し、併せて流行を築く背景にある湖南の書肆の説唱本販売における商業意識についても考察する。その上で、清末民初における全国的な説唱出版活動の趨勢の中で、湖南説唱本「美図」故事はどのような運命をたどるのかを明らかにしたい。

1. 弾詞「美図」故事の流行と他地域への影響

1.1. 弾詞「美図」故事形成の背景

胡士瑩編『弾詞宝巻書目』¹、譚正璧・譚尋編『弾詞叙録』²、盛志梅著『清代弾詞研究』付録「弾詞知見綜録」³を見ると、弾詞「美図」故事には、『三美図縁』、『四美図傳』（即「想當然」後集）、『六美図』、『六美図』（一名「中外縁」）、『七美図』（一名「雙珠印」）、『八美図』（一名「武八美」）、『八美図』（唐伯虎の話。「武八美」と区別される）、『九美図』、『九美図』（一名「映陝樓」）、『十美図』、『十美図』（一名「沈香閣」）がある。それぞれ主人公が婚姻を結ぶ女性の数によって、六、七、八、九、十と「美図」の前に付く数字に差異が出るだけで、基本的にいずれも冒頭で述べたとおり「主人公が、紆余曲折の流浪の中で、縁あって出会った女性たちと次々に婚姻を結び、最終的に出世をして一夫多妻の大団円を迎える」というストーリー構成の枠組みに、それぞれ趣向を凝らした内容をあてはめたものとなっている⁴。

これらの弾詞「美図」故事が出版される以前に、「美図」という文言を書名に採る物語について辿ると、明代に『十美図』という物語が文人の間で大変好まれていたという記事がある。

明代稗史小説『補張靈崔瑩合傳』と小説『十美図』

明末清初の黄周星（1611-1680）が記した『補張靈崔瑩合傳』⁵の小序に、以下のようにある。

余少時閱唐解元《六如集》、有云：六如嘗與祝枝山、張夢晉大雪中效乞兒唱《蓮花》、得錢沽酒、痛飲野寺中。曰“此樂惜不令太白見之。”心竊異焉。然不知夢晉為何許人也。頃閱稗乘中、有一篇曰《十美圖》、乃詳載張夢晉、崔素瓊事、不覺驚喜叫跳。已而澹然而泣、此真古今來才子佳人之軼事也、不可以不傳、遂為之傳。

私は若い頃に唐解元の『六如集』を読み、そこには六如（唐解元）がかつて祝枝山、張夢晉と大雪の中で乞食を做って『蓮花落』を歌いながら、金を得て酒を買い、野寺で痛飲し、「この楽しみを（李）太白に見せられないのが残念だ」と言ったとあり、密かに不思議に思っていた。夢晋とは何者なのだろうか。近頃読んだ稗史小説に、『十美図』という一篇があり、張夢晋と崔素瓊の事が詳しく記載されていたので、思わず驚喜し小躍りした。しばらくするとさめざめと涙が流れ、これは真に古今の才子佳人の逸話であり、伝えないわけにはいかないと思い、遂にこれを著し伝えることにした。

黄周星が涙した『十美図』の内容を伝える『補張靈崔瑩合傳』のあらすじは以下の通り。

明の正徳年間（1506-1521）の蘇州才子の張靈は、乞食のような生活を送りながら、いつか崔鶯鶯のような佳人と結ばれることを願っていた。ある日、張靈（夢晋）は虎

¹ 胡士瑩編『弾詞宝巻書目』（上海：古典文学出版社、1957）参照

² 譚正璧・譚尋編『弾詞叙録』（上海：上海古籍出版社、1981）参照

³ 盛志梅著『清代弾詞研究』（済南：齊魯書社、2008）pp. 263-479 参照

⁴ 筆者が実際に内容を把握できているのは『六美図』、『七美図』、『八美図』、『九美図』、『十美図』である。その他は目録で確認したのみである。

⁵ 張潮『虞初新志』卷十三「補張靈崔鶯鶯合伝」、『古本小説集成』（上海：上海古籍出版社1994）所収上海図書館蔵康熙刻本影印本を参照。

丘で唐寅などに酒を恵んでもらう途中で、崔瑩（素瓊）に一目ぼれをする。互いに好意を寄せるが、崔瑩は藩王の朱宸濠によって皇帝に献上する十人の仕女の一人とされてしまう。また、唐寅は頼まれて十人の美女と共に献上するための仕女図美人画「十美图」を描く事になる。驚いた唐寅が張霊に伝えると、重度の恋煩いを病んで死んでしまった。その後、朱宸濠が謀叛を起こしたことにより崔瑩は戻されたが、張霊の死を知り彼の墓前で自殺をする。二人の事情を知っていた唐寅は彼らを合葬し弔った。

後に内容をほぼ同じくする小説『十美图』も刊行される。その成書年代は定かではないが、早くて清の順治年間(1644-1661)、遅くても康熙初年あたりだろうと考えられている⁶。明末から清代にかけて流布した『十美图』とは、張霊と崔瑩という才子佳人が、唐寅の描いた美人画「十美图」によって引き裂かれる悲恋の物語だったようである。物語の中に出てくる美人画「十美图」において十人の女性は描かれるが、弾詞「美图」故事のような主人公が十人の女性と大団円を迎える展開とは大きく異なる。

清代小説『五美縁』

書名はやや異なるが、小説『五美縁』は、弾詞「美图」故事の形成に影響を与えたと思われる。その物語のあらすじは、

明の正徳年間、銭塘の書生馮旭は一目ぼれをした銭月英と婚約するが、太師の息子花文芳が月英を見初め、馮旭を冤罪に陥れ、月英に結婚を迫る。月英は代わりに下女の翠秀を遣って花文芳を殺害し、後に下女の落霞と男装をして流浪する。馮旭は無実が晴らされ、姚府に婿入りし、姚惠蘭と結婚する。後に状元となり、辺境を警備するが、敵国の王女哈飛愛に好意を抱かれ結婚する。両国は和解し、馮旭は朝廷に戻ると正式に月英、翠秀、落霞、惠蘭、哈飛愛を妻に迎えた。

主人公の男性が出会った女性と次々に婚姻を結び、最終的に五人全員を娶るという、「美图」故事の原形とも言える内容になっている。現存するテキストには、清の道光二年（1882）の寄生氏による序がある。寄生氏は嘉慶、道光年間の人とされるが、小説の創作年代については、物語中の「弘」字の避諱の処理から、乾隆初期以前にまで遡ることが可能だという意見もある⁷。

⁶ 石昌渝主編『中国古代小説総目・白話巻』（太原：山西教育出版社、2004）p.335、施雨田氏による『十美图』の解説に、「『小説考証』続編巻五には『花朝生筆記』を引き、「明人に『十美图』と言う小説があり、この事を記す」とあるが、本書は明人の作ではない。巻頭で才子と佳人が結ばれる事が話題とされ、そこで『無声戯』の醜男の闕里侯が続けて三人の美女を娶ったエピソードを取り上げている。『無声戯』は清の順治年間の作であるため、『十美图』は早くても順治年間を溯ることは無いだろう。また「玄」の字が欠筆にされていないので、出版が康熙初年より遅いこともないだろう。」とある。

⁷ 『古本小説集成』第一輯所収『五美縁傳』（上海：上海古籍出版社 1990）の前言に黄毅による以下の解説がある。乾隆年間、文字の獄で「弘」の字の避諱は大変厳しく行われ、「宏」の字にするか欠筆とされた。嘉慶、道光年間はこのような文字獄は無かったが、習慣で「弘」の字は出現しないようになっていた。この書物は「弘」の避諱の処理が少なく、嘉慶、道

清代小説『五鳳吟』

もう一種、主人公が五人の女性と結ばれる清代小説『五鳳吟』が存在する。こちらも成書年代は不詳だが、更に早く康熙年間（1662-1722）の作ではないかとされる⁸。

「男主人公が波乱万丈の末に五人の女性を娶って大団円を迎える」という構成の小説『五美縁』や『五鳳吟』は、早くて康熙年間から乾隆初年、遅くても嘉慶、道光年間までには既に出版されていたと考えられ、嘉慶年間から出現し始める弾詞「美図」故事作品群の刊行に、少なからず影響を与えたと思しい。

また、『五美縁』について、「該小説故事情節比較曲折、但終不脱才子配佳人“始或乖違，終多如意”的俗套。（この小説のプロットは比較的複雑だが、最終的に才子と佳人が結ばれ、“始めは離別するも、終わりは多く思い通りになる”という常套から抜け出してない）」⁹という指摘があるように、物語の展開からは、明末清初に続々と編まれた『玉嬌梨』、『平山冷燕』、『金雲翹傳』などの才子佳人小説が連想される。

才子佳人小説とは、「①才子と佳人の物語、②運命的な男女が試練に遭遇し、それを克服して結ばれる、③極端な性描写に走らない、というフォーマットをもつ作品群」であり、「ストーリー構成のフォーマットの中で話を展開」していくため、パターン化したシリーズもののように創作され、「営利を主目的とした書肆の活動の産物」であったとも指摘される¹⁰。

弾詞「美図」故事も、ストーリー構成のフォーマットを共有して次々と創作された作品群であるという点では、明末清初の才子佳人小説の現象と同じである。異なる点としては、弾詞には、個々の作品に「中外縁」、「武八美」、「笑中縁」などの別名があるが、全てに「美図」という名称を付けることによって、「美図」故事を統一し、言わばブランド化を図ったことが挙げられよう。

また、明代小説『十美図』は、弾詞では『何必西廂』という題名で広まり、清代小説『五美縁』は、弾詞では『雕龍宝扇』という題名で流布しており¹¹、いずれの物語も弾詞で語られるようになると「美図」という名称では流布しなくなってしまう。つまり、『三美図』、『四美図』、『六美図』などの弾詞「美図」故事は、既存の小説などの物語をそのまま利用するのではなく、それらとは一線を画して、新たに創作された作品であったことが分か

光年間ではこのような現象は絶対にあり得ないため、乾隆年間初年かそれ以前のものと考えられる、と述べる。

⁸ 注6前掲書『中国古代小説総目』pp. 400-402 参照。『古本小説集成』第四輯（上海：上海古籍出版社 1990）所収

⁹ 注6前掲書『中国古代小説総目』pp. 404-405 の『五美縁』の解説に書かれた韋鳳娟による指摘。

¹⁰ 磯部祐子「中国才子佳人小説の影響—馬琴の場合—」『高岡短期大学紀要』第18巻（2003）pp. 223-233 より抜粋。なお、才子佳人小説については、岡崎由美「神童の恋—明末清初才子佳人小説雑考」『中国文学研究』第15期（1989）：pp. 94-113 の論考がある。

¹¹ 注2前掲書『弾詞叙録』pp. 316-317によると、宝巻にも同名で同内容の物語があり、また陝南道情『雄黄劍』も登場人物を同じくすると記される。湖南説唱本にも関連故事『新刻雕龍扇五美縁全部』（長沙：誠興堂刻本、早稲田大学中央図書館蔵）があり、封面には「斬妖記雕龍扇/新刻/小姐遠願 高德華降妖 夏太師忘恩 郁盟文害友/長沙誠興堂刊刻」と書かれ、やはりいずれも「美図」という名称では流布していない。

る。ここから、清代の江南の弾詞出版界において、「美図」故事というものを、意識的にひとつの商品として新たに規格化する動きが起きていたと推察することが出来るだろう。

1.2. 他地域説唱文芸への影響

同治七年（1868）に江蘇巡撫丁日昌が実施した大規模な禁書によって、これら弾詞「美図」故事のうち、『七美図』、『八美図』、『九美図』、『十美図』は禁書の対象となった¹²。しかし、完全に絶版となった訳ではなく、幾つかの物語は主に南中国を中心とした他地域の説唱文芸に採用されて広く伝播した。

例えば、小説『十美図』にも登場した仕女図美人画を得意とした明の風流才子唐寅（伯虎）に関するエピソードは、明の白話短編小説『警世通言』巻26「唐解元一笑姻縁」や弾詞『三笑姻縁』にもしばしば描かれ、特に、唐寅がある日偶然見かけた華太師婦人の侍女の秋香に惹かれ、彼女に振り向いてもらうために、身分を偽って華府に入り、最後はめでたく結ばれるという話は全国的に有名である。

同じく唐寅を主人公に据える弾詞『八美図』、『九美図』になると、唐寅が正妻の陸昭容に、戯れに八人の妻を娶ると言い出し（或いは既に八人居る状態から第九夫人を娶ると言い出す）、実際に放浪の途中で出会った女性たちと次々に婚姻を結び、最終的に全員を妻に迎え、記念に美人画「八美図」を描いてめでたしめでたしという内容となる。これは、美人画を得意とする唐寅の要素と、大勢の女性を娶る弾詞「美図」故事ブームを受けての産物と言えるだろう。宝巻『九美図』¹³やその他の説唱文芸を主媒体に「多妻の唐寅」が流布し、現代の香港映画『唐伯虎点秋香』（1993）でも、唐寅は既に八人の妻が居るという設定の上で、侍女の秋香を振り向かせようと奮闘する様子が描かれており、その影響は現代にまで及んでいる。

唐寅の話だけでなく「美図」故事は、江南弾詞という地域も説唱文芸ジャンルも超えて、もはやひとつの商品規格となって他地域の説唱文芸にも浸透していったが、その中で特に注目になるのが、内陸部湖南省の説唱文芸である。清末民初の湖南地域では、江南の弾詞「美図」故事と同じくらい大規模な「美図」故事の出版ブームが起きていた。

2. 湖南説唱本「美図」故事の出版ブーム

2.1. 物語設定の枠組みの共有と封面の統一

以下の記事は、前章でも取り上げたが、清の同治年間（1862-1874）に湖南の宝慶府の書肆で、湖南説唱本「美図」故事のひとつ『五美図』が販売されていたことが記される。

¹² 車錫倫「清同治江蘇查禁“小本唱片目”考述」『揚州大学学报（人文社会科学版）』02期（1992）、丁淑梅「丁日昌設局禁書禁戲論」『陝西師範大学学报（哲学社会科学版）』第40巻、第1期（2011）など参照。

¹³ 張希舜・濮文起等主編『宝巻・初集』（太原：山西人民出版社、1994）第38巻に光緒三十三年抄本が収められる。唐伯虎に既に八人の妻が居て、九人目の妻が秋香という設定である。

同治年間(1862-1874) 寶慶府皇恩寺(今邵陽市西區長新街)形成專賣《十月飄》《三姑記》《三元記》《孟姜女》等調子書和《五美圖》《彭玉麟私訪廣東》等通俗唱本的一條街，有書舖數十家。

同治年間、宝慶府皇恩寺(今の邵陽市西區長新街)には『十月飄』、『三姑記』、『三元記』、『孟姜女』などの調子書と『五美図』、『彭玉麟私訪廣東』など通俗唱本を専売する通りが形成され、書肆は数十軒に上った。¹⁴

『彭玉麟私訪廣東』の「私訪」故事と並んで、やはり「美図」故事は湖南説唱本を代表する物語として存在したようである。この『五美図』以外に、湖南説唱本では『三美図』¹⁵、『四美図』¹⁶、『後五美図』、『七美図』、『八美図』¹⁷、『九美図』¹⁸、『十美図』¹⁹が現存し、そのうち『八美図』と『十美図』は、弾詞『八美図』(一名武八美)、弾詞『十美図』を翻刻したものである。その他は、全て「ある男主人公が、紆余曲折の流浪の中で、縁あって出会った女性たちと次々に婚姻を結び、最終的に出世をして、一夫多妻の大団円を迎える」というストーリー構成の枠組みに則って、湖南で新たに創作された。

以下にいくつか現存するテキストを挙げると、



左から、『三美図』、『四美図』、『五美図』、『七美図』、『九美図』と封面に大きく記される。それぞれの巻首題は、図 24『新刻白骨塔全部』長沙刻本(上図蔵)、図 25『新抄賢關鎮侯美容焚香絲帶記』中湘:九總黃三元堂刻本(復旦蔵)、図 26『新抄五美圖』長沙:左三元堂刻本(中山蔵)、図 27『新刻小清官烏江渡私訪全部』中湘刻本(復旦蔵)、図 28『新刻龍袍

¹⁴ 『中国曲芸志・湖南卷』(北京:新華出版社、1992) p. 26「大事年表」参照

¹⁵ 『新刻白骨塔全部』長沙刻本(封面に「三美圖」とある。湖南図、首都図、上図、中山、浙江図所蔵)『新刻白骨塔全本』洪江・豊泰新堂刻本(中山所蔵)

¹⁶ 『新抄賢關鎮侯美容焚香絲帶記』黄三元堂刻本(封面に「四美圖」とある。国図、湖南図、復旦、上図、早大演博、浙江図所蔵)その他、武攸:大林福記刻本、洪江:豊泰新堂刻本(共に上図所蔵)がある。

¹⁷ 『新刻綉様八美全圖』全文堂刻本、『新刻繡像八美圖』文順堂刻本(封面にも「八美圖」とある。共に上図所蔵)

¹⁸ 『新刻龍袍記九美圖上部』中湘:三元堂刻本(封面にも「九美圖」とある。国図、湖南図、上図、早大演博、浙江図所蔵)

¹⁹ 『新刻十美圖』永州:文順慶記刻本(封面にも「十美圖」とある。上図所蔵)

記九美圖上部』中湘:三元堂刻本(上図蔵)とあり、必ずしも「美図」という文言を採用していないものもある。その現象は、湖南地域の漁鼓や長沙弾詞などの演目名にも表れており、実際の上演では、『白骨塔』(三美図)、『絲帶記』(四美図)、『龍袍記』(九美図)、『嘉慶帝私訪』(後五美図)などで広く伝わっていたようである²⁰。

ただし、読み物として出版される際は、上図のような封面が付けられ、各テキストの間でその封面形式を共有し、まるで「美図」故事シリーズのような体裁で販売された。これは、シリーズ物であると読者に意識させることで、一つの作品が面白かったらその他の関連作品も読もうという購買意欲に繋げる効果を狙った、書肆による販売戦略だったとも考えられる。また同時に、「美図」故事は「私訪」故事と同様に、商品として規格化できるほど、当時の湖南において人気商品となっていたということも意味する。

現存する湖南説唱本「美図」故事の中でも、以下に挙げる『五美図』、『後五美図』、『七美図』は、封面に印刷された数百、千単位の印刷数からも分かるように、大量に出版され、また現存量、テキストの種類共に群を抜いており、当時の「美図」故事の流行の中心にある物語だったと推察できる。

江南から湖南地域に持ち込まれた弾詞「美図」故事は、どのように湖南で定着し、湖南独自の流行を築いていったのだろうか。以下に、当時の流行の中心であったと思しい『五美図』、『後五美図』、『七美図』を取り上げ、流行のしくみを解明していくが、その前に、先ず3種の物語の書誌情報、テキスト、内容の特徴を整理する。

²⁰ 注 22 前掲書「伝統曲目(書目)表」pp. 117-206 参照。

2.2. 「美図」 故事説唱テキストの種類と特徴

2.2.1. 『五美図』

【表 19】

	巻首題	封面題	刊記	所蔵箇所
1	新抄五美圖 首巻 槽坊許婚	新康渡/五美圖/新抄/真本洪蘭桂中 状元/八十冊/中湘 楊文星堂刊刻	中湘:楊文星堂刻本	国図
	新抄五美圖 下巻 洪藍桂進京	無し		
2	新抄五美圖 首巻 槽坊許婚	新康渡/五美圖/新抄/真本洪蘭桂中 状元/百四十冊/中湘九總黃三元堂 發兌	中湘:九總黃三元堂 刻本	湖南、演博、復 旦、浙図、首図 ×2部
	新抄五美圖 下巻 洪藍桂進京	無し		
3	新抄五美圖 首巻 槽坊許婚	新康渡/五美團圓/新刻/真本洪藍桂 中状元/百冊/中湘三元堂歌書發客	中湘:三元堂刻本 (封面有図)	演博
	新抄五美圖 下巻 洪藍桂進京	無し		
4	新刻五美圖全部	新康渡/五美圖/新刻/槽坊打酒許婚 洪藍桂点状元/百六十冊	三沅堂刻本	湖南
5	新刻五美圖 巻一 槽坊許婚	民國辛未年新刻/五美圖/李小姐會 文許婚 洪藍桂連中三元/二百八 折/永州西郷渡楓塘文順堂印兌	永州:民國辛未年 (1931)文順堂刻本	上図
6	新刻五美圖	洪江豊□□/新刻/洪蘭桂中状元/繡 像五美圖/四百	集賢堂刻本	上図
7	新抄五美圖 首巻 槽坊許婚	新康渡/五美圖/新抄/槽坊打酒許婚 洪藍桂點状元/百冊/長沙小西門外 上首湘郷碼頭左三元堂戲文發客	長沙:左三元堂刻本	中山

『五美図』の物語の簡単なあらすじは以下のとおり。

乾隆五十六年(1791)、乾隆帝の寵愛を受けていた大臣の何坤(ママ)²¹が、朝廷でおぼえめでたい洪有雲(四川省保寧府の人)を妬み、洪有雲に謀反の意有りとなし、乾隆帝に虚偽の奏上をして、洪有雲夫妻を謀殺する。更に、洪家の勢力を一掃しようとするが、東閣大学士の諭文榜、協辦大学士の劉統勛、九門提督の郭文举が、乾隆帝に対して洪家は問題ないと保証し、一族は難を逃れる。その後、洪有雲の父、洪建章は孫の蘭桂を連れて船で逃げ

²¹ 【表 19】4では「何坤」は「何申」と記される。

るうちに湖南省にたどりつく。そこから、洪蘭桂は五人の女性と出会い、最終的には科挙試験に及第し、五人全員を娶るという内容になっている。

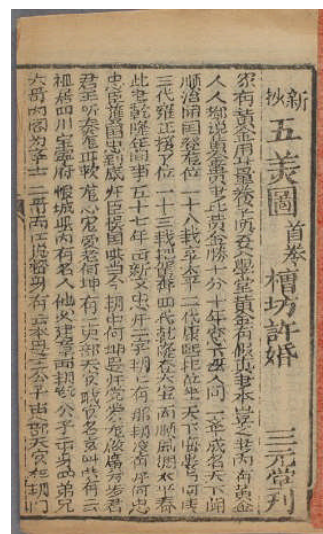
乾隆帝の寵愛を受けた何坤とは、実在の奸臣和珅（1750-1799）がモデルであり、また、物語の冒頭でのみ登場する協辦大学士の劉統勛も、康熙、乾隆年間に活躍した実在の清官劉統勛（1698-1773）がモデルと思われるが、物語の内容は全て虚構である。

【表 19】1～7 は共に、時代設定、登場人物、物語の展開などは同じ。また、いずれのテキストも、封面は共通して大きく「五美图」と印刷され、説唱形式も全て7字句の韻文と、「白（セリフ）～」等で始まる散文の挿入句で構成される。



図【表 19】2 『新抄五美图』

中湘：九總黄三元堂刻本 封面、1a



図【表 19】3 『新抄五美图』

中湘：三元堂刻本 封面

【表 19】1～3 のテキストは、封面の印刷数、書肆名などは異なるが、本文の形式、文言は完全に同じである。同系列の版木が使用され、封面だけ各書肆で挿げ替えられたと思われる。ただし、同じ中湘刻本でも、2 の九總黄三元堂本、3 の三元堂本は、首巻題下に「三元堂刊」と印字があるのに対して、1 の楊文星本はその部分が削られている。上下巻、2 冊、11 行×28 字（7 字句 4 句）、全 30 葉。

【表 19】4 は、上下巻、2 冊、12 行×21 字（7 字句 3 句）、全 34 葉。首巻題下に「三元堂刊」と印字される。

【表 19】5 は、不分巻、1 冊、13 行×31 字（7 字句 4 句）、全 40 葉。

【表 19】6 は、上下巻、1 冊、16 行×23 字（7 字句 3 句）、全 29 葉。封面に「洪江豊口口（豊泰新堂か?）」の印字があるが、首巻題下に「集賢堂板存」と印刷される。版木は集賢堂のものを使用したか。

【表 19】7 は、不分巻、1 冊、10 行×22 字（7 字句 3 句）、全 44 葉。

2.2.2. 『後五美图』 —続編『五美图』—

【表 20】

	巻首題	封面題	刊記	所蔵箇所
8	新抄後五美图抄洗何坤全部	抄何坤/後五美/新刻/洪蘭桂報仇火焚花樓館/九十冊/中湘九總黃三元堂	中湘：九總黃三元堂刻本	国図
9	新抄後五美图抄洗何坤全部	抄何坤/後五美/新刻/洪蘭桂報仇火焚花樓館/百五十冊/中湘九總黃三元堂藏板	中湘：九總黃三元堂刻本	湖南、復旦
10	後五美下巻	嘉慶主/私訪桂藺城/新刻/鐵將軍保駕 康氏女接封/中湘九總黃三元堂刻	中湘：九總黃三元堂刻本	湖南、復旦、上図
11	新抄後五美图抄洗何坤全部	抄何坤/後五美/新刻/洪蘭桂報仇火焚花樓館/百廿冊/星沙小西門三元堂發客	星沙：三元堂刻本	中山
12	新抄後五美图抄洗何坤全部	抄何坤/後五美/新刻/洪蘭桂報仇火焚花樓館/百八十冊/民國九年庚申益陽頭堡文元堂重刊	益陽：民國九年庚申（1920）文元堂重刊本	湖南
13	新抄後五美图抄洗何坤全部	抄何坤/後五美/新刻/洪蘭桂報仇火焚花樓館/壹百四十冊/中湘同華歌書發客	中湘：同華堂刻本	中山
14	新刻私訪桂花城	後五美图/新刻/幼主私訪桂花城 藍桂奏本斬何坤/一千折/永州西郷楓塘黃文順堂慶記印行	永州：黃文順堂慶記刻本	上図
①	何伸抄家	嘉慶私訪桂花城	石印本	傅斯年
②	新刻私訪桂城何伸抄家青龍傳全本	何伸抄家青龍傳	椿蔭書莊石印本	傅斯年

『後五美图』は、『五美图』の続編という形で編まれたものである。

物語は基本的に二部構成になっている。先ず前半部では、『五美图』の最後に状元及第した洪蘭桂に対し、かつて蘭桂の父親洪有雲を謀殺した何坤が、その活躍を阻もうと画策する様子が描かれる。後半部では、乾隆帝による庇護を笠に着た何坤の傍若無人な振る舞いと、何坤の甥の何官保が四川省の桂花城を牛耳り、賭博で金を稼いでいるという情報を耳にした嘉慶帝が、実情を把握するために自ら変装して桂花城を「私訪」する。その後、乾隆帝が崩御すると、嘉慶帝は何坤一族を処分し、屋敷を焼き払い、全財産を没収したという内容となっている。実際の和坤のエピソードが下敷きとなっている。

以下、各テキストに関して簡単に特徴を述べる。²²

²² 【表 20】 11 については、手元にある封面のみの情報である。

説唱形式は、【表 20】8～13 が 7 字句の韻文と「白（セリフ）～」等で始まる散文の挿入句で構成され、【表 20】14 のみ全篇 7 字句で構成される。

【表 20】8、9 は、封面の出版数が異なるだけでその他は全て同じである。【表 20】10 の下巻と合わせて、上下巻 2 冊となっている。上巻の【表 20】8、9 は、11 行×21 字（7 字句 3 句）、全 22 葉。下巻の【表 20】10 は、11 行×22 字（7 字句 3 句）、全 22 葉。上下巻合わせて全 44 葉。

【表 20】12 は、上下巻 1 冊、10 行×21 字（7 字句 3 句）、頁数不詳。

【表 20】13 は、上下巻 2 冊、11 行×21 字（7 字句 3 句）、現存 40 葉。

【表 20】14 は、6 巻 1 冊、9 行×21 字（7 字句 3 句）、全 24 葉。物語の後半部、嘉慶帝が桂花城を「私訪」し、何坤一族を処分するところまでを描く。【表 20】10 の内容に相当する。

【表 20】①、②の石印説唱本は、【表 20】14 を少し簡略化したテキストで、書名は「美図」を採らず「私訪」とする。

2.2.3. 『七美図』 一番外編『五美図』一

『七美図』は、江南の弾詞にも同じタイトルの作品が存在するが、湖南説唱本とは登場人物、内容ともに全くの別物である。

湖南説唱本『七美図』は、『五美図』の冒頭に登場した「東閣大学士の喻文榜」、「協辦大学士の劉統勛」、「九門提督の郭文挙」のうちの、喻文榜と郭文挙を主人公に取り上げた物語である。物語の時代は、『五美図』の乾隆五十六年から溯ること 30 年の乾隆二十六年（1761）に設定され、喻文榜と郭文挙の若かりし頃を描き、恐らく、『五美図』の番外編という位置づけで編まれたものと言えるだろう。物語の簡単なあらすじは、

乾隆二十六年、喻文榜は南京巡撫に任命され、当時二一歳の武科挙状元の郭文挙を同行者として江南の治安維持に出向く。喻文榜は先に占者に変装して民情調査をしながら、赴任の期日までに南京に入ることに決める。途中で災難に遭い郭文挙とはぐれるが、その後、単身で南京に向かう道中で出会った女性から次々と結婚を申し込まれ、彼女らに対し、任に就いた後で迎えに行くと約束する。最終的に無事に郭文挙とも合流し、南京巡撫の任に就き、約束通り七人の女性全員を娶った。（【表 12】15 のテキストに拠る）

湖南説唱本『七美図』の現存するテキストは以下の表の通り。

【表 21】

	巻首題	封面題	刊記	所蔵箇所
15	新刻小清官烏江渡私訪全部	七美圖全部/新抄/喩文榜私訪江南/百廿冊/中湘□□歌書戲文發兌	中湘刻本	復旦、上図×2部、浙江、演博（上巻のみ）、首図×2部
	新刻烏江渡失印七美圖下巻			
16	新刻烏江渡全部	民國乙丑年新刻/七美圖/烏江渡清官滅寇 兪大人私訪南京/八百折/永州西郷渡楓塘文順慶記印兌	永州：民國乙丑年（1925）文順慶記刻本	国図
17	新刻烏江渡全部	民國乙丑年新刻/七美圖/烏江渡清官滅寇 兪大人私訪南京/一百八十折/永州西郷渡楓塘文順慶記印兌	永州：民國乙丑年（1925）文順慶記刻本	上図
18	新刻烏江渡全部	民國丙寅年新刻/烏江渡/小清官私訪南京 七美圖□誥受封/八百折/永州西郷渡楓塘文順慶記印兌	永州：民國丙寅年（1926）文順慶記刻本	上図
19	新刻小清官烏江渡	烏江渡全部/新刻喩撫院私訪/式百五十/洪江□街□□堂歌書發客不言二價	同徳堂刻本（巻首題下刊記）	上図
20	小清官 上巻	民國廿三年甲戌歳新□□/小清官烏江渡□/桂林西華門沈□□	民國廿三年（1934）桂林刻本	中山
21	新刻七美圖全部	烏江渡原本/新刻/小清官私訪烏江渡/一百冊/星沙文□堂精刻歌書戲文發客	星沙：文□堂刻本	湖南
22	新刻全文榜私訪烏江渡全本	余文榜私訪/烏江渡全本/小清官全傳/源盛堂/□千八百	源盛堂刻本	上図
③	新抄小清官私訪烏江渡全本	清官私訪烏江渡	椿蔭書莊石印本	傅斯年

各テキストの特徴は、先ず、【表 21】15～20 は全篇 7 字句の韻文のみで構成され、【表 21】21 と 22 は 7 字句の韻文と「説話～（さて）」などで始まる散文が挿入される形式で構成される。

【表 21】15 は、上下巻、2 冊、10 行×7 字句 3 句、全 34 葉。上記のあらすじは、テキスト 15 に拠る。

【表 21】16～18 は、1 冊、10 行×7 字句 4 句、全 21 葉。民国期に永州の文順慶記から出版されたもの。封面の冊数と刊行年が異なるのみで後は全て同じ。それぞれ末葉に「文順堂刊七美図」と印字される。

これらのテキストは、「聖主三十六年事」という年代設定になっており、どの御代か分からないが、物語の最後に、「又把文挙来封贈、九門提督管万民（また郭文挙に恩典が与えられ、九門提督として万民を管理した）」という一文が付加され（この一文はテキスト 15

には無い)、『五美図』で登場する「九門提督の郭文挙」に繋がる仕組みになっているので、恐らく乾隆年の三十六年(1771)という設定であろう。また、諭文榜を「兪文榜」とする。

ちなみに、永州の文順堂から出版された『五美図』(【表 19】5)も、東閣大学士の諭文榜を「兪文榜」としているなので、民国期の永州の書肆では、『七美図』と『五美図』の関連性をより文中で明確にし、また「諭文榜」を「兪文榜」に統一したようである。

【表 21】19 は、1 冊、12 行×7 字句 4 句、全 22 葉。物語の年代は「聖主三十六年事」という設定。ただし、「聖主三十六年事」を除き、【表 21】15 のテキストとほぼ同じ形式、内容となっている。

【表 21】20 は、上下巻 1 冊、11 行×7 字句 4 句、上巻 12 葉、下巻 13 葉、全 25 葉。湖南説唱本ではなく、桂林刻本だが、19 の同徳堂刻本とほぼ同じ。

【表 21】21 は、1 冊、10 行×30 字(7 字句 4 句)、全 24 葉。7 字句の韻文と散文の挿入句で構成される。なお、物語は康熙三十六年(1697)の設定で、その他は、【表 21】15 とほぼ同じ。

【表 21】22 は、1 冊、12 行×22 字(7 字句 3 句)、全 70 葉。物語の年代設定は康熙年間。諭文榜を「余文榜」とする。【表 21】15~21 のテキストの内容の大筋を襲ってはいるが、「私訪」の要素が強く、異同が多いので独自に編み直された物語か。第 2 章でも検討したが、源盛堂は四川の瀘州の書肆と思しい。

【表 21】③の上海石印説唱本は、文中で使用される文言から判断して、【表 21】15 の中湘刻本を翻刻したものである。

これら湖南説唱本「美図」故事のうち、出版量、テキストの種類、現存数が共に多く、湖南地域で特に流行したと思われる『五美図』、『後五美図』、『七美図』は、それぞれ『五美図』を中心に、続編『後五美図』、番外編『七美図』という具合に、「美図」故事三部作として、書肆が連作として意識的に編んだものであった。

また、次節でも詳しく述べるが、これらの物語は石印説唱本となって出回る際に、『後五美図』は、嘉慶帝による「私訪桂花城」と何坤一族の処罰を描く内容だけを抽出して出版され、『七美図』は、『新抄小清官私訪烏江渡全本』という題名で出版された。いずれも、上海石印説唱本では、「美図」故事というよりは寧ろ「私訪」故事という要素で流布したようである。湖南説唱本【表 19】1~5、【表 20】8~14 【表 21】15~22 のテキストの書誌情報を見ると、書名にしばしば「美図」と「私訪」が並記されることから、「私訪」故事との関連も含めて、「美図」故事がどのように湖南で定着していったのか、続けて考察していきたい。

3. 湖南における「美図」故事説唱の流行のしくみ

3.1. 「美図」故事の湖南化

3.1.1. 『五美図』一物語を支える河川と湖南一

『五美図』は、江南の弾詞に存在の痕跡が無く、湖南説唱本独自の作品と考えられる。また、『五美縁』、『五鳳吟』などとも異なる物語内容である。

『五美图』の特徴は、簡潔に言えば、湖南を舞台に物語が展開することである。様々な事件が起こるのも、主人公の洪蘭桂が五人の女性とそれぞれ出会うのも全て湖南省である。以下に、物語の内容を追いつながら、湖南との密接な関わりを見ていきたい。

乾隆帝の寵臣何坤に妬まれた洪有雲は夫妻共々謀殺され、子の洪蘭桂が一人残されてしまう。身を案じた祖父の洪建章は、洪蘭桂を連れて舟で逃れるうちに湖南省にたどり着く。

先ず、湖南の「新康」で舟を泊め、蘭桂は祖父の使いで酒屋に酒を買いに行くと、店の娘の蘭翠英に見初められ婚姻の契りを交わす。舟に戻った蘭桂は祖父にその事を告げる。

その後、洪建章と蘭桂は南京に向けて出発するが、暴風に遭い「蘆林潭」に流され停泊する。そこに同じく停泊していたのが、広東巡撫に任じられて常州府浙江省から移動中の李卓其の舟。李卓其の娘の叔貞は、船窓から見かけた洪蘭桂に一目惚れし、侍女の楽春を遣って自分の舟に呼びこむ。酒を飲まされた蘭桂が酔い潰れている内に、李卓其の舟は出発してしまう。失踪した孫を探すため、洪建章は「新康」に戻り、許婚と聞いていた蘭翠英の酒屋に留まり、蘭桂を待つことにする。

一方、李叔貞、楽春は、船旅の途中で共に妊娠してしまう。発覚を恐れた洪蘭桂は、李叔貞、楽春と共に逃げ出し、四川省保寧府の蘭桂の叔父を頼る。蘭桂は科挙試験を受けることを決意し、単身京へ上る。その際に通過した「湖南省常德府武陵県の徳山」で強盗に遭い、枯れ井戸に閉じ込められてしまう。偶然そこを通りかかった四川へ赴任で移動中の西安府長安県の陳大人とその家族によって助けられ、陳氏の娘と侍女とも婚姻を結ぶことになる。その後、洪蘭桂は科挙試験を状元及第すると、陳氏の娘と侍女、叔父の元に預けていた李叔貞と楽春を妻に迎え、そして「新康」の酒屋へ蘭翠英を迎えに訪れ、祖父の洪建章とも無事再会を果たすことができ大団円となった。

この物語は全て虚構であるが、その虚構空間の中でも目を引くのが、登場人物が水路で湖南を経由する時に出てくる地名、「新康」、「喬口」、「湘陰」、「蘆林潭」の地理的位置が、かなり正確に描かれていることである。

例えば、洪建章と蘭桂が初めに「新康」に入った時の、「湖南省城長沙府、北門出城小市村、四十五里新康渡（湖南省都の長沙府の、北門から町を出て小さな市や村を、四十五里行くと新康渡）」や、「新康」から「蘆林潭」までの道のり「新康開船往下走、過了喬口与湘陰、湘陰至下三十里、要走蘆林潭過身（新康から船を出して下り、喬口と湘陰を通り過ぎ、湘陰から三十里下り、蘆林潭を通りかかる）」や、洪蘭桂が四川から京へ上る際に湖南を通過した「到了湖南大省城、要走常德武陵県、又走徳山來個身（湖南の大省都に到着すると、常德武陵県へ行き、更に徳山へと歩みを進めた）」や、また三元及第した蘭桂がはるばる酒店の翠英を迎えに「新康」へ行く時の「河南開船到湖北、不覚又到岳州城、洞庭湖中也過了、一連北風到湘陰、蘆林潭前把船靠（河南から船を出して湖北へ到ると、あつという間に岳州城に出て、洞庭湖も渡ったところ、続けざまに北風に遭い湘陰まで流され、蘆林潭の前で船を泊めた）」などが挙げられる。



図 29

図 29 の地図は、上記の地名の実際の位置関係を表したものである。常德は洞庭湖の更に西側にあるため、図には表記していないが、この物語は、長沙から洞庭湖へ湖南省を南北に抜ける湘江が大きな軸となっている。清代の度量衡を目安として、光緒三十四年(1908)の1里が576メートルだとすると²³、「長沙」から「新康」までの四十五里は約26キロメートル、「湘陰」から「蘆林潭」の三十里は約17キロメートルとなる。地図上で水路沿いに距離を測ってみると、物語の距離と実際とが大よそ合致する。

また、物語中で浙江から広東に移動中の李卓其は「蘆林潭」を、四川から京へ上る洪蘭桂や、長安から四川へ移動中の陳大人はそれぞれ「常德」を經由していることも興味深い。浙江から長江沿いに一度「洞庭湖」沿いの「蘆林潭」へ出てから南下して広東に入るルート、四川から「常德」に出て北上するルート、反対に長安府から「洞庭湖」に出て「常德」に南下し更に西へ四川に抜けるルート、河南省から岳州を通過し「洞庭湖」を渡って湖南に入るルートなど、東西南北の移動の重要な経路地として湖南省は存在していた。

『五美图』は、「美图」故事の決まったフォーマットをもとに、湖南の地理や水系など、湖南の土地鑑がある人物によって編まれ、湖南化された物語であったことが分かる。

3.1.2. 『七美图』—物語の展開を支える湖南人—

次に『七美图』に現れる湖南化の現象を見てみたい。

乾隆二十六年(1761)、南京巡撫に任命された諭文榜が、武科挙状元の郭文挙を連れ、赴任地の南京に向かう途中で七人の女性と婚姻を結ぶが、その七人の女性のうち、黄月英という湖南出身の娘に着目すると、他の六人と異なる立ち位置で登場し、湖南の人々からの支持を受ける仕掛けとなっている。物語を追いながら七人の女性の役割を簡単にまとめると以下のようなになる。

諭文榜は十大清官である父の諭成龍から、「叫声我兒莫胡行、南京百姓刁得很(我が息子、無茶はしないように、南京の人民は性質が悪いから)」²⁴と言われ、郭文挙に「文榜這里開言道、郭家兄弟叫幾声、人言百姓刁得緊、你我私訪南京城、今我装扮一算命、你今跟我隨後行(諭文榜が口を開き、郭兄弟、郭兄弟と呼びかけた、南京の人民は非常に性質が悪いと言う、君と私で南京を私訪しよう、私は占い師に扮装するから、君は後から付いて来るように)」と提案し、先ず易者に変装して民情調査をしながら赴任の期日までに南京に入ることに決める。

途中、「烏江」(現南京市浦口区烏江鎮、安徽省との境)の川を渡ろうとすると、盜賊の高風と李雲が船客から渡し賃を強奪している現場に出くわす。郭文挙が腕に物を言わせて

²³ 楊生民「中国里的長度演變考」『中国經濟史研究』第1期(2005)は、『清朝統文献通考』卷191「樂考・度量衡」を引いて「清光緒34年(1908年)重定度量衡時明确规定里制为：“五尺为一步，二步为一丈，十丈为一引，十八引为一里。”在“新制说略”中指出：“长短度分为两种：一曰尺度，以尺为单位，所以度寻之长短也。一曰里制，以一千八百尺为一里，用以计道路之长短也。里制即积尺制而成。盖道里甚长，若仅以尺计，则诸多不便，故必别为里制。”这里把尺制、里制作为基本长度单位列出，在当时是有新意的。据上述清光緒末年所立里制可知：一里为营造尺1800尺。营造尺一尺等于0.132米，所以1800尺，等于576米」と述べる。

²⁴ 本文に引用する『七美图』のテキストは全て【表21】15の中湘刻本に拠る。

二人を懲らしめ、川を渡り終えて休憩していると、喻文榜と郭文挙は急に虎に襲われ（土地神の仕業）、逃げる間に離れ離れになってしまう。

第一夫人：喻文榜の許婚の蘇月英

喻文榜が逃げ込んだ家は、烏江で出会った盗賊高風の住まいで、なんと喻文榜の許嫁の蘇月英が捕われていた。聞けば、父の蘇朝貴の赴任に家族で同行し、船で烏江を通りかかった時に、高風と李雲に襲われ、蘇月英を残して皆殺しにされ、100日の喪が明け次第、高風と結婚させられるという。喻文榜は南京巡撫の任に就いたらすぐに迎えに来ると約束して去る。

第二夫人：李雲の妹の李金蓮

続いて喻文榜が宿を借りる為に立ち寄った家は、盗賊李雲の住まいだった。李雲の妹の李金蓮は、喻文榜に結婚を迫る。喻文榜は盗賊の妹と結婚できるわけがないと断るが、「只要相公不嫌棄、情願做個二夫人（お嫌でなければどうか第二夫人に）」と迫り、結ばれる。途中で李雲が帰って来るが、喻文榜は土地神に助けられて難を逃れる。

第三夫人：旅店の黄月英

喻文榜は何とか南京に到着し、湖南長沙府湘潭県出身の黄氏が営む旅店に身を寄せる。黄月英という娘が居り、喻文榜を見るなり、「店主之女黄月英、月英女子抬頭看、觀看文榜小郎君、生得十分多俊秀、不是平常以下人、若得此人成婚配、不枉人間走一巡（店主の娘の黄月英、月英は頭をもたげて、文榜をしげしげ見ると、その容姿の眉目麗しいこと、ひとかどの人物に違いない、もしこの人と結婚できるなら、この世に生まれた甲斐があるというもの）」と一目惚れする。

その晩、喻文榜は道中での災難を振り返り、「文榜客房来安睡、自思自嘆不安神、心口不嘆別一個、口叫年弟武状元、我今奉皇上旨、南京巡撫管万民…誰知過了烏江渡、遇着猛虎下山林、将我弟兄来失散、不知年弟那方存（文榜は客室で休んでいたが、思い出してはため息をついて落ち着かない、嘆きたいのは他でもない、弟分の武状元郭文挙のこと、わたしは皇帝の命を受け、南京巡撫として人民を治めることになったが、…誰が予想していたら烏江を渡ると、猛虎に出くわして山林を駆け下り、我ら兄弟は離ればなれ、文挙は一体何処に居るのやら）」と心中の心配事を思わず吐露する。

すると、「月英隔房聽分明（月英は別の部屋ではっきり聞いた）」と隣の部屋で盗み聞きしていた王月英は、喻文榜が実は南京巡撫だと知ると、益々思いを募らせる。そして、「三更時分不安睡、自思自嘆為何因（夜中になってもお休みにならず、何をお嘆きになっているのですか）」と話しかけ、大胆にも部屋の扉を開けて中に入る。文榜は驚き慌てるが、月英は構わず「不嫌奴家容貌醜、情願做個三夫人（もし私の容貌が嫌いでなければ、どうぞ第三夫人にしてください）」と結婚を迫り、結ばれる。

ある日、喻文榜は街で破落戸に絡まれ、大切な南京巡撫の官印である「八方印信」を紛失してしまう。喪心落胆して旅店の部屋へ戻り、南京巡撫に任命した乾隆帝に対し、恨み節を口にしながらさめざめ泣いていると、心配した王月英がやはり隣の部屋で聞いており、扉を開けて入ってくる。そして喻文榜から官印紛失の顛末を聞くと、「奴家乃是三夫人、開言就把老爺叫、不必憂悶在中心、明日招牌街上掛、假作相面算命人、倘若有人印撿起、撿起送還老爺身（私はあなたの第三夫人、ほら旦那さま、そんなに憂鬱にならないで、明日

街に看板を掲げて、人相見の占い師に扮しなさい、誰かが印を拾ってくれたら、あなたのところに届けるかもしれないわ)」と慰め励ます。

第四、五、六夫人：張紅英と侍女2人

翌日から、喩文榜は占い師の恰好で看板を掲げて街を練り歩く。幸運にも、官印は張按察の娘である紅英の下女に拾われていた。官印と知り、困った張紅英は、易者に占ってもらおうと、ちょうど黄氏の旅店に居る易者に扮した喩文榜を招いた。喩文榜は晴れて八方印信を取り戻すことができ、涙を流して安堵した。また張紅英にも「只要老爺依從我、情願做個四夫人（もし聞き入れてくださるのであれば、どうか第四夫人にしてください）」と迫られ、侍女二人とも婚姻を結ぶ。

第七夫人：馬快班の胡朋の娘の胡華英

張家の後ろの庭園から出て来た喩文榜は、夜警に出ている江寧知県の劉廷貴に不審がられ、打たれて監獄に入れられる。馬快班（捕り手役人）の胡朋が、獄中より喩文榜の手紙を参将の桂大人に届けて事情を知らせ救出され、無事に南京巡撫として着任すると、郭文挙に命じて第一から六夫人までを迎えに行かせる。その途中に盗賊の高風と李雲も捕える。また、胡朋は郭文挙に会い、娘の華英も喩文榜と結婚できないかと頼む。郭文挙は「年兄若不嫌棄、与你做個七夫人（もし嫌でなければ、第七夫人にしなさい）」と取り成し、喩文榜の第七夫人にさせた。

湖南説唱本『七美图』の物語は、喩文榜が南京で黄家の旅店に滞在する前と後で、前半と後半に分かれ、前半は盗賊高風と李雲や虎に襲われるという災難、後半は「八方印信」の紛失や、監獄に繋がれるという災難、およびその都度出会う女性とのやりとりが描かれる。七人の女性の中でも、湖南省長沙府湘潭県出身の黄月英は、他の女性と異なり、積極的に喩文榜の世話を焼き、慰めたり励ましたり助けたり、物語の後半の展開を支える人物として存在する。

このように、『五美图』と『七美图』は、登場人物を介して本編と番外編のように関連をもちながら、また湖南人には身近に感じるだろう地理的描写や、主人公を助ける人情に篤い湖南女性の登場など、物語内容に対して積極的に湖南化が行われた。これらが、湖南に縁の深い人々による湖南人のための物語として支持を得て、流行を築いたことは想像に難くない。

3.2. 湖南説唱本「私訪」故事出版ブームの影響

3.2.1. 『七美图』 — 「私訪」故事との融合—

物語内容の湖南化のほかに、「美图」故事流行の要因として考えられるのが、湖南で起きた「私訪」故事説唱の流行という特殊な文化現象との密接な関わりである。

前章で述べた通り、「私訪」とは、もともと公案劇や公案小説で包拯など清官が変装して民情調査をする常套である。清末民初の説唱文芸でも、「主人公が皇帝から地方官に任命され、巡閲のための「上皇剣」、「先斬後奏」の特権、「三千人馬」を賜り、変装して民情調査に出かける途中、様々な危機に遭遇しながら事件や問題を解決していく」というフォーマットに基づいて、ストーリー生成が行われた。

特に湖南の説唱文芸では、同時代的に活躍した湖南にまつわる地元の英雄、例えば湘軍の指揮官の一人である彭玉麟が主人公として取り上げられ、また彭玉林が実際に同治末年から長年に亘り、長江沿いの各省の監察をする任務を務めたという経験もあることから、彼が各地を変装して巡査する「私訪」故事は連作となって編まれた。その他にも湖南にまつわる人物の「私訪」故事は数多く生まれ、湖南の湖南人による湖南人のためのものとして、清末から民国期にかけて爆発的に出版され、湖南の周辺地域まで流通し、特別な地位が築かれたという背景がある。

『七美図』も、主人公の喩文榜が易者に扮して民情調査をしながら事件に遭遇し、七人の女性と出会うという、「私訪」モノと「美図」モノが融合した物語構成になっており、また、湖南説唱本「私訪」故事で採用される要素を豊富に含んでいる。例えば物語の冒頭で、喩文榜が「王君賜我上方劍、先斬後奏不順情、又賜王命牌三道、三千人馬緊隨身（皇帝から上方劍を賜り、先斬後奏で情け容赦せず、また王命牌三道を賜り、三千人馬が護衛する）」と、皇帝からお決まりの特権を賜ってから、赴任地の南京まで変装して視察するという設定や、盗賊が船の渡し場で渡し賃を強奪する描写、主人公が却って捕まり牢獄へ入れられるエピソードなどの挿入も、「私訪」モノお決まりのパターンである。

物語内容が「私訪」故事の影響を大きく受けるためか、実際の上演での演目名は、皖南花鼓戲『小清官』²⁵、廬劇『余文榜私訪』（一名烏江渡）など、安徽省一帯では小清官の余文榜による「私訪」が物語の主題として広まっていようである。湖南の漁鼓では『七美図』の演目名でも演じられた。²⁶

また、湖南説唱本「美図」故事は、出版する際に封面に大きく「美図」と印刷されているのが特徴的であるが、『五美図』や『後五美図』と比べて、『七美図』はその特徴がやや揺らいでいる。「私訪」の要素が強いからか、「私訪」と「美図」のどちらを主題として売り出すのか、他地域の書肆によっても取り上げ方が異なっている。

以下に、説唱本『七美図』【表 21】15～22 のテキストの封面と首巻題について、湖南だけでなく他地域の書肆の出版形態も挙げながら、それらの傾向を見てみたい。

²⁵ 『中国劇目辞典』（河北教育出版社、1997）p. 84 に、『安徽伝統劇目滙編・皖南花鼓戲』第一輯に李海如口述本の収録があると記される。

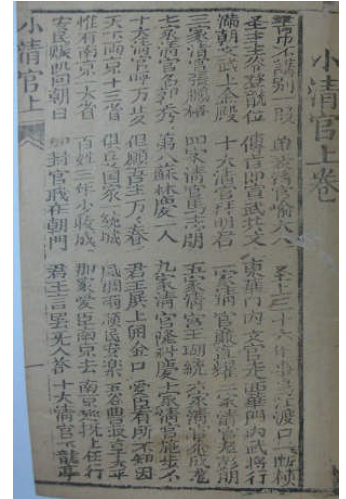
²⁶ 『湖南曲芸志・湖南卷』（新華出版社、1992年）p. 177 「伝統曲目（書目）表」



図【表 21】19 (洪江) 同徳堂刻本



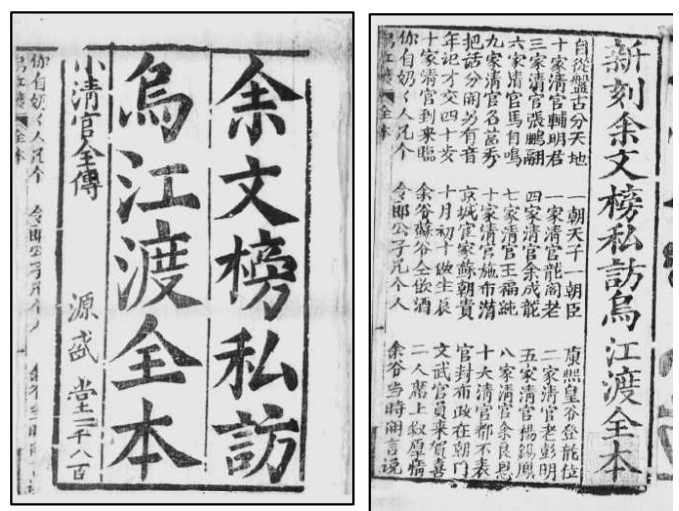
図【表 21】20 民国二十三年 (1934) 桂林刻本



【表 21】19 は湖南省（洪江）、20 は桂林で出版されたテキストだが、使用される文言は両者ともほぼ同じであるため、同一系統の流れを汲むテキストであると考えられる。また、いずれも書名として採用される文言は、「烏江渡」、「小清官」、「私訪」であり、主人公は七人の女性と結ばれるが、「私訪」故事として出版された。



図【表 21】21 星沙刻本



図【表 21】22 (四川瀘州) 源盛堂刻本

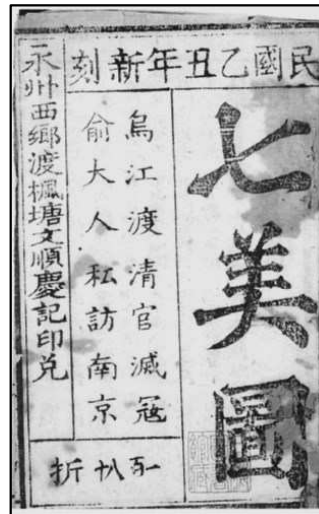
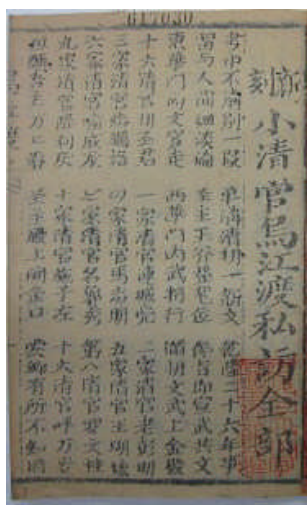
【表 21】22 も「私訪」、「烏江渡」を題名に採り、【表 21】19、20 同様に「美図」という文言は出て来ない。

【表 21】21 の星沙刻本は、封面では、「烏江渡」、「小清官」、「私訪」の要素を前面に出して販売したが、首巻題を見ると「七美図」と印刷され、この物語が「私訪」故事でもあり、「美図」故事でもあると含みを持たせて出版している。

以下の【表 21】15～18 はいずれも湖南説唱本である。先に挙げた湖南説唱本【表 21】19、21 は、「私訪」を前面に押し出していたが、【表 21】15、16、17 の封面は、「美図」で統一された。特に【表 21】15 の中湘刻本は、『五美図』、『後五美図』の中湘刻本と封面の形式を揃えている。【表 21】16、17 のテキストの1年後に同一書肆で出版された【表 21】18 のテキストでは、封面の大文字の部分「鳥江渡」に変更したが、基本的に湖南の書肆は、『七美図』の物語を「美図」故事でもありながら「私訪」故事でもある、というスタンスで出版したと言えるだろう。そしてこの現象は、次の『後五美図』にも通じる所がある。

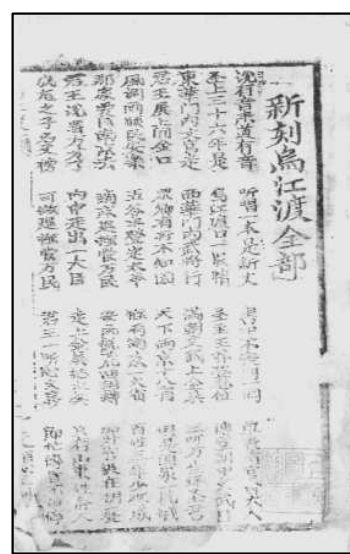
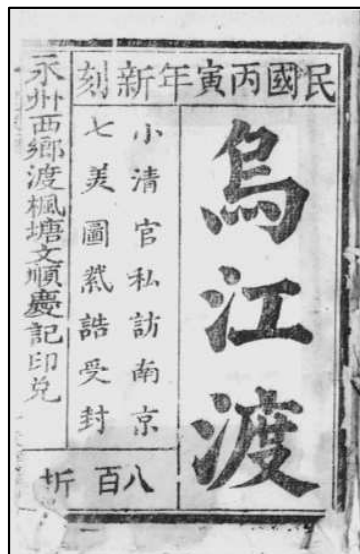


図【表 21】15 中湘刻本



図【表 21】16、17

民国乙 (1925) 年永州:文順慶記刻本



図【表 21】18 民国丙寅 (1926) 年 永州:文順慶記刻本

3.2.2. 『後五美图』 — 「美图」の仮面を被った「私訪」故事—

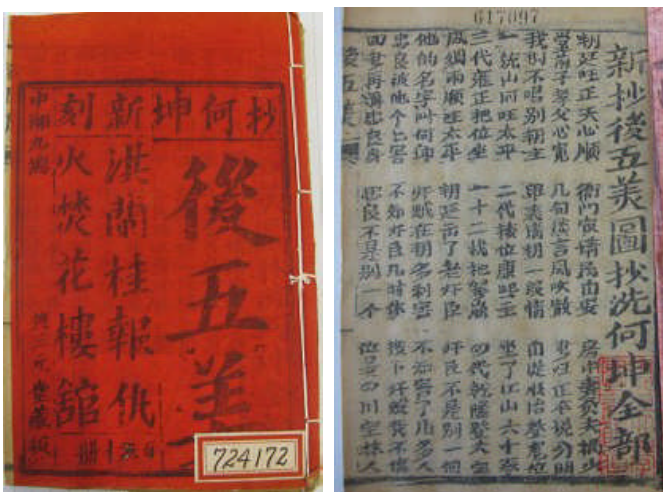
『五美图』の続編である『後五美图』は、基本的に上下巻から成り（【表 20】8~13）、上巻は、何坤（ママ）が洪蘭桂の活躍を阻もうと画策する様子を描く。

洪蘭桂を疎ましく思っていた何坤は、乾隆帝に辺境の総司令官として蘭桂を派遣するよう進言する。賊軍の勢力が強く、派遣された蘭桂たちは包囲されてしまう。応戦を頼むため蘭桂は朱龍を京へ遣るが、何坤が蘭桂は降参したと虚偽の報告をし、新たに朱龍を総司令官に任命し、裏で蘭桂を殺すよう命じる。他の群臣は蘭桂を庇い、嘉慶帝が即位すると、蘭桂を助け出すために明思賢を辺境へ派遣する。明思賢は朱龍を捕えて辺境の兵を統率した。

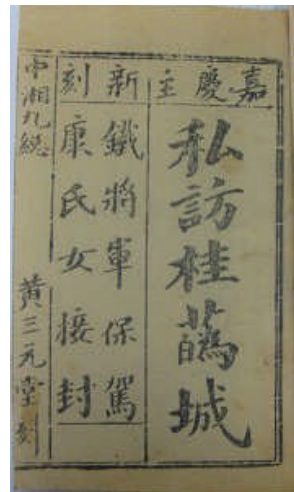
下巻では、何坤の甥の何官保が四川の桂花城を牛耳り、楼館で賭博をしているという上奏を聞いた嘉慶帝による「私訪」が描かれる。嘉慶帝は、「龍心大怒老何坤、要到桂花去私訪…不免王宮来打扮、巧庄（装）打扮出皇城（嘉慶帝は老臣何坤に大いに怒り、桂花に私訪に行かねばと、どうしても王宮で変装し、上手く変装して宮城を出た）」（【表 20】11）と、実情を把握するため変装して桂花城を調査し、何官保の楼館に潜入するも酷い目に遭い、劉天爵と鉄公信に助けられて京に戻る。さて、辺境の戦いで明思賢の旗色が悪いという知らせを聞いた嘉慶帝は、劉天爵と鉄公信を派遣する。劉天爵と鉄公信は洪蘭桂を救い出して凱旋し、洪蘭桂は無事に五夫人と再会する。後に、乾隆帝が崩御すると、洪蘭桂は嘉慶帝に何坤一族の処分を奏上する。終に、桂花城で何官保兄弟を斬り、楼館を焼き払った。

このように、『後五美图』の話題の中心は、乾隆帝の庇護を笠に着た何坤と洪蘭桂の因縁、何坤の甥による傍若無人な振る舞いと嘉慶帝による「私訪」であり、主人公が複数の女性と結ばれる「美图」故事の要素は一切ない。しかし、湖南説唱本で出版される時は、以下のように「後五美图」であることが目印となるように必ず何処かに印字された。

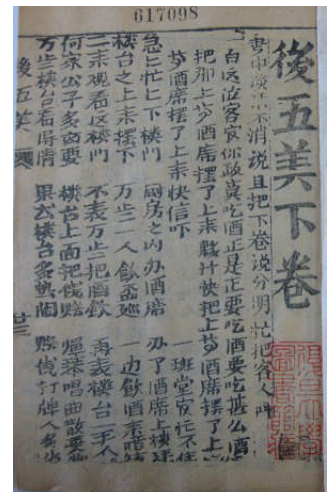
これは、湖南色豊かな人気作品『五美图』の「続編」であることを読者に強く印象づけるための、湖南の書肆による販売戦略だったと考えられる。しかも、続編の内容には、『七美图』と同様に、湖南地域で絶大の人気を博していた「私訪」故事を持ってきたのである。



図【表 20】9 中湘：九總黄三元堂刻本



図【表 20】10 中湘：九總黄三元堂刻本



【表 20】8、9 のテキストは上巻、10 は下巻の上下巻分冊で、【表 20】8 と 10 或いは 9 と 10 で一組のセット商品として販売されたと考えられる。上図のように、【表 20】9 のテキスト（8 は 9 と封面の冊数が異なるがその他は同じ）の封面には、洪蘭桂が仇を報い、何官保の楼館を焼き払ったという、上下巻合わせた全体の副題が記され、10 の下冊では、嘉慶帝による「私訪」を描く下巻のみの内容を表す封面題と副題が印字されている。

また、以下に挙げる永州の黄文順堂慶記から出版された『後五美图』（【表 20】14）は、物語内容が大幅に変化し、【表 20】8～13 の上巻の内容、つまり洪蘭桂が何坤の謀略で辺境の総司令官に充てられ、悲惨な目に遭う話題などが全てカットされ、下巻の嘉慶帝による「私訪」故事を中心とする内容に編み直された作品となっている。



図【表 20】14 永州：黄文順堂慶記刻本

全篇を通して洪蘭桂に関する話題が割愛されているため、五人の夫人も登場しないので、【表 20】14 の『後五美图』は、もはや『五美图』の続編では無いのだが、上図のように、封面には「後五美图」と大きく記され、副題を見ると、「藍桂奏本斬何坤（洪蘭桂は上奏して何坤を斬る）」とある。【表 20】14 のテキストで洪蘭桂は、物語の最後に乾隆期の忠臣「陝西王傑来到此、山東劉庸也來臨、還有四川洪蘭桂、安康朱珠老大人」の一人としてオマケのように登場し、嘉慶帝に対し、「現個老王崩了駕、何坤在守老王靈、不免在此來拏住、如若今朝不拏下、怕的日後有歹心、不如目今先下手、点兵抄洗姓何門（今乾隆帝が崩御され、何坤はご霊体をお守りしている、ここで捕えるほかありません、もし今捕えなければ、後々害を起こす恐れがあります、今すぐにでも手を下し、兵を集めて何家を徹底的に捜査し差し押さえるべきです）」と奏上する役割を担うだけの人物に処理されてしまう。

【表 20】8～13 のテキストは、恐らく書肆が『五美图』の「続編」であることを宣伝するために、封面に「後五美」と記して、読者が「本編」と「続編」両方の作品を購入することを期待し、【表 20】14 は、「後五美图」と封面に記すことで、人気の「美图」故事シリーズであることを意識させながら、『五美图』を読んでいなくても楽しめる作品へと『後五美图』を合理的に改編したと言える。この合理化された『後五美图』は、一千単位で印刷されて広く流布し、更に【表 20】8～13 ではなく 14 のテキストが上海石印説唱本として翻刻されたという事実から考えても、生産性を重視した改編だったと考えられる。

ところが、上海石印説唱本として翻印されるようになると、『後五美図』は『新刻私訪桂城何伸抄家青龍傳全本』、『何伸抄家青龍傳』、『何伸抄家』、『嘉慶私訪桂花城』などの名称で流布し、また『七美図』は『清官私訪烏江渡』、『新抄小清官私訪烏江渡全本』という名称で出版された。なぜ、湖南説唱本で盛んに主張された「美図」である事が払しょくされたのだろうか。

それは、現存する石印説唱本の「美図」故事を見れば一目瞭然であり、上海石印説唱本は、江南弾詞で流行した「美図」故事を、「美図」故事として翻刻したからである。全国的な説唱本出版、流通において、湖南説唱本の湖南色の強い「美図」故事は淘汰され、「私訪」の要素があるものだけが生き残り、更に江南地域の「美図」故事と棲み分けるように、タイトルから「美図」を消して存続する運命を辿ったのであった。

4. 本章のまとめ

本章では、江南の弾詞において陸続と創作、出版された「美図」故事作品群の商品規格が湖南に持ち込まれた時に、湖南の説唱文芸においてどのような現象が引き起こされたのかを検証した。また、湖南における「美図」故事説唱流行の仕組みは、「私訪」故事のそれと非常に類似するところがあるため、相互の影響関係も併せて考察した。

第1節では、先ず、清の嘉慶期あたりから始まる弾詞「美図」故事の出版の背景と、江南弾詞「美図」故事作品群のうち、いくつかは他地域の説唱文芸でも採用され、地域を越えて伝播したという状況を確認した。弾詞「美図」故事は、決まったフォーマットに基づいて創作され、商品として規格化されたことにより、連作や大量生産が可能となり、物語の流行をもたらしたと言える。また、江南地域での流行を、ほぼ同時期に湖南地域でも共有できた背景に、湖南における商業活動としての説唱本出版事業の確立があった。

第2節では、湖南説唱本『三美図』、『四美図』、『五美図』、『後五美図』、『七美図』、『八美図』、『九美図』、『十美図』のうち、テキストの種類、現存数が多く、湖南地域で特に流行を築いたと思しい、『五美図』、『後五美図』、『七美図』を取り上げ、流行の仕組みを検証するため、先ず、書誌情報の整理を通して、各種テキスト、物語内容の特徴を確認した。

それらは、ストーリー構成のフォーマットを共有するだけでなく、本編（『五美図』）、続編（『後五美図』）、番外編（『七美図』）というシリーズ物の関係にあり、封面も統一的な形式が用いられており、湖南の書肆では湖南独自の「美図」故事の商品規格が形成されていたことが明らかとなった。

第3節では、物語のフォーマットや封面の統一といった形式的な枠組みだけでなく、そこで展開される物語内容について分析した。湖南説唱本では「美図」故事の内容を、積極的に湖南化し、湖南の人々の支持を得る仕掛けを物語中に施したこと、また湖南で特異な流行を築いた「私訪」故事の要素を「美図」故事の中に融合させることで、形式面と内容面から独自化を図り、湖南地域での流行を築いたことが分かった。

しかし、湖南説唱本では販売戦略の一環であった「美図」故事のシリーズ化や、流行を築くために必須だった湖南化は、上海石印説唱本の隆盛と、全国的な説唱本の出版・流通の中では、不必要なものとして撤廃され、『後五美図』と『七美図』のように、物語の中に「私訪」故事の要素があるものだけが、「美図」という名前を表から排除することで、江南の「美図」と棲み分けるように生き残っていったことが明らかとなった。

総論

これまで湖南説唱本に関する研究は、姚他（1929）『湖南唱本提要』や、張継光（1998）「一百五十種湖南唱本書録」によって、地域文化を知る上で大変貴重な資料だと紹介され、それ以降は、謝玉芳（2008）が中山大学人類学部収蔵の湖南説唱本 183 種に対して提要と目録を作成したのみであり、文芸研究として取り上げられることは皆無であった。

現在、湖南説唱本は、姚他（1929）、張（1998）、謝（2008）による著録以外に、国内外の所蔵機関にテキストが分散して保管されている。論者による調査から、中国北京市の国家図書館、首都図書館、上海市の上海図書館、復旦大学、杭州市の浙江図書館、湖南省長沙市の湖南図書館、広東省広州市の中山大学非物質中国遺産研究中心、日本の早稲田大学図書館、早稲田大学演劇博物館、大木康氏私蔵など、全部でおよそ 355 種 590 冊にのぼる作品が現存することが確認された（上記以外の所蔵機関は未調査である）。

これらのテキストに対する収集、整理作業を通じて、湖南説唱本は、①大量に集中して残されていること、②ひとつのジャンルだけでなく、弾詞、鼓詞など北方、南方の複数の説唱が入り混じって流通していること、③地域独自の物語および全国的に流布した物語の地域独自の発展や改変が見られること、などという特徴が見出すことができる。また、「口承文芸（上演）と文字テキスト（出版）」、「全国性と地域性」といった、清代以降の説唱文芸の発展に関わる様々な要素が湖南説唱本には内包されていることが分かり、湖南という地域性から説唱本を考察することは、非常に意義があると判断した。

上述のとおり、湖南説唱本に関する先行研究は殆ど皆無であるが、これまで湖南地域の伝統芸能と演劇に関する研究は単独で行われており、他地域の説唱文芸、例えば北方の鼓詞、子弟書、江南の弾詞、広東の木魚書などでも、それぞれ目録整理研究、出版活動に関する研究、個別の物語の伝承に関する研究などが独立して行われて来た。本研究は、それらの独立した研究を「湖南説唱本」という着眼点から新たに展開させたことに独創性と意義がある。

本論では、物語の伝承とテキストの出版・流通を基軸に、①清末民初の説唱文芸活動全体における湖南説唱本の位置、②清末民初、特に太平天国以降の湖南という、極めて限定的な時間と地域で起きた文化現象、③清末民初の出版界の趨勢——木刻説唱本から上海石印説唱本へ——を背景に、湖南の特異な文化現象が地域の枠組みを越えるとどのように変遷するのかを中心に、湖南説唱本の役割を解明した。

研究方法として、現存する湖南説唱本の 355 種ある諸作品のうち、伝統的な戯曲や小説、有名民間故事に取材するもの、或いは説唱文芸で新たに創作された、読み物として流通した約 120 種の作品の中から、「湖南の地域的独自性」と「流行性」を基準に、代表モデルとなるものを抽出し、それぞれその他の説唱だけでなく、小説、戯曲、地方劇、民間故事など、各種媒体における関連故事の収集と、それらについて地域文化と出版文化という観点から分析を行った。先ず、本論の第 1 章では、現存する湖南説唱本の概容をまとめ、湖南説唱本とは如何なるものかを示し、第 2 章から第 5 章において、物語の伝承、流通における湖南説唱本の果たした役割を具体的に明らかにした。各章における考察から得られた研究成果は以下のとおり。

第1章 現存する湖南説唱本の概容

本章では、湖南説唱本とはどのようなものであるか、現存するテキストを調査し、出版年代、印刷形態、テキストの形態、封面の特徴、出版地と書肆の分布、収録される物語内容の傾向をまとめた。

湖南説唱本の出版年代は、刊記から同治あたりから光緒年間、民国 20 年前後の清末民初と推定される。印刷形態は木版印刷が主である。テキストの説唱形態は、弾詞、鼓詞、評話など、複数の説唱ジャンルが入り混じり、また山歌、小調なども存在して複雑であるが、本章では、張（1998）による分類法に則り、各種テキストの実際の書影を付して再現的に整理した。

封面の形式は、各書肆ともにほぼ共通しており、封面には書名だけでなく、副題、出版地、書肆名、印刷数が記される。ほぼ同じ封面の説唱本でも、印刷数だけ異なるものや、出版地、書肆名が削られている或いは変更されているもの等も多数現存するため、当時の湖南では版木を各地の書肆で使い回していたと考えられる。また、現存する湖南説唱本、および姚（1929）、張（1998）等に記される書誌情報に対する調査を通して、岳陽、常德、桃源、益陽、長沙、寧郷、中湘、辰州、宝慶、洪江、武岡、永州の湖南省全域に 85 におよぶ書肆があったことが確認できた。物語の傾向は、恋愛物、家庭問題などの世話物や、事件解決の公案物は特に種類が多く、シリーズ化のような現象も見られ、特に人気があった。

第2章 「秦雪梅」故事の伝播と流通

本章では、全幕通しの湖南説唱本『秦雪梅三元記全部』（「秦雪梅」故事）が、湖南各地の書肆から盛んに出版されて流通しただけでなく、他地域でも広く類似の説唱テキスト（説唱本『秦雪梅三元記』系列）が出版されたことに着目し、清代以降の「秦雪梅」故事の流布において、湖南説唱本が重要な位置を占めると推定した。

そのことを解明するために、「秦雪梅」故事が取材する明の南戲伝奇『商輅三元記』、および各種媒体におけるテキストの収集、整理を通して、物語の形成と展開を詳らかにした結果、明代に南方から発祥した「秦雪梅」故事は、弋陽腔系演劇の上演と散齣集の出版を以て南中国を中心に流布したが、清代以降、民間説唱が隆盛すると、物語の伝承系統は大きな転換期を迎え、弋陽腔系演劇で伝わった古い層の内容を基盤に、新しい内容の「秦雪梅」故事が圧倒的な勢いで全国に広まったことが明らかとなった（説唱文芸や地方劇の中にも弋陽腔系演劇の古い層の内容を継いだものもある）。

また、湖南説唱本『秦雪梅三元記』の中で描かれる「秦雪梅による地獄めぐり」の場面は、説唱で新たに付加されたものであり、そこに出現する「三世姻縁」——商霖と秦雪梅は、実は天界の金童と玉女が下凡したもので、一世が梁山伯と祝英台、二世が郭華と王月英に転生したが、結ばれない男女の姻縁を全うするために、三世は商琳と秦雪梅に転生した——という設定も、湖南説唱本独自のものであった。湖南地域では全幕通しの説唱本の他に、折子戯やダイジェスト版の「秦雪梅」故事も編まれて独自の流行を築いており、新しい層の「秦雪梅」故事の他地域への発信と流通に、湖南説唱本は大きな影響力を持っていたと言えるだろう。

第3章 湖南説唱本と多世姻縁の物語

本章では、前章で取り上げた湖南説唱本『秦雪梅三元記』の中に出現する、「三世姻縁」（「転生姻縁」）の設定をてがかりに、主に有名民間故事の中に特徴的にあらわれる湖南独自の「三世姻縁」の現象が、物語の流布、テキストの流通、光緒年以降に隆盛した上海石印説唱本の出版活動などを背景に、どのような形で全国的なものとなっていくのか、その様相を明らかにした。

「三世姻縁」の要素——物語の冒頭或いは結末で、「（主人公の）何某は、実は天界の金童玉女の生まれ変わり、今世で姻縁を全うできなかった、次の世は何某に転生する」、「第一世は何某と何某、第二世は何某と何某…」と語られ、主人公の男女が現世で結ばれず、他の有名民間故事の主人公に転生する——は、「秦雪梅」故事だけでなく、その他の有名民間故事でも、同様に説唱本として編まれる際に新たに付加されるようになり、例えば、湖南説唱本では、『秦雪梅三元記全部』（「秦雪梅」故事）、『王月英賣胭脂』（「売胭脂」故事）、『新抄繡像祝英台』（「梁祝」故事）の三種の物語の間で、主人公が転生する設定が流布した。一方、上海石印説唱本では、北方の鼓詞で流行した「転生姻縁」の組み合わせを採用し、『新出抄本買胭脂』（「売胭脂」故事）、『最新絵図梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記』等（「梁祝」故事）、『絵圖水漫藍橋相會』（「藍橋会」故事）、『続新藍橋』（「続藍橋会」故事）の物語の間で、主人公の男女が転生する設定が流布した。いずれも、「転生姻縁」の手法を用いて、湖南、北方、上海などの地域で独自の文化現象が築かれていったと言える。

また、これらの民間故事の説唱本は、それぞれ単独で出版されたものだったが、近代になると、「転生姻縁」を媒介として、七種の民間故事をひとつに寄り合わせ、新たに一つの「多世姻縁」の物語として、『七世夫妻』という小説も出版された。この「転生姻縁」の物語の長編化の背景には、例えば、湖南説唱本『秦雪梅三元記全部』、『王月英賣胭脂』、『新抄繡像祝英台』のテキストの末尾に、「続きは〇〇をご覧ください」というシリーズ化を狙った宣伝文句を挿入し、「転生姻縁三部作」として出版したり、上海石印説唱本では転生姻縁の要素がある物語同士を半ば強引に合本販売したりと、清末民初の湖南や上海の書肆による意図的な販売戦略が少なからず影響していたことも明らかにした。

第4章 湖南説唱本「私訪」故事の流行と流通

本章では、清末民初の湖南省ほぼ全域の書肆から陸続と出版され、一大ブームを築いたという「私訪」故事を取り上げる。他地域の民間説唱にはみられない、湖南で単独に流行した特異な文化現象を生み出す要因について、説唱本の出版形態や手法と物語の中身、つまり形式面と内容面の二つの側面から考察した。

「私訪」故事とは、公案劇や公案小説などに必ず盛り込まれるお馴染みの要素——包拯など清廉な官吏が変装微行して事件を解決する——をメインに創作された物語である。

先ず、形式面から言うと、湖南の書肆は、説唱本として「私訪」故事を出版する際、「主人公である各大人が、その功績により皇帝から中国全土を隈なく巡閲するようを命じられ（一十八省把兵巡）、上皇剣（殺生与奪の専権を有す「尚方宝剑」）、先斬後奏（切り捨て御免の特権）および三千の人馬を賜り、各地に民情調査へ向かう」という決まったフォーマットに基づいて創作を行い、また封面を統一し、パターン化された「私訪」故事を大量に出版した。このような商品規格の確立が、「私訪」故事の流行を生み出す一つの要因となったと言える。

内容面について言えば、物語にしばしば湖南人が登場したり、他地域と比較して湖南地域の優位性が語られたりと、現実と虚構を「私訪」を介して融合させながら湖南化を図り、湖南の人々の共感、支持を得るための工夫がなされた。特に、物語の主人公に呉達善、陶澍、彭玉麟という、湖南に縁のある実在の人物を据えたことも大きい。陶澍と彭玉麟は、実際に皇帝の命を受けて各省の巡閲を行い、悪を取り締まった、湖南の出身者であった。中でも彭玉麟は、湘軍水師として太平天国軍と交戦し、洪秀全が占拠した南京の陥落にも功績のある地元の英雄であり、太平天国の乱後、彼が湖南を拠点に長江沿いの各省を巡閲した活動時期が、湖南における説唱文芸活動の隆盛する時期と重なり合ったことも、「私訪」故事の人気、流行を支える要因となったと言える。

一方、上海石印説唱本が隆盛すると、翻印された物語の多くは各地の独自の地域性を排除したものが多かったため、湖南色の強い湖南説唱本「私訪」故事は、演劇としては湖南に限定的に存続し続けたが、読み物としては次第に淘汰されて行った。「私訪」故事の流行という、清末民初の湖南地域で単独に起きた特殊な文化現象の解明を通して、全国的な説唱文芸活動の展開において、太平天国の乱はひとつの契機をもたらし、また湖南という地は、その文化モデルをみるうえでも非常に重要な地域として存在していたことが明らかとなった。

第5章 湖南説唱本「美図」故事の流行と流通

本章では、第4章の「私訪」故事が、パターン化により物語を大量生産し、また内容を湖南化することで湖南地域において特異な流行を築いた、という現象と非常に似通った動きをする湖南説唱本「美図」故事を取り上げた。説唱本の形式面と内容面の二つの側面から、湖南で独自の流行を築いた要因および光緒年以降の上海石印説唱本の隆盛を背景にどのような展開をみせたのかについて考察を試みた。

この物語は、「ある男主人公が、紆余曲折の流浪の中で、縁あって出会った女性たちと次々に婚姻を結び、最終的に出世をして一夫多妻の大団円を迎える」というフォーマットに基づいて創作され、男性が婚姻を結ぶ女性の数が三人なら『三美図』、五人なら『五美図』と「美図」の前の数字を変えて陸続と出版された。テキストの現存数や物語の種類などから鑑みて、湖南では「私訪」故事と人気を二分して流行したと思われる。

ただし、「私訪」故事と異なるのが、「美図」故事の流行は、湖南地域のみで単独に起きた現象ではなく、既に江南の弾詞でも同じ出版手法を用いて流行していたことである。つまり、弾詞「美図」故事の商品規格が湖南に持ち込まれ、その後、新たに湖南独自の流行が築かれたのである。

湖南説唱本『三美図』、『四美図』、『五美図』、『後五美図』、『七美図』、『八美図』、『九美図』、『十美図』のうち、特に流行したと考えられる『五美図』、『後五美図』、『七美図』は、互いに本編（『五美図』）、続編（『後五美図』）、番外編（『七美図』）というシリーズ関係であること、また封面も統一した形式を用いたことなど、湖南の書肆は、江南の弾詞「美図」故事とは異なる、湖南独自の商品規格を新たに作り出した。また、物語内容を積極的に湖南化し、湖南の人々の支持を得る仕掛けを施したり、更には湖南で人気を博した「私訪」故事の要素を「美図」故事の中に融合させたりすることで、内容面と形式面から独自化を図った。

一方で、湖南説唱本では販売戦略の一環であった「美図」故事のシリーズ化や、流行を築くために必須だった湖南化は、上海石印説唱本の隆盛と全国的な流通においては、湖南説唱本「私訪」故事と同様に不必要な要素とされた。ただし、湖南説唱本でも『後五美図』と『七美図』のように、物語中に「私訪」故事の要素がある作品だけは、「美図」という文言を書名から排除し、『新刻私訪桂城何伸抄家青龍傳全本』、『何伸抄家』、『嘉慶私訪桂花城』、『清官私訪烏江渡』、『新抄小清官私訪烏江渡全本』など名称で、上海石印説唱本として生き残っていったことが明らかとなった。

古来、湖南地域が、人口の流動、芸能の流入、経済活動の拠点として存在し、地理的、文化的意義のある位置を占めていたことは勿論、太平天国の乱における江南地域での湘軍の活躍と、彼らが故郷の湖南にもたらした空前絶後の繁栄は、説唱文芸活動の隆盛と展開にとって大きな契機となった。

清末民初の説唱文芸活動において、湖南は単に物流の通過点として存在したのではなく、独自の地域文化を構築する場でもあり、物語の全国的な発信や流布、説唱テキストの他地域への流通を支える一大拠点でもあった。特に江南地域とは説唱本の流通形態において密接な関わりを持ち、江南で流行した物語は流通経路に乗ってしばしば湖南へ運ばれた。しかし、湖南に伝わった江南の物語は現地に留まり根付いたのではなく、出版形態や手法はそのままに、物語の中身は湖南独自の強い地域的意識をもって新たに創作し直された。物語を湖南化することで現地に深く浸透させ、地元のものとして新たな流行を築いていったのである。

また、時代は下り、光緒年以降の上海における石印出版の隆盛に随い、各地の木刻説唱本は上海へ集められて翻印されるようになるという出版界の趨勢の中で、湖南説唱本の物語も幾つか翻印されたが、上海石印説唱本においても同様に、出版手法は湖南説唱本と共有しながら、湖南色の強い内容は淘汰され、中身は上海独自の創作が行われるという文化現象が起きていた。つまり、説唱本の流過程において、その出版形態や手法が文学自体よりも先に伝わり、物語の中身を変容させることで対応していったのである。

このような出版・流通と物語の中身との間に見られる文化現象の入り混じりは、一見すると矛盾したものだが、それぞれ同一の出版文化圏に存在しながら独自に築かれていった地域文化であり、地域の物語であった。湖南説唱本には、四大奇書『三国演義』に取材する『天水関』や『三哭桃園』などの物語も出版され、恐らく一定の人気はあったと推測されるが、現存数や印刷数は決して多く無く、大きな出版ブームにならなかつたと思しい。その要因として、そこに湖南化できる要素が無かつたからであろう。

以上、湖南説唱本の中から「湖南の地域的独自性」と「流行性」を基準に抽出した物語に対する研究を通して、清末民初の説唱文芸活動における地域商業モデルの一端も明らかにすることが出来たと言えるだろう。

付録 湖南説唱本目録（稿）

「湖南説唱本目録（稿）」は、北京市の首都図書館 137 種 245 冊、上海市の上海図書館 112 種（地名の明記が明らかなもの）、復旦大学 138 種（出版地の明記はないが、湖南説唱本とおぼしきもの 54 種を含む）、杭州市の浙江図書館 163 種、湖南省長沙市の湖南図書館 30 種、広東省広州市の中山大学非物質中国遺産研究中心 44 種、早稲田大学図書館風陵文庫 18 種、早稲田大学演劇博物館 28 種、および大木氏蔵本 36 種に対する調査の結果と、姚逸之、鍾貢助（1929）『湖南唱本提要』90 種、張継光（1998）「一百五十種湖南唱本書録」150 種、謝玉芳（2008）「国立中山大学人類学部収蔵湖南唱本的発現与提要」183 種について整理したものである。調査の範囲は不完全であるため（中国国家図書館、湖南図書館が調査未了、目録には調査済みのものだけ収める）、「湖南説唱本目録（稿）」とした。現在確認出来ている湖南説唱本は、およそ 355 種 590 冊（目録確認のみで実際の冊数が不明なもの、重複は除く）。

凡例

1. 「作品名」のピンイン読みをアルファベット順で配列する。
2. 「作品名」は、姚逸之、鍾貢助（1929）『湖南唱本提要』、張継光（1998）「一百五十種湖南唱本書録」に基づいた通称で記載する。
3. 「封面」は、湖南説唱本の封面に記される全情報を記載する。但し、目録確認のみでテキストを目撃してないものについては、封面情報を記さない。
4. 「刊記」は、封面に記される出版地、書肆名、刊行年をとる。但し、首巻題下に書肆名が記される場合、「刊記」に併せて（ ）で記載する。
5. 刊行年も封面に基づき、年号・干支の記載がある場合はそれを取り、西暦年を補う。
6. 「所蔵箇所」については、以下のように略称で記す。
 - 国家図書館 → 国図
 - 首都図書館 → 首図
 - 上海図書館 → 上図
 - 復旦大学古籍所 → 復旦
 - 浙江図書館 → 浙図
 - 中山大学非物質中国遺産研究中心 → 中山
 - 湖南図書館 → 湖南
 - 早稲田大学中央図書館 → 早大
 - 早稲田大学演劇博物館 → 演博
 - 大木康氏 → 大木
 - 姚逸之、鍾貢助（1929）『湖南唱本提要』 → 姚
 - 張継光（1998）「一百五十種湖南唱本書録」 → 張
 - 謝玉芳（2008）「国立中山大学人類学部収蔵湖南唱本的発現与提要」 → 謝但し、各図書館の目録確認のみで、実物を目撃していないテキストについては、「拠目録」と明記する。
7. 磨滅もしくは削られていて判読不能な文字は□□で補う。

湖南說唱本目錄(稿)

a						
作品名		首卷題	封面	刊記	所藏箇所	
1	愛國小曲	一冊	愛國小曲 女學生調同茉莉花		謝	
2	愛郎歌	一冊		愛郎歌	刻本 復旦、浙圖、首圖	
3	愛情山歌	一冊		愛情山歌/最好听/益陽市印刷生產 合作社承印	益陽:印刷生產合作社 浙圖	
		一冊 (十二月採茶 歌と合刊)		愛情山歌四十二首	刻本 復旦、張	
4	庵堂會	一冊	菴堂相會	新出/庵堂會	浙圖	
b						
5	八寶山	二冊	□□ (新刻) 八宝山全集	八寶山/新刻/劉志公大鬧東京/八十五冊/中湘九總黃三元堂歌書戲文發客	中湘:九總黃三元堂刻本 復旦、浙圖、演博、張	
		一冊	新刻八宝山全集	八寶山/新刻/劉志公大鬧東京/五十冊/星沙小西門外慶林堂歌書戲文發客	星沙:慶林堂 姚 (謝)	
6	八美圖	一冊	新刻繡像八美全圖	文順堂/八美圖/上本/新刻/柳樹春訪師聯八美 花少侯擺播過英雄/一百八十折	文順堂刻本 上圖	
7	八仙慶壽				長沙:羅富文 姚	
8	八仙圖	一冊	新抄雙配二銀 左三元刊	雙銀配/新抄真本/八仙圖/韓文玉欽點狀元及第 趙銀堂勅封旌表節義/式百冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭左三元堂戲文發客	長沙:左三元堂 姚 (謝·存二卷)	
9	八義圖	一冊	八義圖程嬰救主	八義圖/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本 謝	
10	白鶴記		新刻白鶴記 一卷		常德:明經堂刻本 湖南 (拋目錄)	
11	百花圖	一冊	新刻百花圖全部	百花圖全本/新刻四季花名十本/中湘九摠同華堂發客	中湘:同華堂 謝 (存7頁)	
12	白牡丹兌藥	一冊	牡丹對藥	白牡丹兌藥/新刻/呂洞賓試道/五本/星沙 路邊井廣文堂記□ (林) 歌書戲文發客	星沙:廣文堂刻本 上圖、復旦、首圖×2部、浙圖、張	
		一冊	牡丹對藥	白牡丹對藥/新刻/呂洞賓世道/三十冊/星沙□□堂發兌	星沙 謝 (存8頁)	
13	白牡丹小曲	一冊	白牡丹小曲	新刻/白牡丹小曲/清音雅調/□本/長沙□□戲文發客	長沙刻本 上圖、復旦、首圖	
		一冊	白牡丹小曲	新刻清音雅調/三本	中湘:九總三元堂刻本 張	
14	百配歌	一冊		百配歌/新抄開喪堂/四十冊/長沙小西門外湘鄉碼頭上首左三元堂發客	長沙:左三元堂 謝 (存13頁)	
15	百日緣	一冊	百日緣 (楚劇) (唱仙腔)	百日緣/花鼓戲		浙圖、首圖、早大
16	白扇記				長沙:煥文堂 姚	
17	白蛇伝	一冊	新刻雷峰塔全集 卷上	白蛇伝/全集/新刻/擺雄黃陣式 南極翁打救/一百冊/星沙小西門外左三元堂發客	星沙:左三元堂刻本 中山、姚 (謝)	
18	百歲坊	一冊	新刻百歲坊	新刻/一九五另年出版/百歲坊		浙圖
19	白兔記 回書		白兔記 回書	回書信/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本 謝	
20	百樣魚名	一冊	百樣魚名	新出/百樣魚名		浙圖
21	百魚圖	一冊	百魚圖	百魚圖全部/新刻/知魚性/四本		浙圖
		一冊	百魚圖	百魚圖全部/新刻/知魚性/五本		謝
22	綁子上殿	一冊	綁子上殿 蕭福祥刊	綁子上殿/新刻真班本/姚期辭朝/六本/中湘十摠正街同華堂揀選戲文發客	中湘:同華堂 謝	
23	北伐中原	一冊	北伐中原	北伐中原/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本 謝	

24	比古人	一冊	比古人	比古人/新抄/花鼓調/□□本/星沙□□□□堂歌書戲文發客	星沙刻本	復旦、浙圖、首圖、張
25	碧玉簪	上下卷 二冊	新刻碧玉簪上本 黃三元堂	碧玉簪/全部/新抄/真本/李尚書席前招女婿 孫媒婆設計害佳人/一百三十冊/中湘九摠黃三元堂發兌	中湘:九摠黃三元堂刻本	浙圖、張、謝 (書誌情報不詳)
			新刻碧玉簪下卷			
					長沙:周慶林	姚

C

26	蔡崑山犁田	一冊	正德遊龍全部	蔡崑山犁田/新刻/正德遇飯/十二本/中湘三元堂發客	中湘:三元堂刻本	復旦、首圖、張
		一冊	正德遊龍全部	蔡崑山犁田/新刻/正德遇飯/八本/星沙城外左三元堂發客	星沙:左三元堂	謝
27	彩樓結掌		彩樓結掌全園 一卷		星沙:信友堂刻本	上圖 (拋目錄)
28	蔡鳴鳳辭店	一冊	辭店送行全本花鼓戲 有幾劇團開場打引 有幾劇團不打引	蔡鳴鳳辭店/花鼓戲	刻本	浙圖
		一冊	蔡明鳳辭店 真班本	新皮/蔡明鳳辭店/真班詞/胡二姐送行/七本/中湘九摠黃三元堂名班戲文	中湘:黃三元堂刻本	復旦×2部、首圖×3部、張
				共和新本/蔡鳴鳳辭店/天德堂	天德堂刻本	謝 (存1冊18頁)
29	曹安行孝	一冊	曹安殺子	曹安行孝/新刻/殺子救母/□□冊	刻本	復旦、浙圖、大木、首圖×2部、早大、張
		一冊	曹安殺子 左三元堂刊	曹安行孝/新刻/殺子救母/廿五冊/星沙小西門外大河街左三元堂發客	星沙:左三元堂	姚 (謝)
30	曹操斬呂布	一冊	新刻北門樓全集 文元堂	北門樓全園/新刻曹操斬呂布六本/星沙永興街文元堂抄選名班戲文發客	星沙:文元堂	謝 (存9頁)
31	曹府賜馬	一冊	曹府賜馬	曹府賜馬全園/新刻關公挑袍/六本/星沙小西門外上河街左三元堂發客	星沙:左三元堂	謝
32	纏姐山歌	一冊	纏姐歌	纏姐山歌/新抄/情奇思情/三本	刻本	浙圖、首圖×2部、張
33	長坂坡	一冊	長坂坡	新抄長坂坡/趙雲救幼主/六本/中湘王廣元堂發客	中湘:王廣元堂刻本	謝
34	唱山歌	一冊		唱山歌/隨時演唱快樂散心/打花鼓	刻本	浙圖、大木、首圖、張
35	陳白筆	一冊	新刻陳白筆	新刻文武記陳白筆/廿十本/閑德軒梓	閑德軒刻本	謝
36	陳姑趕潘	一冊	禪堂偷詩 (花鼓戲)	陳姑趕潘/花鼓戲/益陽市郵局對面華文錦代印	益陽:華文錦刻本	上圖、早大、張
		一冊	趕船	陳姑趕潘/新刻秋江相會/三本/星沙□□堂歌書戲文發客	星沙	謝
37	陳濟趕車			陳濟趕車/新皮/真班本/建文帝被擒/三本/星沙廣文堂戲文發客	星沙:廣文堂	姚 (謝)
38	沈香木	一冊	沈香木	沈香木	刻本	浙圖
39	程咬金上壽	一冊	做百歲 左三元堂刊	作百歲/程咬金上壽/全園/新刻御賜九錫宮/八本/星沙小西門外上河街左三元堂戲文發客	星沙:左三元堂	謝
40	池塘洗澡	一冊	池塘洗澡全部	池塘洗澡全部/新刻/范郎托兆/□本/寧鄉 黎綿芳堂藏板	寧鄉:黎綿芳堂刻本	上圖×2部、復旦、浙圖、首圖、大木、張
					長沙:左三元	姚
41	窓攻書	一冊	新刻林彝南窗攻書全傳 陳道明編	林月麟南/共十二本 板藏萬興堂/窗攻書史	萬興堂	謝
42	春光明月	一冊		小調/□□再版/春光明月/永嘉 木杓巷門牌八號印		浙圖

d

43	打蘆花	一冊	打蘆花真本	打蘆花全圖/新刻/閱世翁休妻/五十五冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭/左三元堂戲文發客	長沙:左三元堂刻本	首圖
		一冊	打蘆花真本	打蘆花全圖/新刻/閱世翁休妻/卅五冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭左三元堂戲文發客	長沙:左三元堂	姚(謝)
44	打牙牌	一冊	打牙牌	小調/打牙牌		浙圖
45	當兵歌	一冊	新抄當兵歌	當兵歌/全部/新刻/李滿姐十勸望郎張三良下書團圓/中湘□□客	中湘刻本	復旦、浙圖、首圖×2部、張、姚(謝)
46	得保放牛	二卷 二冊	新刻得保放牛 □□刊	得保放牛/新刻/劉公設計弄假成真/百廿冊/長沙小西門外上首□□□□歌文發客	長沙刻本	浙圖、張
			得保放牛清官斷婚姻下卷		刻本	浙圖、張
47	得道記	二冊	張三殺豬得道成仙 全本	民國癸丑年陽月敬刊/得道記/中湘□□書局藏板	中湘刻本	復旦、浙圖、首圖、張
48	滴血珠	四卷 四冊	新刻滴血珠全部 卷一	滴血珠/上卷/新刻/趙秉蘭醫產害命田氏女告狀伸冤/百八十冊/中湘九總黃三元堂發客	中湘:九總黃三元堂刻本	復旦、浙圖、首圖、湖南、張、姚·謝(上下卷二冊)
			新刻滴血珠初下河南 卷二		刻本	
			新刻滴血珠設謀畢嫁卷三	包公案/下卷/新刻/報父仇五下河南瓊瑤女節孝受封/中湘九總黃三元堂發兌	刻本	
			新刻滴血珠龍公結案卷四		刻本	
49	定軍山	一冊	定軍山	奪取定軍山八本/新刻黃忠挂帥/星沙路邊井□文堂抄本	星沙	謝
50	丟情記	二冊	丟情記	丟情記/新抄/情姐丟郎/五十冊	刻本	浙圖、首圖、張
51	洞房黃客	一冊	新進洞房	特別新聞/一九五另年出版/洞房黃客	刻本	浙圖
52	董永行孝	上下卷 二冊	新刻董永行孝上卷 左三元堂刊	董永行孝全部/新編/槐陰堂/張七姐下凡雀橋會/□□冊/中湘 楊文星堂刊刻	中湘:楊文星堂刻本 (左三元堂)	浙圖、湖南、復旦、首圖×3部
			新刻董永行孝卷一 左三元堂刊			
		上下卷 二冊	新刻董永行孝上卷 □□堂刊	董永行孝全部/新編/槐陰堂/張七姐下凡雀橋會/□□冊/中湘 九總黃三元堂刊	中湘:九總黃三元堂刻本	湖南、演博、張
			新刻董永行孝卷一 黃三元堂刊			
		上下卷 一冊	新刻董永行孝上卷 左三元堂刊	董永行孝/新編/槐陰堂/張七姐下凡雀橋會/四十冊/星沙□□揀抄真本戲文發客	星沙	姚(謝)

e

53	二度梅	十二回 十二冊	新刻二度梅忠孝節烈全本	二度梅/全傳/新刻/忠孝節義/七伯冊/中湘九總黃三元堂藏板	中湘:九總黃三元堂刻本	復旦、上圖×2部、浙圖、湖南、首圖×2部、張
			新刻二度梅忠孝節烈 第二回 謫相遭殺			
			新刻二度梅忠孝節烈 第三回			
			新刻二度梅忠孝節烈 第四回			
			新刻二度梅忠孝節義第五回			
			新刻二度梅忠孝節義第六回			
			新刻二度梅忠孝節義第七回			
			新刻二度梅忠孝節義第八回			

		新刻二度梅忠孝節義第九回		中湘:九總黃三元堂刻本	復旦、上岡×2部、浙閩、湖南、首岡×2部、張	
		新刻二度梅忠孝節義第十回				
		新刻二度梅忠孝節義第十一回				
		新刻二度梅忠孝節義第十二回				
	一冊	二度梅 指釵為聘			謝	
54	二進宮	一冊 二進寒宮	二進宮/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝	
55	二取高閣		二取高閣	辰州:文陞堂刻本	上岡(拋目錄)	
56	二十四孝	一冊	二十四孝	二十四孝/新抄/百善孝為先/口本/中湘口摠文星堂歌書發客	中湘:文星堂刻本	浙閩、首岡×2部、張
		一冊	二十四孝	二十四孝/新抄/百善孝為先/五本/中湘十摠同華堂歌書發客	中湘:同華堂	謝
		一冊	二十四孝 一卷		三元堂刻本	復旦(拋目錄)

f

57	法場對子	一冊	法場對子 真班調 三元堂刊	法場對子/全部/新抄/徐相爺救薛蛟/五本/星沙 三元堂揀抄名班戲文發客	星沙:三元堂刻本	上岡、復旦、浙閩、首岡、張
		一冊		法場子/新抄/徐相爺救薛蛟/四本/星沙左三元堂揀抄名班戲文發客	星沙:左三元堂	謝
58	反五更		反五更/新抄清音雅調/口口堂歌書戲文發客		刻本	謝
59	風箏記				中湘:十八摠	姚

g

60	高機分別	一冊	新出高機分別全本	新出/三元堂/高機分別	三元堂刻本	浙閩、張
61	高旺進表	一冊	高旺進表	高旺進表全圖/新刻揚八姐領兵莫虎關夫妻相會/八本/星沙口口堂抄選名班戲文發客	星沙	姚(謝)
62	隔窗會	一冊		特別詞調/隔窗會/永嘉 木杓巷門牌八號印		浙閩
63	歌錢臨風		歌錢臨風 一卷		永州:文順堂刻本	上岡(拋目錄)
64	鼓棚孝歌	一冊	開喪孝歌	鼓棚孝歌/全部/新抄/開喪歌 起唱歌 起倉歌 對罵歌 分別歌 運糧歌 謝酒歌 辭別歌 上糧歌 收句歌 掃堂歌 對糧歌/七十冊/中湘九總黃三元堂發兌	中湘:九總黃三元堂刻本	復旦、浙閩、首岡×2部、演博、張
		一冊	開喪孝歌	鼓棚孝歌/全部/新抄/開喪歌 起唱歌 起倉歌 對罵歌 分別歌 運糧歌 謝酒歌 辭別歌 上糧歌 收句歌 掃堂歌 對糧歌/六十冊/長沙小西門外湘鄉碼頭左三元堂發客	長沙:左三元堂	謝
65	瓜子紅	一冊	瓜子紅	新刻衡州花鼓調/三本/星沙口口堂抄本不悞	星沙	謝
66	怪姐奇歌	一冊		怪姐奇歌/新錄/十怪情姐/三本		復旦、浙閩、首岡×2部、張
67	閔公盤貂	一冊	閔公盤貂 真班詞	閔公盤貂/全部/新抄真班詞曹孟德獻計求賢/三本/中湘同華堂戲文發客	中湘:同華堂	謝
68	關王廟會	一冊	關王廟(閔王廟)	關王廟會/新刻/玉堂春贈銀/三十冊/星沙誠興書店發客	星沙:誠興書店刻本	大木、張
69	光緒自嘆	一冊	光緒皇帝自嘆	光緒自嘆/長安城逃難 二本/審鄉縣	寧鄉:刻本	浙閩、首岡、張
70	光緒主遊長安	二冊	擋金主遊長安城 卷上本	光緒主/遊長安/新刻/泥水關/傳樁賢保主 紅花院選死/七十冊/中湘九摠 三元堂	中湘:九總三元堂刻本	浙閩、湖南、大木、演博、張

71	姑嫂忙	一冊	姑嫂忙	姑嫂忙/花鼓戲 益陽市華文錦印	益陽:華文錦刻本	浙閩
		一冊	姑嫂忙(花鼓戲)	姑嫂忙/花鼓戲 益陽市藥王宮下首志安印刷店代印	益陽:志安印刷店刻本	首閩×2部
		一冊	姑嫂忙(花鼓戲)	姑嫂忙/花鼓戲		首閩、早大、張
72	郭子儀上壽	一冊	郭子儀上壽	郭子儀上壽/新抄/真班本/醉打金枝五本/中湘三元堂揀抄名班戲文發客	中湘:三元堂刻本	上閩、復旦、浙閩、首閩×2部、張
h						
73	韓仙問道	二冊	□湘子問道寶卷	民國癸丑年陽月敬刊/韓仙問道/中湘□□書局藏板	中湘刻本	浙閩、首閩、張
74	何氏磨媳	一冊	何氏磨媳 一卷		寶慶刻本	
75	何文秀算命	一冊	新刻何文秀算命全部 信友堂	何文秀算命/新刻/何副史報冤記/七十冊/星沙明經堂歌書發兌	星沙:明經堂刻本	中山×2部、姚(謝)
76	洪碧玉	一冊	新刻碧玉和詩招親	新刻洪生和詩招親/共□十/碧玉全傳/得意樓梓行	得意樓刻本	謝
77	後八仙圖	三卷 三冊	新抄後八仙圖一卷 □□堂刊	後八仙圖/新本/真本/趙銀棠枯井產子 張太師謀害佳人/百廿冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭 □□戲文發客	長沙刻本	復旦、浙閩、首閩×2部、演博、張
			新編後八仙 韓文玉與兵勦賊 二卷			
			新編後八仙 趙銀棠落井生子 三卷			
		一冊	新刻後八仙圖		民國十三年(1924) 洪江豐泰新刻本	上閩(拋目錄)
78	後五美圖	上下集 二冊	新抄後五美圖抄洗何坤全部	抄何坤 後五美 上集/洪蘭桂報仇火焚花樓館 嘉慶主 私訪桂花城 下集/鐵將軍保駕 康氏女受封	刻本	浙閩
						浙閩
		上卷 一冊	新抄後五美圖抄洗何坤全部	抄何坤/後五美/新刻/洪蘭桂報仇火焚花樓館/百五十冊/中湘九總黃三元堂藏板	中湘:九總黃三元堂刻本	湖南、復旦、首閩×、張
			新抄後五美圖抄洗何坤全部	抄何坤/後五美/新刻/洪蘭桂報仇火焚花樓館/九十冊/中湘九總黃三元堂		閩閩
		下卷 一冊	後五美下卷	嘉慶主/私訪桂蕊城/新刻/鐵將軍保駕 康氏女接封/中湘九總黃三元堂刻		湖南、復旦、上閩、首閩、張
		一冊	新抄後五美圖抄洗何坤全部	抄何坤/後五美/新刻/洪蘭桂報仇火焚花樓館/百廿冊/星沙小西門三元堂發客	星沙:三元堂刻本	中山
		一冊	新抄後五美圖抄洗何坤全部	抄何坤/後五美/新刻/洪蘭桂報仇火焚花樓館/百八十冊/民國九年庚申 益陽頭堡文元堂重刊	益陽:民國九年庚申(1920) 文元堂重刊本	湖南
		一冊	新抄後五美圖抄洗何坤全部	抄何坤/後五美/新刻/洪蘭桂報仇火焚花樓館/壹百四十冊/中湘同華歌書發客	中湘:同華堂刻本	中山(謝)
		一冊	新刻私訪桂花城	後五美圖/新刻/幼主私訪桂花城 藍桂奏本斬何坤/一千折/永州西鄉楓塘黃文順堂慶記印行	永州:黃文順堂慶記刻本	上閩
79	蝴蝶夢	一冊	蝴蝶夢□墳吵嫁	扇墳吵嫁/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本□□	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
80	華容擋曹	一冊	華容擋曹	華容擋曹/義釋孟德 二□/光緒辛卯梓行/寧鄉 黎綿芳堂藏板發客	光緒辛卯(1891) 寧鄉:黎綿芳堂刻本	復旦、浙閩、首閩、大木、張
81	槐蔭會	一冊	槐蔭會(花鼓戲)(西湖調)(魚古調)	槐蔭會/花鼓戲 益陽市郵局對面華文錦印	益陽:華文錦刻本	浙閩、首閩、早大、張
					長沙:左三元	姚
82	黃河擺渡	一冊	黃河擺渡	新刻黃河擺渡/李存孝巡查河北 王彥章霸占黃河/一百折/文星堂	文星堂	謝

83	黄金印	卷一 卷二 合冊	新刻黄金印全集卷之一	黄金印全部/新刻/蘇秦求官勸和六國 封為六國都丞相府/口十冊/中湘九總黃三元堂藏板	中湘:九總黃三元堂刻本	浙閩、首閩、湖南
			新刻黄金印全集卷之一	黄金印全部/新刻/蘇秦求官勸和六國 封為六國都丞相府/八十冊/中湘九總黃三元堂藏板	中湘:九總黃三元堂刻本	大木
			新刻黄金印全集卷之一	黄金印全部/新刻/蘇秦求官勸和六國 封為六國都丞相府/六十冊/中湘九總黃三元堂藏板	中湘:九總黃三元堂刻本	張
		卷三 一冊	黄金印 卷之三			浙閩、湖南、首閩、大木
		一冊	黄金印全集		蕭同華堂刻本	湖南(拋目錄)
		一冊	新刻黄金印全集			謝(存卷一~4頁)
					長沙:周慶林堂	姚
84	回番斬婿	一冊	回番斬婿	回番斬婿全圍/新刻楊四郎被擒/五本/星沙南門外鎮有堂抄選名班戲文發客	星沙:鎮有堂	謝
85	回国	一冊	回國 左三元堂	四郎回国全圍/新刻盜令出關探母七本/星沙	星沙刻本	謝
86	迴龍閣	一冊	鴻雁傳書 盜令闖關	迴龍閣/一折/名班戲文/文星堂印行批發	文星堂	謝
87	活人變牛		新刻活人變牛 一卷		永州:文順書局刻本	上閩(拋目錄)
88	活捉三郎	一冊		名班戲文/活捉三郎	刻本	謝(存5頁)

j

89	江嫂謀夫	一冊	新刻江嫂謀夫 陳道明編選	庚午年新刻/江嫂謀夫/共拾四本		謝
90	江西買雜貨	一冊	江西買雜貨 上本	江西賣雜貨/新刻/戴光彩/五本/中湘九總三元堂發客	中湘:九總三元堂刻本	復旦、首閩、張
91	姐兒得病	一冊	姐兒得病新出	新刻/三元堂/姐兒得病	三元堂刻本	浙閩、張
92	借箭打蓋	一冊	借箭打蓋	借箭打蓋/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
93	界牌關	一冊	界牌關	界牌關/全圍/新刻許昌假降/卅冊/星沙路邊井廣文堂冰記歌書戲文發客不悞	星沙:廣文堂	謝
94	金釵記				長沙	姚
95	晉鳳蘭全部	六冊	新刻晉鳳蘭替父報仇雪冤卷一 黃信友堂	晉鳳蘭全部/新刻丁丞相謀害晉公/參佰冊/星沙口口書局發客	長沙 (黃信友堂)	姚(謝)
96	進宮取笑	一冊	進宮取笑	進宮取笑/口口冊/楊波受封/甯鄉黎綿芳堂刻	甯鄉:黎綿芳堂刻本	大木、張
97	金蓮調叔	一冊	金蓮調叔 一回	花調/金蓮調叔/星沙路邊井口(広)文堂戲文發客不悞	星沙:廣文堂刻本	首閩
98	錦秀床	一冊		錦秀床四本/真正抄本玉娥蘭/星沙小西門外左三元	星沙:左三元	謝
99	精忠伝	一冊	精忠伝 胡迪罵閻	胡迪罵閻	刻本	謝
100	九龍山	一冊		九龍山/全部/新抄真班本收楊在興/六本/星沙左三元堂揀抄名班戲文發客	星沙:左三元堂	謝
101	九美圖 上下部四冊	上部 二冊	新刻龍袍記九美圖上部 黃三元	龍袍記/九美圖/前本/李香保賣花股小姐贈袍/二百冊/中湘九總三元堂歌書發兌	中湘:九總三元堂刻本	上閩×3部、湖南、浙閩、首閩、演博(殘欠)、張
		上部 二冊	新刻龍袍記九美圖上部 黃三元	龍袍記/九美圖/前本/李香保賣花股小姐贈袍/百五十冊/中湘九總三元堂歌書發兌		國閩
		下部 二冊	新刻李香保九占花魁龍袍記下部	九占花魁/後本/金星下凡打救香保中狀元招附馬團圓/口十冊/中湘九總三元堂發兌	中湘:九總三元堂刻本	上閩×3部、湖南、浙閩、首閩、國閩、中山(謝·殘欠)
						長沙:左三元

102	酒色財氣	一冊	新刻酒色財氣	酒色財氣/全集/新刻/四字可少莫多/□本/中湘 □□堂刊	中湘刻本	復旦、浙閩、首函×2部
		一冊	新刻酒色財氣	酒色財氣/全集/新刻/四字可少莫多/□本/中湘 三元堂刊	三元堂刻本	張

k

103	看經王氏女	一冊	新刻看經王氏女		洪江刻本	上函（拋目錄）
		一冊	新刻看經王氏女全本	王氏女全集/新刻白鶴記/三十冊/中湘十六摠信友同發客	中湘：十六摠信友同刻本	謝
104	康茂才擋亮	一冊	新刻康茂才擋亮	康茂才擋亮/新刻土台釋放/三本/長沙小西門三元堂抄揀選名班戲文發客	長沙：三元堂	謝
105	拷打春桃				長沙：左三元	姚
106	哭靈牌	一冊	哭靈牌 滿江紅時調	新出時調/哭靈牌/三元堂	三元堂刻本	浙閩、張
107	哭五更	一冊	哭五更	哭五更/新抄/清音小曲/三本/□□歌書戲文發客	刻本	首函
108	快樂歌	一冊	新編快樂歌	快樂歌/新刻/真好聽/三十冊/□□堂發客		復旦×2部、浙閩、首函×2部
109	葵花記		葵花記		長沙刻本	湖南（拋目錄）
		一冊	葵花記全傳上武部	葵花記全集/新刻/孟日紅行孝/三十冊/星沙小西門外三元堂發客	星沙：三元堂	中山×2部、姚（謝）

l

110	藍絲帶	一冊	新刻藍絲帶全部 左三元堂刊	藍絲帶全部/新刻/遊南京茅蓬躲雨/程月英結拜干親/八十冊/星沙路邊黃文森發客	星沙：黃文森	中山、姚（謝）
111	黎都督勸郡民歌		黎都督勸郡民歌	湖北起義二折/建國興漢剪髮/文星堂	文星堂刻本	謝（存1頁）
112	李廣催貢	一冊	李廣催貢 真班詞	李廣催貢/全部/新抄/番王進寶/四本/中湘九摠三元堂抄揀名班戲文發客	中湘：九摠三元堂刻本	復旦、首函、張
			李廣催貢 榮華堂刊	李廣催貢/全部/新抄/真班本/番王進寶/四本/中湘十摠榮華堂戲文發客	中湘：十摠榮華堂	謝
113	黎花斬子	一冊	黎花斬子 二卷		洪江：同德堂刻本	上函（拋目錄）
		一冊	黎花斬子	黎花斬子/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭：蕭同華堂刻本	謝
114	李四覆情	一冊	李四覆情	李四覆情/新抄/真本/花古調/□本/中湘九摠 □□戲文發客	中湘：九摠刻本	復旦、浙閩、首函
		一冊	李四覆情	李四覆情/新刻花鼓調/六本/衡州正有堂名班戲文發客	衡州：正有堂	謝
115	良言記	一冊	新抄良言記上本 卷首題下：三元堂刊	良言記/全本/新抄/勸世文/四十五冊/中湘九摠 三元堂發客	中湘：九摠三元堂刻本	浙閩、首函、演博、湖南、張
116	烈女記	一冊	烈女記卷上	烈女記全集/新刻/二姐盡節為神/三十冊/中湘十六摠信友堂發客	中湘：十六摠信友堂	中山、姚（謝）
117	臨潼山	一冊	臨潼山	臨潼山救主全圍/新刻李淵勸兵/五本/星沙小西門外大河街左三元堂發客	星沙：左三元堂	謝
		一冊	臨潼山	臨潼山/百廿折/□□文星堂印行批發	文星堂	謝
118	劉海砍樵	一冊	劉海砍樵	劉海砍樵/花鼓戲	刻本	首函
119	劉海戲蟾	一冊	劉海戲蟾	劉海戲蟾/全部/新抄/石羅漢花月姑二仙失道/七本/中湘九摠 黃三元堂刊	中湘：九摠黃三元堂刻本	復旦、浙閩、首函×2部、張
		一冊	劉海戲蟾 羅富文刊	劉海戲蟾/全部/新抄/劉海戲蟾全部/石羅漢花月姑二仙失道/六本/星沙小西門內路邊井慶華堂	星沙：慶華堂	姚（謝）
120	柳陰記				長沙：周慶林堂	姚

121	盧俊義上梁山	一冊	上梁山 真班詞 二卷	盧俊義上梁山/全部/新皮/真班本/大名訪友 金沙灘儀行/□本/中湘九摠 黃三元堂揀選戲文發客	中湘:九總黃三元堂刻本	上圖×3部、復旦、浙圖、首圖×2部、張
		一冊	上梁山 真唱詞 二卷	盧俊義上梁山/全部/新皮/真班本/大名訪友 金沙灘儀行/十本/中湘十摠蘭砂頭正街下首同華堂揀選戲文發客	中湘:同華堂	謝
122	蘆林會				長沙	姚
123	蘆花蕩		蘆花蕩	蘆花蕩/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
124	盧知果私訪武陵		盧知果私訪武陵 一卷		常德:明經堂刻本	湖南(拋目錄)
125	羅一打柴記	一冊	新刻打柴記	羅一打柴記/羅一打柴記/新刻胡大娘/三十冊/長沙城內文星堂發客	長沙:文星堂	姚(謝)
126	龍鳳閣	一冊	龍鳳閣	徐楊三奏/新抄真班本龍鳳閣/六本/星沙南門外童慶華堂戲文發客	星沙:童慶華堂	謝(存6頁)
127	龍虎關	一冊	虎關	龍虎關/全圍/真班本/胡延贊報仇/□本/文星堂歌書戲文發客	文星堂刻本	復旦、浙圖、首圖×2部、張
		一冊	龍虎關	龍虎關全圍/新刻/胡延贊報仇/中湘信□□	中湘刻本	謝(存6頁)
128	龍圖公案	一冊				謝(存11頁)

III

129	麻城歌	一冊	麻城歌 十寫	麻城歌全本/新抄/拾寫繡拾恨想下書接郎/□心堂戲文發客	□心堂刻本	復旦、浙圖、首圖×3部
		一冊	麻城歌		三元堂刻本	上圖
130	罵姐山歌	一冊		罵姐山歌/新抄/十罵情姐/三本		復旦、浙圖、首圖×2部、張
131	馬金龍私訪華容	二冊	私訪華容全部 □□堂刊	馬金龍/私訪華容/新刻/彭氏女謀死親夫 晏有文顯魂伸冤/□十冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭 □□堂戲文發客	長沙刻本	復旦、浙圖、首圖、張
		一冊	私訪華容全部 □□堂刊	馬金龍/私訪華容/新刻/彭氏女謀死親夫 晏有文顯魂伸冤/五十冊/星沙大西門外上河街 □□堂戲書發客	星沙刻本	中山、姚(謝)
132	馬嵬驛	一冊	馬嵬驛	馬嵬驛	刻本	首圖
		一冊	安祿山造反 真班詞	祿山造反 明皇棄城/劍閣開玲子儀封王 馬嵬驛/星沙彭煥文堂揀抄名班戲文發客	星沙:彭煥文堂	姚(謝)
133	賣花記	一冊	賣花記張小姐全部	賣花記全部/新刻/曹國文謀害張小姐/卅五冊/中湘九摠正街三元堂歌書戲文發客	中湘:九總三元堂刻本	上圖×3部、浙圖
			張小姐賣花記 一卷		永州:文順慶記刻本	上圖(拋目錄)
		一冊	新刻張小姐賣花記全本	賣花記全集/新刻/曹國文謀害張小姐/三十冊/漢鎮永寧巷內同盛堂發客不悞	同盛堂	謝
134	賣花線	一冊	新刻賣花線	訂正/姑蘇小曲/賣花線/三元堂	三元堂刻本	浙圖、張
135	賣水記	一冊	賣水記 上卷	賣水記全部/黃小姐/生祭李彥貴/七十冊/中湘九總黃三元堂	中湘:九總黃三元堂刻本	湖南、首圖、張
		一冊	賣水記 上卷		(封面欠)	浙圖
		一冊	賣水記 上部 左三元堂刊	賣水記全部/生祭李彥貴/六十五冊/河街左三元堂歌書發客	左三元堂	姚(謝)
136	賣油郎				中湘:十八摠	姚
137	賣雜貨	一冊	賣雜貨	小調賣雜貨/天德堂	天德堂刻本	謝
138	茅菴渡妻	一冊	新刻茅菴渡妻全圍	茅菴渡妻/新刻觀音老母渡上天庭/五本/星沙□□堂戲文發客	星沙	謝
139	毛洪記	上下卷 二冊	新刻毛洪張玉音兩世姻緣全本上	毛洪記/全部/新抄/真本/兩世姻緣/六十冊/中湘九總三元堂揀抄真本戲文發客	中湘:九總三元堂刻本	上圖×2部、復旦、首圖、湖南、大木、張

		新刻毛洪張玉音兩世姻緣全本下			上函、復旦、首函、湖南、大木、張
		新刻毛洪張玉音兩世姻緣全部 不分卷		民國十四年（1925）永州文順慶記刻本	上函（拋目錄）
	一冊	新刻毛洪張玉音兩世姻緣全本	毛洪記/全部/新抄/真本/兩世姻緣/五十冊/星沙小西門外左三元堂棟抄真本發客	星沙：左三元堂	姚（謝）
140	一冊	鄺塢解犯	鄺塢解犯/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭：蕭同華堂刻本	謝
141	一冊	孟姜女唱春 原本每月俱有花名	孟姜女唱春/坤厚發行/附工尺	刻本（封面有函）	復旦×2部、首函×2部、早大
	一冊		特別新聞/一九五另年出版/孟姜女過關		浙函
	一冊	孟姜女尋夫 哭七	孟姜哭夫/坤厚發行/附工尺	坤厚刻本（封面有函）	首函、大木、張、復旦×2部
	一冊	孟姜女尋夫	封面欠	刻本	大木
	一冊	孟姜女尋夫	孟姜女/新刻/喜良被擄命喪長城/百冊/星沙小西門外同華堂發客	星沙：同華堂刻本	早大、張
	一冊	孟姜女送夫			首函
142	二冊	新編謀朝記 楊文星刻	謀朝記/紅娥女/全部/新刻/金不換揭榜文/百廿冊/中湘十總河街楊文星堂/發行	中湘：十總楊文星堂刻本	浙函、首函×2部、演博、復旦、張、姚、謝
		謀朝記 下本			
143	一冊	紅蘿蔔頂	木匠做官/新刻/蘿蔔頂/十本/同華堂發客	同華堂刻本	大木
144	一冊	陽傳陰報目蓮尋母傳	目連尋母/新刻/遊觀地獄陰陽殿/百冊/長沙誠興堂歌書發客	長沙：誠興堂刻本	湖南、大木、張
	一冊	陽傳陰報目蓮尋母傳	目連尋母/陰陽殿遊十殿母子相會/六十冊/長沙小西門外上首碼頭左三元堂歌文發客	長沙：左三元堂	姚（謝）
n					
145	一冊	娘教女	娘教女/新抄/女兒聽話/七本/中湘三元堂歌文發客	中湘：三元堂刻本	復旦、浙函、首函×2部、張
146		奶奶私訪		長沙：左三元	姚
147		牛皮山	牛皮山/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭：蕭同華堂刻本	謝
148	一冊	新刻南橋會 上本	南橋會/二本/光緒三年冬月/寧鄉黎綿芳堂梓	光緒三年（1877）寧鄉：黎綿芳堂刻本	浙函、首函、張、大木
	一冊	南橋會 西湖調 雙川調 隨使	南橋會/花鼓戲	刻本	首函
	一冊	南橋會	南橋約會全圍/新刻梁山伯轉玉堂春/五本/中湘十六摠金玉堂藏板	中湘：十六摠金玉堂刻本	謝
149	一冊	新刻南陽關	南陽關全圍/新刻韓擒虎起兵/六本/星沙□□抄選名班戲文發客	星沙	謝（存4頁）
150	二冊	南嶽寶詰（十怨）	南嶽寶詰/新刻/十朝十拜十求十怨十月懷胎十謝/八十冊/中湘九總黃三元堂藏板	中湘：九總黃三元堂刻本	浙函、首函、大木、張
	一冊	南嶽寶詰	南嶽香詰/新刻天地閣帝觀音東岳許公司命門神 家堂廟堂五方天燈石碑橋梁牌樓戲臺 河江井泉拜茶謝東登舟起程陰香謝香/百冊		謝
151	一冊	新刻小曲鬧五更	鬧五更/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭：蕭同華堂刻本	謝
152	一冊	鬧新房（新讚茶）	鬧新房/新讚茶/三本/三元堂發兌	三元堂刻本	復旦、浙函、首函、張
	一冊		新讚茶/四本/鬧新房		謝
153	一冊	女綁子	女綁子上殿/新刻金水橋/星沙小西門□□發客	星沙	謝

154	潘葛思妻	一冊	一品忠思妻	潘葛思妻/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
		一冊	新刻壹品忠 左三元堂刊	一品忠全部/新刻白恩歌蘇娥記 潘葛教主思妻/五十五冊/星沙小西門外左三元堂發客	星沙:左三元堂	謝
155	彭大人私訪廣東	二冊	私訪廣東 左三元刊	私訪廣東/全部/新抄/真本/彭大人/私訪萬花樓 捉拿馬三洪/口十六冊/楊文星堂發兌	楊文星堂刻本 (左三元)	浙函、湖南、演博、復旦、上函×3部、首函×3部、張
			私訪廣東下部 左三元刊			浙函×2部、湖南、演博、復旦、上函×3部、首函×3部、張、姚
		一冊	私訪廣東	私訪廣東全部/新刻真本彭大人私訪萬花樓捉拿馬三洪/式百八十/洪江豐泰新堂揀抄真本發客	洪江:豐泰新堂刻本	上函
		一冊	彭大人私訪廣東省	民國乙丑年新刻/私訪廣東/折毀萬花樓 捉拿馬三洪/一千折/永州西鄉渡楓塘文順慶記印兌	永州:民國十四年(1925)文順慶記刻本	上函
		一冊	私訪廣東 左三元刊	私訪廣東全部/新刻真本彭大人私訪萬花樓捉拿馬三洪/六十冊/太平街文珍堂抄揀真本發客	長沙:文珍堂 (左三元)	中山、姚(謝)
156	彭大人私訪湖北	二冊	私訪湖北漢陽 全部 文星	彭大人/私訪湖北/新刻/漢陽府/嚴玉春買糖封提台 日英拜千父做夫人/口口冊/中湘楊文星堂戲文發客	中湘:楊文星堂刻本	湖南、首函×2部、復旦、上函×2部、浙函、張
		一冊	私訪湖北漢陽全部	彭大人/私訪湖北/新刻/漢陽府/嚴玉春買糖封提台 日英拜千父做夫人/八十冊/中湘十摠正街蕭同華堂歌書戲文發販	中湘:同華堂刻本	湖南、中山(謝)
			私訪湖北漢陽(損壞)		黃三元堂刻本	湖南
		一冊		彭大人/私訪湖北/新刻/漢陽府/嚴玉春買糖封提台 日英拜千父做夫人/五十五冊/星沙小西門外上河街左三元堂戲文發客	星沙:左三元堂刻本	中山(謝、存17頁)、湖南(1~3葉欠)
			訪干陽(魚尾)		(星沙:左三元堂刻本に類似)	大木(13葉~最後存)
157	彭大人私訪九龍山	一冊	私訪九龍山 文星堂	私訪九龍山/新抄/姜大岸指路 師爺算八卦/口拾冊/中湘 楊文星堂刊刻	中湘:楊文星堂刻本	浙函、首函、復旦、上函×3部、張
		一冊	私訪九龍山 文星堂	私訪九龍山/新抄/姜大岸指路/師爺算八卦/七拾冊/中湘楊文星堂刊刻	中湘:楊文星堂刻本	首函
		一冊	私訪九龍山 黃三元堂	私訪九龍山/新抄/姜大岸指路 師爺算八卦/七拾冊/星沙黃三元堂歌書發售	星沙:黃三元堂刻本	湖南、首函、演博、浙函
		一冊	(欠損)	私訪九龍山/新抄/姜大岸指路 師爺算八卦/五拾冊/星沙口口堂發客	星沙刻本	中山(謝)
		一冊	私訪九龍山	彭大人私訪九龍山/新刻 姜大岸指路 師爺算八卦/七十冊/益陽頭堡文元堂歌書發販	益陽:文元堂刻本	湖南
158	彭大人私訪蓮花廳	二冊	私訪蓮花廳全部	彭大人/私訪蓮花廳/新鈔/江西省/賓文秀冤魂伸冤 捉拿石匠朱大龍/八十六冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭 口口堂發客	長沙刻本	湖南、首函×2部、復旦、上函×3部、浙函、張
		一冊	彭大人私訪蓮花廳		寶慶:文元堂刻本	湖南
		一冊	彭大人私訪蓮花廳全部	民國丙寅年新刻/私訪蓮花廳/五金山冤魂頭應 奉聖旨二次出京/一千折/永州西鄉渡楓塘文順慶記印兌	永州:民國十五年(1926)文順慶記刻本	上函
		一冊	私訪蓮花廳全部	彭大人私訪江西/新刻 蓮花廳 廳官進京面聖 皇娘保本復訪/八十六冊/中湘十摠正街同華堂歌書戲文發客	中湘:同華堂刻本	國函

159	彭大人私訪南京	一冊	私訪蓮花廳全部	彭大人/私訪蓮花廳/新鈔/江西省/賓文秀冤魂伸冤 捉拿石匠朱大龍/六十六冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭 左三元堂發客	長沙:左三元堂刻本	中山、姚 (謝)
			彭大人私訪蓮花廳全部		永州:西鄉田洞餘家刻本	国図 (拠目録)
		一冊	彭大人私訪南京	彭大人私訪南京/新板 湖南人南京受害 劉大人洩恨報仇/八十冊/光緒丙午年文元堂書坊梓	清光緒32年(1906) 文元堂刻本	湖南、姚
		一冊	彭大人私訪南京	彭大人私訪南京/新到 湖南人南京受害 劉大人洩恨報仇/六十冊	刻本	湖南、浙図、張
		一冊	彭大人私訪南京	彭大人私訪南京/新刻 湖南人南京受害 劉大人洩恨報仇/五十冊	刻本	国図
160	彭大人私訪蘇州	二冊	私訪蘇洲 □□堂刊	彭大人私訪蘇洲/新刻/桂英陰魂申冤 捉拿向氏兄弟/八十五冊/中湘楊文星堂歌書發客	中湘:楊文星堂刻本	演博、早大、国図、首図×2部、復旦、上図×3部、湖南、大木、浙図、張
		存一冊		彭大人私訪蘇洲/新刻/桂英陰魂申冤 捉拿向氏兄弟/五十五冊/星沙小西門外上河街 左三元堂歌書發客	星沙:左三元堂刻本	中山(3葉~終り)、姚(謝)
161	琵琶記	一冊	琵琶記 打三不孝詞	打三不孝/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
		一冊	琵琶記 廣才掃松	廣才掃松/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
		一冊	琵琶記 描容上京	描容上京/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
162	劈三關	一冊	劈三關	劈三關/新刻善驛駝降堂/七〇本/星沙□□堂歌書戲文發客	星沙	謝

q

163	七層樓	二冊	新刻七層樓上部	七層樓全部/新刻/沈子忠點狀元/九十冊/中湘九摠 三元堂歌書發刻	中湘:九摠三元堂刻本	浙図、復旦、首図×2部、湖南、演博、張
			新刻七層樓下部			
164	麒麟送子	一冊	仙姬送子	麒麟送子全圍/新刻/仙姬下凡/甯鄉綿芳堂書坊抄選名班戲文發客	甯鄉:綿芳堂刻本	大木、早大、張
		一冊	麒麟送子	麒麟送子/新刻仙姬下凡/六本/中湘十摠同華堂發客	中湘:十摠同華堂	謝
165	七美图 (烏江渡)	上下卷 二冊	新刻小清官烏江渡私訪全部	七美图全部/新抄喻文榜私訪江南/百廿冊/中湘 歌書戲文發兌	中湘刻本	浙図、復旦、首図×2部、上図×2部、演博(上卷のみ)、張
			新刻烏江渡失印七美图下卷			
		一冊	新刻烏江渡全部	民國乙丑年新刻/七美图/烏江渡清官滅寇 俞大人私訪南京/八百折/永州西鄉渡楓塘文順慶記印兌	永州:民國乙丑年(1925) 文順慶記刻本	国図
		一冊	新刻烏江渡全部	民國乙丑年新刻/七美图/烏江渡清官滅寇 俞大人私訪南京/一百八十折/永州西鄉渡楓塘文順慶記印兌	永州:民國乙丑年(1925) 文順慶記刻本	上図
		一冊	新刻烏江渡全部	民國丙寅年新刻/烏江渡/小清官私訪南京 七美图口誥受封/八百折/永州西鄉渡楓塘文順慶記印兌	永州:民國丙寅年(1926) 文順慶記刻本	上図
		一冊	新刻小清官烏江渡	烏江渡全部/新刻喻撫院私訪/式百五十/洪江口街□□堂歌書發客不言二價	同德堂刻本(卷首題下刊記)	上図
		一冊	新刻七美图全部	烏江渡原本/新刻/小清官私訪烏江渡/一百冊/星沙文口堂精刻歌書戲文發客	星沙:文口堂刻本	湖南

		一冊	小清官 上卷	民國廿三年甲戌歲新□□/小清官烏江渡口/桂林西華門沈□□	民國廿三年(1934)桂林刻本	中山
166	奇巧字謎	一冊	奇巧字謎	癸酉年新刻奇巧字謎/一折/京都翰林館監定/文星堂梓	長沙:西牌樓彭煥文	姚
167	千家贊	一冊	千家贊 十八卷		永州:文順慶記刻本	上圖(拋目錄)
168	巧姻緣				常德:蕭福祥	姚
169	乾隆主私訪南京	一冊	新刻私訪遊南京同德堂	遊南京全部/新刻/乾隆主私訪/百八十冊/洪江□□堂藏板	洪江刻本(同德堂)	上圖(存卷上)
170	秦雪梅	六卷六冊	新刻秦雪梅三元記全部卷之一	繡像三元記/新抄/秦雪梅旌節傳/三百五十冊/中湘九總黃三元堂藏板	中湘:九總黃三元堂刻本	湖南、復旦、上圖×3部、浙圖、首圖、張
			新刻秦雪梅三元記全部卷之二 真本			
			新刻秦雪梅三元記全部卷之三 真本			
			新刻秦雪梅三元記全部卷之四	秦雪梅弔孝/新刻/連中三元/□冊/中湘九總黃三元堂		
			新刻秦雪梅三元記全部卷之五			
			新刻秦雪梅三元記全部卷之六			
		六卷二冊	新刻秦雪梅三元記卷之一左三元刊	三元記/上卷/新刻/秦雪梅旌節傳/百冊/星沙小西門外□□碼頭左三元堂發客	星沙:左三元堂刻本	中山(謝)
		三元記秦雪梅卷四	雪梅吊孝/下卷/新刻連中三元/百冊/星沙小西門外衡山碼頭左三元堂發客			
		六卷一冊	新刻秦雪梅三元記全部	繡像三元記/新刻/秦雪梅教子/七百□/洪江豐泰新堂書文發客	洪江:豐泰新刻本	上圖
		一冊	綉像三元記秦府攻書全本	繡像三元記/斷機教子三撻鼓調/八十冊/益陽頭堡文元堂歌書發販不悞	益陽:文元堂刻本	湖南
		一冊	新刻三班鼓三元記	三元記全本/新刻/秦府攻書得病歸家商林婦天 吊孝守節教子受屈連中三元/九十冊/常德□街□錦華堂歌書發客	常德:錦華堂刻本	湖南
		二冊			長沙:左三元	姚
		一冊	秦雪梅吊孝	秦雪梅吊孝/新刻/過門盡節/四本/中湘九總黃三元堂發售	中湘:九總黃三元堂刻本	復旦、國圖、上圖、湖南、浙圖、首圖、張
		一冊	秦雪梅吊孝	秦雪梅吊孝/文順堂/秦小姐靈前結拜 玉堂星商門降生/五百折	永州:文順堂刻本	上圖
	一冊	新刻斷機教子全本	斷機教子/全圍/新刻 秦雪梅 機房教子/十六□/益陽頭堡文元堂精刻歌戲小曲勿□悞	益陽:文元堂刻本	浙圖	
	一冊	雪梅教子		永州:文順堂刻本	上圖(拋目錄)	
	一冊	三元記 雪梅教子	雪梅教子/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂	謝	
171	清朝記	一冊	清朝記	清朝記全部/新刻/勸世文/□□冊	刻本	大木
172	青楓亭趕子	一冊	青楓亭趕子	青楓亭趕子/花鼓戲	刻本	浙圖、首圖、早大
		一冊		青楓亭趕子/新刻雷打張吉保/十二本	刻本	張
			新刻青楓亭趕子全部左三元刊	青楓亭趕子/打張吉保/七本/湘鄉碼頭左三元堂發客	長沙:左三元堂	姚(謝)
173	慶賀新春	一冊	新春土地讚語	慶賀新春/新出土地書/□□縣黃大文堂名班戲文發客	黃大文堂刻本	復旦、浙圖、首圖×2部、張
174	慶賀新房	一冊		慶賀新房/漢腔	同文堂刻本	上圖、復旦、張

175	全家寶	一冊	全家寶	甲戌新刻/全家寶/岳陽彭同文堂梓	民國甲戌(1934)岳陽:彭同文堂刻本	湖南、首函、演博
		一冊	全家寶	甲戌新刻 四十五冊/全家寶/岳陽彭同文堂梓	民國甲戌(1934)岳陽:彭同文堂刻本	首函
176	全家福				長沙:左三元	姚
177	勸世山歌	一冊	新刻勸世歌	山歌書本/新刻/勸世山歌 樂而不淫/文富堂抄撰□□歌書發客不言二仙	文富堂刻本	復旦、浙函、首函
178	勸孝歌	一冊		甲寅年 五十冊/勸孝歌/中湘九總黃三元堂藏板	中湘:九總黃三元堂刻本	浙函、大木
179	取城都	一冊	取城都	取城都/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發		
180	取榮陽	一冊	取榮陽 真班詞全義堂刊	新皮/取榮陽/八本/新抄/真班本/紀信替主/星沙小西門外下河街羅富文戲文發客	星沙:羅富文刻本(全義堂)	大木、張

r

181	仁貴回窠	一冊	仁貴歸家 一卷		洪江:同德堂刻本	上函(拋目錄)
		一冊	薛仁貴回窠	薛貧(平)貴回窠/新刻王寶川(釧)跑坡試妻/二十冊/四本	綿芳堂刻本	張
		一冊	打雁回窠	薛仁貴回窠/新刻打雁試妻/八本/星沙西長街大成堂戲文發客	星沙:大成堂	謝
182	仁貴征東記	上下卷四冊	仁貴征東記 卷上	征東記全部/新刻/薛仁貴投軍/八十冊/中湘□摠 楊文星書坊批發	中湘:楊文星刻本	復旦、浙函、首函×2部、大木、演博、張、姚
			征東記 卷下	征東記/大戰鳳凰山/新刻/真本/薛仁貴救駕 官封平遼王/八十冊/中湘□摠 楊文星書坊 批發		

S

183	三打玉麟班	上下卷二冊	新抄真三打玉麟班	三打玉麟班全部/新抄/真本/朱文進四川被難 劉家庄捉拿張龍/八十冊/中湘九總黃三元堂刊	中湘:九總黃三元堂刻本	上函、大木
			玉麟班下卷			
		上下卷二冊		三打玉麟班全部/新抄/真本/朱文進四川被難 劉家庄捉拿張龍/六十冊/星沙小西門外上河街左三元堂刊	星沙:左三元堂刻本	中山×2部(謝)
	上下集二冊		三打玉林下集/朱文進伸冤	益陽印刷生產合作社刻本	張	
184	三姑記	一冊	三姑記	三姑記/全部/新刻/嫌貧愛富/□□冊/中湘□摠 文星堂批發	中湘:文星堂刻本	浙函、首函×3部、湖南、演博
		一冊	三姑記		永州:文順堂刻本	上函(拋目錄)
		一冊	三姑記	三姑記/新刻/嫌貧愛富/五十冊		謝
185	三姐遊花園		三姐遊花園		星沙:信友堂刻本	上函(拋目錄)
186	三郎二姐	一冊	三郎二姐	新刻/三郎二姐全園/□□正街□□堂抄刻歌戲發客	刻本	復旦、浙函、首函、大木
187	三娘教子	一冊	教正京調三娘教子全本	三娘教子	刻本(有挿函)	首函×2部、浙函
188	三哭桃園	一冊	三哭桃園	三哭桃園/新抄/真班本/劉備哭靈五更思嘆/五本/中湘九摠 三元堂發客	中湘:九總三元堂刻本	上函、復旦、浙函、首函×2部、張
189	三美圖	上中下卷四冊	新刻白骨塔全部上卷	三美圖/全卷/新刻/陳太師謀害焦百萬/八十冊/□□堂歌文發客	長沙刻本	湖南、首函×2部、上函、浙函、湖南、張
			新刻白骨塔圍王府中卷	搜焦府/中卷/新刻/仙山賜寶 夫妻學法/八十冊/□□堂歌文發客		
			新刻白骨塔下卷	大鬧東京/下卷/焦公子/金殿會母 夫妻團圓/八十冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭 □□堂歌文發客		
		一冊	新刻白骨塔全本	白骨塔全傳/新刻焦可道紫陽山上墳/五百廿冊/洪江豐泰新堂歌書發客不□	洪江:豐泰新堂刻本	上函
		存一冊	白骨塔(拋魚尾)			

					長沙:左三元	姚
190	三氣周瑜	一冊	三氣周瑜全本 不分卷		永州:文順堂刻本	上圖 (拋目錄)
191	三討荊州	一冊	三討荊州	三討荊州/湘潭九總正街簫同華堂歌書戲文班本發客	湘潭:同華堂	謝
192	散瓦崗	一冊	散瓦崗	散瓦崗/新刻李密不仁/三本/星沙小西門外上河街左三元堂戲文發客	星沙:左三元堂	謝
193	三孝記	二冊	新刻三孝記全本 二卷		洪江刻本	上圖 (拋目錄)
194	三字經	一冊	新刻三字經告狀 不分卷		民國十四年 (1925) 永州文順慶記刻本	上圖 (拋目錄)
		一冊	三字經告狀	新刻三字經告狀/京都翰林館編修/三本/中湘拾六摠新街口信友堂刊	中湘:十六摠信友堂	謝
195	三醉岳陽樓	一冊		三醉岳陽樓/買魚放生全圖/共口冊/寧鄉正街黎綿芳堂藏板	寧鄉:黎綿芳堂刻本	張
					長沙:左三元	姚
196	沙橋餞別	一冊	沙橋餞別	沙橋薦別全圖/新刻唐僧西天取經/口本/星沙南門外鎮有堂抄選名班戲文發客	星沙:鎮有堂	謝
197	殺四門	一冊	殺四門	殺四門全部/口口冊/劉定金南唐救主/口本/黎綿芳堂發兌	黎綿芳堂刻本	復旦、浙圖、首圖、大木、張
		一冊	新刻劉金定殺四門救駕	民國癸酉年/新刻殺四門/劉金定南塘救駕 高君保服藥團圓/八十折		謝
198	沙陀頒兵	一冊	沙陀頒兵	沙陀頒兵全圖/新刻程敬思解寶/五本/星沙二西堂抄選名班戲文發客	星沙:二西堂	謝
199	山伯訪友	一冊	山伯訪友 (西湖調 川調也可)	山伯訪友/花鼓戲 益陽市郵局對面華文錦代印	益陽:華文錦刻本	浙圖、張
		一冊	山伯訪友 (西湖調 川調也可)	山伯訪友/花鼓戲	刻本	首圖、早大
		一冊	新刻山伯訪友全部	山伯訪友/新刻/英台自嘆 山伯得病/九本/長沙明月街袁瑞文戲文發客	長沙:袁瑞文刻本	首圖
					長沙:左三元	姚
200	山伯送友	一冊	山伯送友	山伯送友/花鼓戲	刻本	首圖、早大、張
201	扇子歌	一冊	扇子歌全本	扇子歌全圖/新抄衡山調/三本/星沙	星沙	謝 (存2頁)
202	商賈便覽	一冊		商賈便覽/路程唱/口本	刻本	復旦、浙圖
203	賞月光	一冊	賞月光	賞月光/新刻堂班調/三本	刻本	復旦、首圖
204	燒火調	一冊	新刻燒火調	燒火調/中湘九總 三元堂板 三本	中湘:九總三元堂刻本	復旦、浙圖、首圖×2部、張
205	十八條好漢	一冊	十八條好漢	十八條好漢/新刻/瓦崗英雄/口本/星沙口口 (三元) 堂發客	星沙:三元堂刻本	復旦、浙圖×2部、首圖、演博、張
206	十二月比古	一冊		十二月比古/新抄/月月數古/三本	刻本	復旦、浙圖、首圖
		一冊		十二月比古/新抄/月月數古/三本/中湘同華堂戲文發兌	中湘:同華堂	謝
207	十二月道思情	一冊	十二月道思情	十二月道思情/新抄/增廣韻歌/三本	刻本	浙圖、首圖
208	十二紅	一冊	新刻十二紅全木 (本)	新出/三元堂 十二紅	三元堂刻本	浙圖、張 (黃三元堂)
209	拾式思君	上下集 二冊		新出詞文/最時小書/拾式思君 上集	刻本	浙圖×2部
				新出詞文/最時小書/拾式思君 下集	刻本	浙圖×2部
210	十二月放羊	一冊	十二月牧羊	十二月放羊/新抄/真班本/三宮主修書/四本	刻本	首圖×2部
		一冊	放羊歌	十二月/放羊歌/新刊/真班本/宮主修書/全部/中湘 歌書發客	中湘刻本	復旦、浙圖、張
211	十二月牧羊	一冊	十二月牧羊	十二月牧羊/新抄/真班本/龍王救女/四本/歌書發客	刻本	浙圖、首圖
		一冊	十二月牧口	十二月/牧羊歌/新刊/真班本/龍王救女/全部/中湘口口歌書發客	中湘刻本	首圖
212	十二月想郎	一冊		新刻/十二月想郎/三元堂發兌	三元堂刻本	浙圖、張

213	拾式張紙	一冊		新出詞文/□□□出版/拾式張紙/□□信知街□□巷間□□□□	刻本	浙閩
214	失金釵	一冊	失金釵 一卷		文順堂刻本	上閩 (拋目錄)
215	世龍搶傘	一冊	蔣世隆搶傘	世龍搶傘/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
216	十美图	二冊	新刻十美图全部	上本/十美图/新刻/嚴小姐大鬧相府吐真情夫妻分別/一百八十折/永州西鄉渡楓塘文順慶記印兌	永州:文順慶記刻本	上閩
			新刻十美图下本	下本/十美图/新刻/喜鳳閣仇鸞謀反双状元班師團圓/一百八十折/永州西鄉渡楓塘文順慶記印兌		
217	十勸記	一冊	十勸記 黃三元堂刊	新十勸/新刻/醒世文/卅五冊/中湘九總 黃三元堂歌書發客	中湘:九總黃三元堂刻本	浙閩
		一冊	十勸記 左三元堂刊	新十勸/新刻/醒世文/三十冊/長沙小西門外上河左三元堂歌書發客	長沙:左三元堂	謝
218	十条手巾	一冊		十条手巾/新抄/清音雅調/星沙 □□歌書戲文發客	星沙刻本	復旦、浙閩、首閩×2部、張
219	石頭人招親	一冊	石頭人招親	石頭人招親	刻本	謝
220	十月懷胎	一冊		十月懷胎/孝為百行原/十口/寧鄉西正街綿文堂藏板	寧鄉:綿文堂刻本	復旦、浙閩、首閩、張
221	十不親	合本				
222	手扶欄杆	一冊	新刻手扶欄杆	□本/手扶欄杆/三元堂	三元堂藍印本	上閩、浙閩
223	手巾記	上下本	新刻手巾記		文順堂刻本	上閩 (拋目錄)
		一冊				
224	書房調叔	一冊	書房調叔	書房調叔/小曲/新刻/王蓮送飯/星沙城內文元堂刊	星沙:文元堂刻本	復旦、浙閩、首閩、大木、張
225	梳粧臺	一冊	小調梳粧臺	小調/梳粧臺/三元堂	三元堂刻本	浙閩、張
226	雙拜壽		雙拜壽 一卷		寶慶刻本	上閩 (拋目錄)
227	雙花記	上下本 二冊	新刻雙花記 上本 黃三元堂真本	雙花記/全集/新刻/王文永兄弟聯科/一百六十冊/中湘九總黃三元堂發兌	中湘:九總黃三元堂刻本	上閩、浙閩、湖南、張
			新刻雙花記 下本			
228	雙情配				長沙	姚
229	雙嘆妹	一冊	新編雙嘆妹	雙嘆妹/新刻/堂班調/三本/黃三元堂發客	黃三元堂刻本	浙閩、首閩、張
		一冊	新編雙嘆妹	新雙嘆妹/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
230	雙珠球 (掛袍記)	八卷 四冊	新刻砮礮山義俠記 黃三元堂 別母、出獄、害主、結拜	雙珠球/掛袍記/新刻/劉子英打虎/ 二百六十冊/中湘九總黃三元刻發客	中湘:九總黃三元堂刻本	上閩、復旦、浙閩、湖南、首閩、演博、張
			新刻砮礮山義俠記 卷三			
			新刻砮礮山義俠記 卷五	三打廣東/新刻/許姣春招親/□□冊/中湘九總 黃三元堂藏板		
			新刻砮礮山義俠記 卷七			
		一卷 のみ	新刻砮礮山義俠記 □□堂刊	雙珠球/掛袍記/新刻/劉子英打虎/ 百五十冊/中湘同華堂揀選歌文發客	中湘:同華堂刻本	中山 (謝)
		五卷 六卷	新刻□□山義俠記	三打廣東/新刻/許姣春招親/□□/ 中湘同華堂揀選歌	中湘:同華堂刻本	謝
		六卷 七卷	新刻砮礮山義俠記			謝 (存17頁)
				長沙:楊福星	姚	
231	水路程歌	一冊	水路程歌	水路程歌/全本/新刻風暴日期/六本/中湘十摠同華堂揀選戲文發客	中湘:同華堂	謝
232	私訪長沙	一冊	私訪長沙	私訪長沙全部/新刻/趙陸喬訓民/從十冊/星沙路邊黃又森戲文發客	星沙:黃又森刻本	中山、姚 (謝)
233	私訪翠花菴	一冊	(新刻) 翠花菴 不分卷		永州:文順堂刻本	上閩 (拋目錄)

234	四個字	一冊	新刻四個字下本			謝 (存下本7頁)
235	私懷胎	一冊	思懷胎	私懷胎/新抄/二八女/口本/中湘口口發客	中湘刻本	復旦、浙閩、首閩×2部、張
236	四季相思	一冊	四季相思	四季相思/小曲/新刻/書生藏舟/四本/三元堂歌書戲文發兌	三元堂刻本	復旦、浙閩×2部、首閩、張
		一冊	相思	四季相思/小曲/新刻/書生藏舟/口本/文星堂發兌	文星堂刻本	首閩
		一冊	四季相思調	四季想思/文順堂後附蘇州滿江紅調/共四折	文順堂	謝
237	四美圖	上下卷二冊	新抄賢關鎮侯美容焚香絲帶記 口口刊	四美圖/新刻/龍公子点雙狀元/百冊/中湘九總 黃三元堂刻	中湘:九總黃三元堂刻本	上閩×3部、復旦、浙閩、首閩、湖南、演博
			新抄絲帶記下卷	絲帶記全集/新刻/龍官保/賢關鎮女大王/口口冊/中湘 口口堂發客		
		上下卷二冊	新抄賢關鎮侯美容焚香絲帶記	四美圖/新刻/龍公子点雙狀元/九十冊/中湘九總黃三元堂刊	中湘:九總黃三元堂刻本	閩閩
		一冊	新抄賢關鎮侯美容焚香絲帶記	絲帶記全集/新刻/龍官保/賢關鎮女大王/六十冊	武攸大林福記	上閩
		一冊	新刻絲帶記龍公子侯美芙全部	糸帶記全部/新刻/各班戲文/口口/洪江豐泰新堂奇書發兌 不言二價	洪江:豐泰新堂	上閩
					長沙:周慶林堂	姚
238	送表妹	一冊	觀灯 扇子調	送表妹全部/新抄/花古調/四本/口口堂歌書戲文發客	刻本	浙閩、首閩×2部、張
		一冊	新刻送表妹二卷	送表妹/下卷庚午新刻		謝 (存8頁)
239	送寒衣	一冊	新刻送寒衣 一卷		文順堂刻本	上閩 (拋目錄)
240	送郎哥	一冊	送郎哥		三元堂刻本	上閩 (拋目錄)
241	送子書	一冊	仙姬送子	送子書/新刻/仙女下凡/二口 (本)/甯鄉西正街 黎綿芳堂藏板	甯鄉:黎綿芳堂刻本	上閩、復旦、大木、張

七

242	太平王反南京	一冊		太平王反南京/新刻/曾大人征長毛/五十冊/星沙貢院西街王洪興堂名班戲文發客	星沙:王洪興堂刻本	中山、姚 (謝)
243	陶大人私訪江南	五卷四冊	私訪江南	陶大人/私訪江南/新抄/真本/私訪曹百萬 捉拿尤子金/口口冊/口口堂揀抄真本發客	刻本	湖南、復旦、上閩、浙閩、首閩、演博、張、謝 (存1冊27頁)
			私訪江南 三卷			
			私訪江南 四卷	劉龍李豹/搜曹府/真傳/後本/吳官保頂職 蔡秀英受封		
			私訪江南 五卷			
		九卷一冊	新刻清官傳陶大人私訪南京道情真本	清官傳全部/新抄 陶大人私訪南京道情真本/二百冊/益陽縣頭堡文元堂書坊梓	益陽:文元堂刻本	湖南
		七卷一冊	新刻私訪江南	新刻陶大人私訪南京/百二十折/清官傳全部/武岡州正街大林堂福記	武岡:大林堂福記刻本	上閩
		七卷一冊	新刻私訪江南	清官傳全部/新刻/陶大人私訪南京道情真本/六百冊/洪江口口堂書坊梓	洪江刻本	上閩
		(存卷四) 私訪江南	劉龍李豹搜曹府/真傳/後本/吳官保頂職蔡秀英受封/八十冊/中湘九總黃三元堂藏板	中湘:黃三元堂刻本	閩閩	
244	嘆妹	一冊	嘆妹	嘆妹/三本	刻本 (有封面圖)	復旦、首閩、張、謝
245	譚五姐	一冊	譚五姐全本 信女堂真本	譚五姐全集/新刻/前朝記/三十冊/星沙同文堂發客不悞	星沙:同文堂	姚 (謝)
246	探五陽	一冊	探五陽弟一下山降漢	探五陽/一折/名班戲文/口口文星堂印行批發	文星堂	謝
247	嘆營觀兵	一冊	嘆營觀兵	探營觀兵/全園/新刻李良謀位/三本/中湘信友堂發客	中湘:信友堂刻本	謝

248	天門陣	一冊	擺陣破陣	天門陣全部/新刻穆桂英產子/五本/常德府三元堂歌書真本	常德:三元堂	謝
249	天水關	一冊	天水關 点将收維 全圍	新皮/天水關/全圍/新抄/真班本/點将收姜維/七本/中湘九摠 三元堂歌書戲發客	中湘:九總三元堂刻本	上囙、復旦、浙囙、首囙×2部、張
			天水關	天水關/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
250	鐵冠囙				中湘:同華堂	姚
251	偷詩趕潘	一冊	禪堂偷詩 (花鼓戲)	偷詩趕潘/花鼓戲		浙囙、首囙
252	土牢記	一冊	新刻土牢記全本	土牢記全集/新刻/四川楊國茶/六十冊/星沙明經堂藏板	長沙:明經堂刻本	湖南
		一冊	土牢記 上卷	繡像/土牢記全集/新刻四川楊國茶/八十冊/星沙城□□堂歌書發客	星沙刻本	中山、姚 (謝)

W

253	瓦車蓬	八卷 八冊	新編揀抄瓦車篷 好善賑民第首卷 牙痕記真本 黃三元堂刊	瓦車蓬/全部/新刻/兄弟狀元牙痕記/□□冊/中湘九總黃三元堂藏板	中湘:九總黃三元堂刻本 (有插囙)	復旦、浙囙、湖南、首囙、演博、張
			瓦車蓬 第二卷 寿保賣身			
			瓦車蓬 第三卷 生祿巾車蓬產子			
			瓦車蓬 第四卷 奴害主			
			原板瓦車蓬血書牙痕記 卷之五			
			新刻瓦車蓬血書牙痕記 卷之六			
			新刻瓦車蓬血書牙痕記 卷之七			
		一冊	新刻瓦車蓬血書牙痕記 卷之七		長沙:左三元	姚 (謝、存卷七)
254	瓦崗寨	一冊	瓦崗寨李蜜降唐 不分卷		永州:文順慶記刻本	上囙 (拋目錄)
255	望春樓	一冊	望春樓	望春樓/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
256	王大娘補缸	一冊	補磁缸 (「新十杯酒」合刻)	新刻原本/王大娘補缸/文元堂梓	文元堂刻本	上囙、復旦、浙囙、首囙×2部、張
257	王官保	一冊	(新刻) 王官保全本		清光緒中三元堂刻本	上囙 (拋目錄)
258	望二郎	一冊	新刻望二郎		永州:文順慶記刻本	上囙 (拋目錄)
259	望郎歌	一冊		望郎歌/五更思情 四本	刻本	復旦、浙囙、首囙×2部、張
260	王民女還陽記	一冊	(新刻) 王民女還陽記 不分卷		寶慶:文元堂刻本	上囙 (拋目錄)
261	王婆問病	一冊	王婆問病 (小曲) 一卷		辰州:文陸刻本	上囙 (拋目錄)
262	王三買肉	一冊	新抄王三買肉 花鼓戲	王三買肉/全部/新抄/真班本/大套小套/七本	刻本	浙囙、首囙×2部、張
263	王三姐遊花園	一冊	王三姐遊花園	新刻遊花園/貧貴逃難/四本/中湘王廣元堂	中湘:王廣元堂刻本	謝
264	王氏女全集				中湘:信友堂	姚
265	王月英賣胭脂	一冊	王月英賣胭脂	王月英/買胭脂/新刻/老毛胡鬧婚/六十冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭□□堂戲文發客	長沙刻本	上囙
		一冊	王月英賣胭脂	王月英/買胭脂/新刻/老毛胡鬧婚/□□冊/長沙小西門外上首湘鄉碼頭□□堂戲文發客	長沙刻本	浙囙、首囙×2部、張
266	渭水訪賢	一冊	渭水訪賢	文王訪賢/新皮/新抄姜太公把釣/□本/星沙李文定堂戲文歌書發客	星沙:李文定堂	謝

267	文斷橋	一冊	新刻文斷橋 一卷		文順堂刻本	上図 (摺目錄)	
268	問姐巧歌	一冊		問姐巧歌/新抄/問姐思情/三本		復旦、浙図、首図 ×2部、張	
269	文書調兵	一冊	文書調兵		寶慶:文元堂刻本	上図 (摺目錄)	
270	吳大人私訪漢陽 (三人頭)	上下卷 二冊	吳大善私訪漢陽卷上	三人頭/全部/新刻/吳大善訪武昌/ 七十冊/中湘九總黃三元堂發客	中湘:九總黃三元堂刻 本	湖南、国図、復 旦、上図×2部、 浙図、大木	
			吳大人私訪漢陽卷下				
					長沙:三元堂	姚	
271	吳大人私訪九人 頭	四卷 四冊	新刻九人頭吳大人私訪第一 卷	吳大人私訪九人頭/新刻/漢陽府/獄 神殿明冤 捉拿張大紅/二百廿冊/ 星沙小西門外上河街口□歌書發客	星沙刻本	湖南、復旦、上図 ×3部 (四卷のみ4 部)、首図、浙 図、大木、張、中 山	
			新刻九人頭吳大人私訪第二 卷				
			新刻九人頭吳大人私訪三卷	吳公案/下卷/後本/長發救鄉親得妻 財 楊春龍拜干父升 (昇) 官/□□ 歌書發客			
			新刻九人頭吳大人私訪四卷				
		存一卷	新刻九人頭吳大人私訪	吳大人 私訪九人頭/新刻 漢陽府 獄神殿明冤 捉拿張大紅/百七十冊/ 星沙小西門外上河街左三元堂歌書 發客	星沙:左三元堂刻本	国図、姚 (謝)	
272	無根樹	一冊	張三丰 (豊) 眞人無根樹詞 一嘆世		刻本	首図	
273	五更勸夫	一冊	五更勸夫 黃三元堂刊	五更勸夫/新刻/花古調/六本/中湘 九總 三元堂戲文發客	中湘:九總三元堂刻本	上図、復旦、浙 図、首図×2部、 張	
274	五更想郎	一冊	五更想郎	新刻文元堂想五更/本堂新抄/堂本 月調/共十折	文元堂	謝	
275	五花陣	一冊	五花陣 一卷		武岡刻本	上図 (摺目錄)	
276	烏金記	三卷 二冊	新刻烏金記 王小姐 卷一	烏金記全部/新刻/張大人私訪捉拿 雷龍 陳氏女救夫伸冤報仇/九十冊/ 中湘九總黃三元堂發兌	中湘:九總黃三元堂刻 本	浙図、演博 (存上 卷)	
			烏金記 王小姐 卷三				
			新刻王小姐烏金記 慶林堂 刊	烏金記全部/張大人私訪/陳氏女救 夫/一百冊/星沙小西門外上河街口 □堂戲文發兌	星沙 (慶林堂)	姚 (謝)	
277	五美圖	上下卷 二冊	新抄五美圖 首卷槽坊許婚 三元堂刊	新康渡/五美圖/新抄/真本洪蘭桂中 狀元/百四十冊/中湘九總 黃三元 堂歌書發客	中湘:九總黃三元堂刻 本	湖南、演博、復 旦、浙図、首図× 2部、張	
			新抄五美圖 下卷洪蘭桂進京 三元堂刊				
			上下卷 二冊	新抄五美圖 首卷槽坊許婚 三元堂刊	新康渡/五美圖/新刻/真本洪蘭桂中 狀元/百冊/中湘三元堂歌書發客	中湘:三元堂刻本 (封面有図)	演博
				新抄五美圖 下卷洪蘭桂進京 三元堂刊			
			二冊	新抄五美圖 首卷 槽坊許婚	新康渡/五美圖/新抄/真本洪蘭桂中 狀元/八十冊/中湘 楊文星堂刊刻	中湘:楊文星堂刻本	国図
			一冊	新刻五美圖全部	新康渡/五美圖/新刻/槽坊打酒許婚 洪藍桂点狀元/百六十冊	三沅堂刻本	湖南
			一冊	新刻五美圖	民國辛未年新刻/五美圖/李小姐會 文許婚 洪藍桂連中三元/二百八折 /永州西鄉渡楓塘文順堂印兌	民國辛未年(1931)永 州:文順堂刻本	上図
			二冊	新刻五美圖 集賢堂存板	洪江豐□□/新刻/洪蘭桂中狀元/繡 像五美圖/四百	洪江:豊 (泰新堂) 集賢堂刻本	上図
		二冊	新抄五美圖 首卷 槽坊許婚	新康渡/五美圖/新抄/槽坊打酒許婚 洪藍桂点狀元/百冊/長沙小西門外 上首湘鄉碼頭左三元堂戲文發客	長沙:左三元堂刻本	中山、姚 (謝)	

278	五美緣雕龍扇	上下卷 二冊	新刻雕龍扇五美緣全部卷上	斬妖記/雕龍扇/新刻/新刻/小姐還願/高德華降妖 夏太師忘恩/郁監文害友/百廿冊/長沙誠興堂刊刻	長沙:誠興堂刊刻	早大 (1葉~12葉)、張
			新刻雕龍扇五美緣全部卷下			大木 (13葉~最後)
279	吳三保遊春	一冊	新出吳三保遊春全本	吳三保遊春/花鼓戲 益陽市華文錦代印	益陽:華文錦刻本	浙圖、首圖、早大
		一冊	新出吳三保遊春全本	吳三保遊春/花鼓戲 益陽市藥王宮下首志安印刷店代印	益陽:志安印刷店刻本	首圖、早大、張
280	五鼠鬧東京	一冊	五鼠大鬧開封府	五鼠鬧東京/前本/太行山遇妖國母辯真偽/一百冊/漢鎮同華堂歌書發客	同華堂	謝
281	五台會元	一冊	五台會元 一卷		洪江:口德堂刻本	上圖 (拋目錄)
282	吳燕花 二冊	一冊	吳燕花	吳燕花/全集/新刻/柯子書解糧/八十五冊/中湘九摠黃三元堂歌書戲文發兌	中湘:九總黃三元堂刻本	上圖、復旦、浙圖、首圖×2部、演博、張
		一冊	吳燕花全部 左三元刊	吳燕花/全集/新抄/柯子書解糧/八十五冊/星沙上河街三元堂名班戲文發客	長沙:三元堂	姚 (謝)
283	五子行孝	一冊	五子行孝		光緒二十年 (1894) 寧鄉:黎綿芳堂刻本	上圖 (拋目錄)
		一冊	五子行孝	五子行孝/光緒十年重梓/十五/寧鄉黎綿芳堂藏板	光緒十年 (1884) 寧鄉:黎綿芳堂刻本	首圖、復旦
		一冊	新刻五子行孝		清光緒二年 (1876) 辰州刻本	上圖 (拋目錄)
		一冊	五子行孝		永州:文順堂刻本	上圖 (拋目錄)
		一冊	五子行孝		寶慶:王長興刻本	上圖 (拋目錄)
		一冊	新刻五子行孝	癸酉新刻/一折/五子行孝/文星堂藏板	文星堂刻本	謝

X

284	喜報三元	一冊		喜報三元/新抄/清音雅調/星沙□□歌書戲文發客	星沙刻本	首圖
285	洗菜心	一冊	洗菜心小曲	洗菜心/小曲/新抄/時新調/三本/星沙黃三元堂發客	星沙:黃三元堂刻本	上圖×2部、復旦×2部、首圖、張
286	洗宮	一冊	洗宮			謝
287	喜姐歌	一冊		喜姐歌		復旦、浙圖、首圖
288	下江泥	一冊	下江泥全部	下江泥/全本/新抄/天平昌/巧配姻緣/六十冊/中湘 三元堂歌文發客	中湘:三元堂刻本	上圖、浙圖、張
		一冊	下江泥全部	下江泥/全本/新抄/天平昌/巧配姻緣/五十冊/長沙小西門外湘鄉碼頭左三元歌文發客	長沙:左三元刻本	謝 (存2頁)
289	下盤棋	二冊	下盤棋	下盤棋全本/新抄/花鼓調子/三本/長沙□□戲文發客	長沙刻本	復旦、浙圖、首圖×2部、張
290	仙姬送子				長沙	姚
291	賢良詞	一冊	賢良詞	賢良詞	刻本	首圖
292	想郎歌	一冊		想郎歌/新抄 佳人自嘆 四本		復旦、浙圖、首圖×2部
293	香山記	一冊	香山記	香山記/觀音得道全部 (十二頁) 益陽印刷生產合作社制	益陽:印刷生產合作社	浙圖
		二冊 (四冊)	香山記 黃三元堂刊	宣統元年春月重刊/香山記/觀音修道 百五十冊/黃三元堂發兌	宣統元年 (1909) 黃三元堂刻本	上圖、復旦、首圖、湖南、演博、張
				遊十殿		
			香山記		光緒三十一年 (1905) 刻本	湖南 (拋目錄)
			香山記		同治元年 (1862) 刻本	湖南 (拋目錄)
			香山記 一卷		清光緒間、武岡:大林堂福記刻本	上圖 (拋目錄)

	一冊	香山記	光緒戊申年春月重刊/香山記/觀音修道 二百冊/長沙小西門外上河街左三元堂發兌	光緒戊申年 (1908) 長沙:左三元堂	姚 (謝)
294	一冊	湘潭景	湘潭景/新抄/三街六巷/八本/中湘九摠口口發兌	中湘刻本	復旦、首函、張
295		新刻湘子化齋 一卷 (林英觀花全圖)		文順堂刻本	上函 (拋目錄)
	一冊	新刻韓湘子化齋 左三元刊	湘子化齋/新刻林英花園燒香/三本/長沙小西門外上湘鄉碼頭左三元堂發客	長沙:左三元堂	謝
296	一冊	湘子賣雜貨 上本	湘子賣雜貨/新抄/真本/寶鏡度妻/口本/榮華堂歌書戲文發客	榮華堂刻本	復旦、浙函、首函
297	一冊	湘子賣藥 六音調 羅富文堂刊	湘子賣藥/新刻/林英服藥/五本/星沙 羅富文堂歌書戲文發兌	星沙:羅富文堂刻本	復旦、浙函、張、姚
	一冊	新刻林英服藥全本	韓湘子賣藥/新刻/林英服藥全本/中湘口口堂戲文發客	中湘刻本	首函×2部
298	一冊	孝弟忠信	孝弟忠信/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
299	一冊		小放牛/抄錄/京班新調/六本		復旦、浙函、首函×2部、張
300	一冊	小姑賢 (花鼓戲)	小姑賢/花鼓戲		浙函
	一冊	小姑賢	小姑賢/新刻/家和福自生/星沙小西外大河	星沙刻本	首函
	一冊	小姑賢 (花鼓戲)	小姑賢/花鼓戲/益陽市藥王宮下首志安印刷店代印	益陽:志安印刷所刻本	首函、早大、張
301	一冊	小姑賢 桂姑賢	花鼓戲/桂姑賢	石印本	浙函、早大
302	一冊	新採茶歌	新採茶歌/新刻/湖北調子/口本/中湘 文星堂戲文發客	中湘:文星堂刻本	復旦、浙函、首函、張
303	一冊	新調兵	新刻時調小曲調兵	新調兵/新刻/堂班調/三本	復旦、浙函、首函×2部
304	一冊	新殺蔡鳴鳳 真班本	八音連彈/新抄/新殺蔡鳴鳳/四本/中湘九摠黃三元堂發客	中湘:九摠黃三元堂刻本	浙函、首函×2部、張
305	一冊		新十八摸/新刻/清音雅調/全部/中湘口口發客	中湘刻本	首函、張
306	一冊	新杯酒	新十杯酒/新刻/堂班調/三本/三元堂戲書發客	三元堂刻本	復旦、浙函、首函、張
307	一冊	新十個月漂	新十個月漂/三本		復旦、浙函、首函×2部、張
308	一冊	送郎哥 (歌)	新送郎歌/新刻/十送情人/四本/三元堂戲文發客	三元堂刻本	復旦、浙函、首函×2部、張
309	一冊	新跳嘈 堂班詞 四川調	新跳嘈/新抄/四川調/六本	刻本	復旦、首函
310	一冊	最新讚茶	新讚茶		復旦、首函、張
311	248と合本	讚檳郎			
312	一冊	最新扎床	新讚床/六本		首函
	一冊	最新讚床			復旦 (拋目錄)
313	一冊		醒閩俗歌/宜章螢記書句印行	宜章:螢記堂	謝
314	一冊	興漢函全本			謝
315	一冊	修身錄	民國二年刊/百二十冊/修身錄/中湘九摠黃三元書局藏板	中湘:九摠黃三元堂刻本	浙函、大木、張
316	一冊		秀英記全部/新刻廣東李舉人/卅五冊/中湘九摠 黃三元堂發兌	中湘:九摠黃三元堂刻本	復旦、浙函、首函、張
317	一冊	反唐	薛剛反唐/新抄哭城報仇/三本/星沙小西門外上河街左三元堂戲文發客	星沙:左三元堂	謝
318	一冊	跑坡回窠	薛貧貴回窠/新刻/王寶川/跑坡試妻二十冊/四本/綿芳堂抄選名班戲文發客	綿芳堂刻本	首函、張
		平貴跑坡 一卷		三元堂刻本	上函 (拋目錄)

	一冊	跑坡回窰	貧貴回窰/新刻/跑坡試妻/六本/羅富文堂歌書戲文發客	羅富文堂	謝
319	一冊	血掌印第一回全集	血掌印全/口二本/新刻王小姐生祭林公子/中湘十六摠信友堂戲文發客	中湘:十六摠信友堂刻本	謝 (存15頁)

y

320		牙篋記		長沙:明經堂	姚
321	一冊	陽雀歌	陽雀歌/新刻/清音雅調/星沙文星堂發客	星沙:文星堂刻本	復旦、浙閩
322	一冊 合本	陽雀歌	新抄/羊雀歌/班本/附西宮詞/全部/中湘口口歌書發客	中湘刻本	復旦、首閩×2部、張
323	一冊	鷓鴣子觀星	鷓鴣子觀星/高平閱交印 口冊/趙匡胤借頭/甯鄉黎綿芳堂藏板	寧鄉:黎綿芳堂藏板	大木、張
324	一冊	夜学巧語	夜学巧語/百六折/閑假無事 笑話談心/文星堂印兌	文星堂刻本	謝
325	一冊	英臺勸酒	新刻/英臺勸酒/三元梓	三元堂刻本	浙閩、張
326		(彭榮耀) 遊南京		中湘	姚
	一冊	桂花城	遊南京全部/西瓜保大鬧龍舟/五十冊/口口發客不悞	刻本	謝 (存10頁)
327		玉美人 一卷		永州刻本	上閩 (拋目錄)
328	一冊	玉堂春	玉堂春/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
329	一冊	轅門射戟	三才陣/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
330	一冊	轅門斬子 真班詞 三元堂刊	轅門斬子/全部/新抄/真班本/宗保挂帥/十二本/星沙廣文堂揀抄名班戲文發客	星沙:廣文堂刻本 (三元堂刻本)	復旦、首閩、張
	一冊	轅門斬子	轅門斬子/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝
331		月姑顯魂		常德三元堂刻本	湖南 (拋目錄)

z

332	一冊	讚獅子 漂八洞神仙 下部	耍新春/新刻讚八洞神仙/八本/中湘九摠同華堂發客	中湘:同華堂	謝
	一冊	新刻讚獅子耍新春 上本	讚獅獅/新刻慶賀元宵/八本/中湘九摠同華堂發客	中湘:同華堂	謝
333	一冊	斬李廣	斬李廣/湘潭九摠正街蕭同華堂歌書戲文班本發客	湘潭:蕭同華堂	謝
334		新刻張得保放牛 二卷		長沙刻本	上閩×2部 (拋目錄)
335	上下卷 二冊	新改反情上	張二姐反情/新刻/四郎算賬/七十冊/中湘九摠三元堂歌書發客	中湘:九摠三元堂刻本	復旦、浙閩、首閩×2部、張 (刊記無し)
		新改反情卷下			
336	一冊	張公百忍	張公百忍/全園/新刻/九世同居/星沙同文堂	星沙:同文堂刻本	上閩×2部、復旦、首閩×2部、張
337		張桂姐通情記 一卷		寶慶刻本	上閩 (拋目錄)
338		張三反情 一卷		寶慶:福慶堂刻本	上閩 (拋目錄)
		張三反情 一卷		永州:文順堂刻本	上閩 (拋目錄)
		新刻張三反情 不分卷		永州:文順慶記刻本	上閩 (拋目錄)
339		新刻張三姐下凡 不分卷		永州:文順堂刻本	上閩 (拋目錄)
340	一冊	勸妹	張三勸妹/花鼓/新刻/回心轉意/四本/星沙汲古閣發客	星沙:汲古閣刻本	復旦、首閩×2部、張
341	一冊	四姐下凡	張四姐下凡全部/新刻/真班本/崔文瑞成親/八本/三元堂歌書發客	長沙:三元堂刻本	復旦、首閩
	一冊	張四姐下凡 一卷		寶慶:武岡州刻本	上閩 (拋目錄)
	一冊	四姐下凡 西湖調 魚鼓調	四姐下凡/花鼓戲	刻本	浙閩、首閩、早大

342	張秀英懷胎	一冊	懷胎記 張秀英上部	張秀英懷胎/新刻夫妻行善黃鶴樓/ 卅五冊/中湘九摠 黃三元堂刻	中湘:九總黃三元堂刻 本	上閩、復旦、浙 閩、首閩、張
			懷胎記	張秀英懷胎/新刻夫妻行善黃鶴樓/ 卅冊/中湘楊文星堂刻	中湘:楊文星堂	姚 (謝)
343	珍珠塔				長沙:明經堂	姚
		一冊	新刻珍珠塔全本	珍珠塔全集/新刻/陳小姐贈金方卿 中狀元/百卅冊/中湘十總同華堂歌 書發客	中湘:十總同華堂刻本	謝 (存5頁)
344	正德遊龍		正德遊龍全部 一卷		三元堂刻本	上閩 (拋目錄)
345	硃砂印	四卷 二冊	硃砂印卷一 黃三元堂	硃砂印/全部/新刻/大唐李旦登基/ □冊/中湘九總黃三元堂刻	中湘:九總黃三元堂刻 本	浙閩、湖南、張、 姚
			硃砂印卷三		中湘:九總黃三元堂刻 本	浙閩、湖南、張、 姚
346	祝英台	卷一 一冊	新抄繡像祝英台卷一	封面欠		浙閩
		卷一 一冊	新抄繡像祝英台卷一	繡像祝英墓/新抄梁山伯同窓記/百 五十冊/長沙誠典發兌	長沙 誠興堂刻本	大木、早大
	卷一 一冊	新抄繡像祝英台卷一	繡像祝英墓/新抄梁山伯同窓記/百 五十冊/中湘九總三元堂歌書發客	中湘:九總三元堂刻本 (文星堂)	上閩、復旦、湖 南、浙閩、首閩 ×2部、演博、張	
	卷二 一冊	繡像祝英台卷二		中湘:九總三元堂刻本 (文星堂)	上閩、復旦、湖 南、浙閩、首閩 ×2部、大木、演 博、張	
	卷三 一冊	繡像祝英台卷二 (三)				
	卷四 一冊	繡像祝英台卷四 文星堂刊			長沙:左三元	姚
347	祝英台	一冊	新刻祝英臺全本 一卷		洪江:左文堂刻本	上閩 (拋目錄) 欠本
		一冊	新刻祝英台全本 一卷		永州:文順堂刻本	上閩 (拋目錄) 欠本
		一冊	新刻同窓記全傳	新樣同窓記全本四折文茂堂板/大英 臺同窓記	文茂堂	謝
		一冊	新刻梁祝同窓團圓柳蔭記	柳蔭記全部/新抄梁祝團圓/八十冊/ 星沙小西門外下首河街周慶林堂發 客	星沙:周慶林堂	謝
348	狀元拜塔	一冊	狀元拜塔 一卷		寶慶:王長興刻本	上閩 (拋目錄)
349	專諸刺王僚				長沙:大成堂	姚
350	捉曹放曹	一冊	捉曹放曹 真班詞	捉曹放曹/全部/新抄真班本棄官逃 走/三元堂揀抄名戲文發客	三元堂	謝
351	紫金瓶	一冊	紫金瓶 全部	紫金瓶/全部/新刻/子英遇山被擄 白花公主贈瓶/七十冊/中湘九摠 黃三元堂歌書發客	中湘:九總黃三元堂刻 本	上閩、浙閩、復 旦、湖南、首閩、 演博、張、姚
352	走廣東	一冊	周老籠走廣東	新刻/走廣東		浙閩
353	走馬薦行	一冊	走馬薦行	走馬薦行全圖/新刻徐庶薦孔明/星 沙鎮有堂選名班戲文發客不俱	星沙:鎮有堂	謝
354	醉花樓破鏡重圓		(新刻) 醉花樓破鏡重圓 不分卷		洪江:豐泰新堂刻本	上閩 (拋目錄)
355	坐宮嘆母	一冊	坐宮	坐宮嘆母/湘潭九摠正街蕭同華堂歌 書戲文班本批發	湘潭:蕭同華堂刻本	謝

参考文献一覧

日本語文献

【図書】

か

金文京・稲葉明子・渡辺浩司編著『木魚書目録』（好文出版、1995）

金海南『水戸黄門「漫遊」考』（東京・新人物往来社、1999）

金文京『水戸黄門「漫遊」考』（講談社学術文庫、2012）

さ

澤田瑞穂『中国の伝承と説話』（研文出版、1988）

周静書編、渡辺明次訳『梁祝リャンチュウ口承伝説集』（日本僑報社、2007）

た

田仲一成『中国巫系演劇研究』（東京大学出版会、1993）

田仲一成『明清の戯曲』（創文社、2000）

田仲一成『中国地方戯曲研究』（汲古書院、2006）

辻リン『宝巻と女性文化』（早稲田大学博士学位論文、2007）

よ

吉澤誠一郎『清朝と近代世界 19世紀』シリーズ中国近現代史①（岩波新書、2010）

芳村弘道編『十抄詩・夾注名賢十抄詩』（汲古書院、2011）

わ

早稲田大学図書館編『風陵文庫目録』（早稲田大学図書館文庫目録第17輯、早稲田大学図書館、1999）

【論文】

あ

岩田和子「秦雪梅故事唱本流通考—湖南における唱本の流通—」

『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第55輯（2010）：pp.103-114、早稲田大学大学院

岩田和子「秦雪梅故事流伝考—以清末民初唱本為中心—」『黄霖先生七秩華誕師門同慶集』

（2011）、鳳凰出版社：pp.1137-1160

岩田和子「清末民初湖南における「私訪」故事説唱の流通」『日本中国学会報』第63集、

（2011）：pp.234-249

岩田和子「清末民初「美圖」故事説唱の流通—湖南説唱本『五美圖』『後五美圖』『七美圖』

を中心として—」『中国文学研究』第39期（2013）：pp.52-70

岩田和子「「王月英」「梁祝」「秦雪梅」故事からみた多世姻縁の物語—清末民初湖南説唱本

を中心として—」『東方学』第128輯（2014）：pp.109-125

磯部祐子「中国才子佳人小説の影響—馬琴の場合—」『高岡短期大学紀要』第18巻（2003）

pp.223-233

上田望「文化資源化する伝統芸能と中国—芸能研究の情報収集・整理・発信の手引きとし

て—」『文化資源情報論』2（2013.3）：pp.111-121

大塚秀高「石印鼓詞研究（其一）」『埼玉大学紀要 教養学部』第35巻第1号（1999）：pp.43-56

大塚秀高「石印鼓詞研究（其二）」『埼玉大学紀要 教養学部』第35巻第2号（1999）：pp.67-88

大塚秀高「石印鼓詞研究（其三）」『埼玉大学紀要 教養学部』第36巻第1号（2000）：pp.17-44

大塚秀高「宋太祖趙匡胤をめぐる清朝宮廷連台戯」『日本アジア研究：埼玉大学大学院文

- 化科学研究科博士後期課程紀要』11 (2014) : pp. 25-129
- 岡崎由美「神童の恋--明末清初才子佳人小説雜考」『中国文学研究』第15 (1989) : pp. 94-113
- 岡崎由美「彈詞『倭袍伝』の禁書と流通」『中国古籍文化研究』(3) (中国古籍文化研究所、2005) : pp. 29-35
- 岡崎由美「清代小説『繡戈袍全伝』成書考—木魚書『繡戈袍全本』および彈詞『倭袍伝』との比較から」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第2分冊、第55 (2009) : pp. 77-90
- 上田望・大塚秀高「潮州歌冊研究目録(稿)」『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第3輯 (1999.4) : pp. 139-151

か

- 川浩二「清末民初上海時調小曲初探—復旦大学蔵趙景深旧蔵唱本を中心として—」『中国都市芸能研究』第5輯 (2006)

た

- 田中譜美「清代江南における代言体彈詞の出版について—『彈詞総目録』を基礎資料とした量的研究—」『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第10輯 (2007.12) : pp. 13-30
- 千田大介「湖南影戲研究の現状と課題」『』
- 土屋育子「弋陽腔系散齣集の書誌について」『汲古』第46号 (2004) : pp. 42-48
- 土屋育子「『琵琶記』テキストの明代における變遷—弋陽腔系テキストを中心に」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』vol. 13 no. 2 (2009) : pp. 318-301
- 土屋育子「明清刊散齣集の収録演目に見られる特徴について」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』vol. 16 no. 2 (2012) : pp. 190-178

な

- 中里見敬、山根泰志「濱文庫所蔵唱本目録稿(一)」『言語科学』第45号、九州大学言語文化研究院言語研究会 (2010) : pp. 117-137
- 中里見敬、山根泰志、戚世雋「濱文庫所蔵唱本目録稿(二)」『言語科学』第46号、九州大学言語文化研究院言語研究会 (2011) : pp. 147-166
- 中里見敬、山根泰志、戚世雋「濱文庫所蔵唱本目録稿(三)」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2010/2011 (2011) : pp. 65-74
- 中里見敬、山根泰志、戚世雋「濱文庫所蔵唱本目録稿(四)」『言語科学』第47号、九州大学言語文化研究院言語研究会 (2012) : pp. 91-110
- 中里見敬、山根泰志、李麗君「濱文庫所蔵唱本目録稿(五)」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2011/2012 (2012) : pp. 51-60
- 中里見敬、山根泰志、中尾友香梨「濱文庫所蔵唱本目録稿(六)」『言語科学』第48号、九州大学言語文化研究院言語研究会 (2013) : pp. 95-119
- 中里見敬、李麗君、中尾友香梨「濱文庫所蔵唱本目録稿(七)」『九州大学附属図書館研究開発室年報』(九州大学附属図書館研究開発室) 2012/2013 (2013) : pp. 51-68
- 中里見敬、李麗君、中尾友香梨「濱文庫所蔵唱本目録稿(八)」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第18集第1号(佐賀大学文化教育学部)、(2013) : pp. 85-104
- 中里見敬、李麗君、中尾友香梨「濱文庫所蔵唱本目録稿(九)」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第18集第2号、佐賀大学文化教育学部 (2014) : pp. 65-84
- 中里見敬、李麗君、中尾友香梨「濱文庫所蔵唱本目録稿(十)」『言語科学』第49号、九州大学言語文化研究院言語研究会 (2014) : pp. 101-120
- 中里見敬、李麗君、中尾友香梨「濱文庫所蔵唱本目録稿(十一)」『言語文化論究』第32号、九州大学言語文化研究院言語研究会 (2014) : pp. 39-60
- 中里見敬、李麗君、中尾友香梨「濱文庫所蔵唱本目録稿(十二)」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2013/2014 (2014) : pp. 50-73

中里見敬、李麗君、中尾友香梨「濱文庫所蔵唱本目録稿（十三）」『言語文化論究』第 33 号、九州大学言語文化研究院言語研究会（2014）：pp. 87-106

は

波多野太郎『子弟書集』（横濱市立大学、1976）

ま

丸山浩明「中国石印版小説目録（稿）」『広島女子大学国際文化学部紀要』第 7 号（1999）：pp. 1-39

丸山浩明「中国石印本小説の特徴と役割」『広島女子大学国際文化学部紀要』第 10 号（2002）：pp. 13-25

よ

芳村弘道「朝鮮本『夾注名賢十抄詩』の基礎的考察」『学林』第 39 号（2004）：pp. 44-99

中国語文献

【図書】

b

北京市民族古籍整理出版規劃小組輯校『清蒙古車王府藏子弟書』（北京：国際文化出版社、1994）

『宝卷初集』40 冊（山西人民出版社、1994）

c

車錫倫『俗文学叢考』（学海出版社、1995）

f

范正明『湘劇劇目探微』（長沙：岳嶺書社、2011）

傅惜華『子弟書總目』（上海古典文学出版社、1957）

傅惜華『北京伝統曲芸総録』（中華書局、1962）

g

高國藩『中國民間文学』中國文学研究叢刊（臺北：學生書局、1995）

顧頡剛『顧頡剛民俗学論集』（上海文芸出版社、1998）

顧頡剛『顧頡剛民俗論文集』（北京：中華書局、2011、『顧頡剛全集』）

古本戯曲叢刊編刊委員會編輯『古本戯曲叢刊』初集（上海：商務印書館、1954）

『鼓詞彙編』全 6 輯、4 冊（瀋陽市文学芸術工作者聯合会編、1957）

h

湖南省地方志編纂委員会編『湖南出版志・出版』（湖南省志第二十卷、湖南出版社、1991）

湖南省戯曲研究所編『湖南地方劇種誌（五）下：長沙市花鼓戯誌』（湖南文芸出版社、1992）

胡士瑩編『彈詞宝卷書目』（上海：古典文学出版社、1957）

j

江凌『清代兩湖地区的出版業』（北京：中国書籍出版社、2011.7）

蔣守文『半方齋曲芸論稿』（四川大学出版社、2006）

l

- 李昉『太平廣記』（中華書局、）
李浩主編『中国古代文学研究高層論壇論文集』（中華書局、2004）
李家瑞『北平俗曲略』（中央研究院歷史語言研究所、1932）
李秋菊『清末民初時調研究』、復旦大學博士論文（2007）
李修生編纂『古本戲曲劇目提要』（北京：文化藝術出版社、1997）
李雪梅、于紅、霍耀中、尹變英、李豫『中国鼓詞文学發展史』（上海：上海人民出版社、2011）
李豫、李雪梅、孫英芳、李巍編著『中国鼓詞總目』（太原：山西古籍出版社、2006）
李豫、尚麗新、李雪梅、莫麗燕著『清代木刻鼓詞小說考略』（太原：三晉出版社、2009）
林淳鈞、陳歷明編『潮劇劇目滙考』（廣州：廣東人民出版社、1999）
林仁昱『廿世紀初中国俗曲唱述人物』（台北：里仁書局、2011）
劉復、李家瑞等編『中国俗曲總目稿』（中央研究院歷史語言研究所單刊甲種之九、中央研究院歷史語言研究所、1932.5 初版、1993.2 重版）
劉烈茂、郭精銳『清車王府鈔藏曲本·子弟書集』（江蘇古籍出版社、1993）
劉烈茂、郭精銳等『車王府曲本研究』（廣東人民出版社、2000）
劉英男顧問、陳新主編『中国傳統鼓詞精彙』（北京：華芸出版社、2003）
路工編『梁祝故事說唱集』（上海古籍出版社、1985 年）

m

- 馬華祥『明代弋陽腔傳奇考』（北京：中國社會科學出版社、2009）
毛晉『六十種曲』（北京：中華書局、2006、2007 重印）
『中國民間通俗小說』（台北：文化圖書公司再版、中華民國六十六（1977）年）

p

- 蓬道人（楊恩壽）撰『蘭芷零香錄』（雷瑠輯『清人說薈』、掃葉山房、1928 所收）
彭玉麟著『彭玉麟集·下冊』（梁紹輝等整理、長沙：岳麓書社、2003）
『彭玉麟傳記資料』（台北：天一出版社）

q

- 錢德蒼編撰、汪協如點校『綴白裘』（北京：中華書局、2005）
『清蒙古車王府藏曲本』315 函 1661 冊（北京古籍出版社、1991）

s

- 瀋陽市文學藝術工作者聯合會編『鼓詞彙編』（1957）
盛志梅『清代彈詞研究』（濟南：齊魯書社、2008）
首都圖書館編輯『清蒙古車王府藏曲本』全 315 函（北京：北京古籍出版社、1991）
孫崇濤·黃仕忠箋校『風月錦囊箋校』（北京：中華書局、2000）
石昌渝主編『中国古代小說總目·白話卷』（太原：山西教育出版社、2004）
『俗文學叢刊』全 5 輯 500 冊（臺灣新文豐出版公司、2001-）

t

- 唐英撰·周育德校點『古柏堂戲曲集』（上海：上海古籍出版社、1987）
譚正璧『話本與古劇』（上海古典文學出版社、1956 年）
譚正璧·譚尋『彈詞叙錄』（上海古籍出版社、1981）
譚正璧·譚尋『木魚歌潮州歌叙錄』（文史哲研究資料叢書、書目文獻出版社、1982）
陶樹著『陶澍集』（長沙：岳麓書社、1998）
陶陽選編『中国民間故事大觀』（北京出版社、1991）
陶宗儀『南村輟耕錄』歷代史料筆記叢刊（中華書局、1959 年、2004 年 4 次印刷）

w

- 王秋桂編『李家瑞先生通俗文學論文集』(臺灣學生書局、1982)
 王秋桂主編『善本戲曲叢刊』(臺灣學生書局、1984~)
 王森然遺稿『中國劇目辭典』(河北教育出版社、1997)
 王志健『說唱藝術』(臺北：文史哲出版社、1994)
 吳宗錫主編『評彈文化詞典』(漢語大詞典出版社、1996)

x

- 徐渭『南詞叙錄』(『增補曲苑·石集』上海：六藝書局、1932 所收)
 『稀見舊版曲藝曲本叢刊·潮州歌冊卷』(北京：北京圖書館出版社、2002)
 『戲考』(上海：中華圖書館、1917)

y

- 楊恩壽『坦園日記』(上海古籍出版社、1983.5)
 楊家駱『中國俗文學』(臺北：世界書局、1995)
 楊振良『孟姜女研究』(臺灣學生書局、1985)
 姚公鶴『上海閑話』(上海灘與上海人叢書、上海古籍出版社、1989.5)
 姚逸之、鍾貢勛述『湖南唱本提要』(國立中山大學言語歷史研究所、1929.3 初版、1969 秋復刊)
 葉德均著『戲曲小說叢考』(北京：中華書局、1975)
 芸生、文灿、李斌『豫劇傳統劇目匯積』(黃河文芸出版社、1986)

z

- 曾永義『說俗文學』(聯經出版事業公司、1984)
 曾永義『俗文學概論』(台北：三民書局、2003.6)
 張詠撰『宣室志』、『古小說叢刊』(北京：中華書局、1983) 所收
 張繼光『明清小曲研究』(私立中國文化大學中國文學研究所博士論文、1993)
 張壽崇『子弟書珍本百種』(北京：民族出版社、2000)
 張希舜·濮文起等主編『寶卷·初集』(太原：山西人民出版社、1994)
 鄭振鐸輯『彙印傳奇』第一集(民國二十三年(1934)上海鄭氏景印本)
 鄭振鐸『西諦所藏彈詞目錄』
 鍾嗣成『錄鬼簿』(古典文學出版社、1967)
 中國歷史大辭典·歷史地理卷編纂委員會編『中國歷史大辭典·歷史地理卷』(上海辭書出版社、1996)
 中國戲曲志編集委員會編『中國戲曲志·湖南卷』(文化藝術出版社、1990)
 中國戲曲志編集委員會編『中國戲曲志·湖北卷』(文化藝術出版社、1993)
 『中國曲芸志』全國編集委員會·『中國曲芸志·湖南卷』編集委員會編『中國曲芸志·湖南卷』(北京：新華社出版社、1992)
 『中國曲芸志·湖北卷』(中國 ISBN 中心：新華書店北京發行所經銷、2000)
 中央人民廣播電台文芸部戲曲組編『豫劇小戲考』(上海：上海文芸出版社、1987)
 周靜書主編『梁祝文化大觀』故事歌謠卷、曲芸小說卷、戲劇影視卷、學術論文卷(中華書局、1999)

【論文】

c

查屏球「新見最早的《梁山伯與祝英台傳》—兼論梁祝故事在唐宋流行」『中国古代文学研究高層論壇論文集』(中華書局、2004)

車錫倫「清同治江蘇查禁“小本唱片目”考述」『揚州大學學報(人文社會科學版)』02期(1992)

陳錦釗「子弟書的整理與研究世紀回顧」『漢學研究通訊』22:2、總86期(2003)

d

丁淑梅「丁日昌設局禁書禁戲論」『陝西師範大學學報(哲學社會科學版)』第40卷、第1期(2011)

g

顧頡剛「蘇州唱本叙錄」『開展月刊』第十、十一合期、『民俗學集鐫』第一輯(1931)

顧頡剛「尾生故事」『顧頡剛民俗學論集』(上海文藝出版社、1998): pp. 179-189

桂遇秋、雷靖「黃梅戲傳統劇目考略(之二)」『黃梅戲藝術』(2004): pp. 54-55

郭啓宏「戲曲古代劇的文學性轉變—評楚劇《獄卒平冤》」『劇本』12期(1985): pp. 21-72、

h

黃樸「祝英台與秦雪梅」『民俗週刊』第93、94、95期合刊(1930)(『梁祝文化大觀』「學術論文卷」: pp. 21-24所收)

黃春玲「明清時期說唱藝術探究」『中國科創新導刊』總第462期(2007): p. 16

黃海蘭「試論中國古典戲曲中的“金童玉女”題材劇」『語文學刊』22期(2010)

黃仕忠「國立中山大學“風俗物品陳列室”舊藏唱本考略」『文化遺產』第3期(2009): pp. 42-49

黃仕忠「雙紅堂文庫藏清末四川“唱本”目錄」『東洋文化研究所紀要』第148冊(2005)

黃仕忠「雙紅堂文庫藏清末民初北京木刻、石印本『唱本』目錄」『東洋文化研究所紀要』第150冊(2007)

黃仕忠「雙紅堂文庫藏北京排印本唱本目錄」『東洋文化研究所紀要』第151冊(2007)

胡紅波「民初繡像鼓詞刊本三十二種叙錄」『成大中文學報』第8期(2000)

胡紅波「清末民初繡像鼓詞三十二種叙錄」『成大中文學報』第9期(2001)

胡紅波「清末民初繡像鼓詞百卅種總論」『成大中文學報』第11期(2003)

胡健國「從音樂角度看小戲形成發展的軌跡」『藝海』4期(2000)

j

金芝「無心插柳柳成萌—黃梅戲《梁山伯與祝英台》創作手記一」『黃梅戲藝術』(1994): pp. 32-46

l

李靜「唐英戲曲創作在藝術形式上的創新」『湖北大學學報』(哲學社會科學版)第28卷第5期(2001)

李豫、于紅「清末民初上海石印鼓詞小說文化現象透視」『閱江學刊』第1期(2011.2) pp. 81-90

李雪梅、李豫「晚清民國“上海石印鼓詞”概念闡釋」『山西大學學報』哲學社會科學版第30卷第5期(2007): pp. 36-39

劉康健「千古絕唱出中原—河南省汝縣梁山伯與祝英台故里考」『中國地方誌』第6期(2004)

劉守華「湖北“故事村”里傳承的梁祝傳說」『鱸陽師範高等專科學校學報』第23卷、第1期(2003)

m

- 馬紫晨「梁祝中原說」『尋根』第3期(1997)
莫高「浙江梁祝伝説流變考察記」『江、浙、瀘梁祝學術検討会論文』(1987)

q

- 丘慧瑩「雪梅故事的演變及文化解讀」國立中山大學中國文學系主編『文與哲』第十五期(2009) : pp. 253-283

r

- 任広世「明清俗曲研究綜述」『中国詩歌研究動態』第4輯(2008)

w

- 王寧邦「梁山伯考」『江海學刊』第4期(2012) : pp. 198-204
王夔「黃梅戲『藍橋會』考論」『文芸争鳴・芸術史』(2011) : pp. 92-96
武縦「脱胎換骨 移花接木-從《九人頭》到《獄卒平冤》」『戲曲芸術』2期(1986) : pp. 12-14

x

- 謝玉芳「国立中山大学人類学部収蔵湖南唱本の發現与提要」中山大学碩士學位論文(2008)
徐宏図「南戲《王月英月下留鞋》遺存考」
尋霖「明清湖南戲曲作家和戲曲刻書」『藝海』第5期(2004)

y

- 楊生民「中国里的長度演變考」『中国經濟史研究』第1期(2005)
叶雪芬「羅皚嵐年譜」『湖南師院學報(哲学社会科学版)』第4期(1983)

z

- 張繼光「一百五十種湖南唱本書録」『中国文哲研究通訊』第八卷・第二輯(1998.6) : pp. 111-142
卓之「湖南戲劇概觀」『劇學月刊』3卷7期(1934)